
WAN t the relief -the 1st story-

おおいす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W A N t t h e r e l i e f - t h e 1 s t s t o r y -

【Nコード】

N 8 0 6 5 G

【作者名】

おおいす

【あらすじ】

災害孤児を引き取る「南教会」に引き取られた七人の子供たちは「沙耶久」の提案で家族に代わる新しい絆を結んだ。いつも笑っている少女「春賀のぞみ」破天荒なアウトロー「庄治慶介」ルールを大切にする委員長気質の「高辻日向」外見は恐いくせに気が小さい「昴栄治」いつもバイタリティ溢れる「塚本佳織」魔女と呼ばれた少女「沙耶悠希」未曾有の災害「ブラック・マンデー」より早十年。彼らは平和な日常の中を生きていた。

天体観測 プロローグ

これは、彼らの記憶の話。

彼らの住んでいた『南教会』は、この国最大規模の地方都市、針木市の中心部が見渡させる小高い山の麓に在った。

ある土曜日の夜に、親のいない七人の子供たちは内緒で教会を抜け出した。

明かりのない真つ暗な山道。

脇から伸びる鬱蒼とした雑草の群れを掻い潜りながら、それぞれが手を取って助け合いながら頂を目指した。

神父は厳格な人間だった。

彼がもし知っていたならば、夜中に教会を抜け出して子供たちだけで山に登るなど、そんな危険な行為を許すはずがなかっただろう。だから子供たちはタイミングを待っていた。

日曜日のミサは街中の教会で行われることになっている。

その前日、土曜日の夜、神父はいつも早い時間に床に着き、そして寝る前には必ず彼らの部屋の一つ一つを見て回るのが習慣だった。その日も彼らはみな安らかに眠っているようだった。

子供にいいように騙されるとは……彼も随分とやきが回ったものだ。

その日寝静まったふりをして、南が床に着いた一時間後に出発することを提案したのは沙耶悠希だった。

思慮深い大人びた彼女ならばそんな馬鹿な計画を止めるだろうと神父は期待していたが、どうやら彼は彼女のことをよく理解していなかったようだ。

彼女もまた、年相応の悪戯心を持つ、幼い側面があったのだ。

彼女にその週のミサのことを話し、皆のことを任せたのは結果的に失敗だった。

だが計画は悠希でも、事の発端は沙耶久の一言。

「星空も見てみたいけど、この街の夜景も見てみたい」

眠らない街。針木の街はけして眠ることがない。

ネオンの城を見下ろすために、その夜子供たちは山の頂を目指した。

「あつ」

足元の木の根に躓き、高辻日向が派手に転んだ。

膝を擦り剥き涙目になる彼女にそつと手が差し伸べられる。

「……………だいじょうぶ？」

たどたどしく話しかける声は、日向とは一度も話したことのない少女、春賀のぞみのものだった。

日向に限らず、これまで久以外にはけして口を開かなかった少女だ。

日向は呆然と差し出された手を見ていたものの、やがて笑顔になりその手を握った。

「ありがと」

「……………う、うん」

笑顔を向けられて、のぞみは恥ずかしそうに赤面した。

「あつ、地主様」

先頭を歩いていた塚本佳織が不意に口を開く。

彼女の手にある懐中電灯が照らす先には、この山でも一・二を争う大きさのクスの木。

もうすぐ山頂であることを告げる大自然のランドマークである。

「もうすぐ着くわ、日向、足は大丈夫？」

佳織と共に先頭を歩いていた悠希が足を止め、振り返り尋ねた。

隣を歩いていた昴栄治も心配そうに日向の方を見つめている。

「大丈夫、擦り剥いただけ」

親指を立てて日向が答えると二人とも優しく笑った。

「ほんじゃまあ、行きますか」

ポケットに手を入れたまま庄治慶介が悠希と佳織を抜かして歩き始める。

「行儀が悪い」

「駄犬が仕切るな」

悠希と佳織が慶介の背中に蹴りを入れる。

「ぶっ」

ポケットに手をいれたままの慶介は受身を取れず、地面と熱烈なキスを交わした。

「き、貴様ら、何しやが……ぐほっ」

さらに佳織が踏みつけて前へと進む。

「すまんすまんこ、暗くて足元が良く見えなかった」

佳織が棒読みで謝る。

「テメエ……泥を喰っちゃったじゃねえか」

「何してるのよ、全く」

日向が呆れた顔をしていた。

その横でのぞみがクスクスと忍び笑いを浮かべる。

「のぞみ、楽しい？」

久が尋ねる。

「えっ」

「だって、のぞみ笑ってる」

久の問いかけにのぞみは目を丸くし、顔を擦る。

「わたし……笑えてた？」

そう問いかけるのぞみの顔は笑顔だった。

自分でも気づかないほど自然に現れた感情表現に、彼女自身も戸惑っていた。

「あっ、のぞみん笑ってるじゃん」

「あら」

前を進んでいた佳織と悠希も振り返る。

「お、初めて見たかもしれん」

慶介もにやにやしなから。

「おー、多分初めてだよ」

栄治もそれに続く。

「あれ、栄治いたの？」

「始めっからいたよお」

「いやあ、存在感がなかったからさあ」

佳織はそうやっていつも栄治をいじめていた。

そしてのぞみはまたクスクスと笑い始める。

「こういうときはね、指差して、ばーか、って言ってやるのよ」

日向が悪い笑顔でのぞみに耳打ちした。

「ばーか」

そしてのぞみは二人を指差して教えられたとおりに罵る。

「なっ」

栄治がショックを受ける。

「おーおー、のぞみんも栄治の馬鹿さに気づいちゃったかー」

「いや、佳織。あなたもよ」

悠希が冷静に突っ込む。

「なっ」

佳織はわざとらしく驚愕の表情になった。

「おっ」

慶介の声と共に鬱蒼とした森の視界は一気に開けて

「おおお・・・」

みんなの感嘆の声と共に

頭上に。

そして眼前に。

目が眩むばかりの光たちが世界を埋め尽くした。

頭上に広がる満天の星空たち。

気が遠くなるほどの時間の先でこの世界に光を届ける星の輝きと、
見下ろした街を彩る眠らない人々の営みを照らすオレンジ色の光の
世界。

「きれい」

のぞみと口から思わず漏れた言葉。

「ええ」

見上げながら日向もそれに同意する。

「絶景かな、絶景かな、と」

棒読みでふざける佳織に、悠希が軽く拳骨を当てて。

「素直に感動すれば？」

そう言つて優雅に街を見下ろした。

佳織は叩かれた頭をさすりながら急に真面目な顔になって。

「いやあ、どうも素直に感動してしまつてはいけな。どうして
も天邪鬼なことを考えてしまうワケで」

「・・・・・・そう」

そう言つたきり二人は口を噤み、ただ針木の街を見下ろした。

「星とか夜景は柄じゃないが、たまにはいいかもな」

慶介はにや、と笑い久を見る。

「でも、突然天体観測なんて、どうしたの？」

栄治も不思議そうに久を見る。

「別に、何でも良かったんだ。ただね」

他の四人も久の次の言葉を待っていた。

六人の視線を浴びながら、久は静かに目を閉じて・・・・・・唇
を噛んだ。

「きっかけが、欲しかったんだ」

声が震えている。

「久？」

驚いた表情で日向は問いかける。

「・・・・・・」

悠希は悲しそうな顔で久を見つめていた。

「ヒッサー？」

佳織も心配そうに。

「どうして、泣いてるの・・・・・・？」

のぞみがもらい泣きしそうな顔で尋ねた。

「どう、して、だろう。嬉しいんだろうか、悲しいんだろうか。
幸せで、満たされてて、でも、どうしようもなく空っぽで・・・・・・」

・
」

「久
」

悠希が横で背中を静かに撫でてあやし続けた。

「ごめん、ほんとうに、ごめん
」

拭っても拭っても涙は溢れてしまつて、鼻水に混ざつて顔はぐちゃぐちゃになつてしまつて、それでも久は謝り続けた。

「ねえ、どうということ？」

日向が心配そうな声で尋ねる。

「まあ、なんつーか……、つまり久の言いたいことはだな
慶介が必死に言葉をまとめようとしている。

「みんなと友達になれて、嬉しいってことよ」

「おい悠希、おいしいトコ持つてくな！」

「ははは……」

涙を拭きながら久は笑つた。

「そういうことでしょ？」

悠希が問いかける。

「その通りだよ」

久は六人に向かつて両手を広げて見せた。

「これが、家族に代わる新しい絆だ
」

これが、南教会で出会つた七人の最初の物語。

親もなく、身寄りのない七人の子供たちから始まる最初のエピソードだつた。

ある朝 沙耶久

薄暗いまどろみ。

自分が寝ているのか起きているのかもよく分からない意識の浅瀬で、外界の音を聞いていた。

小鳥の囀る声、たまに通る車のエンジン音、冷蔵庫の低音、これといった珍しい音はない。

朝起こしに来る幼馴染を持った覚えもない、か……。考えてもみれば幼馴染という存在 物心がついた少年期に、子供は得てして異性と遊ぶことに違和感を覚えるようになる。

自分と違う姿、身体的特長、衣服、自己と世界を区別しようとする。

そうした区別の中で、自分と類似した他者性のみを認め、群れを成そうとする。

ともすれば自然と幼少期を過ごす相手は同姓に限定されてくるのも道理だ。

幼馴染が起こしに来るなんてシチュエーションは正しくご都合主義の産物だろう。

そう思いながらも、落胆は禁じえないけどね。

幼馴染、それは甘く、得難き響きだ……。まあ、今更そんなことを望んでも仕方がない。

自称、日本幼馴染評論家、沙耶久です

幼馴染とは、報われない男たちの妄想の産物 というのが自弁。

ちなみに姉の悠希の前では口が裂けても言えない。

家族の諦めの視線が一番痛いからだ。

ちなみに家族構成は、父と姉と僕。

もう一人、非常に仲の悪い弟分がいるけれど、それはあまり語りたくないことなので割愛しよう。

災害孤児として教会に引き取られた僕を含む七人の少年少女たち

で過ごした青春時代、その七人は、今でも血よりも濃い家族以上の友情を結んでいる。

その中で、僕と悠希だけは引き取り手が見つかった。

それも二人セットだ。僕たち二人を引き取ったのは沙耶春樹という経済界では名の知れた経営コンサルタントだった。

とまあ、自己紹介はこれくらいにして、物語を語ることにしよう。いざ、起床。

そう思い、意識を一気に覚醒させる。

瞬間、まばゆいほどの朝日が目に入り、思わず目を細める。

机と棚とベッド、ただそれだけの殺風景な部屋は朝の冷たい空気を含んでいた。

今年はまだ雪を見ていないが、それでも十二月の寒さはパジャマ一枚でしのげるような寒さではない。

「うう、さぶつ……」

枕元のエアコンのスイッチを入れるが、暖をかせぐまではとてもじゃないが布団から飛び出すのは億劫だった。

布団の中から手を伸ばし、制服を手繰り寄せ、もぞもぞと器用にパジャマを脱ぎカッターシャツとズボンを履いた。

横着の集大成として獲得したスキルである。

布団から這い出ると、その上からカーディガンを羽織り、ひとまず準備が整った。

おはようございます、ペコリ。

壁にかけてあるアナログの時計を見ると、時刻は午前六時半、まだ登校まで一時間以上もある。

居間へ移動すると、いつもは僕より先に起きているはずの悠希がいなかった。

そういえば、実家に帰って泊まると言ってた気がする。

姉不在の日は仕方がないので、自分で朝食を用意しなければなら

コーヒーメーカーに轆いた豆をフィルターを引いて入れ、さらに水を入れてセットする。

オーブンに食パンを入れてダイアル式金庫を回す気分でセット。ダイアル式金庫を回すのは、いつだって何かを盗みたいという男のロマンだからだ。

そう、例えば あなたの、心です
.....。

もちろんツツコむ人は誰もいなかった。

冷蔵庫からバターとパツクのサラダを取り出してテーブルに置く。三分クッキングならぬ朝食の準備は完了した。

顔を先に洗い、トーストをサラダとコーヒーでほおばった。

「先日発売の週刊誌リサーチで、男女の愛を確かめ合う方法として取り上げられたポリネシアンセックスについてですが」

「朝から深夜番組みたいなネタだなあ.....」

目ばしいニュースはなし。

世は事もなし。

ずずつ、と一口コーヒーを啜ると砂糖を含まない苦味が口いつぱいに広がった。

朝の至福のひと時である。ポリネシアにも、朝の祝福を。

ふう、と一息吐き出し、カップを左手で置き右手で携帯電話を慣れた手付きで動かす。メールをチェックする。

二通新規受信メールがあった。一件は塚本佳織から。

『ヒッサーへ』

「ヒッサーって」

思わず携帯電話に突っ込んでしまった。

先週まではヒサシオンとか呼ばれてた気がする。

知らぬ間に新しいあだ名は廃れ、元に戻ってしまったようだ。

『前に貸して欲しいと言ってた本だけど、今日学校に持ってきて貰っている？ てか持ってたかい。命令。反故にしたら呪う』

「うっかりメールを開き忘れていても呪われるじゃないか.....」

・
忘れない内に本棚から件の本を取り出し鞆にしまふ律儀な性格だ。そろそろいい時間なので、テレビを消し、コーヒーを一気に飲み干して流しに水を溜めて放り込んだ。

ブレザーを羽織って準備を済ませる。

いざ、出陣。

ドアノブに手をかけたところで思い出して後ろを振り返る。

視線は棚の上に立てかけてある写真立て、そこにはまだ十歳に満たない僕とその横で笑う一回りほど歳の違う女性、そして女性と同じくらいの歳の男性、三人とも嬉しそうに笑っている写真だった。

『行ってくるよ　・・・・・・・・』

本日も、素晴らしい世界でありますように。

小さく呟いた言霊がふわりと浮かび、ドアを閉める金属音にかき消される。

カーテンから漏れる朝日に照らし出されて埃が舞い、主のいなくなった部屋は再び静けさに包まれた。

朝の少し早い時間、歩く人もほとんどいない閑静な住宅街。

その一角にある高級ではなく、だからと言ってオンボロというわけでもない六畳二間、リビング付きのマンション。

そこが現在の住処だ。姉との二人暮らしである。

沙耶の実家は同じ針木市内でありながら、親元を離れて暮らしている、なんとも金のかかった姉弟だ。

まあ、家賃など、父沙耶春樹からその他もろもろ出されている生活費は借金という形で計上されており、なんとも世知辛い。

歩いているとたまに人と出会う。

ゴミを捨てにくる主婦、原付で仕事へ向かう会社員、違う学校の制服を着た学生。

そんな、なだらかに続く道を四十分ほど歩けば学園がある。

二十分ほど歩いたところで、後ろから声をかけられた。

「おはよう、久くん」

「おはよう」

そう言って振り返り手を上げる。

向こうも手を挙げて小走りでこちらへ近づいてくるので、足を止めて到着を待った。

セミロングくらいの髪の毛の長さで少し赤みがかったているが、無理やり染めたような色ではなく自然の茶色の髪が印象的だ。

実際の年齢よりも少し幼い顔立ちの少女、春賀のぞみだった。

少し息を切らせて僕の隣に並ぶ。

「おはよう」

挨拶をする。

「どもども」

のぞみはにっこりと笑う。

「今日もいい笑顔」

「どもども」

「ジェットストリーム」

「ドムー、ドムー」

「正解だけど景品がないなあ。とりあえずキスしとく？」

「意味が分かりません」

そう言いながら笑顔で肩を殴られた、ちなみに本気で。地味に結構痛い。

「いや、米国では挨拶代わりのスキンシップでして……」

不屈の精神で再チャレンジを試みる

「ここ、日本」

二度目の肩パン。

久くん寝言を起きているときまでほざかないでね、と続けて聞こえた気がした。

被害妄想ではあるがあなたが間違ってもいないだろう。

肩を抑えていると、もう一人、のぞみと同じ制服の少女が近づいてくる。

黒く腰まで伸びた髪。

切れ長の目にほっそりとした輪郭が、儚さを印象づける少女だった。

「おはよう」

「悠希ちゃんおはよう」

「おはよう……朝から何してるの？」

肩を押さえてたので、怪訝な表情を向けられる。

「いえ、のぞみが実は笑顔の下に底知れぬ攻撃性を持っていた場合を想定しての考察を……」

「何のこと？」

のぞみが首を傾げる。

「あなたの妄想も大変ね」

溜め息混じりに沙耶悠希が会話に加わった。

「のぞみ、今日もいい笑顔ね」

「どもーどもー、今日二度目だよ」

「そうなの？ 久、朝からのぞみを口説いていたの？」

「いや、口説くとかじゃなくてさ、自然と発せられた言葉だよ」

「キスしたいって言葉が？」

「……聞いておられたのですか？」

「朝からお盛んなのね」

「違うんだ……」

姉に口説いてるところを目撃され、羞恥を通り越して悲しくなった。

その前方に二人の人影がこちらを眺めて待っていた。

大柄で、釣り目の厳つい顔つきの少年と、ウェーブがかった茶髪で制服を着崩す少女。

昂栄治と塚本佳織の幼馴染コンビである。

「おいっす」

「サー」

男同士の挨拶を済ませる。

「おはよー、クソ野郎とアバズレ諸君……」

朝のローテンションを引きつり佳織もファツキンな挨拶をする。

「おはようございまーす！」

選挙のごとくのぞみが声を張り上げる。

「……………テンション高」

佳織はげんなりした。

「おはよう、……………相変わらず言葉遣いが最低ね、佳織」

悠希も挨拶を返す。

「今日慶介は？」

栄治が久に問いかける。

「今日は見てないね。サボりで休みか遅刻じゃないかな」

「アイツここ三日くらい見てないなー」

「そうだね、今週入ってからまだ来てないね」

栄治と話していると、のぞみが間に入ってきた。

「慶介くん出席日数とか大丈夫なの？」

「のぞみが心配など無縁の笑顔で尋ねる。社交辞令とはかくありき。
「……………」」

腕を組んで考える。出席日数は四分の三出なければアウトである。
一週間五日の内三日休んでいると出席日数は五分の二で計算が合わない。

「まずいね」

「んだな」

栄治も同じ結論に達したようだ。

「ああ、やっぱりまずいんだ……」

「どうしようもないわね」

「野獣ですから」

三人それぞれのコメント。

のぞみは苦笑い、他の四人は溜め息を吐いた。

佳織にいたってはボソッと、クズだな……………と呟く始末である。

「そっぴや日向ちゃんも来ないね」

のぞみが強引に話を変えた。

「ひなた委員長は朝練」

佳織が答える。

「何か部活に入ってたかしら？」

「ダイエツト同好会名誉会長」

「あなた前にも同じこと言って日向に怒られてたでしょうが」

「ですのでもないところでそう言うことにちまちたー」

「なぜに赤ちゃん言葉……」

ふーっと悠希は諦めたように溜め息を吐いた。

佳織のその発言、行動は恐ろしくフリーダムである。

幼馴染である栄治が語る彼女の破天荒ぶりは数々の伝説となって後世にまで語り継がれていくことだろう。

彼女は歩く伝説である。

「相変わらずメチャクチャだね」

「あらヒッサー、いやーん、お褒めいただきサンキューですう」

朝から酔拳みたいな動きをする……。

「大変だのぞみ、佳織がナマコみたいにクネクネしてる」

「誰がナマコだ、コラア！」

「いや、それすごい失礼だよ、ナマコさんに」

そして、のぞみさんは笑顔でさらっと毒を吐く腹黒少女なのです。

「ヒッサーそう言えばメール見た？」

「うん、おかげで呪われずに済んだよ」

「おいおい、呪われるってどんなメールだよ」

「じゃあ例のやつ貸して」

「ほい、これ」

「……あれ、無視されてる？」

「わざとやっているのよ」

悠希が栄治をフォローする。

栄治は外見だけを見ると、けして弄られる側には見えない。

身長百八十センチを超える大柄に逞しい体格。鋭く尖った目付に

黒く焼けた肌、短く刈り上げられた髪の毛。

クラスの女の子には恐がられているし、本人が望んでなくとも街で怪しいスーツのお方のスカウトを受けたこともある。

だが、中身はとてもナイーブな少年だ。

そんな彼をいじる『栄治イジメ』はここ五年間くらいずっと局地的ブーム。

とかなんとかやってるうちに学園に到着。

私立、針木学園。

いつからか公立の教育機関は無くなった。

子供の数が少なくなり、学校経営も民間法人へと移行したのだ。

「では」

のぞみの姿が一年生の棟へと消えていく。のぞみは一つ年下である。

「ほんじゃ、まあまた昼にでも」

「俺もこっちだから」

佳織と栄治は別のクラス。各々の教室へと入る。

悠希とは一緒のクラスなので、二人で教室へと入った。

一日は、こうして始まる。

ある昼 沙耶久

昼休み。教室のプレートには「二一」と書かれている。教科書を机の中にしまつてると悠希がやってきた。

「昼はどうする？」

「そうだね、やっぱり学食かな」

「おーい、久ー」

そこに隣のクラスの栄治がやってくる。

「ひっ！」

ドアの付近に屯している女子たちがびくりつ、と肩を跳ねさせて、そそくさと去っていった。

外見はすごい恐いからなあ……………。

「……………」

「どうしたの栄治？ お昼の誘い？」

「……………なあ、久」

落ち込んだ声で。

「何？」

「俺、あの子達になんか悪いことしたかな……………」

「……………栄治は悪くないよ、栄治をそんな風に創った神様が悪いんだ」

栄治は外見に似合わず、とても人の態度を気にするナイーブな男の子だ。

「それは俺の外見が見るに耐えないって事か！」

「いや……………」

フォローに失敗したようだ。

無駄に繊細だからな、本人には言えないけど。

「どうして無駄に繊細なのかしら」

「あー、言っちゃったよこの人」

悠希はいつも自分のペースだ。

マイペースというよりも私がルールって感じの。

「とりあえず、昼はどうする？」

落ち込む栄治をそっちのけで我が姉は尋ねる。

「そだね、どうする栄治？」

「……神よ、なぜ醜い私をこの世界へと産み落としたのでしょうか？」

栄治は未だ思考の迷宮に陥っているようだ。

「うーす」

振り向くと、金髪の良く目立つ柄の悪そうな男も教室内に入ってきた。

「ああ、慶介いつきたの？」

「ついさっきだ」

「……将来が心配な人ばかり」

悠希がため息をついた。

「なんだ悠希？ 学食とつとで行こうぜ」

無言で栄治の方を指差す。

「なんで人は外見でしか人を判断することができないんだ……俺だって、カッコいいところあるよ。ネットゲーだと友達だって多いんだ……」

「……なんだこいつ？」

「妄想中」

慶介は辟易とした顔で。

「これだから二次元野郎は……」

「二次元バカにすんじゃねえ！」

「あっ、聞こえたぜ」

「……」

「……」

クラスの視線が一気に集まった。

「どうした兄弟？ そんな親に隠してたエロ本見つかった時の顔は」

「栄治……ここ、教室」

「なっ」

慌てて辺りを見渡す。そそくさと、皆目を背けていく。

「……………今、二次元って言った？」

「まさか……………昂に限って、聞き間違いじゃないか？」

「いや、俺は確かに聞いた」

「こそこそこそこそこ。」

「……………」

「確かに居心地が悪いな」

慶介が呟く。逃げるように学食へと向かった。

民間法人の学校では、生徒を確保する為に学力の向上と施設の充実には特に力を入れている。

おかげで広い学食、カフェテラスのようなお洒落空間だ。

一昔前までは学食は不味い昼食の争奪戦だったようだがこの光景からは考えられない。

四人は食券を買い、カウンターに出す。

人の数はまばら。

昼休みは九十分である。

昼食を外でゆつくりと取りたい生徒もいるからである。

少しして昼食がカウンターに置かれる。

「久よ、特盛りか？」

「うん」

「相変わらず底なしだこと」

「ねえ、栄治いつも小で足りるの？」

栄治のご飯はいつも少なめ。

「こいつはこいつでガタイの割りに情けねえ」

「うるせえ、飯が食えるからっていい気になるなよ」

「なぜキレル？」

男なのに飯が少ない、というのを気にしているのかもしれない。八人がけのテーブルを四人で占領する。

「……………久、実は俺、女の子から告白されちゃった」

食事の途中、栄治がぼつりと呟く。

「いいことじゃないか」

「何がいいことか！ 何を喋ればいいか分からないじゃないか！」

「趣味の話でも……」

そう言つて失言だと気づく。

「趣味？ 女でもアニメを見るのか？」

「そりゃ見るとは思ふけど……」

「……栄治、女との会話でアニメはモテねえ」

「アニメいいよな。あれは人類の生み出した最高の文化だ」

慶介の言葉は聞こえなかったようだ。

栄治はアニメフリークスだ。ついでに声優事情に詳しい。

「なんで声優つて女だと若い人の入れ替わりが多いのに、男は大御所ばつかなんだろうな？ なあ、慶介？」

「俺にふんじゃねえ」

「……席離れていいかしら？」

「奇遇だね、僕も今そう思つてた」

僕と悠希はとりあえず栄治から距離を置いた。

「ンで、告られた話はどこいったんだ？」

「ああ、そうだった！」

慶介が軌道修正に成功。

「誰なの？」

「三組の小浦さん」

「知ってるか、久？」

「いんや、悠希は？」

「知らないわ」

「そっか、交友関係が狭いもんね」

「……本音がもれた。」

「……久？」

「ぎろりと。」

「なんでもないです」

すぐに訂正した。

「やっぱりここだった」

お盆を持って日向がやってくる。

「教室行っても誰もいないんだもん」

少し怒り気味の口調。

「別に約束してねえだろ」

「うるさい、暗黙の了解」

「めんどくせえ」

慶介は溜め息をつく。

「それでなんの話してたの？」

「栄治が告られた話」

「つつつ」

日向が絶句する。

「もしもし．．．．．？」

「まあ、そうよね．．．．．顔だけしか知らないともどもには見えるか．．．．．思春期は闇に懂れる年頃だと言うし．．．．．」

「

日向はぶつぶつと独り言を始める。

「．．．．．俺っていけないのか？」

「日向は知ってる？ B組の小浦さん」

「ああ、ちょっとおとなしめの子。その子に告られたの？」

「そうみたいね」

「小浦さんって可愛い？」

「久、アンタさらりとそう言うこと聞くわね」

「お盛んな年頃なのよ．．．．．」

悠希は溜め息をつく。

「誤解、誤解」

「朝からのぞみにキスを迫るしね」

「．．．．．」

「．．．．．」

一同絶句。

「やるな、久よ。先輩権限を利用して強制猥褻か」

「さすが、久だ。大人しそうな顔をして……………」

慶介も栄治も勝手なことを言う。

「ちよつと、どういうことよ、のぞみ大丈夫なの？ 妊娠してない？」

「日向は話が飛びすぎだ」

慶介が言えることではない。

「皆さん、久くんいじりはほどほどにね？」

「自業自得」

「悠希…………勘弁してよ」

我が姉は復讐ができてどこかご満悦の様子だ。外見は変わらずクルだが。

「で、だ」

「どうしたの慶介？」

「日向よ、ここにいるヘタレ二次元愛好者の栄治くんは三次元の女性と何を話せばいいか分からないんだそうだ」

「ちよつと待て、酷い言われようだぞ」

「佳織と話すことを話せばいいのよ」

「…………いや、それは」

ちよつとどうか、という顔を栄治はする。

「…………確かにね、佳織はちよつと特殊だから」

悠希が付け加える。

「そつか……………」

満場一致の納得である。

「趣味の話とか……………」

「エヌ、ズイー、ワード！ ストップ！」

ランナーコーチのように両手を上げる。

「何？ どうしたの久？ 突然大声で」

「ここは一つ趣味以外の方向で」

「？」

栄治の趣味への愛情は、聞き手を置いてけぼりにしてしまうほど深いものだ。

「今女子の間で流行っていることを話せばいいんじゃない？」

悠希が提案する。

「さすがお姉さま、友達いないけどそういう知識だけは豊富でいらつしゃる！」

「久……………口を慎みなさいよ？」

……………声がアルトでした。

「ち、ちらみにどんなことが流行ってるの？」

「チラ見？」

「久よ、昼からチラリズムを語るか。よかろう、なぜ開いた胸元の谷間に神が宿るのか、思う存分に語り合っぞ」

話を反らそうと試みるが噛んでしまった。男衆の食いつきは抜群だ。

「さあ？ 交友関係が狭いからよく知らないわ」

「……………お姉さま、怒っていらつしゃるのでしょうか？」

「怒ってないわよ、ね」

悠希は怪しげに笑う。ああ、お姉さま、とても笑顔が素敵です。

「日向委員長はなんかねえのか？」

慶介が気だるげに尋ねる。

「委員長じゃないんだけど？」

「細かいこと気にすんな」

規律を重んじる日向の潔癖さは委員長と呼ぶにふさわしかった。

「なんか慶介の言葉には悪意を感じるけど、まあいいわ」
少し考えて。

「ドラマの話題とか」

「無難だな……………」

「なによ慶介、含みのある言い方ね」

「意外性にかける」

「別に意外性を求めてないでしょうが」

「ドラマ・・・鬼門だ」

栄治が頭を抱える。

「どうしてよ？ アニメもドラマも似たようなもんでしょ？」

「ドラマは三次元じゃないか！」

「・・・」

「・・・」

一体何が不満だとおっしゃるのか・・・。

「・・・まあ、がんばって」

投げやりの結論で会話は終わる。

ちなみに、告白された返事をしようと意気揚々とB組に乗り込んだ栄治に待っていた結末は。

「ごめん・・・、あれ、罰ゲームだったの。佳織ちゃん指定の」

「・・・そう」

「ごめんなさい。私は嫌って言ったの。でもやらなきゃいけない雰囲気になっちゃって・・・。お願い、殴らないで、犯さないで」

「・・・強姦魔扱い？」

栄治は心に深い傷を負った。

「だから三次元は信用できない・・・、二次元は嘘をつかないんだ・・・」

昂栄治の名言リストに新たな一ページ、である。

黒い雨 沙耶久

空を染め上げていくオレンジの眩しい色。

夕立後に立ち込めるアスファルトの匂いはどこか懐かしく、そして優しい。

一歩歩くたびに水の跳ねる感触。

強く踏みつけるほどパシャッつと軽快な音。

靴の中がグシヨグシヨになるかも、なんて気にしちゃいけない。走ってみる。

水を踏み散らして、夕焼けを仰いで、僕は濡れネズミで、なんか青春っぽくて。

「ぐっしょぐしょだー」

思わず叫んでしまう。

「なんでそんなにテンション高いのよー」
後ろから追いかけてくる声。

片手に折りたたみ傘を持っているのに彼女もびしょびしょで、額に張り付いた黒い髪の毛の束が、少しエロティックに見えた。

「日向ブラ透けてる」

濡れたブラウスから透ける下着は裸よりもエロい、と小一時間力説したのは庄治慶介。

チラリズムだそうだ。

「誰のせいよ」

片腕で胸元を隠しながら日向は肩で息をしている。

「せっかく夕立が降ったのに傘を差すなんて邪道でしょ」

「どんな理屈よ、それ」

「ていうか僕だけ濡れるのってなんか癪じゃない」

「子供かあんたは」

事の始まりは、学校の帰りに雨が降ったこと。

駅前の本屋を出た辺りで突然夕立が降った。

せつかく買った、よりにもよってハードカバーが水を含んでテンションが下がったところで、折りたたみ傘を差して優雅に帰宅する高辻日向を発見。

同じ目に合わせるべく彼女の傘を奪いそのまま走って逃走。
現在に至る。

というわけだ。

「いや、今時子供でもそんな幼稚な悪戯しないわ」
心底呆れた顔をされた。

「せつかくだからどっか寄ってく？」

「とりあえず今は早く帰って着替えたい」

「つれないな」

「誰のせいよ、誰の」

取りとめもない無益な会話。人によっては窒息してしまいそうなありふれた日常のひとコマ。

「きつと明日もいい日だ」

「突然どうしたの？」

「んー、今ふとそう思った」

「何よそれ」

ふふっ、と日向が笑う。

つられて僕も笑う。

やっぱりこのまま帰るのはもったいない。

同じように繰り返すように続いていく毎日でも、一日一日が持つ意味はきつと違うだろう。

一日たりとも無駄にするのは、やっぱりもったいない。

ある日突然、当たり前のことが当たり前でなくなる、僕たちは誰よりもそれを知っているから。

僕は携帯電話を開き、何度も行ってきた動作で彼らの名前を探す。
「やっぱりこのまま帰るのはもったいないよ。どっか寄ってかない？」

「いや、だから帰って着替えないと気持ち悪いから」

「送信、つと。はい、これで寄り道決定」

「いつもながら、人の話聞かないんだから……」

そう言って日向は額に手を当てながら溜め息をついた。これで事後承諾はオッケ―。

「とりあえずいつもの駅前のファミレスにしといたけどいい？」

「いや、って言ったら帰してくれるの？」

「帰るのはダメ。これからみんなで遊ぶのは決定」

「ファミレスでいいわ。のど渴いたし。でも一番は家に帰りたい」

「はい、聞こえない。じゃあ向かおっか」

「あんたってやつは……」

というわけで来た道を引き返す。

「おっ」

「どうしたの？」

「メール帰ってきたっぽい」

携帯電話を取り出して、「お知らせ」を開く。メール画面に受信一件の表示。

「のぞみが一番手」

「のぞみはなんて？」

「悠希と一緒にいるんだって」

「はあ」

日向の今日二度目の溜め息。

「もうこれは決定。いや確定。確約された未来だ。来ないなんてないよ。あるはずがないんだ」

「分かった、分かりました。ええ、分かりましたとも」

もう日向もやけっぱちである。自宅へと向かう足を方向転換して針木駅の方角へと向かう。

雨上がりの街並み、無色透明の水溜り。

「雨、黒くないね」

雨上がりの空を見上げながら思わず呟いた。

「そうね」

日向も呟いた。

僕らの街の話をしよう。

日本で最も都会化の進んだ地方都市、中四国州、針木市。
かつてこのクラスの都会は都心か京阪神くらいだったようだ。

この国が中央内政集権から州分権体制へと完全に移行して百年ほどが経ち、地方都市は著しい成長っぷりだった。

中央の内政権限を政府は「州」という新しい組織に大幅に分割、移管して市町村を合併し、政令指定都市と連合自治圏による、各政府組織関係の徹底的な簡素合理化が進められていった。

それが州分権体制、北海道、東北、関東甲信越、東海北陸、関西、中四国、九州沖縄　7州制度の確立である。

それぞれの州の下、県は廃止され、政令指定都市とその他の連合自治圏として新たに地方自治体は生まれ変わった。

東京「王国」へと人口集中と地方過疎化による衰退の回避と、具体的政策の立案と実施は州が連動し行うことで、内政がより国民に近くなり、地方問題にも敏感に反応できる体制を整えるのである。特に、この中四国州においては、都市の発展を促すために政治の面においても、経済界の競争化の概念を持ち込み、脆弱な自治体のスクラップアンドビルドを図った。

州税制の地方配分は移民人口、都市発展の成果により配分を行う、と大々的に宣伝を行った為である。

言い換えれば、人の集まる自治体を優遇するということ、いわば自治体の人気投票のようなものだ。

各自治圏、政令指定都市はこれまでのように現状維持による日和見主義を方向転換しなければならなくなった。

「より人々が住みやすい都市」

年金制度、公共料金、住民税、教育制度、それぞれが構造改革、コスト削減による低価格戦略のように人々に提示される。

競争化の一番手はいつだってコストリーダーシップ戦略だ。

そんなわけで、住民の一人一人が住む場所を選ぶ時代が訪れたのである。

それぞれの市がまるで別の国であるかのように、税金のシステムが違い、教育から治安、条例に至るまで異なる。

人々にとって住みやすい時代になったとコメンテーターが騒ぎ立っているテレビ番組を思い出した。

これまでの消極的な現状維持政策は中央集権の時代から続いてきた悪しき習慣だったらしい。

それが今では積極的に国民の生活の改善に取り組むように各自治体が動いてきたし、現に多くの都市の発展に結びついてきた。

それが国民ののぞむ形となるよう具体的な政策となって現れるし、自分たちの生活に直接結びつきを持ち始めた政治に、人々は関心に向けるようになる。

だが、それを全ての国民が快く受け入れることが出来たわけではない。

道路の拡張工事とそこに昔から住む人々との摩擦とかがあった。

公務員の大幅な削減、解雇と徹底的な合理化による煽りをつけた人々は少なからず存在する。

何よりも、競争化が表立ったクリーンな争いのみで済むはずもない………。

「………十年経ったのね」

しみじみと、日向が眩く。

例えば、僕らの街の深い傷跡 二百万人の人口を抱える政令指定都市針木市の暗部。

針木市とは、五年前までは二つの政令指定都市だった。現在の針木市の広大な面積を、現在小高い丘の上に連なるコンクリートの壁がある位置を隔てて真っ二つにされていた。

北東側は針木市。

そして南西側は御座市だった。

現在、針木市は日本のベルリンと呼ばれている。

事件は十年前まで遡ることになる。

過激化した市民グループによる私刑と、失業率五十パーセントを越える経済的混乱が発生した。

その真ん中にあつたのが、底の見え始めた枯渇資源に変わる、コストを従来の半分以上にまで抑えられる火力発電に変わる新しい原発の理論だった。

石油の価格は高騰を続け、火力発電に掛かる費用、そしてガソリン代はここ三十年の間に何十倍という致命的なコストとなった。

それに変わるエネルギーというのは全国民の望んで止まない願いだった。

それに成功したのが御座市。箕正樹という一人の偏屈な研究者から始まった研究は塚本佳織の一族より援助を得て、井端紫音という若き研究者を中心に完成させ、実用に至ったそうだった。

ちなみに塚本一族とは御座市の一大財閥。土地、電気、ガス、水道、『住』に関するあらゆる事項を取り扱う塚本グループである。

その始まりは、小さな不動産事業からだったそうだった。

この土地は古くからの地主による土地代の高騰が目覚しく、平野部以外が山に囲まれ、海に面しており、その開発は遅れていて、それを当時周辺の連合自治圏所属だった政治家達も嘆いていたらしい。彼らはまず、地主達の土地をこれまでの相場を遥かに下回る数値で買い取った。どんな裏事情があつたかは知らないが、子供が知ってはいけない大人の事情ってヤツだろう。

そうして、人を集める為の手段と、魅力的な街づくり。

主に中流一般家庭を狙い、各企業に格安で土地のリースを行い、人を集めた。同時に学園都市、産業都市という街づくりと、水道・光熱費の徹底した低価格プランを提示し、わずか二十年で御座市を政令指定都市までのし上げた。

塚本の下には、現在針木市の巨大企業の一つ春賀建設の代表取締役

役春賀晃、針木市市長森野勇次なども集まったそうだ。

さて、話を戻そう。

原発の研究は市中の中小企業は活発化し、大企業に至るまでそのエネルギー産業に乗っかうとした。市は街の活発化、それによる人口増加のためにそれを市内の企業に限定するように塚本に働きかけた。結果として南御座市はエネルギー産業に乗っ取られたように一つの流れを作り出した。

だが、その大きな流れはそのまま市民へとなだれ込むことになる。その日は月曜日だった。一九八七年の世界的規模で起こった史上最大の株価の暴落、その響きが当時の人災にマッチしたのだろう。一連の事件は『ブラック・マンデー』と名付けられた。

休日が明けて騒がしくなった南御座市南区の都市から離れた一角で、塚本の研究施設でエネルギー炉内が融解、爆発する事故が発生した。

爆発により発生した放射性物質が、大量に大気中へと放出され、当の研究施設の辺りは大規模な火災が発生、三日三晩の消火活動が続けられた。

衛星写真で、核で燃える赤い火に覆われた御座の中心部が一斉に各メディアで取り上げられた。

原因の定かでない中、メディアの出した結論は『算理論』という未知のエネルギー理論に対する危険性だった。

都市同士の競争化の為に理論の内容を秘匿し続けたことも裏目に出た。

なぜここまで危険な物を扱う研究所を街の中に設置したのか。核分裂の危険性を伴うものであったことを公表していなかった、という批判も相次ぎ、エネルギーの開発は中止になる。

それに伴い、その研究に関わった多くの中小企業、そして、大企業のいくつかも倒産を余儀なくされた。

だが、事態はそれだけに留まらなかった。

小規模とはいえ、核爆発であったのだ。

御座市の土地は汚染された。

八十万人の市民が自らの住む場所を汚染されたのだ。

被爆五キロ圏内の市民は強制移住。

そして受け入れが出来ず、汚染された御座市に残された者たちは数十万にも及んだ。

中央区　市の中心部で市民グループの過激な抗議デモが発生した。

それはデモに留まらず、一部の過激派の間でテロとなった。

職を奪われ、住む場所を汚された人々の怒りが一つの方向を向くことになる。

エネルギー開発者への報復である。

第一の事件は塚本一族の毒殺事件だった。

当時十に満たない佳織だけを残して、彼らは殺されることになる。第二の事件は地下鉄爆弾テロ。

原発設計、開発者、当時市長など数人が市外へ逃げようとした列車に爆弾が仕掛けられ、罪のない市民とともに爆発した。

後の発表で、被害者の中にエネルギーの理論体系を完成させた筈正樹の名前もあった。

そしてブラックマンデーの最後を締める事件も、やはり月曜日だった。

正午　、周辺地域の地上波が過激派市民団体によってジャックされた。

そこに映されたのは研究の中心人物であった女性だった。

目隠しをされていて、頬は何度も殴られたのか腫れており、衣服は乱れ、肌が曝け出されていた。体中に卑猥な落書きをされて、目も覆いたくなるほどのショッキングな映像が周辺地域に向けて強制的に報道された。

市民団体は、これが最後の一人　、そう言って彼女に向かって引き金を引いた。

空薬莢が宙を舞うのまで見えた。

彼女は床に頭を打ち付けて、そのまま果てた。赤い雫がスプリンクラーのように辺りにばら撒かれて、テレビの画面にも赤が飛び散る。

その光景はまるで宗教的なテロのようでもあった。

彼女は原発の設計者だったのだ。

さて、事後処理の話だ。

針木市の当時の市長森野勇次は国の支援を求め、当時大規模な土地事業を展開しようとしていた春賀建設より大量の土地を買い取り、御座市の市民の受け入れを公表した。

御座市と針木市の境には万里の長城のような防護壁が展開され、かの地は立ち入り禁止という形となった。

日本のベルリンと呼ばれるようになった由来である。

それにより一連の事件は終結を迎える。

だが、残された深い傷跡は、解決することはない。

『ブラック・マンデー』と呼ばれたあの日を時々思い出す。

その街の雨は黒かった。

まるで街そのものが呪われているようで、雨が街を殺していくようにうで。

あまりにも典型的で終末的な光景　それが、僕の前風景だった。

あめあめ、ふれふれ。

あめあめ、ふれふれ。

僕は、南神父の手に引かれながら、真っ黒な空を見上げていた。
ただ、神様が無表情に街を見下ろすのが見えた気がした。

ある放課後 沙耶久

ピンポン

お客様が来店されたことを告げる間抜けなチャイムが店内に響いた。

「あつ、久くと日向ちゃん。おはようございまーす!」

席から身を乗り出して、元気よく手を振っているショートカットの女の子、今日も元気な春賀のぞみさんを発見。

「のぞみ、恥ずかしいから止めて……」

悠希は眉を顰めながら呟いた。栄治も苦笑している。

「お待たせ」

久は二人に挨拶をして、コの字型のテーブルの奥に腰をかける。

「うわ、二人ともびしょびしょ。傘持ってなかったの?」

「理由はその男に聞いて……」

のぞみの質問に日向は本日三回目の溜め息をついた。

「委員長お怒りだな」

既に到着していた栄治が久に耳打ちをする。

「女の子の日なんだ」

しれつと答える。

「委員長言つな。そしてどさくさに紛れて最低な嘘つくな」

「まあまあ、日向ちゃん、赤飯いる?」

のぞみは今日も元気に腹黒かった。

「ファミレスにあるか!」

「聞き流せば問題ないわ」

優雅にティーカップを傾ける悠希の様は、動じない大人の女を思わせた。

「今ほど悠希の冷静さが羨ましいと思ったことはないわ」

日向は本日四度目の溜め息。

「そんなに溜め息ついてたら幸せが逃げてくよ」

「誰のせいよ、誰の」

「周りに迷惑だから大声を出さないの」

「うっ、ごめん」

悠希の毅然と発せられた正論に日向は思わずしゅんとなった。

「でも、久」

悠希の細めた鋭い視線が久を射止める。ビクッ、と久の両肩が跳ね上がった。

「……………下品ね」

「す、スミマセン」

「久くん、悠希ちゃんにだけはすっごく弱いよね」
のぞみが苦笑する後ろ。

「それはだなー」

「うわっ」

のぞみの素朴な疑問に答えたのは、いつの間にか後ろに立っていた佳織だった。

「あっ、佳織ちゃん。チーズ」

「こんちゃーす」

「若者らしい、日本語の乱れ」

日向がぼそつと呟くと。

「乱れてるのは夜な夜な右手の中指で自分を慰めてるひなたんの性生活だろーが」

佳織は下ネタで反撃した。

「なっ」

赤面して日向は立ち上がる。

「と、久は申しておりました一九九九年」

「こっちに振るか……………」

「しかも世紀末だ」

そこに突っ込むか、栄治。

「これはぐだぐだという展開だね悠希ちゃん」

「そうね」

「というか佳織、そこに正座しなさい」

「おー、こわいこわいっす」

佳織はいつも楽しそうだった。

「そういや久、慶介まだなの、一緒じゃなかった？」

悠希が尋ねる。

たしかに、慶介の姿はなかった。

「ちよつと電話してみるよ」

そう言つて携帯電話を取り出してアドレス帳から『庄治慶介』を探し出す。一昔前に流行った映画のフレーズが流れる。呼び出し音が電子音ではなく曲になるという機能である。一フレーズほどで慶介が電話に出る。

「あつ、慶介？今どの変？」

『あと五カウントしたら着く』

「あつ、もう近いんだ」

『5・4・3』

「2・1」

「なんでカウントしてるの？」

怪訝な表情で日向が尋ねる。

「さあ・・・」

のぞみも奇怪な人を見る苦笑い。

「雨で脳みそ蕩けたんじゃない？」

蕩けてるのはお前の頭の中だ、と佳織に言いたい気持ちを我慢した。

言いたいことも言えないポイズンな世の中だからだ。

「ゼロ」

そのコールの瞬間、ピンポンと間抜けなチャイムが店内に響いた。

「オッケー、時間通りだ慶介」

「万事抜かりはない」

ちなみにまだ慶介は電話を耳に当てて喋っている。

「いや、もう電話で話す必要ないでしょ」

「貴様の正論など聞きたくない」

「ああ、そうですか」

日向はもはや怒りを通り越して呆れていた。

日向の白い目を気にしたそぶりもなく、慶介は席に着いた。

「相変わらず頭おめでただな」

佳織がへらへらと笑いながら慶介をちやかす。

「いや、俺は妊娠させるほうだ」

「日向ちゃん、この人たちは何を喋ってるの？」

「・・・・・・・・のぞみ、お願いだから私に振らないで」

それを聞いたのぞみの視線は悠希へと向かうが、

悠希の冷たい目線が、『私に振ったら命はないわよ』と雄弁に語るために、のぞみはとりあえず笑った。

『そんなこと神に誓って致しません』という類の恭順の笑みで。

「慶介はゴムつけないらしいからね・・・・・・・・」

しれっと言ってみる。

「おまつ、どさくさにオレの赤裸々な性生活を」

どうやらビンゴだった。

「あんたってやつは・・・・・・・・」

そこは日向の怒りのツボだったらしい。少し肩が震えている。

「マジ？ うわっコイツ、チャイルド・メーカーじゃん」

対照的に、新しい言葉を生み出した佳織はケラケラと楽しそうに笑う。

「・・・・・・・・っ」

カップを口に持っていたいこうとした悠希の手が一瞬止まったのを見逃さなかった。

うん、下ネタはほどほどに自重しよう、彼女恐いからね。

「おい、久。お前のせいでオレは一気に女性の憎き敵だ」

「それくらいの方がアウトローはカッコいいよ」

「ふっ、そうだな・・・・・・・・」

そう言つて慶介は二ヒルにコーヒーを飲む。

そんな彼を見る日向の視線は冷たいままだった。

「アホね」

「脳みそ妊娠してるからね。多分久のザーメ」

佳織の脳天に容赦なく全員の拳が降り注ぐ。

「・・・・・・・・・・てえ・・・・・・・・・・」

佳織は頭を抱えてうずくまる。

「もつと恥じらいを持てよ」

栄治が溜め息交じりで呟いた。

「恥じらいかあ・・・・・・・・・・」

「恥じらいねえ・・・・・・・・・・」

「佳織に恥じらいねえ・・・・・・・・・・」

一同が佳織に目を向ける。

それぞれの視線に籠められた意味合いは似たような物だ。

のぞみ（恥じらい？）

悠希（恥じらい？）

日向（佳織が？）

慶介（このビッチが？）

栄治（俺が言っておいて何だけど・・・・・・・・・・）

久（似合わない・・・・・・・・・・）

以上である。

「ん・・・・・・・・・・、なになにみんなどうしたの？そろいもそろってアホ面して私見つめて。なに、一目ぼれ？シンデレラがパーティーの視線独り占め？いやー、まいったなあ」

「はあ・・・・・・・・・・」

一同の溜め息が同時にもれた。

「なに、マジどしたの？」

佳織は一人キョトンとしていた。

「と、いうわけで」

無理やり収集をつかせて栄治がリスタート。

「おい、無視すんな、ガングロ」

話が進まないので佳織の抗議はスルー。

「かおりん、かおりん」

のぞみが手招きする。

「なになにのぞみん？　ほんと私の味方はのぞみんだけだ。ほんとこいつら冷たいっつーの。多分血とか通ってないな、ガソリンかなんかで動いてるよ、きつと。あ、なんかそれはそれでカッコいいんじゃないね？」

「そんなかおりんにはこれをプレゼント」

そう言ってロリポップをポケットから出す。

「マジ？　マジ貰っていい？　ていうかも貰った。もう返せない。いただきまっすー」

「これで3ターンは稼げるよ」

「ターンって……」

苦笑いするしかない。

「のぞみ、腹黒いオーラーが……」

悠希もたじろぐ。

「悠希ちゃん、それきつと幻」

のぞみはいつも通りの素敵な笑顔。

「ごきげんよう、ミス腹黒。」

「というわけで3ターンの間にこれからどうするか話決めよう」

「ふがふが」

佳織が何か言いたそうだが、飴が口に入っていて上手く話せないようだ。

「はいはい、3ターン短いよ。ぱっぱと意見出して」

栄治が手を叩いて促す。

「鬼ごっこ地獄変だ」

「却下」

慶介の意見を日向が即効で却下する。

「いや、何が地獄変なのかよく分からないよ」

「芥川だ、久。将来に漠然とした不安を覚える鬼ごっこなんだ。それは富国強兵の名の下に全体主義へと移行していく日本帝国に第二次世界大戦の悲劇を予期した芥川の心境を再現する……」

「のぞみ、慶介にもロリポップ。4ターン黙らせて」

「おい、オレは佳織ほどイタくないぞ　！」

「誰がアンチファシストの知識をひけらかせて言ったのよ」

「ふがふがふが（日向に同じく）」

のぞみの目論見どおり、佳織は上手く喋れなかった。

「そんな慶介くんには二つ進呈」

のぞみの魔法のポツケから再びロリポップが取り出される。

「二倍の時間黙れと　。　しかも秋だからと安易な栗味とは……

・……キャンディーに栗味とはインディ・ジョーンズより大冒険ではないか……。メーカーが何を狙ってるのか分からない」

「まあ、そんな慶介君はチャイルド・メーカーだけだね」

「のぞみ……、今すぐその言葉を忘れなさい」

日向の指導が入る。

いつものようにグダグダだった。

やることは一向に決まらない。

「ぶはっ、というわけでごっそうさん」

佳織が戦線に復帰する。

「3ターンが終わった……」

「おいガングロ、見るからに嫌そうな顔するな」

「飲食店に食べ物の持ち込みはご遠慮下さい」

「いやいやのぞみん、アンタが持ち込んだんだろーが」

「そうだったっけ？」

「忘れるのはえーって」

そんな光景を一人静かに傍観していた悠希がぼつりと。

「平和なことで」

空の飛び方 沙耶久

放課後、重い屋上へのドアを開く。

甲高い音とともに、晴れ渡る空が、僕を迎えた。

特に用事はない。慶介との待ち合わせまで時間があるから、怠惰に消費しようと考えた結果だ。

「ふう」

一息ついて仰向けに寝転がる。昼下がりの太陽が照りつけ、暖かな初春の空気が漂っていた。

風もなく肌寒く感じることもない、春眠を誘うようなまったりとした心地よい空気と、そう多くの人は表現するだろう。

「平和、だな」

ひとりでに口から漏れた言葉。

でも、そんな言葉とは裏腹に心がざらついた。

空を見上げるという行為は健全な青春時代の行為として表されることが多いし、世界は僕の心中に反して、今日も平穩そのものだった。そんなことを考えていると、屋上の金属のドアがキィと擦れる音を鳴らした。

「あ、久くん発見！ おはようございます！」

空いたドアに向けると制服の少女が一人こちらを見下ろしている。距離にして十メートルほど。スカートの中身が見えそうで見えないギリギリの角度である。

そして思春期の青年は、落胆した。

「やあ、のぞみ、君にはがっかりだよ」

「……いきなり怒られた」

訳の分からないのぞみは苦笑するしかなかった。ともあれ、今日ものぞみは笑顔である。絶えず笑顔を浮かべる少女だ。

「今日もいい笑顔」

親指を上げて見せつける。

「どもーどもー」

のぞみは親指を立てて返す。

「久くん睡眠中だった？」

邪魔だったかな　、そう気遣いをしてくる辺り気の回る少女である。

「大丈夫、寝てないよ。天体観測してたんだ」

「昼でも天体観測って呼ぶのかな？」

「ここで寝転がると、空が良く見えるんだ」

空に視線を戻した。

視線の先に邪魔をする遮蔽物は何もない。純粹に空の色だけである。

「私も寝転がってもいい？」

「どうぞ」

答えるとのぞみは隣に仰向けに寝転んだ。両手を横に放り出し大の字を二人で作った。

「いー天気。日向ぼっこ日和だね」

のぞみは弾んだ声で楽しんでいる。

「でしょ？」

「ですな」

まったりと。内容があるようでないようで、やっぱりない。

のぞみと話す会話は、いつもそんな風にゆったりとしている。

「空と鳩って自由と平和の象徴って言うよね……」

「空を飛びたい願望は危険だよ？」

「いや、飛びたいなんて言っただけだよ」

「うーん、何となくそんなニュアンスに取れたり取れなかったり」

「要は取れたわけね」

「そうそう」

のぞみの会話は本当にまったりとしている。

「のぞみは、空ってどう思う？」

ただなんとなく、尋ねてみた。

「私は」

笑顔を浮かべながらも少し真面目な口調でのぞみは続けた。

「空、自由っていうのにいい印象は持てないかな……」

「どうして？」

「例えばさ」

そう言って彼女は空を指差す。

「あの中に一人で「自由に飛んでください」って言われたら……
・何をすればいいか分からなくない？」

「誰かに聞くしかないね、空の飛び方」

「空には誰もいないよ？」

その笑顔が、少し寂しそうに見えたのは、気のせいだろうか。

「人と関わるとルールが必要になってさ、束縛されて自由を失う。
自由を得れば独りぼっちになって何も出来ない」

のぞみが黙って視線をこちら向けた。

「どっちが、正しいのかな？」

答えを催促する。

どちらが正しい、ね……

空を見ながら言葉を紡ぎだす。

「空は、それだけで完成してしたものなんだと思う」

だから、憧れていたのかもしれない。

「完成してしまっているから、他に何も必要ないんだ。あればむしろ純度を失ってその価値をなくしてしまう」

「純度？」

「例えば雲に覆われてしまったら、その姿は失われてしまうし、世界の隅に遮蔽物があれば景観を失わせる。空という景色は、ただそれだけだからこそ完成しているんだ」

だから空を見た時に感じる自由は、この世界に他人を必要としない。そんな絶対的な孤立故に成り立ったものかもしれない。

「難しいな……」

つい、ぼやきが漏れた。

「難しいって何が？」

「一人で生きるのって、難しいね」

「？」

のぞみは首を傾げる。

「でも、いつでも遠いんだよ」

空を掴むかのように手を伸ばし、握りしめ、そして手を開く。
手の平に何一つ掴むことができない齒痒さだけが残る。

「人間は、一人だと無力だからね……だから『僕』も、他人を求めたのかもしれない。群れて、力を得たいと考えて……」

「……」

「自分だけで完結できる強さがあれば、どれほど楽だろうね」

その声は寂しげに浮かび、冬晴れの空に吸い込まれていく。
のぞみは上半身を起こして両手を精一杯広げてみせる。

「これが、家族に代わる新しい絆だ」

……その言葉は、僕の弱さだった。

驚いて身体を起こす。驚きが半分と、そして羞恥が半分。いつの間にかのぞみはこちらを見て笑っている。

「そう言ったのはどこの誰だっけ？」

思わず口元を緩め噴出してしまった。

「はは」

「何かおかしいなと言ったかな？」

目を丸くし怪訝そうな顔でのぞみは問いかける。

「確かに、そう言ったっけ。僕も若かった」

「そこから、この可笑しい縁は始まったね」

僕は、一人では何も出来ずに震えている少年だった。ただ、何かを追われるように、行き急ぐように、絆を求めた少年時代。

何かを証明したくて、家族を求めた。

……得られないならば、それに変わる何かを。

「友情？」

「そうかも」

「家族？」

「そうかも」

のぞみは楽しそうに笑いながら。

「でも、何ていうか……もつと釈然とするような言葉がな
いかな？」

「……そうだね」

久は、少し考えて。

「ヘイヴン」

そう答えた。

「天国？」

「極楽浄土ってこと。ニルヴァーナさ」

苦しいことが何ひとつない楽園の名前。だけど、呟いた言葉は
のぞみにとっては聞き間違い程度にしか認識できなかったかもし
れないけど、ヘヴンではなかった。

空は既に青さをなくし、眩しい赤色が夕暮れの空を染めた。そんな
平和な一日の話。

そして。

「で、遅れた理由は屋上で空を眺めていたからと」

僕とのぞみは見事に待ち合わせ時間を一時間以上遅刻してしまっ
た。待ちつかれた慶介と呆れた悠希の迎えの視線は冷たい。

「弁解を聞こうか、このサノバビッチども」

「いや、佳織も三分遅刻したんでしょ？」

「昔のことは忘れるカオリイズムだから」

「またオレイズムを掲げる……素晴らしきかな、ゆとり世
代」

昔の政治家達へと思う。日本政府よ、ゆとり教育は失敗した、と。

「春眠暁を覚えずというけれど」

悠希が額を指で押さえて溜め息を吐いた。

「いえ、寝てたわけじゃなく空を眺めててですね……ひい
」

その瞬間悠希の険しい視線がこちらを囚える。こうなれば蛇に睨まれた蛙も同じ。

「お姉さまの目が獲物を搔つ攫ったハイエナの如く……………いえ、何もないです」

腰を九十度に曲げて謝罪した。どっちにしろつまらない理由ならば訂正する前に謝ることが重要なのだ。

「全くお前らの頭に何が入ってるのか見てみたいぜ」

慶介の皮肉にぐうの音も出ないぜ。

「前頭葉？」

のぞみ的思考で彼女は答える。

「なぜ部位で答える！」

「じゃあ夢でいいよ」

「じゃあつて……………たまにお前の言うことが全然わからん……………」

早くも慶介はのぞみのまつたりムードにまかれていた。

「なんかどうでもよくなってきたわ……………。お腹もすいたし早く夕食にしましょう」

緻密な計算の上で演じられた腹黒さ――パーセントの天然素材、強引に話を有耶無耶にする術に彼女は長けている。

（よくやったのぞみ。お前は二階級特進だ）

心の中でのぞみに勲章を与えた。ちなみにそれでは戦死している。もちろん久のおごりでね」

悠希は冷たく言い放つ。

「えっ！」

「当然だな」

慶介も頷く。

「久くんごちです」

「なんでのぞみまで！」

「えっ、久くんの奢りって話でしょ？」

「いや、のぞみも遅刻してるからね」

「細かいことを言っていると器の小ささが知れるわよ」

シャープな悠希の言葉がグサリと心に刺さった気がした。

「諦めろ。男らしく全部払いやがれ」

今だけは慶介の尊大な態度に反抗することも出来なかった。四面楚歌である。

「なんか納得いかない……」

そう言いながらも結局四人分の食事代四二一九円をレジで払った。スタンプリカードが八個溜まった。

おっ。

少しだけ救われた気分になった。

……。

安い、男だ……。

すぐに自己嫌悪に陥った。

ウォン 幕間

ウォンの物語をしよう。

ウォンはいつも笑顔を浮かべている。

本当に、いつでも笑顔を浮かべている。

困ったときには、苦笑。

怒っているときはいつも以上に笑顔。

それが妙に作り物めいていて、皆は恐がるのだが……。

でも作り物と言うならば、彼女の浮かべる笑顔全てが作為的に作られたものだ。

よく人は、外面と内面で人を定義する。

ウォンの内面を、彼女をよく知る仲間たちはこう評価するだろう。他者を立てて自らを律する思慮深い一面もある、と。

容姿やスタイルといった外観と、その感性や思慮、性格を指す内面。

人間は外面ではなく中身である、とそういった信仰を聞いたことはないだろうか。

でも、内面にもさらに外と内がある。

心にも、表に出て相手に印象を与える外面の心と、誰にも見せない理性の奥底で眠るおぞましい内面の心があるのだ。

誰にも見せたくない醜い自分を誰もが飼っているだろう。

人はやはり外面でしか人を評価できない。

相手に伝わる内面も、結局のところは外面に過ぎない。

ウォンの、誰にも見せたくない醜い自分。

それを含め、彼女をこう評価しよう。

ウォンはとても欲深い。

恐らく彼女は、自分の手に入れたいものを手に入れるときは、仲間内の誰よりも手段を選ばずに残酷になれるだろう。

自分を犠牲にして他人を立てる反面、自分の為に冷酷に相手を踏

みつけるウォンもまた真実の姿だ。

そんな怪物を囲う檻こそが幼く、純粹無垢に見える、それでいて思慮深い一面。

彼女がそんな風に見えるのは、彼女がそれを彼女自身持つていないと認識しているからだ。

だからこれは、彼女の罪と罰の物語。

さあ、ウォンの物語を始めよう。

それでは、沙耶久から次の語り手の説明を。

名前、春賀のぞみ。歳、秘密。スリーサイズ、秘密。身長百四十九センチのミニマムサイズで体重は秘密。女の子には秘密が一杯だ。でも、それは可愛らしい秘密ばかりとは限らない。人は綺麗な部分ばかりじゃ生きていけないからだ。

彼らは、そんな隠したいドロドロとした自分の中に溜まるヘドロを『暗黙の了解』と呼んでいた。

触れず、助けず、侵略せず。

それを白状だと、みんなは言うだろうか。

幸福 春賀のぞみ

「……………ぶらぶら」

手持ち無沙汰な時間を持て余します。制服のままガードレールに腰をかけて、足をぶらぶらと。ごそごそとポケットを漁って携帯電話を取り出すけど、着信は0件。私、春賀のぞみに友達は少ないのです。

表面上はクラスのみんなの顔色を必死に伺って、好感度を稼いでるけど、なんせ普段の付き合いが先輩ばかりで、まして慶介くんとか栄治くんとか、あまりよろしくないと噂の先行する方々なので、友達関係は表面ばかりです。目の前には、さっきまで授業が行われていた学校。学力はこの辺りではいい方の進学校。なので目に余るような髪の毛の男子やケバ化粧の女子の姿は見られません。

「ごめん、おまたせ」

人の波から久くんが駆けてくる。

「かなり遅い」

思わず本音が漏れてしまいました。数少ない、顔色を伺わず接することが出来る友達の一人です。

「ごめんごめん、ホームルーム長引いて」

「言い訳だよー。ホームルームとわたし、どっちが大切なの？」

「そんな仕事人間の夫に嫌気の差した妻みたいなことを……………」

「

「仕事を捨てても家族を選んでください、ってやつ？」

「その件につきましては、善処いたします」

「……………具体的対策の伴わない謝罪だから、誠意がないと言われるのよ」

悠希ちゃんも校内から現れます。

「あら、今日は三人？」

「佳織ちゃんと栄治くんと日向ちゃんはいつものファミレスだって。

慶介くんは連絡がつかないらしいよ」

「慶介はキャッチセールスのバイトだよ」

「……それって本当にバイトなの？」

「大丈夫、今回は駅前で居酒屋のメニューを見せながら客引きをするやつだから」

「……前回があつたんだ」

質問してました。

「あつたのよ……」

「あつたんだよ……」

沙耶姉弟はそろって溜め息をつきます。

「内容は本人の名誉の為に黙秘するよ」

「ソープ街での客引き」

「ああ……言っちゃったよ」

悠希ちゃんは慶介くんの名誉を守りませんでした。

「あはは……」

とりあえず笑っておくけど、慶介の好感度大幅にダウンです。

「まあ、学生がする仕事じゃないよね……」

「あはは……仕方ないよ慶介くんだし。多分小さいときに交通事故で頭打っちゃったんだよ……」

「のぞみ……それ、フロアーなの？」

うん、違う。他のクラスメイトとかには隠してるけど、私が実は腹黒いことは七人の中では周知の事実。

というわけで、楽しい放課後の始まりです。みんなでそろってフ

アミレスへ。

「たこ焼き」

「買ってく？ 奢るよ」

「久くん太っ腹」

「ふふふ、メタボ予備軍とでも言ってくれ」

「……バカ」

ちよつと買い食いタイムを挟んで、三人で一つの皿をつつき合い

ます。

「ちよつとCDショップに寄ってもいいかしら？」

「悠希ちゃん何か買うの？」

「この前見た映画のサントラ」

「悠希はインスト派だよね」

「久くんは最近何聞くの？」

「・・・メタル以外ならなんでもいい」

「？」

久くんはおかしな答え方をします。

「この前佳織に軟禁されて、永延と四時間メタルを聞かされた・・・
・・・何がメロディックパワーデスメタルだよ・・・。。名
前にデスが付いた時点で歌にメロディがないじゃないか・・・。。」

「

「あはは・・・。。、大変だったんだね」

そんな二人には目もくれず悠希ちゃんはお目当てのCDを物色していました。相変わらずマイペースというか唯我独尊な感じの人です。

「これ下さい」

そして繁華街近くへ。駅の西口は今日も健全コース。ちなみに東口の方へ向かえばバイト中の慶介と会えるのです。

駅の前を通れば、一際大きなビルが目に入ります。街頭テレビを備えた地上二百階立ての超高層ビル、エディフィスタワー。臨時ニュース以外は、いつも今流行のアーティストのプロモーションビデオが流れています。

二百万人を抱える針木市の中心部。ここはいつも人で溢れかえっています。歩く人々の年齢層も様々で、同年代の制服姿の若者からスリ姿のサラリーマンに至るまで、ビジネスにおいても娯楽においても、この街の中心です。

そこから少しだけ北に上がり、いつも屯しているファミレスへ。
「遅い、亀のように遅い。ゴキブリのように必死こいて急げった

る」

「アンタ……ファミレスにいるんだからせめてウサギとかにきなさいよ」

ファミレスの中にはいつも通り口が悪い佳織ちゃんとあきれた顔の日向ちゃんが既に座っていました。先に来ているはずの栄治くんの姿はないようです。

「おはようございまーす!」

「テンション高!」

いつも通りの佳織ちゃんのツツコミです。

元気よく挨拶、が座右の銘なのです。

「栄治くんは?」

「ウォシュレット」

ネイティブな発音で佳織ちゃんが答えます。

「なぜに英語?」

フリは必ず返すのも、日常会話の潤滑油です。

「食事中だと委員長に「ファミレスにいるんだから」って怒られるから」

「トイレって言えばいいじゃない……そんなことで怒らないわよ」

「あれ? 日向ちゃん、『委員長』って言っても怒らないんだ?」

「ええ……、あの最低なあだ名に比べれば、ね」

日向ちゃんは阿修羅のごとく佳織ちゃんを睨みます。しかしいつでも朗らかにフリーダム、塚本佳織さんは口笛を吹いてどこ吹く風です。

「ねえ佳織……、なんてあだ名つけたの?」

久くんが興味深々のご様子。

「むふつ、知りたい? ……ったい!」

嬉しそくに耳打ちしようとした佳織ちゃんの耳たぶを日向ちゃんが掴み上げます。とても痛そうですね、はい。

「ひなた、千切れる千切れる! やめろって!」

「ねえ佳織、耳たぶって簡単に千切れるらしいわよ？　あなた、リアル耳なしホウイチになりたくなければ余計なことを言わないほうがいいんじゃない？」

日向ちゃんのこめかみに青筋が浮かんでいます。よほどお怒りのようです。

「おー、三人ともついたかー、って佳織と日向なにじゃれてんの？　トイレから戻った栄治くんが平和そうに尋ねました。

「佳織ちゃんが日向ちゃん変なあだ名をつけたって揉めてたの」

栄治くんに助けを求めてみます。

「ああ……、さすがに『ひなとりす』はないよなー」

「……」

「……」

いきなり爆弾を踏みやがりました。空気の読めなさには定評があります、昴栄治さん。

「……もしかして、オレ先走った？」

「それはそれは見事なカウパーでした……」

久くんは栄治くんの為に合掌しました。

「栄治……アンタどこまで空気読めないのよ」

「うわああ、ゴメン。てつきり、暴露された後かと思ったんだよお」

「……ひなとりす。それは、古代日向姫が每晚快樂に身を任せ、刺激を与え続けて肥大化したピンクのピンクのお豆さん……」

解放された佳織ちゃんが昔話風に語ります。

「こつ」

「あらやだ……剥けてる」

どこぞの名探偵の家政婦みたいです。一言言わせてもらっとなら、下ネタ多すぎです。顔を真っ赤に上気させた日向ちゃんを悠希ちゃんが一喝するまで騒ぎは続きました。

そしてみんなで繁華街の東口へ。目的は、バイト中の慶介くんを

からかうことです。時刻はもう夕方を過ぎていました。

「さすがにこの時間になると人通りが多いね」

久くんが呟きます。

「そうね、週末だからいつも以上ね」

そう言つて悠希ちゃん髪を掻き上げます。美人って何をしても様になるのが羨ましいです。

「野獣どこ？ 野獣は」

「さすがにこの人通りの中から探すのは難しいんじゃない？」

佳織ちゃんの言葉に日向ちゃんが答えます。

「だいじょぶ、だいじょぶ。のぞみんのデビルアイズ・バージョン・タイプアール」

お呼びならば、期待に応えないわけには参りません。

「おはよーございまーす、健康優良児です」

「そうそう、これこそ健康優良児の鏡。てか、テンション高！ まあ、オナニーばっかしてるのが健康じゃないのよ、ひなとりす」

「・・・・・・クロス、百回殺して千回首刎ねる・・・・・・」

「九百回は首刎ねても生きてるんだな・・・・・・さすが佳織、油断できねえ」

珍しく、栄治くんのツツコミが冴えています。

「あなたが過剰に反応するから佳織が面白がるのよ？ もう少し大人な対応をしなさい」

いつも通り悠希ちゃんが諫める。

「・・・・・・そ、それはそうなんだけど」

「いじめられる方が悪い理論を持ち出した」

「久、ちやかさないの」

「サー」

「あつ、慶介くん居た」

慶介が熱心にOL風の女性二人と話していたのを発見。指を指してみんなに示す。

「おつ、珍しく真面目に仕事してる」

「キャッチって興味がなければ見向きもされないじゃない。よく慶介が根気よくやってるわね」

日向ちゃんの中で慶介くんの好感度が少しだけ上昇したようです。「そうそう、そのビルの三階に出来たバーがすごい雰囲気がいい店なんだ。この後暇？　暇ならどう？　案内するよ」

「えー、どうしょつか」

「慶介くん未成年じゃないのー？」

「大丈夫、オレ成年。それも好青年。普段はスーツにネクタイ決めてヒルズ勤めだから」

「うっそだー、てかヒルズ遠いつてー」

「・・・・・・」

仕事そっちのけでナンパ中でした。全員の中で慶介くんの好感度、超大幅に暴落。東証、ナスダック、共に大荒れです。

「てい」

「オブツ」

日向ちゃんの鞆が慶介くんの後頭部に直撃。

「誰だ」

「慶介・・・・・・、なにやってんの？」

「なんだお前らか。俺は見ての通り仕事で忙しい。暇つぶしなら他を当たるんだ」

「どう見てもアンタ、ナンパ中だったじゃない」

「ナンパは男の五大業務の一つだ」

「後の四つはなんだろうね」

「ナンパ、デート、酒、セックス、煙草だ」

「おいコラ未成年」

「俺は未成年以前に男だ。それをする義務がある」

「ナンパしてデートに誘い、酒で酔わせてセックス。終わった後に煙草を吸う。それが庄治慶介の墮落論」

「久よ、お前にとっては必修四単位だ」

「ソウデスカ・・・・・・」

「誰か、この野獣の言葉を通訳して」

「あはは………仕方ないよ慶介くんだし。多分小さいときにジャングルジムから落ちて頭を強く打っちゃったんだよ………」

「

「おいのぞみ。勝手に俺のエピソードを捏造するんじゃない。ジャングルジムから落ちててもケガ一つなかったぞ　！」

「あつ、落ちたんだ」

「ああ、バンジーするつもりがヒモを付け忘れた」

「ダメだ………慶介を的確に表現する言葉がオレのボキャブラリーでは思いつかない」

「言葉は無力なのよ、栄治」

一人だけ一歩離れていた悠希ちゃんは、

「………帰っていいかしら」

そう言つて溜め息をつきました。しばらく慶介くんのバイトを邪魔して雑談にふけました。

そうして、慶介くんを残し帰路に着きます。

「………慶介はどうにかならないかしら」

東口の夜はこれから。逆を言えば健全な時間は終わりを迎えて、街の雰囲気はがらりと変わります。そうなる前に私たちは帰路へと着きました。

夜は、苦手　。冷たい空気に手が悴むのも、ネオンが誘蛾灯のようにギラギラと輝く景色も。押し込めちゃいけない記憶を押し込めた心の部屋。その扉が、開いてしまうから　。

「慶介は仕方ないよ。脳が下半身にあるんだ」

「久はしれつと下ネタを言うなあ………」

「空気が読めずに引かせるヤツよりは全然ヒツサーの方がいいよ」

「おい佳織、それは俺のことか？　俺のことなのか？」

「ちよつと栄治、傷口を広げないの」

日向ちゃんが悪い笑顔で栄治くんの肩を叩きます。

ははは………。なんだろう、この感じは。遠近感が妙にお

かしくなってます。どくん、どくん、と。心臓の音に合わせて視界が揺れる。

「その言葉が一番傷口を広げてる　！」

そう、傷口。

「んっ？」

声に気づいて顔を上げると、久くんがこちらを見すえていました。その目は　、出会ったばかりの時の、悲しげな目でした。

「のぞみ、どうかした？」

「えっ・・・・・・・・？」

素っ頓狂な声を上げてしまい、何事かと他の四人も振り返りました。

「どうかした？」

悠希ちゃんが優しい声で尋ねます。

「いやいや、何でもないよー」

気づかれないように、急いで仮面を取り繕います。笑顔という仮面。

「これこれ悠希さんや、女の子にはそういうことを尋ねてはいかん日があるぜよ」

「誰か佳織を黙らせなさい」

ギロりと、擬音語が聞こえてきそうです。

「・・・・・・・・悠希に怒られましたとさ」

「バカ・・・・・・・・」

日向ちゃんは佳織ちゃんに軽く拳骨を当てて、

「怒られたことよりボケを全てスルーされた方が辛いんだって・・・前半は黄門様なのに、なんで後半は竜馬になってんだよーって突っ込む優しさがあつたって・・・・・・・・、ってあらやだ、突っ込むなんてはしたない」

「・・・・・・・・ほつとこう」

しゅんとなる佳織ちゃんは皆にスルーされました。

「ほんとに何でもないんだよ」

「・・・・・・・・そう？」

心配そうにする悠希ちゃんだが、それ以上は追求しませんでした。止まっていた足は、誰からともなく再び進み始めます。

「そんじゃあ」

「ばーい」

栄治さんと佳織ちゃんが別れ、

「私もこつちだから」

次に日向ちゃん。

「じゃあね、久、のぞみ」

「今日も実家？」

「ええ」

そして悠希ちゃんも別れます。七人は二人になり、自然と言葉は少なくなります。口数が減ると、やけに自分の足音が響くような気がします。

「のぞみ・・・・・・・・本当に大丈夫なのかな？」

久くんが前を向いたまま沈黙を破ります。

「さっきのこと？ やだなあ、ちよつとボーっとしてただけだって」

「笑ってなかったから」

「・・・・・・・・えっ？」

声色は優しく、そして悲しげでした。

「また、笑えなくなつたのかと思つたんだ」

「・・・・・・・・」

権利は、ありますか？

私に、その権利はありますか、と。

のぞみよ、お前は絶えず何かに怯えていた。

「のぞみ？」

「・・・・・・・・わたし、笑えてなかった？」

「・・・・・・・・ほんの一瞬、ね」

「ダメな子だね、わたし」

自嘲する。

「のぞみは・・・よくやってるよ」

「笑わないと、いけないのにね・・・・・・・・」

それは義務感を示唆する言葉。

「もう、今はいいんだ・・・・・・・・」

久くんは、私の頭に手を置きます。伝わる手の平の温もりに、泣きたくなります。後悔と、恐怖。

「今なら、僕だけしかないんだから」

「ダメなの、幸せなの・・・・・・・・」

幸せすぎると、恐くなる。

「みんなでいるのが？」

「そう、みんなでいると・・・可笑しくて楽しくて堪らないの」

「それは確かに、幸せなことだよ」

「幸せすぎるから・・・・・・・・笑えなくなる」

それが突然、無くなってしまった時の落胆。同時に、幸せな自分を絶えず責め続ける声が聞こえる。

どうして、のうのうと生きてるの？

わたしの、かわいいのぞみ・・・・・・・・。

罪悪感と喪失の恐怖。

人一倍、お前はそれに脅かされていた。

背筋が、冷たくなり、汗で張り付くキャミソールの下着が気持ち悪いです。

「辛い？」

「うん・・・辛い、よ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・そうか」

「幸せなのは、辛い」

神様。あなたがもし存在するなら、どうか教えてください。
私に、人として、幸せに生きる権利がありますか。

密室 春賀のぞみ

その権利は生まれつき持っているものなのか、それとも生きてきた軌跡により獲得されるのかは分からない。生きるということを選んだならば、最低限すべきこと。それは、食事、排泄、そして睡眠、たったの三つです。それに加えて、文化的な生活として、入浴や運動、勉強と娯楽が並びます。

睡眠は午後十時以降と決めている。しかしながら食事と入浴を終えると、すべきことは終わってしまいました。

ベッドに寝転がり、焦点の定まらない瞳で天井の隅から隅へとゆっくりと視線を動かします。ぼんやりと、ぼんやりと、天井の模様を眺めていると、何か違うものに見えることがあるから……。そうしていると、拡散して曖昧になっていた自己が急速に集まり、形を成したように感じられるからです。そうして、罪が模られます。

「いつも、笑っている子です」

他人に評価される自分を、呟いてみます。

「いつも、とても楽しそうに笑っています」

「純真無垢で、世の中の汚さもまるで知らないよう」

「天然に計算を織り交ぜた少し腹黒い女の子」

「そう、演じてきました……」

聞く者はいません。

「わたしは、いい子でいます」

「フリだけならば、ダメですか？」

自問の声。

「偽りならば、無意味ですか？」

静かな空気。

「幸せには、なれませんか？」

自室という空間に流れる独特の沈黙は、他者性をシャットダウンした自意識の密室。

邪魔は、入らない。

助けも、入らない。

なによりも、静寂は必ずしも平穏と一致しません。それが時にどうしようもない虚無感へと変化して、心が狂乱に満ちてしまうことも何度か経験しました。腕に針を刺される痛みを錯覚したこともあります。一日がどんなに幸せでも、お腹を抱えて笑えるような日々だったとしても、それがこの時間で裏返し、幸せだった分がそのまま私に痛みを植えつけるのです。

「一人になれば、どうあっても自分を意識しなければならない」

「笑顔の自分は笑ってますか」

「答えは、イエス」

「答えは、ノー」

「矛盾ではない」

「本当に、楽しいと思う」

本当の自分を見せる必要のない世界。

「嘘は心地よかった。嘘は、これまでのどんな真実よりも優しかった」

同時に、苦しみの生でもありました。

そんなことをぼんやりと考えていると、時計の針はいつの間にか十時を過ぎていました。

少なくとも十一時までには必ず床に着きます。この部屋の中はまごつことなき現実の世界。だから、明日訪れるはずの七人の夢へと逃避する為です。

そう、日常とは私にとって許されなかったはずの泡沫の夢。

明日も、いい夢が見れますように。

告白 春賀のぞみ

「私ね……、父親が借金していて、お金が必要なの……」

少女は華やかな針木市の繁華街で俯きながらそう呟きました。それをイヤらしい笑みと共に聞いていたのは、家に帰れば妻と子供がいそうな四十代のサラリーマン風の男です。

春賀のぞみという少女の昔の話です。

心が壊れた私の物語。

それはよくある風景です。十代の女の子と四十を過ぎた壮年の男性が二人きりで連れ添い、繁華街を歩く景色。今でもこの街では毎晩のように、援助交際と思わしきカップルと出くわします。

子供たちはお金が必要だから。

人生のある時を境に、子供たちは見栄や優越感がプラトニックな純愛ではなく性の知識を知りブランドを纏うことに変化します。彼女たちに必要な金額は親からもらう小遣いだけでは、話になりません。この時期の子供が身にまとう服は、大人の服と比べても金額のケタが違うからです。バッグに靴、財布に香水、ピアス、化粧品に至るまで。それらの合計額はサラリーマンの一ヶ月の給料を下手すれば超えるものでしょう。

そんな子供たちの為に、この街には『優しい大人』が溢れています。たまに何も知らない家出少女などが『優しい大人』たちの犠牲となることもあります。大抵の場合は、そこにはギブアンドテイクの図式が成り立っているものです。それが、売春という非法のビジネス。売春はある時期にメディアで大々的に取り扱われましたが、それが定番化して日常の景色となると一気に話題は沈静化することになります。今時そんなの珍しいことじゃない、と。そんな諦

念を混ぜ合わせた言葉によって、売春は暗黙の了解のような立場を得たのでしよう。

春賀のぞみも、傍から見れば典型的なブランドを身にまとう少女に見えたのかもしれない。

この頃の私も、やはり笑っていました。

しかしそれは爽やかに、夏の青空のように笑うそんな『完璧』な笑顔ではなく、世の中の全てをさげすんだような、そんな薄っぺらい笑い方をしました。

事実　あの頃の私は、世界を呪っていたのかもしれませんが。

「そうか、そうか。大丈夫だよ、おじさんはお金持ちだから」

鼻息荒く、私の肩に手を回す男。私は顔を両手で覆い、両肩を振るわせる演技を続けます。この頃から、『誰か』を演じるのが上手だったと思います。

「大丈夫、泣かなくてもいいよ。ちょっとおじさんのお願い聞いてくれたらそんな借金なんてすぐに返せるよ」

笑っていました。

それは、獲物を捕まえた歓喜。

愚かな獲物に対する嘲笑。

男は自慢げに自分の仕事場での役職、仕事の内容から給与に至るまで語り始めます。いかに自分が社会的に成功を収めているかを誇示し、私は善望の眼差しで、一つ一つの内容に感嘆や尊敬、そんな風に見える反応を示しました。気分をよくした男は、さらに自分のことを話し始めます。男は、自分が獲物であることに気付く様子もありませんでした。男は、少女が自分という存在に興味を示しているのだと思い込まされているからです。

本当に愚か……。

少女が興味を示しているのは、あなたの財布の中身と口座の中身であると言うのに……。

繁華街の路地を一本入れば、そこはホテル街となります。男は私の肩に手を回しながら、ホテルへと誘います。男は全く気付いてい

ません。二人の姿をデジタルカメラに収めた第三者の存在。それが彼の破滅を告げる狼煙だったのに。

男が異変に気づいたのは、それから一日後のことでした。

「だからさあ教授さん、この写真が週刊誌なんかに載るとオタクも色々とまずいでしょ？」

プリペイドの携帯電話を片手にカラオケルームで少年が喋っていました。

部屋にいるのは携帯電話で喋る少年、それをにやにやと見つめる同年代の男女が二人。派手な服とメイク、夜の繁華街で見かけるような少年達三人と、つまらなそうに携帯ゲーム機をピコピコと動かしている私の姿がそこにはありました。

「ワカル？ 彼女未成年なワケ。彼女にとっちゃ『優しいおじさん』が親身になって相談してくれたと思ってたのにさあ、それをアンタはホテルに連れ込んだってこと。これってトラウマもんだぜ？ かわいそうに。だからオレらに話が回ってきたってわけ。オレら街の平和を守るピースメーカーだから、ぎゃはははっ」

電話口から漏れる男の声も興奮しているようです。それを横耳で聞きながら、私は溜め息をつきます。その後、男がシャワーを浴びている隙に、私は彼の免許書と名刺、電話番号を奪って逃げました。そう、始めから目的は、こうした脅迫なのです。

立場がある人間ほど、警察に頼ることは出来ません。なぜなら、責任という言葉ほど、この世に恐ろしいものはないからです。

「オッサンさあ……、口の聞き方に気をつけるよ？ オレらの悪を憎む心が爆発したらさあ、アンタの痴態がマスコミとか警察屋さんに漏れちゃうよ？ オレらが穩便に慰謝料で解決してやるって言ってるの。人の好意はありがたく受け取るもんだぜ？ ……そうそう、それでいいんだよ。んじゃ指定の口座に三百万円よろしく」

ヘラヘラと笑いながら少年は電話を切りました。

彼は桜井要くんといいます。このグループのリーダー格の少年で、常にこうした犯罪の実行犯でした。

「あのオッサンもすげえ金持ってるよねー」

「ああ、これで五百万？ すげえじゃん、俺ら一気に金持ちだよ」

「マジで？ アタシなに買おうかなー。秋の新作バッグ欲しかったんだよねー」

「一人アタマ百二十万？ やべえなー、オレ単車買おっかな」

私が男の話を聞きだした理由は、脅迫内容と共に、いくらまでお金を引き出せるかの調査でもあるのです。その範囲でお金を脅迫して奪い、破滅する寸前で止めておくというリスク管理。追い詰められた人間は、何をするか分かったものじゃないから。

私は、追い詰められた人間の思考を、行動をよく知っていたからです。

「ねえー、のぞみは何に使うー？」

話を振られたと同時に、ゲームオーバーになった携帯ゲームの画面を見て、ソファァーに放り投げます。

「……………つまんない」

しかし時々、そのリスクを越えてしまいたくなる。

「のぞみ、どしたの？」

「なーんか、飽きてきた」

坂道を、ブレーキの壊れた自転車で駆け下りるように、頭の中を痺れるような衝動が走る。

わたしのかわいい、のぞみ。

わたしのかわいい、のぞみ。

どうしようもなく全てを滅茶苦茶にしていまいたくなる。

「なんだよ、これからもっと金が入るぜ？」

「……………」

私はテーブルに頬杖をつき、考えます。

「ちよつとー、のぞみまた悪いこと考えてるよ」

「じゃあのぞみが楽しいこと思いつくまでセックスでもしとく？」

「ばーか」

「ばかじゃねえつて。横で楽しいことしてた方が楽しいこと思いつくдар？ テレビで偉い人言ってたつて」

「どこの偉い人よ」

「どっかの」

「てきとー」

「でも楽しいことつて、なんがある？」

「ギャンブルとか？」

「何？ アンタスロットでも行けば？」

「暇ならそーする」

ギャンブル。

その言葉の響きが、やけに気に入りました。

「ギャンブル……いいね」

「のぞみもスロット派？」

「スロットよりもスリリングで楽しいよ」

止まらない。

ブレーキの壊れた自転車では、止まれなかったのです。

「はあ」

「ねえーのぞみー、つまりナニすんの？」

「おっさんの支払う五百万賭けない？ 勝ったもん総取り」

「ふうーん、で賭けの内容は？」

「今からオジさんの大学忍び込んで、この写真を教室とか掲示板とかドアとか、一晩中かけて四人で貼りつけんの。んで出版社にもフックス。そしたらさーオジさんまずいよね？ そしたらオジさんどうするかなー？」

黒い衝動が、私に悦を与えます。

「うへえ………陰湿」

「のぞみー、悪い顔してるよー」

「刺激的なことでしょ？ 何日後かな……」

さて、 何日後に男は、どのように破滅するでしょうか？

さてさて、お立会い。

皆さま、こそつてご参加下さい。

ベット・プリーズ。

他人の人生を、決定的なまでに破滅させる最悪のゲーム。

春賀のぞみは、あまりにも欲深く、罪深い少女。

特に快楽を求める欲望にブレーキがなかったのです。

エロスとタナトス 性と死に私は病的に惹かれていました。

……さて。

二日後に、とある州立大学の教授が自宅で首をつっているのが発見されました。

遺書はなく、衝動的なものであったとの警察の見解だったそうです。

手元には五百万の束。賭けは私の一人勝ちでした。

さてさて、お次のゲームは？

次は？

次は？

そんな狂った宴を、私たちは繰り返していました。

そんな時に、彼と出会ったのです。

メフィストファレス、ウェイとの、出会いでした。

ウォン2 幕間

さて、ウォンの話の続きをしよう。

彼女の家の話だ。

彼女の家は、由緒正しいという言葉がよく似合う。

この針木市において最も大きな力を持つ大手ゼネコン企業。

それが、ウォンの実家だった。

親族経営の部分はあっても、大手ならば一枚岩ではない。

彼女の祖父にあたる会長の元、社長は彼女の父。

親族経営には常に反対勢力の影がある。

だから、身内の不祥事には人一倍厳しく対応しなければならない。

親族経営が一番注意しなければならないことは、身内の失敗を他

の誰よりも厳しく罰さなければならないことだ。

そうでなければ秩序は保てない。

それは仕事に限った話ではない。

家族だって同じだ。

罰したい、罰したくないではない。

ルールを破ってしまったものは罰さなければならないのだ。

そして、ウォンを含む、少年少女たちの遊びはエスカレートしていった。

彼ら、彼女らに罪の意識はない。

世の中には言葉が溢れていて、彼らはその中から自己弁護に最適な言葉を選び出し、自らに暗示する。

法律にも守られていると錯覚する。

それら全ての自らに都合のいい部分だけを集めて造り上げた幼き

世界は、どこまでも本能的で純粹な悪意の塊である。

だが、それは見てみないフリをするということでもあるのだ。

彼らは見ないフリをしていた代償を払わなければならない。

そして、そのツケはあまりにも大きい。

破滅ゲーム 春賀のぞみ

いつしか、彼らの行動は暴行、恐喝に留まらず、麻薬の強制にまで発展しました。

ウェイという悪魔が私に与えた商品は、夢を見るための薬 覚醒剤と呼ばれる常用性の高く、幻覚症状の激しい薬でした。

少年期とは、闇に憧れる時期です。

学園の子ども、街の子ども、火傷を伴う遊びに憧れる未成年たちが針木のネオンに惹かれて集まり出し、誘蛾灯のように街のネオンは輝き、針木駅東口午後十時は、街の色が一層濃くなります。

ターゲットは、遊びなれていない、制服を着た少年、もしくは少女。

私たちは、その子たちをクラブへと誘い、グループを広げていきました。

クラブは誘蛾灯としては最適でした。

低音の爆音が響くそこは、扉を開けた瞬間に迷い込んだ者を別世界へと導くかのようで、赤や青のライトが飛び交う蛍光色の樂園幻想。

非日常の幻想は、思春期の思考に甘い痺れを感じさせました。

私たちは、その子たちがクラブに通うようになると、麻薬を薦めました。

マリファナです。

もちろん初めから乗り気である者は少ないです。

そんな躊躇する子供たちに与える免罪符は、「依存性がない」「煙草のようなもの」という二点でした。

彼らには煙草感覚で、麻薬を手にしてもらうのです。

確かにマリファナは依存性は低く、幻覚症状もない。

さらに言えば、麻薬の中では非情に安価です。

でもそれは、麻薬という言葉に括られる代物。

ただの言葉遊びに聞こえるかもしれませんが。

だけど少年達は、麻薬なんてやってみるとそんなに怯えるようなことではない、とそう思うようになるのです。

そんな子供たちにマリファナから始まり、シャブ、ヘロイン、LSD 徐々に中毒性と常用性の強い麻薬へと切り替えて、簡単に売り渡しました。

そして気付いたときにはもう遅い。

彼らはもはや麻薬なしでは生きていけない子供。

何とかして金を作り、高額に上げられた麻薬を買おうとして、そうして、強盗や恐喝といった犯罪行為にまで発展しました。

さらには中毒者による殺傷事件や交通事故に至るまで、私たちの遊びは、もはや「遊び」で済まされないレベルだったのです。

その中心に春賀のぞみはいました。

私は、覚醒剤の売買で得た金で街のホテルを転々としていました。私たちは知りません。

自分達の踏み越えたルールを知ろうともしませんでした。

でも、知らないからと言って罰されない道理はないでしょう。

見ようと思えば見ることが出来ました。

知ろうと思えば知ることが出来ました。

その代償を、やはり払わなければならなくなったのです。

この世界にはルールがあります。

それは法律や道徳とは限りません。

この人に逆らってはいけない、この人に従ってはいけない。そんな暗黙の了解も、立派なルールでしょう。

今回適応されたルールは、この街で麻薬を扱うのは全て唐風組を通さなければいけない、というものでした。

チームに属する少年少女ならば当たり前のルールでした。

唐風組とは広域暴力団、つまりヤクザ。

その彼らの麻薬のマーケットを許可なく荒らした私たちはつまり、ヤクザの顔に泥を塗ったということです。

ヤクザの縄張りを荒らすということがどういうことか。恐いものを知らない少年達は、そんなことも知らなかったのです。そう、春賀のぞみという少女以外は。

それは雨の日の出来事。
ぼつぽつと。

頬に感じる冷たい感触を感じながらわたしは走ります。逃げました。

息が切れながら。

必死そうに見えて、頭の中は酷くハイで。
ろくな終わり方をしないだろうなって。

これは、春賀のぞみの望んだ未来が現実になった日の再現映像です。

ご覧下さい。

愚かな少年少女たちの、偽りの楽園の終わりを。

私は、いつも屯していたクラブに桜井くと顔を出しに向かいま
した。

いつものように麻薬をヤツて麻薬を売る。そのはず、でした。
しかし、クラブの中は真っ暗だったのです。

「なんだ？」

いつもとは違う景色。桜井くんは首を傾げて、壁のスイッチを探
ります。

異臭。臭い。思わず鼻を塞ぎます。よく知っている暴力的な
臭いでした。

・・・そう。

私たちの仲間が、麻薬を服用しながらよくやってた、レイプの時
の臭いです。

「えーっと」

間抜けな声でスイッチを探す桜井くんは気づいてないのでしょ

か。

「あつ、これこれ」

パチリつと。電気がつき、その光景が目の前に広がります。そう、何となく思っていたことが現実になっただけです。心は、特に揺らぎませんでした。

「あつ　？」

桜井くんはぽかんと口をあけて呆然としています。

そりゃそつか。

私は妙に冷静に納得していました。

テーブル席のソファにだらしなく横たわる物体。

麻薬の売買を始める前からの仲間だった四人のうちの二人。

白目を向いて、だらしなく口が開いて、全裸で血と精液に塗れた私たちの幹部の女の子が股を広げて捨てられていました。

その彼氏だった方は、頭部が、原型を留めていない有様でした。

「うぷつ　！」

桜井くんが口に手を当てます。

ああ、確かにアレはグロかったです。

秘部には氷を掴む為のトングが捻じ込まれ、血に塗れていました。
「おえええええええつつつ　！」

びちよびちよ、と。桜井くんは床に吐射します。

これが、普通の反応、なのかな？

普通はこういうの見たら、気持ち悪くなるのかな？

私には分かりませんでした。

何も、感じないな・・・・・・。

心は、静かでした。

「どうでもいいけど、多分私たちヤバイよ？」

淡々と私は告げます。

「げほつ、・・・・・・うえ、な・・・・・・に？」

「縄張りを荒らされた暴力団にねぐらを知られたってこと」

「なっ　！」

桜井くんの顔は蒼白になる。

「早く逃げないと、多分もう仲間呼ばれてるよ?」

「まじ、かよ……なん、で?」

バカみたいに立ちすくむ桜井くんがやけにおかしくて。

「それがね、麻薬を扱ってことなんだよ」

嘲笑しました。

そう、これが最後のゲーム。

命をかけた、文字通りの『鬼ごっこ』でした。

私は桜井くんを置いて、一人裏口から出ました。

裏口の方が入り組んだ路地で逃げやすくだろうってことで。

ゲーム、スタート。

「おい、待って」

正氣に戻った桜井くんが、縋るようになってきます。

これこそが、ウェイという悪魔の提案してきた最高にハイなゲーム

ム 破滅ゲームだったのです。

『捕まれば死、最高に絶望的な逃走』

『逃げ延びたらどうする?』

同じことを繰り返すだけ。

『捕まったらどうする?』

きつと、痛いだろうね。

『もしかしくとも、殺されるだろうね』

あはははっ。

笑ってました。

可笑しくて、可笑しくて。

捕まれば、命の保障もないのに。

なのに、笑ってました。

可笑しくて、可笑しくて。

腹を抱えて、笑いたくなりました。

怒号と喧騒。

疾走。

「…………どのくらい、逃げ回ったでしょうか。」

薄汚いネズミのように、チューチューと、路地裏の闇を逃げ回りました。

雨に濡れて額にへばりつく前髪も気になりません。

気がつけば、辺りは静かでした。

「はぁ…………はぁ…………」

荒い二人分の吐息が、響くだけでした。

ひとまずは逃げ切れたようです。

「た、助かったのか…………？」

そんなことを言う桜井くんが、おかしくて堪りませんでした。

「あははははっ、バカじゃない？」

「な…………何がおかしいんだよ」

「逃がすわけじゃない。面子で商売してるのにさあ」

恐怖によるルールの支配。それは、彼ら暴力団に限ったことではありません。

全てのルールにおいて重要なのは、それを犯した時の報いが如何に悲惨であるかということです。

そうじゃなきゃ、守る人間なんていない。

「…………何を、呑気な…………」

「楽しみなよ」

私は、ポケットからピルケースを取り出します。

「最期になるんだからさ」

「何だかつ」

「始めから、そういうゲームだったんだよ、これは」

轟音と閃光。

近くに雷が落ちて、少女たちの終焉を彩ります。中々の演出だと思いました。

ピルケースから、二つの錠剤を取り出します。

これこそが、私の中に眠る黒い衝動を自由に目覚めさせる起爆装置。

赤と青のカプセル。時限爆弾の解体の最後に切る、確率二分の一の導線のようにです。

それを両方一気に飲み込みます。

じわり、じわりと、嚥下したカプセルは胃へと落ちて、酸に溶けて混ざっていきます。

ドクンッ。

胎動する。

ドクンッ、ドクンッ。

じわじわと、血液に乗った何かが、思考を蝕んでいく。

神経が溶けて、頭の水が泡立ち、何者でもなくなっていく感覚。

天使の羽を広げたかのような、躍動感と全能感。

人間から天使へのメタモルフォーゼ。

「狂ってる」

破壊されていく。

「死にてえなら・・・殺してやるよ」

破壊されていく世界。

みんな、滅んでしまえばいい！

蝶番が軋み、壊されて、ヘドロの濁流が、体中を支配していきま
す。

「キヤハハッハハハハハハは嗚呼あはははあははあああつつ

」

天使化、完了です。

「この・・・狂人が・・・」

一瞬のことでした。

「テメエのメンヘラに俺らを巻き込みやがって！」

首を、乱暴に掴まれて押し倒されました。

これは、予想外でした。

「そんなに死にてえならよお、テメエ一人で死ねばいいんだよお！」
瞳孔を開いて、震える手で、ひどく絶望的な表情で、桜井要は私
を押し倒し、そのまま首を絞め殺そうとしました。

そう、追い詰められた人間は、何をするか分からない。すっかり忘れていました。

「全部……テムエのせいで……」
 こういう可能性もなきにしもあらず、だったと。

「コロしてやる……」

体が、動きませんでした。苦しくも、ありませんでした。

ただ、浮遊するような感覚だけが、私を支配していました。

なるほど……こういう終わり方でしたか。

[illegible]

壊れたように笑う彼も、もう未来を見てはいませんでした。
ドクンッ、ドクンッ。

そう、私は生きていた。

ここで、必死に心臓を動かしながら、生きていた。

押し掛かってくる蒼白い手が、この身体を止めるまでは。

汚れも、痛みも、憎悪も、全てをひっくりかえして春賀のぞみだった。私は、初めて生きていると実感しました。

気分は、悪くない。

最高にアガツてて、なのに、安らか。

ありがとう。

私は、心の中で、悪魔に感謝しました。

当時の私は、薄れ行く意識の中で、そんなことを本気で思っていたのです。

、中性的な声でしたが、男だと思っています。

初めて会ったはずのその男は、私よりも私のことを知っていました。

雨に、縁があります。

その日も、こんな雨の夜でした。

男は、白い、石灰のような仮面を付けていました。

紙粘土のような表面で、その頭上には、音楽室に飾られたベート

ーベンのようなパーマの当たった金髪がくつついていました。

「覚醒剤？」

「そう、これまでの遊びなんかとは比べ物にならない、最高にスリリングなゲームだ」

「こんな量を一人で服用しろって？」

男が持っていたスーツケースに満タン詰め込まれた白い粉。覚醒剤の入手が難しくなったとよく聞きますが、それが嘘に思えるくらい大量の覚醒剤が入っていました。

「売りまくって、キミはさらにオレから覚醒剤を買い付ける。この街の子供たちを全て食い物にしてやればいい」

「黙ってない人たちだっているでしょ？」

詳しくは知りませんが、そんなことをすればこの街で麻薬を売っていた暴力団も黙っていないでしょう。

「はははっ、それが狙いだよ」

「狙い？」

「これはね、その暴力団達から奪った白い粉なんだ」

「……バカじゃないの？」

「足はついてない。皆殺しにしたからね」

話の真偽は分かりません。でも、どちらにしろ、常軌を逸した提案でした。

「こんな馬鹿な話受けると思ってるの？」

そう言いながら、去らなかつたことこそが、今にして思えば雄弁な答えだったと思います。

「受けるさ」

「どうして？」

「キミがタナトスに取り憑かれているからさ」

「……」

「キミは欲深い」

どうして、生きてるの？

誰かが、そう囁きました。

「自らが死のうとするのにも、ちつぱけな自殺など選ばない。壮大に他人を巻き込んで破滅へと転がり落ちたいとのぞんでいる」

わたしの、かわいいのぞみ。

そう、私は壊れた心の奥底で思っていたのです。
死してようやく、私の霊は救われる。

「これこそが、キミを天使へと昇華する魔法のクスリだ」

芝居がかった口調で、覚醒剤とは別に、彼が懐から出したピルケース。

その中には、赤と青のカプセルが、所狭しと並んでいました。

「ウォン　空を飛ばう」

彼は私のことを、ウォン、と呼びました。

『捕まれば死、最高に絶望的な逃走』

『逃げ延びたらどうする？』

同じことを繰り返すだけ。

『捕まったらどうする？』

きつと、痛いだろうね。

『もしかしなくとも、殺されるだろうね』

・・・・・・視界が、ぼやけていました。

まだ、雨が降っていました。

天国にも、雨が降るのだろうか、とそんなことを考えました。

そんな私に、何かが差し伸べられていました。

「・・・・・・ウェイ」

悪魔のお迎えとは、中々乙なものです。

だけど、視界がはつきりすることに、辺りは見慣れた景色になっていきます。

そんな世界の中に、真っ白な人間がいました。

笑顔で、私に差し伸べられた手。

「天使・・・・・・」

思わず、呟いてしまいました。

私が出ったのは、天使だったのです。

私のような、紛い物の天使ではない、本物の天使
そう。

。

その人こそが、沙耶久だったのです。

リスタート 春賀のぞみ

灰色の夢。

雨の日の夢。白黒だから雨は黒くて、見上げる私を見下ろす空が責めるように、世界は雲ひとつない晴れでした。

ずきりと、鋭い頭痛。

殺風景な部屋 自室。

夢に脅かされる懺悔の部屋。

全てが夢ならばどんなによかっただろうって、たまに思います。でも、そう思うには、雨の冷たさも、服用した薬の効果も、恐いくらいにリアルに思い出せる。

七人の暖かな夢から覚めた、たった一人の六畳の部屋。

焦点の合わない二つの目で、どこか夢うつつにぼんやりと天井を眺めがら思います。

「いつから、ここにいるんだろう……」

ことは、どこを指した言葉だったのか。

六人の顔を思い描きます。

救われたような歓喜と、どこか妙な居心地の悪さと共に。

一気に意識は覚醒しました。

そしていつも通り、慌しく通学の準備。

別に遅刻するような時間ではないけど、ただ、一秒たりともこれ以上はこの部屋にいたくなかったから……。

しばらくしてボタンと乱暴な音が、誰もいない部屋に響きます。

外は雲ひとつない快晴。

見上げながら、久くんの言葉を反芻します。

『空は、それだけで完成してしまったもの』

「孤独ならば……こんな気持ちとも無縁かな？」

そして、のぞみは歩き始める。

その顔から憂いは隠しましょう。完璧な笑顔の仮面で擬態しまし

よう。

嘘が上手くなること、それが久くんと約束だから。
日常はこうして始まります。

ブラン 沙耶久

のぞみの『暗黙の了解』。

それは非常に分かりやすい。

彼女は、世界を、人間を、自分を、存在する全てを憎んだ。
近づくもの全てを傷つけて、巻き添えにしていた。

よく、姉である悠希は僕に質問する。

「どうして、のぞみを助けたの、と」

時間はのぞみと出会った頃まで遡る。

その日は雨が降っていた。

雨の降る音は深夜の番組が終わった後のテレビのノイズに似ている。

灰色の壁を叩く音。

コンクリートの溝にできた水溜りを跳ねる音。

空を閉ざす分厚いコンクリートのような監獄の空。

誰も世界からは逃さないと、神が告げるかのように。

意識は、覚醒する。

右手に傘を持ち、目線は左手に持った携帯電話の画面に落として溜め息をついた。

「無茶苦茶するよな、アイツ……」

辟易として愚痴をこぼす。

雨に打たれる傘が心なしか重く感じた。

「まあでも、仕方ないか」

父である、沙耶春樹からの命令だった。
普段ならウェイという僕の弟分を使う春樹が、珍しく僕を指名したのだ。

ウェイ その名前を聞くだけでげんなりする。

アレはイかれている。

アレを人と例えるのは、人間に対する冒瀆になるだろう。
これくらい言ってもけして失礼などではない。

それほどまでに、歪な存在なのだ。

ともあれ、おつかいの途中だ。

おつかい、とは言っても昔テレビでやってた物心ついた子供が母親の買い物を一人でする初めてのおつかい、というような可愛らしいものでもない。

「途中で泣き出しちゃう子とかもいたよな」

隣に居て当然の人がいなくなってしまう恐怖。

幼い子供心にとってはこの世で恐ろしいことの一つだ。

それは時に、大人に成長したその心にまだ傷跡を残すほどに。

画面を見ながら歩いていると、ノイズに紛れて何かが聞こえる。

その指はすかさず三桁の番号を打ち込んだ。一、一、0。

「はい、こちら百十番、何かありましたか？」

「女性の悲鳴が聞こえたんです ！」

焦りを含んだ声で。

「場所はどちらですか？ 聞こえた場所は分かりますか？」

「住所は分らないですが、場所は針木市のセントラル街にあるラーメン屋から入った細い路地を百メートルほど真っ直ぐに行った辺りです」

「分かりました。至急警官を向かわせます、あなたの名前は ？」
そこまで言ったところで電話を切った。

演技はお仕舞い。

そもそも、女性の悲鳴などは聞こえなかったしね。そして携帯電話をしまい音の方向へと走り始める。

その先に居るはずの春賀のぞみという少女。

お使いとは、彼女の愚かな人生の幕を下ろさせることだった。

少年の甲高い罵声の聞こえた方　その場所は路地裏の奥深く。
夜の店の裏口が並ぶその場所は、雨の昼間に人通りなど皆無だ。

「お前の……せいだ……」

重なり合う少年と少女、桜井要と春賀のぞみ。

書面でしか知らない少女達。

少年の表情はもはや常軌を逸していた。

瞳孔が開いて、近づく僕に気づく様子もない。

「テメエが……俺たちに麻薬売買をそのかさから……」

$$\begin{array}{c} \bullet \\ \bullet \\ \perp \end{array}$$

随分と自分勝手な呪詛だ。

ウェイが聞けばさぞかし喜ぶだろう。

アイツは狂人だから。

「あつ？」

少年の声が上がる。

その時、少女の口元が歪んだように見えた。

「なにが、おかしいんだよ！」

ドスを聞かせた低い声。

見るからに、少女は意識を手放している。

雨の中で、野良犬のように一人、その人生を終えようとしていた。それなのに、彼女の表情は 安らかに笑っているようだった。

どくんっ。

意思に反して、身体が反応した。

[illegible]

つつ　　！！！」

「……そんなに、彼女は死にたがってたの？」
ぴくりと、その声に少年は反応する。

「だれ、だ　？」

振り向いた少年の顔が一気に青ざめていく。

少女の首にかかった手がゆっくりと落ちていった。

だけど、そんなことはどうでもいい。

冷たいアスファルトの上に横たわる少女。

解放されたような安堵。

終焉という、絶望的な希望に救われようとする少女　。

「誰だって聞いてんだろ！」

春賀、のぞみ　。

僕は、君の事を知らない。

見当違いなのは分かっている。

だけど、問わずにはられないんだ。

「それで………満足かい？」

「ワケ分からねえこと言ってんじゃねえよ！」

春賀建設、代表取締役、春賀晃の一人娘、春賀のぞみ。

売春、恐喝、脅迫、麻薬の不法所持と乱用、そして売買。

僕が知っているのは君の人生における結果だけだ。

その生は、死よりも辛いものなのか、それとも死をのぞんだが故
の結果なのかは分からない。

歩を、進めた。

『助けるつもりか？』

自問する声。

………助ける？

なぜ、僕が？

何度も、自問する。

『なぜ？』

問いかけてるのは、僕だ。

『　　キミらしい』

「ワケが、分らないよ……」

答えは返ってくるはずがない。

「近づくんじゃねえ」

少年のナイフを持つ手がこちらへと向いた。

止まる必要はない。

ナイフの先は震えている。

この少年が本当に殺傷する可能性はほとんどない、と判断した。

一度冷静になってしまえば、恐怖も再燃する。

人を殺すという行為は一線を越える。

それ故に本来ならばその恐怖が付きまとう行為だ。

越えてしまえば人でいられなくなる。

「聞こえてんのか！」

その叫びは懇願だから。

「刺せばいいじゃないか」

「なっ」

ナイフの切っ先に身体を寄せていく。

「そうしたら僕は止まる」

「ダメエ、オレは本気だぞ　！」

本気ならば、僕は既に死んでるだろうね……………。

君は、まともすぎるんだ。

本当に狂える者を、君は知らない　。

ナイフが少しだけ遠ざかる。

それに合わせて、また一步距離を詰める。

そしてナイフを掴む。

鋭い痛みが走る。

気にしない。

皮膚が切れて、血の滴る手で、ゆっくりと自分の胸へとナイフを誘導した。

「だから、刺すんだ。引くなよ」
笑みを浮かべる。

「・・・・・・正気かよ」

少年との距離は限りなく近くなっていた。
ナイフを持つ腕が少年の死角となる位置で、もう片方の手を伸ばした。

そのまま気付かれないように、少年のポケットに目的の物を入れる。

「近づくなつつてんだろうが！」

不意に、至近距離で少年の蹴りが腹に入る。

それを避けることなく受けた。

胃を何かが逆流するような衝撃。

だが、倒れそうになるのを後ろ足で必死に踏みとどまる。

「彼女は、どうして死にたがってたの？」

問いかける。

「ああ　？　知るかよ・・・・・・俺たちを巻き込みやがって、最低のクソ野郎だ。そんなに死にてえなら一人で死ねばよかったんだ。仲間を、裏切りやがって」

「彼女は、どんな人間だった？」

「なんだそりゃ？　そんなことを聞いて何になる？　ご覧の通りのヤク中だよ。いつも薄ら笑って、人を陥れることしか考えてねえ、生きる価値のねえ人間だ。ああ、そうだ、こいつは生きる価値もねえんだよ！　全てはこいつのせいだからな！」

その言葉に、意識が遠のきそうになる。

どうして、罪の意識がない？

どうして、罪を犯してなおも被害者面をしている？
なんて、絶望的　。

『ははははははっ』

』

そう。

ヤツが最も好む種類の人間だ。

ヤツが強く意識を侵略しようとする。

僕が絶望するほど、ヤツは愉悦する。

『変わってくれよ久、コイツ最高だよ！ 人間の中の人間だよ、マスターピースだ！ 春樹には警察に売れって言われたけどさあ、コイツ摘み取るよ。ここまで汚えヤツは滅多にお目にかかれない！』

ウェイが、目覚めた。

失せてくれ。

お前が、気が進まないから代われって言っただんだ。

『マイ・ブラザー、キミは俺の尻拭いを嫌ってただろう？ 面倒くさい日常は全てキミの担当で、春樹は俺の担当。でも、今回は殺しもダメで俺だと失敗しそうでしょ？ だから代わってって言っただ。でももう、関係ないよ。コイツはここで楽しむからさあ！』

春樹の意向に逆らうことは、君の本意じゃないだろう？

『へえ……』

小馬鹿にするような口調で。

『マイ・ブラザー、キミは春樹の意向通り動く気だった？ 俺に嘘は通用しない。キミは、さっきからあそこの少女にご執心じゃないか』

助けるつもりか、と。

『本当に、春賀のぞみを警察に売れる？』

冷や汗が落ちる。

少女を見る。

視線が交錯したように錯覚した。

その焦点はあっていない。

魂無き肉体の虚ろなる目。

だが、それだけではない。

直感がそう告げた。

からからと。

空洞が音を立てる。

音を立てたのは少女の空洞ではない。

自らの胸に手を置く。

『それとも、彼女を殺して解放してあげる？　彼女、本当に安らかそうだし、必要なのはそっちの少年の証言だろう？　彼女の生死は問われてないからね。どちらにしろ早く決めなよ、どうやら時間切れだ。コイツと遊びたかったけど、次の機会にするよ』

どうして、助けたいって？

『・・・・・・・・』

ウェイは答えないかと思った。

『無駄さ、キミには分からない。そして、俺には、理解出来ない。それだけのことだよ』

そう言った。

それっきり、ウェイの存在は希薄になる。

頭の中が急激に静けさを取り戻す。

「時間切れ、か・・・・・・・・」

罪は全て、春賀のぞみへ、それが、父である沙耶春樹からの命令だった。

それに背く工作を、どうして僕は行っただろうか？

水溜りを叩く足音を拾った。

人一倍聴覚は敏感だ。

桜井要が気付くよりも先に、その音に気付いた。

未だに、桜井はこちらにナイフを向けたままである。

「おい、何をしている？」

傷害未遂の成立だった。

「なんで、警察が・・・・・・・・？」

少年は呆然と突然現れた警察を眺めていた。

我に帰ったときにはもう遅い。

桜井は自分よりも一回り体格のいい警察官に取り押さえられた。それを一瞥するが、すぐにどうでもよくなり歩を進める。そして少女の前に立った。

「どうして、死にたいと思ったの？」

「・・・・・・・・」

口元に手を当ててみる。

「まだ君は、死んでないよ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

頬に手を当ててみる。雨に晒されて、死んだように冷たい。

「他にも何か持っていないか調べろ！」

取り押さえた警察官が、少年のポケットを無理やり探る。

「これは」

重々しい声。

警官の手にあるのは、透明のビニールでパッケージングされた麻薬だった。

さっき僕が彼を嵌める為にポケットに入れたもの。

本当なら春賀のぞみに持たせて、彼女を嵌めなければならなかったのに。

「なん、だと？」

少年も驚愕の表情を浮かべる。

「至急少年課に問い合わせろ、今中高生に広がっている覚醒剤だろう」

「なんでそいつが俺のポケットに・・・・・・・・？」

「桜井要というのか。覚醒剤不法所持の現行犯だ」

少年の財布から身元を割り出した警察官が、少年の薄暗い未来を宣言した。

「オレじゃない・・・・・・・・オレじゃ・・・・・・・・あっ」

少年　桜井は久を睨む。

「テメエ・・・・・・・・」

横目でそれを確認するが、すぐに視線は少女へと戻す。

「俺じゃねえ　！　アイツだ！　そこにいるクソ野郎が　！」

「おい、暴れるんじゃない！」

桜井は、屈強な警察官に取り押さえられながら必死にもがいていた。

「・・・・・・・・・・あ」

「えっ　」

僅かにその口から吐息が漏れた。

「ねえ、僕が分かる？　大丈夫？」

「・・・・・・・・・・し・・・・・・・・・・？」

彼女の目は、すぐに閉じた。

「天使？」

彼女は、確かにそう言った。

「おい君たち、大丈夫か？」

警察官の一人が向かってくる。

潮時だと思った。

少女を抱えて、走り始める。

「ちよつと、君たち　！」

突然のことで警察官は即座に反応できなかった。

少女を抱えて全力疾走で逃げる。

こんな状態で逃げ切るつもりだったのだろうか？

混乱していたのかもしれない。

どうすればいいのか、全然分からなくて。

思考は自分の行動に一向についていけないくて。

ただ、走った。

針木市の路地裏を、少女を抱えて疾走した。

不思議なことに、警察はすぐに追ってこなくなった。

しばらくして、足を止める。

雑多とした街並み。

そこもやはり、人の通りはなかった。

「・・・・・・・・」

春賀のぞみ、腕の中で眠る彼女を見ながら思う。

「まずい・・・・・・・・きれる・・・・・・・・」

「きれる？」

のぞみを見る。

その目は閉ざされたままだった。

寝言のようだ。

ただ、心臓を抉り出すような勢いで僕の胸元を強く掴む。

滴り落ちる雨に紛れて、異常な汗が流れていた。

「っ」

酷く、うなされていた。

「・・・・・・・・はっ」

そして、奇妙な笑い声。

「ばら、ばらになる・・・・・・・・ばらばらになる・・・・・・・・ああ

あああつつ」

そして、悲鳴。

「ねじれる・・・・・・・・ねじれう・・・・・・・・」

言っていることが分からなくとも、聞くに堪えない・・・・・・・・。

「クスリ・・・・・・・・くすりを・・・・・・・・くすりをちょうだいよお・・

・・・・・・・・」

泣きながら懇願する。

今度は僕の袖を掴む。

力を込めて、掴む。

「・・・・・・・・」

無言で見下ろした。

「手を、洗わなきゃ」

脈絡のない言葉。

電気を消さなきゃ、水を止めなきゃ、鍵を掛けなきゃ、家に帰ら
なきゃ、笑わなきゃ、笑わなきゃ、笑わなきゃ、と彼女は呟き

続ける。

「お．．．．．か、あさん」

少女は最後にぼつりと、その言葉を呟いた。

「．．．．．お母さん？」

脈絡がなさそうに聞こえるけれども、その言葉だけが気になった。覚醒剤中毒症状に滅裂思考というものがある。

質問に対して的外れな答えを返したり、意味のない単語の羅列を発したり、である。

だが．．．．．それは本当に脈絡のない言葉だったのだろうか。そうは、思えなかった。

なぜだろうか。

考えても、答えは出なかった。

．．．．．ともあれ、少女は危険な状態だ。

暴行を受け、何時間も雨に晒されて、息は荒い。逡巡する。

本気で、助けるつもりか？

自問する。

．．．．．助ける？

何度も、自問する。

「あは、ははっ．．．．．」

のぞみは、雨と涙と鼻水と涎に塗れた酷い寝顔で笑う。

「わら、わなきや．．．．．」

「．．．．．どうして、そう思うの？」

「わらわ、な．．．．．きゃ．．．．．」

「お母さんに関係すること？」

答えはなかった。

ゆつくりとしゃがみ、彼女を自分の膝の上に横たえる。携帯電話を取り出した。

「久です」

重々しい声で電話口の相手に告げた。

なんて、馬鹿なことをしているのだろうか。

彼女は罪人だ。

沙耶春樹に命令されなくとも、本来ならば警察に引き渡すべきなのだ。

そう思いながら、彼女の濡れた髪を撫でる。

優しく、撫でた。

そう・・・・・・・・。

せめて、いい夢が見れますように、と。

「プランを、提案します」

その日から、僕たちの延命行為は始まった。

「アレは、***じゃない」

分かってる。

「冤罪でもない。彼女は正真正銘の犯罪者だ」

分かってるよ・・・・・・・・。

「だったら、それを匿うキミも犯罪者だね・・・・・・・・、それに、助けたフリをしているだけでキミは彼女を救ってなんかいない。・・

・・・・・・・・クソみたいな偽善者だよ、キミは」

嫌ってほど分かってる。

「でも、だからこそ、そんなキミが大好きなんだよ」

・・・・・・・・。

「理解は、できないけどね」

僕は君が嫌いだよ、ウェイ。

父 沙耶久

休日。

一人電車で揺られている。今回は世界の車窓からお届けします。

ここはかの有名なライ麦畑。

ごめんなさい、嘘つきました。

列車は針木市セントラル街を離れ、広大な住宅街を通過して、針木駅を離れることに田園へと変化する風景の中を走る。

手すりに捕まりながら、ドアに持たれかかりぼんやりと外の風景を眺めていた。

窓の外の景色は電車の後方へと流れていく。

代わり映えのしない田園の風景が再び目に飛び込んでくる。

空は、よく晴れていた。

日差しがドアのガラスから車両の中にまで差し込む。

目的地は針木市セントラル街から六駅も離れたサバブの地。

サバブ、店舗出店の際に、ここ十年の間に開拓された土地のことをそう呼ぶ。

沙耶春樹の会社はそこにあった。

経営コンサルタント、主に御座市で企業戦略を企画し、それを企業に売り込むことを生業としていた沙耶春樹であったが、針木市へと移ってから針木市の発電を任されている企業の代表取締役を勤めていた。

針木電力。

「憂鬱だ……」

ぼつりと呟く。

そして考えるのはのぞみのことだった。

覚醒剤中毒者だったのぞみを助ける為に、僕は沙耶春樹の力を使った。

沙耶の意向を捻じ曲げるほどの力だった。

それは、友達を助けようとした息子が親に泣きつくようなものではない。

言うなれば、それ相応のリターンを提示することが出来るか、そしてそれを払うことが出来るのか、という点につきた。

本来ならばのぞみは警察の手により、覚醒剤の常用者としてしかるべき施設で処置されなければならない。

そして沙耶春樹もそれをのぞんでいた。

だが僕は沙耶春樹の力により、彼の手配した病院で春賀のぞみの治療を行った。

春賀のぞみは、針木市において最大の年経常利益高を誇る大手ゼネコン企業春賀建設の代表取締役である春賀晃の一人娘。

春賀晃は当然市会議員とのコネも強い。

沙耶春樹は春賀のぞみに関する事件を解決し、彼女を親元へと帰すことで、そのトップに恩を売るチャンスもあった。

もしくは、それをネタに春賀を脅迫することも可能だった。

だが、それも止めた。

悉く、自分の意見を通した。

逆を言えば、それほどのリターンを提示した、ということだ。まるで借金の担保みたいだ。

電車は目的の駅名を告げる。

重苦しい気分を腹の底へと沈めて、電車を降りた。

電車を降りれば昔ながらの街並みが広がっている。

老朽化している背の低いビルがちらほらと見受けられる。

まるで世間の流れから取り残されたような空気が漂っていた。

そこからバスに乗り、三十分かけて海沿いの施設へと到着した。

針木市第一火力発電所である。

白と赤の排気塔が天へと聳える。

その広大な敷地の一角である棟へと足を運ぶ。

受付で名前を告げると意外なことに応接室ではなくラウンジに通された。そうして十分ほど待ったところに目的の人物がこちらへ

と向かってくる。

「久しぶり、だな」

「はい」

厳格な声。

扱けた頬と色素の薄いしらみがかった髪のこの男こそが沙耶春樹である。

断ることもなく春樹は対面に腰を下ろした。

握りこんだ手の平が汗ばむ。

独特の威圧感だ。

いつ爆発するか分からない不発弾の解体作業をしているような気分になる。

「順調か？」

主語はない。

「はい」

迷いなく応えてみせる。

だが、沙耶春樹の視線は細くなった。

「それが本当ならば、私もこんな無意味な質問はしない」

「報告は、以前に送ったとおりです」

「春賀のぞみの件は確かにお前に一任した。だがそれはお前を信用したからではない」

分かっている。

彼は『人』を信用などしない。

「お前の提示したプランを信用したのだ。お前はいつになればその結果を出す？」

彼は数字と客観的根拠しか信用しない。

分かっている、もう動かなければならないと。

結果を出せなければ……。

「春賀のぞみの経過はこの三年を見ていれば充分だ。日常生活への復帰も含めて問題はないはずだが？」

「まだ、不安定です」

「医師に診断させてみたのか？」

「それは・・・・・・・・」

「どうした？」

「医師は症状が見られない場合の正確な診察は出来ません。稀に起こる不安定さへの対応・・・・・・・・」

「それでお前は、何も手を打たなかったのか？」

「・・・・・・・・はい」

瞬間に、耐え難い悪感が走る。

「命令というものには必ず期限が提示される」

淡々とした声だった。

怒声などよりも、はるかに効果的だと思った。

怒りは、その人間に対する期待の裏返しでもあるからだ。

「期限は・・・・・・・・分かっています」

「その時もし、それが未達成ならば私はお前にどのような評価を下す？」

「・・・・・・・・最良を尽くしていない、と」

「出来ないなら原因を探す、分析して解決案を見つける。これは当たり前前で、誰もがそうしている」

「了解しました・・・・・・・・」

「もう、三年か」

「・・・・・・・・はい」

思考が停止する。

「私は三年前に春賀のぞみを警察に売り渡せと命令したはずだったな？」

「はい・・・・・・・・春賀晃を失脚させる為に」

「お前がそれを止めた」

「・・・・・・・・その通りです」

「確定できることの方がこの世の中には少ない。それともお前は確定できないからと手を拱き、私を裏切るか？」

「・・・・・・・・」

「愛着が湧いてしまったか？ 手放すのが惜しいと思い、始めから私を裏切るつもりでプランを提案したか？」

「いえ……」

たとえこの男が感じていたとしても、首を縦に振ることは出来ない。

「惜しいならば、私が未練を断ち切つてやろう」

「それ、は……」

この男の辞書に、同情や躊躇、良心なんて言葉をいくら探しても意味がない。

全ては人を扱うための手段として認識されているからだ。

「汚し、蹂躪し、価値がなくなるまで滅茶苦茶にしてやろうか？」

だから、沙耶春樹のことを父親と呼んだことは一度もない。

いくら愛情を求めても、家族であることを望んでも、体よく利用され、手酷く裏切られ、蹂躪されていくのが分かるからだ。

彼は息子を欲したのではない。

久とウェイいう、希少な駒を欲した。

そこに愛情は、ない。

久とウェイは、期待に応え続けなければならない。

それが、沙耶春樹の息子に選ばれたということだ。

それに、ウェイも僕も承諾したのだから。

「動き、ます……」

声が震える。

感情を抑えることができない。

自らよりも上位の者。

得体の知れない者。

僕にとって、ウェイの他に、畏怖と恐怖の対象となる者。理性の怪物、沙耶春樹。

「……それでいい」

地の底から蠢く様な憎しみの嘲笑。

「お前は、そうするしかないのだ」

それを聞いた沙耶春樹は本当に嬉しそうに笑う。

無感情に傍観しながら、全てが消えることを願う。

心から、願う。

お願いだから　　。．．．．。

その瞬間に意識は急激に闇へと落ちていった。

回想 沙耶久

どうして、のぞみを助けたの………？

闇の中で僕は、悠希に言われた言葉を反芻してみる。

あの雨の日、のぞみと出会ったのは偶然ではない。

広域暴力団唐風組の筋から得た情報、春賀のぞみという少女の存在。

それを警察に売り渡せ、と沙耶春樹から指示されたからだ。

助けるつもりなどはなかった。

だから、警察を呼んだ。

後は、浅はかな少女達を挑発してナイフでも向けさせればいい。

冤罪を着せる為の麻薬も用意した。

麻薬を売買する、痛みも世間も何ひとつ知らない子供。

その程度の認識しかなかった。

だからこそ、春賀のぞみの異質さは衝撃だった。

仲間から罪を着せられて、その手にかかれて、彼女は笑っていたのだ。

雨でべた付く前髪の下に見え隠れする目。

焦点の合わない、塗りつぶされたような黒い目だった。

『 白い髪、赤い目の少女、ウサギのような少女、でも、彼女は走れない』

だから、彼女を連れて逃げた。

『 彼はね、彼女を助けたかったんだ』

沙耶春樹にかけあった。

『 でも、彼は逃げた』

春賀のぞみを助けようとした。

『 だから、キミが生まれたのかもね』

そして、説得は成功した。

場面は変わる。

白い病室。

そこは沙耶春樹が春賀のぞみの為に手配した病院だった。

「リハビリ………?」

掠れた声で、のぞみが尋ねる。

「そう、クスリを止めるための、ね」

僕はベッドの傍らに座って、のぞみに答える。

「僕は体験したことないけど、禁断症状ってやつに悩まされると思う。クスリが欲しくてたまらなくなる。息苦しくて吐き気がする。不眠症。その辺りの説明は医師からあったかな？」

「………」

のぞみはぼんやりと天井を眺めている。

聞いているのかいないのかもよく分からない。

「………ひどい景色」

のぞみはぼつりと呟いた。

「ひどい？ 病室がかい？」

「ぼつかりしてる」

「病室には、何もないからね」

「………」

「………」

そして、沈黙。

その日は、それ以上のぞみは何も喋らなかった。

翌日。

やはり僕は、のぞみのベッドの傍らに座っていた。

「気分はどう？」

尋ねてみた。

「………最悪」

答えが返ってくる。

大きな進歩だった。

「そりゃそうだろうね、クスリなんてやるもんじゃないよ」
「……………そう」

返事は素っ気ないけど。

ここにいる僕が存在を認めてくれたようだ。

「誰？」

「あれ、これで会うの三度目なんだけどなあ」

「よく覚えてない」

「それは悲しいね」

優しい声で。

「久っと呼んでくれればいい」

「久？」

「そう」

「……………なんでいるの？」

「君を助けたから」

「助けた？」

「君は、暴力団に追われていたんだ」

「……………ああ」

思い出したように。

どうでもいいように呟く。

「死に損なったんだ……………」

「君は、死にたかったの？」

あの時、問いかけた言葉。

「……………どうでもいい」

寝返りを打ち、背を向ける。

「……………どうしても、いいの」

もう一度呟いた。

その翌日も、そのまた翌日も、病院に通い続けた。

一ヶ月、二ヶ月と、毎日通い続けた。

「……………暇なの？」

「失礼な子だ」

「毎日やることがないの？」

「時間をわざわざ割いてる」

「酔狂」

「クスリをやるほど酔狂じゃないけどね」

のぞみはむっとした表情を浮かべるが。

「そう………」

すぐに表情は消えた。

「調子はどう？」

構わず尋ねる。

「………お腹すいた」

「いい傾向だね」

笑顔を浮かべる。

「………」

のぞみは、久を見つめていた。

「どうしたの？」

「何が、嬉しいの？」

「嬉しい？」

問い返す。

「笑ってる」

「笑顔は日常の潤滑油」

「そう」

相変わらず返事は素っ気なく、会話は長続きしないけれど、日を
追う毎に確実にのぞみは口数が増えていった。

「クスリは、まだ欲しい？」

「………」

のぞみは、顔を背ける。

答えは返ってこないだろうと思っていたが。

「別に………」

「そっか」

ひとまずは渴望することがなくなったことに胸を撫で下ろす。

「退院も間近かもね」

「・・・・・・・・」

反応はない。

「退院したくない？」

「したらどうするの？」

「さあ？ 君が考えることだと思う」

「・・・・・・・・同じ」

のぞみは呟く。

「・・・・・・・・同じコト、繰り返すだけ」

「また、麻薬をやるってこと？」

「破滅ゲーム・・・・・・・・」

そう言って、のぞみは薄ら笑った。

「どうして、破滅をのぞむの？」

「・・・・・・・・えばいい・・・・・・・・」

「えっ？」

問い返す。

だが、それっきり、のぞみは口を閉ざしてしまう。

「・・・・・・・・」

でも、実は聞こえていた。

こんな世界、壊れてしまえばいい。

その日は結局、それ以上のぞみが口を開くことはなかった。

その日の帰り、悠希に電話をした。

「もしもし」

「久？ 春賀のぞみのお見舞いは終わったの？」

「うん、大分会話をしてくれるようになったよ」

「そう」

のぞみのように素っ気ない口調。

この頃の平穏な日常は、姉弟の間に、そんな冷たい空気が流れていた。

「春賀のぞみの母親のことで何か分かったことはある？」

「ええ、当時の担当医がその病院にいたわ」

「当時の担当医？」

「春賀のぞみの母親は、ネグレクトにより逮捕されていたわ」

「ネグレクト？」

「育児放棄、ということよ。母親が逮捕される十歳くらいまで、春賀のぞみは読み書きすら出来なかったらしいわ」

「・・・・・・・・」

携帯電話を持つ手が震えた。

「暴行も加えられていた。元々はそれが酷く近所の住民が通報したみたいね」

「・・・・・・・・その母親は？」

「出所後に元々住んでいたアパートに戻ったあと、すぐに自殺しているわ」

「・・・・・・・・」

「久の聞いた『お母さん』という言葉は、覚醒剤によるフラッシュバックなのかもしれないわね」

のぞみの、黒い瞳を思い出す。

春賀のぞみの、死に逝く瞬間に浮かべた笑顔を思い出した。

あれは・・・・・・・・どこまで絶望的な人生を体験したら生まれるのだろうか。

「久・・・・・・・・？」

「それが、世界を憎む理由・・・・・・・・？」

「久、聞いてる？」

「・・・・・・・・ああ、ごめん、なんだっけ」

「・・・・・・・・」

「悠希？」

「春賀のぞみをどうするつもり？」

「そうだね、南さんに聞いてみるよ」

「・・・・・・・・本気なの？」

「手元に置いてた方が都合はいいと思うよ」

スラスラと言いつけが出てくる。

だが、聡明な少女にはそれが嘘だと分かるだろう。構わない、と思った。

「……………いいわ、春樹には私から伝えておくわ」

「ごめん……………仕事を増やして」

「いいのよ」

でも、と悠希は続ける。

「久、忘れないで」

珍しく強い口調で。

「沙耶春樹に自分が何を言ったのか　けして忘れないで」

「……………分かってるよ」

「あなたの提案したプランに、あなたは結果を出すという責任を負ったのだから」

そう、これは責任の話だ。

沙耶久は春賀のぞみの件で責任を負った。

それをいつか、必ず支払わなければならない時が来る。

契約と代価。

悪魔の力を借りるとは、そういうことだからだ。

「覚悟を決めなさい」

あの時の、悠希の真剣な表情。

彼女は、今の僕を予見していたのだ。

ヘイヴン 沙耶久

さて、平和な日常の話をしよう。

「だから、栄治は女の子に過敏過ぎるのよ」

先日の昼休みの話を日向が話している。

「分かってる……分かってるって、でも緊張しちゃうんだ。頭が真っ白になって言葉が全部消えちゃうんだ」

「いや、オメエの今目の前にいるアタシらも女なんですけどー？」

佳織が反論する。

「バカだからいいんじゃないのか？」

慶介はどうでも良さそうに答えた。

「おい、こら野獣。テメエ人のこと言えんのか？ マジ殺すリスト入れたぞ」

「M・K・L」

謎の言葉を発してみる。

「久、変な造語は止めなさい」

悠希に怒られました。

「ヤー」

「どういう意味？」

日向が首を傾げる。

「MAJI・KOROSU・LIST」

佳織とハモる。こういうことに関しては頭が回る彼女。

「……あつそ」

くだらない内容に日向は呆れている。

いつも通りの通学の光景である。

「……話が脱線しすぎるなあ」

「それくらい栄治のことに皆興味がないんだ」

「……マジか」

「おい、久。しれっと毒を吐くな。こいつ本気にしてるぞ」

「栄治、冗談だよ。半分くらい」

まだまだ局地的ブームだ、栄治いじり。

「…………もう半分を聞くのが怖い」

「絶対久の腹黒さがのぞみに感染した」

日向が僕を責める。

いつの間にか、のぞみの親のポジションだ。

「えーっ、私、腹黒くないよー」

「……………」

予想外の答えに一同は絶句するしかない。

「あれ、ノーコメント？」

「自分の胸に手を当てて考えてみて？」

悠希が冷静に告げる。

のぞみは実際に自分の胸に手を当てて。

「んー、Cカップ」

「指導」

すかさず日向のチョップが入る。

「あてっ」

「朝は健全なトークでは非」

苦笑いするしかない。

「いやあ、今の返しは良かったなあ、どう？ Aカップひなたん？」

「……………アンタね」

日向が佳織を睨む。

日常は続いていく。

世は事もない、と続いていく。

その水面下はけて映すことなく、穏やかな水面がゆらゆらと揺れるように。

皆知っている。

それは脆く、簡単に失われるものであることを。

一石投じれば、波紋は瞬く間に広がっていく。

「でさー、続きなんだけどさー」

だが、誰もが気づかない振りをする。

「もうお前のモテねえ話はいいだろう」

「ひど」

その場所の温ささえも失ってしまうのが恐いから。

だから、隠す。

終わりなどないかのように振舞う。

「・・・・・・・・」

「どうしたの？ 久」

「・・・・・・・・いや、何でもないよ」

誰かが一石を投じて、その楽園のメツキが剥げるまでは
。せめて、と。

ただ、皆願う。

天国ではなく、避難地。

ヘブンではなく、ヘイブンであつたとしても。

願わくば、それが少しでも長く続きますようにと
。

まだ、天国は空の上だ。

高度を保っている。

王様1 桜井要

誰だって、ワケもなく自分だけが特別だって思う時期がある。
何も見えねえ、見ようとしねえ、ただ、世界が自分のためにあるような全能感だけに支配されて傲慢に振舞う。

オレ、桜井要は、そんなちっぽけな世界の王様だった。

ひやはははっ、すげえだろ？ 王様だ。

テメエの世界なら、王様だろうが、神様だろうが、なんだってなれる。

そして、オレしかない。王と認めるのは、俺だけだからだ。

……この世界から、全てが奪われたからだ。

なあ、沙耶？

*

肩を小さくして出来るだけ目立たないように、人目を避けて、往来を避けて歩く。

歩きなれたはずの街が、異質な、悪夢としか思えない。

そんなん、決まってる。

オレが、ヤクザに狙われてるからだ。

出所したオレは、以前のような小さな世界の王様になど戻れなかった。

少年院の中で更正したとかじゃない。

仲間を殺され、仲間裏切られ、命を狙われ、そして年少にぶち込まれた。

唐風組に身柄を狙われた話は、院内でも有名な話となっていた。

同室の少年達に、オレは憐れみの目で見られたのだ。

可哀相に。

そう呟いた同室の少年。

年齢はオレと殆ど変わらない。

しかし、ソイツの外見は唐風組の組員といわれてもなんら不思議はない成熟した感じだ。

なぜ麻薬の売買に手を出した。

心底不思議そうに尋ねるソイツが、オレには不思議に見えてしょうがなかった。

楽しそうだから、金になるから、自分たちをバカにする優等生達に立場を思い知らせてやることができるから。

何より、春賀のぞみがそうのぞんだから。

それだけだ。

それだけではいけないのか、と尋ね返す。

まあ、のぞみの話は……口にするのも億劫だったが。

それだけの為に自分の命を棒に振るのか？

ソイツは、そう問い返した。

命。

絶句する。背筋が寒くなる。

脳裏に浮かんだのは仲間のこと、園河と、その彼氏の死体だった。だせえことに、オレはこれ以上ないくらいに恐かった。

何でも許されていた、ただオレだけがそう思っていた世界。

下法には下法を。

園河とその彼氏を殺した男達もまた、オレと同じく未成年だったらしい。

唐風という組では、下法は子飼いの少年達が引き受ける。

ソイツらならば大きな罪にはならないからだ。

現に目の前にいる男。

唐風組に飼われている少年の一人だった。

ソイツの役目は組織のマーケットを荒らした少年達を始末して、

そして自首すること。

そうして出所した暁には唐風組でのポストが与えられるシステムらしい。

だが、入院中で指示が与えられていないソイツにはオレをその時
どうしようという考えはなかったのだろう。

多分だが、ただ純粹に、唐風というブラックマーケットの元締め
に目をつけられた少年が可哀相に見えたのだ。

この子供には、もうろくな未来が残っていない、と。

こうなつて、オレも初めて理解したワケだ。

出所した先も、唐風はオレを死体にするまでついて回るのだと。
少年院に入ったという事実は通常の社会復帰を絶たれたというこ
とでもある。

表でも裏でも、オレは世界に見放されたのだと分かった。

王様は、裸の王様になつたわけだ。

街を歩く。

帰る場所はない。

家族はオレを捨て、針木の土地を既に離れていた。

「すべて……なくした」

ぽつりと呟く。

「アイツのせいで……」

思い浮かべるは、春賀のぞみ。

オレを巻き込んだのぞみ。

「クソ　っ」

情けねえ……、

オレに出来ることは、こうして一人で声を潜めて、悪態をつくこ
とだけだった。

「桜井、要」

声をかけられる。

「なっ」

唐風組？

頭ん中が一瞬で真っ白になる。

滑稽なほど両肩はびくりと跳ね上がるのが分かった。

やけに瞳孔が開いている気がした。

心拍数が一気に上がり、一瞬で冷静さを失う。

「そう警戒することはない、俺は味方だ」

世界の全てに見放されたオレに、味方だと声をかけた男。

加藤恭介。

『優しい大人』が声をかけた。

「・・・・・・・・だれだ」

掠れる声。

怯える野良犬のように。

疑念と恐怖に溢れた小動物のように。

目の前に立つ男からそれらを加速させるような得も知れぬ恐怖を感じた。

「このままでは、お前は唐風に殺される」

単刀直入に加藤恭介と名乗る男は切り出した。

「とう、ふう・・・・・・・・」

頭では、逃げなければならぬことが分かっている。

だが、意識に反して身体は石化したように動かない。

理解はしても実感が湧かねえ・・・・・・・・。

今から、自分が殺されることに。

だが、予想とは違い、加藤恭介は尋ねる。

「お前の願いは、何だ？」

「・・・・・・・・」

答えることが出来なかった。

急展開に思考がついていかない。

「少しか、ほんの少しか道を踏み外すつもりで上った手すりからお前は落ちてしまった。そんなところか」

自分の行為への罪はない。

オレはただ、火遊びをしてただけだ。

ただ、なぜか分からないが失ってしまったんだ。

「お前はなぜ、失ったんだと思う？」

上辺だけの仲間も、矮小な世界での地位も、そして 春賀のぞ

み。

惚れた女すらも失った。

「……ガキだったからかよ？」

何も知らなかったから。

「沙耶久も、子供だった」

「沙耶？」

首を傾げる。

「お前を嵌めたヤツの名前だよ」

「ッ」

一瞬で脳裏に雨の日の光景が浮かぶ。

どうしようもなく殺したくなる。

生きながら指を切り落としてやりたい、泣き叫び懇願させながら一本ずつだ。

暴力的な憎悪が煮えたぎってくる。

こんなになっちまっても、オレらしさは残っていた。

オレを舐めたヤツは、全員ブチ殺してやる、と。

「沙耶久は略奪者で、お前は被害者になった」

沙耶、ソイツが敵の名前。

「沙耶久が持っていて、お前が持っていなかったものはなんだ」

「……なんだよ、それ」

声が低くなり、掠れる。

「それは、沙耶という名前だ」

「名前？」

「力を与えてやるう」

加藤恭介は言った。

ヤツは、そんな捨て犬のようなオレを、自分の組織に迎え入れた。

加藤恭介が組する組織。

それは、暴力団の庇護を受ける少年グループだった。

新しい組織で、オレの新しい日常が始まった。

始めに任された仕事は、なんの皮肉か、オレが捕まった罪状と同じく覚醒剤の売買だった。

「麻薬を扱うにはルールがある」

加藤恭介は説明する。

「ルール？」

「ああ、お前たちの不運だったのは、この世界のルールを知らぬまま足を踏み入れてしまったことだ。こういうアンダーグラウンドの商いはマーケットの元締めに許可を取らなければならない。おおっぴらに取り扱い、供給過多を起せば警察が動くし、組の懷事情にも影響してくる。この国のことを法治国家だというが、このマーケットに独占禁止法はない。ここでは自由競争の概念などもってのほかだ」

「元締め、だと？」

「法がなくとも秩序は必要だということだ。やり過ぎずカモを飼いきれずにし続ける為の、な」

自由にやっている頃よりも制限が多くなった。

「不満そうだな？」

「……別に」

素っ気なく答える。

「力というものは、得てしまえば不自由なものなんだよ」

「難しいこと言うなよ」

「簡単なことだ。力とは群れのことだ。帰属すれば集団の制限に縛られるんだよ」

その時、オレはまだ『力』の恩恵について、いま一つ図りかねていた。

ただ、不自由なだけの鎖だと。

だがすぐに、群れの効力に気がつくことになる。

「恭介」

「はい」

恭介たち何人かと麻薬の売買をしている途中、柄の悪い男達数人

に絡まれた。

「桜井とかいうガキを囲っているだろう」

自分の名前が出て、神経がおかしくなる。

汗が止まらなかった。

唐風組の組員だった。

「さあ」

それを恭介は平然とシラを切り通す。

「シラをきるなよ？」

「彼を庇護することは上の了承を得ている。桜井がウチの下にいる間に、妙なちよっかいは出さないでもらいましょうか」

「・・・・・・なんだと？」

口調は剣呑なものになるが。

「沙耶春樹を通して、話をしてもいいんですよ？」

沙耶春樹。

「チツ」

男たちは舌打ちをすると、すぐに踵を返した。

その名前を出しただけで、彼らはあっさりと引いた。

あれだけ執拗に攻め立てて、オレの仲間をゴミのように犯して殺した暴力団があっさりと手を引いたのだ。

それがオレには信じられない光景だった。

「・・・・・・すごい、い」

ぼつり、と呟く。

力は、絶大だ。

これが群れに属するということだ。

これまでの不満を一瞬にして考え直さなければならなくなった。

そして、これを機に、恭介の言う力に、そして恭介に心酔するようになった。

組織のピラミッドを上になれば、信じられないほどの力を得ることが出来る、と確信したのだ。

俺は組織の仕事に性を出すようになった。

麻薬の売買から始まり、運び屋など小間使いすら進んで行つようになった。

あんなに圧倒的で恐怖だった唐風組でさえ、今の自分には手出しすることができない。

ただ組織の下に就いただけで、だ。

そのことがオレに愛社精神みたいな帰属意識と向上心を植えつけた。

何もかもを忘れて、妄信者のように魅了され続けていた。

だが、それはオレらしさじゃない。

群に埋没した機械となっていたんだ。

楽だった。

命令されて、ルールの内側で尻尾を振って生きるのは、屈辱的なくらい楽だった。

だが、そんなオレに転機が訪れる。

まるで、そんな怠惰な夢から醒めるように、現実を目にした瞬間に負け犬精神は空々しく拡散してしまうことになる。

桜井要という人間の駆動力は、悦楽よりも憎悪に傾いているからだ。

それが、オレらしさ、ってヤツだった。

春賀のぞみと沙耶久。

ヤツらは笑っていた。

針木駅東口の付近で、七人で楽しそうに笑っていた。

本当に、楽しそうだった。

組織への陶醉は一瞬で冷めて、どうしようもない憎しみだけが残った。

「………沙耶」

沙耶久、ヤツは、ハイエナ野郎だった。

沙耶久が、許せなかった。

その隣で、オレが見たことのない笑顔で笑い続ける春賀のぞみが許せなかった。

「なんで……そんな顔で笑ってんだよ」

ふつつつと、火に囲まれていく。

ちりちりと、口の中が乾いていくのが不快だった。

ナイフを手にした。

あの時叶わなかった、沙耶久の中にナイフを埋め込んで滅茶苦茶にしてやりたくなった。

「桜井」

呼ばれてはつとする。

恭介は首を傾げて、オレの目線の先を追った。

「……件の少年達か」

「顔も知ってるのか？」

「そりゃあ、な……」

恭介はいい淀み。

「沙耶久と春賀のぞみ、春賀のぞみは家を出て家族との連絡を絶っているが有名だな。春賀建設という会社も色々黒い噂の耐えない企業だ。癒着なんかもみ消してるらしいな。そんな会社が目の色変えて娘を探しているのに、こんなに簡単に見つかるとはな……情報があれば春賀とお近づきになれるんじゃないか？」

「沙耶から止められてるよ。アンダーグラウンドのことについては沙耶の方が力があるからな」

表では春賀、裏では沙耶。

この街では有名な話だ。

「なんで沙耶が？」

「さあな……恐らくは」

そう言つて恭介は沙耶久を見る。

「……アイツが」

齒軋りを立てる。

「ブチ殺してやる……ボンボンが」

「沙耶には手を出すな」

強い口調で釘を刺される。

「沙耶に手を出すのはルール違反だ」

「・・・・・・・・」

納得できるわけがねえ。

理解は出来ても、受け入れることができないことだっである。

恭介を通して、この街における沙耶という名前の影響力は理解していても、殺したいと思うほど憎む感情を納得させることは出来ないのだ。

「本人達には、手を出すな。殺しはいけない。傷害沙汰も禁止だ」
「・・・・・・・・じゃあ、どうすれば」

どうにもできねえじゃねえか。

そんなことすら分らない程、桜井要は愚かではなくなった。
クソツタレが。

怒りを、持て余すしかないのか？

だが、恭介の答えは予想を反するものだった。

「そうだな。こういうのはどうだ？」

密談 幕間

交通量の多い夜になろうとしている駅前。

高速道路が空の概観を遮り圧迫感を増していく。

七人から始まったもの。

家族に代わる新しい絆。

始まったものはいつか、終わりを迎える。

離陸し、そして墜落する。

限りなく楽しかった時間の分が、限りなく空虚な絶望に取って代わる。

これは、天国の高度が下がり始めた日の出来事。

彼らの与り知らぬ人間達の幕間劇。

この時の彼らには、自分たちに向けられた悪意がどのようなものであったのか知る術がなかった。

桜井と恭介はその場を去る。

その顔に、嗜虐の笑みを浮かべたまま。

ヤツらの去った場所を沙耶悠希は遠く、七人の輪から眺めていた。

「悠希、どうしたの？」

高辻日向は問いかける。

「・・・・・・何でもないわ」

悠希は答えた。

ここが延命の限界。

そして、物語の始まり。

歯車は動き始める。

カタカタと。

神様のいない、『地球儀の世界』を廻していく。

針木第一発電所内の応接室で、二人の男が向かい合っていた。

一人は、針木電力の取締役を勤めている沙耶春樹。

この針木市において多大な影響力を及ぼす男を前にしながら、向かい合う男の態度は尊大であった。

「今日はどのようなご用件ですか？ 春賀さん」

春賀建設代表取締役、春賀晃。

「よからぬ噂を聞いたんですよ」

「ほう……噂ですか」

スーツを着崩して茶色に染まった髪は、この針木市を代表する大手ゼネコン企業の社長にはとても見えなかった。

「アンダーグラウンドでは有名なのですが、少し前に麻薬のマーケットを荒らした馬鹿な餓鬼どもがいたんですがね、そいつらの中にウチのバカ娘が混ざっているんじゃないかってね」

「娘さんですか？」

「ええ」

春賀晃は表情を崩す。

眼光に鋭さを残したまま。

応接室の中の空気は緊迫していた。

「あなたのバックにいる唐風組から噂くらいは聞いたことないですかね？」

「……当社はクリーンな会社ですよ？」

「はははっ、白々しいですね」

軽口を叩き合う。

腹を探り合う。

そうして、笑い声は途絶える。

一時の沈黙。

そして、先に切り出したのは春賀晃だった。

「……娘を、渡してもらいましょうか」

「我々も娘さんの居場所は分かっています」

「桜井要という少年が補導された際、春賀のぞみを逃がした子供が

います」

「……………ほう？」

よく調べている。

あの時補導した警官は沙耶春樹の手のものだ。

「沙耶久、ではないですか？」

「私の息子ですか」

「ええ……………、息子さんから何か聞いてませんか？　もしくは、息子さんにそのように命令しませんでしたか？」

「残念ですが、悠希と違いあの愚息は私を失望させるのが得意でね。私も手を焼いているのですよ」

「息子の独断、だと？」

「息子がしていることを親が全て知っているわけではないので」

「……………参りましたね」

苦笑する。

膝の上で組んだ両手が強く握りすぎて震えるほど、内心は腸が煮えくり返っているのかもしれない。

「……………ウチのことはよく知っているでしょう？」

「ええ」

苛立ちの混じる声を沙耶春樹は老獪に受け流す。

「では、ウチがどう動くかも分かりますね？」

「ええ」

その態度に春賀晃は苛立ちを押さえきれなくなった。

「分かった上での態度だと？」

ふっ、と沙耶春樹は笑う。

「何か、おかしいですか？」

「いえ、恥ずかしながら私にもどうしたらいいのか分からないのです」

「分からない？」

「久が何をしているのか、私にも分からない」

「……………未だシラを切りますか？」

「信じては貰えませんか？」

「・・・・・・・・」

春賀晃は答えなかった。

「仕方ありませんね。では、唐風組を使いましょう」

「？」

「桜井要を使い、娘さんを探しましょう」

「桜井？」

首を傾げる。

「餅は餅屋ということです。子供を捜すには子供を使うに限る」

「ふう・・・・・・・・」

春賀晃は大きく溜め息をつく。

「そういうことに、しておきましようか・・・・・・・・」
席を立つ。

「一週間、待ちましよう」

「・・・・・・・・」

春賀晃は、ノブを掴みそのまま立ち止まる。

「そうそう・・・・・・・・、娘を警察に売らなかったこと、感謝しておきましよう」

「・・・・・・・・」

ドアを閉める音が響いた。

空気が緩和する。

「・・・・・・・・よく言っわ」

「何がだ？」

春賀晃のいなくなった空席を見ながら沙耶春樹は答える。

「のぞみを引き渡すなんて、これっぽっちも考えてないくせに」
ゆらりと、彼の背後の暗がりから悠希が姿を現す。

「久は？」

「タイミングが悪い、と」

「・・・・・・・・あぁ、潮時だな」

「・・・・・・・・分かりきってたわ」

悠希は辟易と答える。

「なのに、なぜ彼のプランを受け入れたの？」

「久とウェイを試す」

「試す？」

「あの愚息は、想像通りに私を失望させてくれる傍ら、もう片方は、期待以上の働きをしている」

「あら、息子だと思っていたのね」

「意外か？」

「笑えない冗談なこと」

鼻で笑う。

「あなたにとって久の魅力的な部分はウェイでしょ？」

「……さて、な」

「それは久以外にはあり得ないもの」

「それだけはいくら望んでも他人には得られないものだ」

「そうね……」

話は終わったのか、悠希は立ち去ろうとする。

「悠希」

そちらを向くことなく、沙耶春樹は呼び止めた。

「あの男の出来はお前に掛かっている。……仕上げを、期待している」

「期待している、だなんて珍しい」

「時期は近い」

「……」

「春賀晃を失脚させる最高のタイミングは間近だ」

今度こそ悠希は立ち去る。

桜井要 沙耶久

崩壊とは、日常の変異だ。

だから、その日もいつも通りの日常から始まった。

のぞみと佳織と栄治と通学、昼には慶介が食堂に行こうと誘ってくる。

そして放課後になるとそろってファミレスへ行き、ドリンクバーだけで何時間も粘る。

唯一違うところは、今日は悠希の姿がなかったことくらいだろうか。

だが今日一日違和感を拭うことができなかった。それを僕は予兆と知っていたのだろう。

一人で繁華街を歩く。

東口。

ただ歩き続ける。

十時を回る。

ファミレスで解散してから、二時間ほど針木駅前のセントラル街をアテもなく歩いていた。

繁華街は十時を過ぎると一気に夜の街へと変貌する。

表通りは居酒屋やパブ、二十四時間のファーストフードショップに複合喫茶店。

だがその客層は一気に多種多様となる。

一本路地を入れば、そこにはモーターやソープが鎮座する風俗指定地域である。

メインストリートをさんざん歩き回った後は人通りの少ない通りに入る。

その瞬間だった。

「・・・・・・・・ っっ！」

一瞬、寒気で胃が収縮する。

背中に何かを押し当てられた。

服の上からでも、先が鋭いものと分かる。

「沙耶、久」

ドスの効いた低い声。

押さえられていた気配は、声と共に殺意を模る。

「・・・・・・桜井、要かな？」

平然とした声で答えた。

そう、釈放されるとすれば、三年くらいだと踏んでいたからだ。

予兆の正体は、なんとなく気づいていた。

「へえ・・・・・・俺の名前知ってた」

時刻は十時を少し過ぎた辺り。

この時間帯は、制服を来た生徒が、浮き彫りに成るように目立つ。後をつけられるには格好の的だった。

「オレも、テメエの名前は知ってるぜ」

「さつき、呼んだでしょ？」

「沙耶っていうボンボンの息子だろ？」

「檻から出てきたのかい？」

「ああ・・・・・・、ちょっと前にな。またこの街に戻ってきた」

「・・・・・・なんの為に？」

「とばけんじゃねえぞ、テメエの胸に手を置いてみるよボンボン」
ナイフを強く突きつける。

「ああ・・・・・・、姑息なボンボン、だったか？」

「間抜けなキミには、そう映るだろうね」

ナイフの感触が遠のく。

次の瞬間にその柄で左の鎖骨辺りを殴打された。

「・・・・・・ぐっ」

さすがは絶望的な十代。

陰湿で、効果的に苦痛を与える殴り方を知っている。

「スマしてんじゃねえぞテメエ・・・・・・。このまま刺し殺すぞ」

「それは、困る」

「へっ」

優越に笑う。

だから、こちらも余裕を崩してはいけない。

「……キミだって檻の中に戻るのは不本意だろ？」

「それは脅しか？ それとも命乞いか？」

「殺されるのは不本意だ」

「オレも困るな、殺しだけはダメだって言われている」

「……組織についたのかい？」

「オレはお前とのぞみのおかげで良く学んだよ。ガキがこの街で力を手に入れるためにはどうすればいいかってことだ」

「そうさ、野良犬よりも飼い犬の方が強い。野良は保健所で処分されるからね。良かったじゃないか、保健所で飼い主に拾われて」

「いちいち癪に障る言い方をするヤツだ。でもその通りだよ。俺はノラだった。だから、なんの庇護も受けられず、守るルールも知らなかった」

「今は違う、と？」

「ああ、テメエの言う飼い犬ってやつだ。気に食わねえが、確かにあの頃のオレが持っていなかった力ってヤツを手に入れられる。オレもちよつとは賢くなったってことだよ」

「でも、それで人間に噛み付くのは些か図に乗りすぎじゃないかな」

「……テメエは」

背後の気配は剣呑とする。

「そのナイフを押し付ける前に飼い主に言われたことを復唱する」とだ。殺しは、許可されてないんだろう？」

沈黙。

これで話は終わりだと思った。

だが、桜井は本命を切り出す。

「春賀のぞみは、どうしている……」

「っ」

びっくりと、肩が動く。

「その反応……俺の思った通りってことだよな」

「……お前」

「どうした？ 地が出てるぞ成金野郎」

「どうするつもりだ？」

「のぞみを……お前の、オナにしたのか？」

桜井が声を低くする。

「……彼女は、仲間だ」

「へえ……仲間ねえ。　オレはソイツにテメエの仲間殺

されたんだぜ？　過去のお前たちも、今日のお前の言葉も、必ず後

悔させてやる。お前、オレの言ったことを忘れるなよ？　けして、

忘れるな」

背中に当たるナイフが震えている。

姿を見なくとも、憤怒と復讐への歓喜に震える桜井の姿を久は想像した。

「……のぞみを、レイプしてブチ殺してやろうか？」

っ。

その言葉が、致命傷だった。

まず、い。

「……踊らされればいいさ」

抗うように、声を出す。

「……なんだと」

「……大きな波に吞まれないように、必死に立ち回ればいい」

腹に力を入れて、踏みとどまるように。

「……」

「……せめてもの忠告だ」

「……お前は、自分がその大きな波とでも言つつもりか？」

「僕たちのような子供が、それを知るはずがないだろう……」
「？」

「八」

鼻で笑う。

「楽しみにしているよ、そのうち、お前にものぞみにも血反吐を吐かせてやるよ」

楽しそうに笑う。

「陵辱と蹂躪の中で、オレに泣きながら許しを請わせてやる。これから踊らされるのはお前らの方だよ」

ナイフの気配が遠ざかる。

「じゃあな、沙耶」

悪意は去り、街の雑音が戻ってくる。
．．．．．

安堵の溜め息をついた。

「うまく、やらないとね．．．．．」

殴られた鎖骨のあたりがズキズキと鈍い痛みを発する。

肩を押さえて家路を辿ることにした。

うまく、やらないと．．．．．

僕の思うままに事を運ばなくてはならない。

のぞみ．．．．．

ウェイを、好きにさせてはいけない。

笑顔を思い出す。

過去と昔の彼女。雨の中、死に行く少女の顔を思い出す。

そうして、思いを馳せそうになる。

重たい足取りで帰路を辿った。

「助けよう．．．．．彼女を」

暗黙の了解。

それは、僕とのぞみ、セットだ。

彼女を助けられるのは、僕しかない。

接触2 沙耶久

「優等生が夜遊び？」

「・・・・・・・・佳織？」

「こん」

自室のドアを開けようとしたところだった。

佳織は軽快に左手をあげる。

「佳織こそどうしたのさ、こんな夜中に」

「見て見て、不屈のデスメタバンドの四年ぶりの新譜」

「・・・・・・・・」

げんなり。

「おい、明らかに嫌そうな顔すんな。ヒッサーは分かってない。いい？ 疲れたときこそ聞くのはデスメタ。ピアノとかマイナスイオンにはつか頼ってたら人間ダメになる」

「ファックとかシットを叫んでいるほうがダメな気がするんだけど・・・・・・・・」

「それは違う違う、彼らのファックやシットの叫びにむしろ救われるの」

「・・・・・・・・」

理解の超えた感性だった。

フリーダム過ぎるよ、塚本佳織。

「だよねー」

投げやりに答える。

「要するに、メタルに出会わなかったら犯罪者になっていた人たちだって世界にはウン十万人いるわけ」

「だよねー」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「あ、彼氏からだ！ ばいびー」

「だーよーねー」

「人がデスメタ進めるときにラップネタかよ」

「佳織だってノリノリじゃん」

「ノリノリ死語」

「だよーねー」

「だからもうラップネタはいいって」

「えー、せっかくチエキラな気分になってきたのに……………」

「どんな気分だよそれ」

「すごいリズムに合わせて踊りたくなるチエキ」

「語尾がチエキになってるだけじゃん」

「で、その新譜で僕を洗脳しに来たチエキ？」

「その語尾なんかすげえム力つくけど……………ま、話が進まないからスルーね」

「……………ごめん、明日でいいかな？」

「明日？」

「ちよつと疲れちゃった」

「ふーん、疲れねえ……………」

含みのある口調。

「疲労じゃなくて、肩の打撲？」

その言葉で気づく。

先程から、右手を左肩に添えたままだった。

「……………あのクズ野郎はダレ様？」

「……………佳織、見てたの？」

「コソコソと人の後付けて自分は尾行されてることに気づいてねーの。とんだハイエナ野郎だったの」

「どうして？」

「どうしてって？」

「あの時間に、東口に何か用事が？」

佳織の目を見据える。

その目は、戯言を発し、蒙昧に振舞う佳織のそれではない。

表情を意図的に読み辛くするために、感情をスポイルさせたそれだ。

佳織は、けして頭が悪いわけではない。

蒙昧さは擬態。

その裏表を知る人物はほとんどいない。

「……………」

佳織から、目を反らさない。

無言の圧力だ。

「……………ふう」

諦めたように佳織が息を吐き出す。

「イタ電」

「イタ電？」

意外な言葉に鸚鵡返しになる。

「そつ、イタ電の被害を最近、佳織ちゃん受けてます」

「どんな？」

「それは言えない」

「言えない？」

「暗黙の了解にかかるから」

「……………そつか」

暗黙の了解。

それを言われると、引き下がるしかない。
教会時代からの盟約だ。

触れず、助けず、侵略せず。

「んで、あれは誰なの？」

今度は佳織が問いただす。

「それも、暗黙の了解にかかる」

「ヒッサーの？」

「いや、のぞみの」

「……………のぞみんのか」

重苦しく呟く。

無表情な振りをして、同情の色が見え隠れする。

言葉にしくとも、ヤツが誰かを理解したのだろう。

麻薬を強制させる少年グループというのは有名だった。

「佳織も注意して欲しい、接触してきたんだろ？」

「・・・そだね、アイツ下衆度高けえよ」

「下衆度って・・・」

「まあいつか、収穫あったしね」

「帰る？」

「イエス、部屋に入るのはまた今度で」

「悠希が許したらね」

「愛の巢に立ち入り許可できるのかねえ・・・」

佳織は茶化し、踵を返す。

「ばいびー」

「じゃあね」

軽快な足取り。

後姿はすぐに見えなくなる。

「・・・桜井、要」

胸の内に沈殿していく不快感の名前を、僕は知らない。

「・・・ウェイ」

ヤツの名前も同列にしてみる。

それは、共通する感情。

「・・・お前こそ、後悔することになる」

生理的嫌悪。

僕は彼らを忌み嫌う。

アレ、桜井要は、招かざる客だ。

そう、ウェイと同じく。

携帯電話を手にして、庄治慶介と連絡をとった。

深夜十二時も近い頃、僕は、慶介とファミレスの席で向かい合っていた。

「バイト中にごめん」

「気にすんな、どうせ今にも潰れそうな居酒屋だ。早引きだと言えば大喜びされる」

仕事終わりの気だるげな表情で、慶介は答える。

「ピザとドリンクバーで。慶介はどうする？」

「俺はバイト後で腹が減った。ミックスグリのドリンクバーセツトで」

「そう言えば、今月厳しいんじゃないかったの？」

「目の前に金利ゼロ円の沙耶金融がある」

「……そういうことは頼む前に言おうね。僕もお金なかったら大変じゃないか」

「結果オーライだ」

「なんか違う」

注文を繰り返しウェイトレスは去っていく。

「で、こんな時間に集合は珍しいな」

「ちよつとのぞみのことで困ったことになってね……」

ストレートに言うか、遠まわしに言うか、暗黙の了解に関わることなので悩む。

本来ならば、慶介に打ち明けるべきではない。

それは、慶介に助けを求めるということでもあるのだから。

だが、桜井は危険な存在だ。

止む得ない事情でもある……。

「そうか……そういえば、もうそろそろだったか？」

ソファに両腕を投げ出して、尊大な態度で尋ねる。

言いよどむ僕に、内容を察した。

「ああ……件の少年が釈放された」

慶介の表情が少しだけ険呑なものになる。

「……奴は、やはりのぞみに接触すると思うか？」

問いかける慶介の声は低かった。

「間違いなくそうだろうね……」

力なく呟く。

慶介は顔をしかめた。

桜井、要。

小物だと思う。

だが、小物だからこそ性質が悪い。

組織についたとしても、小物ならば彼の動きの情報は入り辛い。

「……………後悔させてやるってさ」

「後悔？」

ははは、と慶介は笑い飛ばす。

「あんなヤツに何が出来るってんだ？」

「組織についたって」

「胸糞の悪いやつだ。虎の威を借りるってか？」

慶介は舌打ちをする。

「奴らは陰湿で、そして心を痛めない子供のままだろうな」

心の中で同意しながらも、敢えて尋ねてみる。

「施設で、更正したって可能性は？」

「更正する奴だって沢山いる。だが、奴らはそんなタマじゃなかったはずだ」

「ああ、そうさ……………奴らは全部のぞみのせいにして、のぞみを売ろうとしたからね……………、何も更正されることなく『はい、出所』って感じだろうね」

出所した桜井要は、むしろ以前よりも質が悪い。

「だが、横槍が入って……………結局罪は全部奴らが背負うことになった。そんな奴らが今ののぞみを見たら、どう思っただろうか」

「……………間違いなく、ヤツらはのぞみを逆恨みしている。火を見るより明らか、ってヤツだ」

「それで後悔させてやるってさ」

全く……………問題が山積みだ。

愚痴を零したくなる。

「どんな手も辞さない、ルールを無視して玉碎してくる素人ほど手

に負えないものはないぞ」

珍しいことだ。慶介が僕の心配をするなんて。

「・・・・・・正直、手に余るんじゃないかって思う。手を借りるべきじゃないか？」

「慶介も手に余るって思う？」

「それに上手くいったとして、それは・・・・・・正直気が滅入る・・・・・・のぞみにとっては、残酷なことになるかもしれない」

「僕はうまくやるさ」

断言する。

自信なのか、強がりなのか、僕自身にも判断することは出来ない。

「オレには、お前を信じることしかできない・・・・・・」

「慶介には慶介の、やるべきことがあるでしょ？」

「・・・・・・ああ、その通りだ」

「それは、誰でもない慶介しか出来ないことだ」

「すまん」

「謝られることじゃないよ」

笑う。

「そのことで慶介を呼んだ」

「そのこと？」

「桜井要は、他のメンバーに接触してくる可能性が高い」

「・・・・・・」

「一番接触しやすいのが多分、女の子たちだよ」

「だから俺、か？」

「うん、慶介が一番適任だ。ミスター女垂らし」

「・・・・・・」

無言で慶介は水を口に運ぶ。

「ターゲットに復讐する為なら、周りを巻き込むことを辞さないだろうね。のぞみと僕を孤立させる為ならどんな汚い事だって平気でやるヤツだよ」

「全く胸糞ワリいヤツだな」

「

「ごめん・・・・・・・・ややこしいことに巻き込んで」

「気にすんな・・・・・・・・俺、お前の、ダチ。オーケー？」

「そっか、悪いからここの代金持とうって考えてたけど、気の回しすぎか・・・・・・・・」

「それは奢れ、ミスター女垂らし二号よ」

「・・・・・・・・熱い友情だね」

溜め息をついた。

慶介との会話を終えて部屋へと帰ったのは、午前二時だった。

「遅かったわね」

玄関をくぐると悠希が出迎える。

「佳織、いたの？」

「うん、声聞こえてた？」

「ええ、近所迷惑も考えないバカな二人の声が」

「・・・・・・・・怒ってらっしゃいますか？」

低頭に尋ねる。

「怒ってるのはご近所さん、怒られるのは私」

「・・・・・・・・言葉もない」

猛省。

「春樹はなんて？」

ぴくり、と動きが止まった。

。　　そうか、彼女は今日、春樹のところに行っていたのか・・・・・・・・

「現状維持は、許さないってさ」

「そう」

興味なさげに、悠希は部屋へと戻る。

「・・・・・・・・悠希は、それでいいと思う？」

その背中に、問いかける。

「どうして？」

「桜井要、アイツが出てきた」

「それに問題が？」

そっけなく尋ねる。

「組織についた」

「そう」

「僕は………反対だ」

悠希の動きが止まる。

「なぜ？」

「今のぞみを動かせば、隙を見せることになる………」

言いあぐね、言葉が抽象的になる。

「結果を出さないまま、現状維持を続けることが出来ると思う？」

「でも」

「隙を見せて、桜井につつかれて、終わるならば潮時だったってことよ」

「………何とも、思わないの？」

「寂しくなるでしょうね、七人でつるめなくなるのは」

淡々と言う。

「だったら、まだ、時間を稼ぐべきだ。そうすれば………」

「惚けたわね、久」

僕の言葉は遮ぎられ、現実が突きつけられる。

「春樹を過小評価するなんて、そこまで冷静で居られなくなった？」

「………」

「そんなに、のぞみを助けない？」

「それ、は………」

答えることが出来なかった。

沙耶春樹には、春賀のぞみを助ける理由をプランとして説明したが、それは後付けに過ぎない。

それは、今もなお分かりかねる。自分のことにも関わらず、だ。

「本当でも嘘でも、あなたがそう口にしたという事実重いわ」
その通りだ。

『お前はそうするしかない』と沙耶春樹は言った。

のぞみを助けたのがプラスになったということを結果で表さなければならぬ。

「どうするつもり？」

「・・・」

答えることが、出来なかった。

『 白い髪、赤い目の少女、ウサギのような少女、でも、彼女は走れない』

・・・ウエイ？

『彼はね、彼女を助けたかったんだ』

彼女って、誰？

『でも、彼は逃げた』

彼って、誰？

『だから、キミが生まれたのかもね』

お前は、何を知ってるんだ？

『動機なんてどうでもいいじゃないか。理由なんて知らない方がいい。今日の前にあるものだけで充分じゃないか』

理由って、のぞみを助けた理由ってこと？

『キミと俺、二人で一つ、沙耶久だ。それでいいじゃないか』

・・・僕の知らない、僕がいるってこと？

『今はもう、いない。気配すら感じないから、キミもその存在は信じられないだろう？ 俺も時々、俺の妄想だったんじゃないかって疑いたくなる』

・・・ねえ、ウエイ。その彼の名前は知ってる？

『・・・マスター、そう呼んでいた』

それって・・・。

『沙耶久が安定する為には、彼は邪魔だったから、消された。消された、はずだったよ』

はずだった？

『俺にもよく分からない。・・・もう止めよう。不毛だ。言っただろ？ 目の前にあるものだけで充分じゃないか。キミと俺、俺は二人で充分だよ』

最後に、もう一つだけいいかい？

『なんだい？』

彼女って、誰？

・・・・・・・・。

・・・・・・・・答えなくないってことか。

ウェイの気配は、消えた。

名前も知らず、顔も知らない彼女。

ただ、おぼろげに居たという残り香だけが漂う存在。

・・・・・・・・やめよう。

今必要なのは、自分の中に潜む違和感の考察じゃない。

桜井要と沙耶春樹。

どうすれば、のぞみを助けることができるか、だ。

*

のぞみが教会の孤児達の仲間入りを果たした当時は、彼女は全く笑うことがなかった。

「暗れえ・・・・・・・・」

慶介が呆れながら呟く言葉も黙殺。

「ねえ、今日私と悠希が食事当番なんだけど一緒に・・・・・・・・」

日向の誘いも黙殺。

「のぞみんのぞみん、南さんの部屋のエロ本探しと洒落込みませー

ん？」

「・・・・・・・・佳織」

佳織はそのまま南に襟首を掴まれて引きづられて行った。

当然佳織のボケも黙殺。

「のぞみ、夕食できたわよ」

悠希が呼ぶ。

のぞみは答えず食卓についた。

少し食べて、すぐに立ち去った。

・・・・・・・・。

ある夜、のぞみを除く六人が、僕の部屋に集まっていた。

「第一回のぞみんの冷凍マグロ状態を解凍しよう会議」

佳織が口を開く。

「……冷凍マグロってアンタ」

日向が額を押さえる。

「不感症というヤツだ」

「言い換えんでいい！」

日向の拳を繰り出すが、慶介は平然とかわす。

「でもどうすんの？ あれは鉄壁だよ」

栄治が足を組みながらに尋ねる。

「……そういえば栄治だけのぞみと絡んでないよね」

栄治いじりは、この頃からブームになりだしたっけ。

「うつ……」

凶星をつかれた、という表情。

「新入り無視かよ。教会内でイジメだイジメ」

佳織が茶化す。

「ヘタレは極度の人見知りなだけだろう」

「ヘタレってなんだよ！」

「言い換えるとシヨボい」

「慶介え」

栄治は目覚まし時計を掴んで慶介に投げるが、慶介は平然と避ける。

「コラ栄治。物投げないの」

そして日向に怒られる。

「だって、慶介が」

「だってもへちまもない！」

「へちま？」

悠希が首を傾げる。

「そういえば不思議だ。なんで、だってもへちまも、って言うんだろっね。」

「という苦情だけど悠希はなんかいい案ない？」

「……私？」

「参謀様、お願いします。あつ、へちまについての謎じゃないよ」

「私の担当物件じゃないでしょ。のぞみもへちまも」

不動産みたいなことを言う。

「というか、へちま担当って何か嫌だ。」

「ヒッサーの担当」

佳織もこちらを指差す。

「僕かあ……」

天井を見上げる。屋根裏部屋だから鋭角の形だった。

「レンジでチン」

「真面目に答えろ」

五人がハモる。

「佳織が解凍とかいうから……」

「ヒッサーったら人のせいですよ」

「久、責任転嫁はいただけないわ」

「おいおい、お前はいつからそんな卑劣漢になったよ」

「頼むよー、久」

「久、話逸らさないの」

さらに五人分の追撃。

みんな敵になっていた。

「……何コレ？ 新手のイジメ？」

「違うわよ。教会内はイジメ禁止だし」

腕を組みながら日向が笑った。

「みんなアナタを信頼して任せたいってこと。表面上しか知らなく
たつて、久が信用できることは皆知ってる」

「お前について行ってやろう」

慶介が頬杖をつきながら言う。

「……アンタはなんでそんなに態度がでかいのかしら」

この頃から、日向と慶介は、犬猿なのに仲がいい。

「信頼って都合のいい言葉だ」

毒づくが悪い気分ではなかった。

「都合のいい男は好かれるぞ」

慶介が笑いながら言う。

「ヒモになりたい……」

「……なんてダメな発言を」

栄治が苦笑する。

暖かな空気が流れていた。

ウェイの意見には賛成できる。

過去なんか明かさなくとも、傷を晒さなくても、今ここにいる彼らがいればそれで充分じゃないか、と当時の僕も考えていた。

だから、嫌なことなんて忘れてしまえばいいんだ、のぞみ。

ただそこに、幸せな今さえあればいい。

「歓迎会しよう」

みんなに、言った。

異変 沙耶久

「くん」

「……………」

「ねえ、久くん？」

「えっ？」

意識が浮上する。

「どうしたの？ さっきから返事がないよ？」

「ぼーっとしてた」

桜井要、ヤツのことを考えていた。

「あははっ、冬だからね」

「……………冬、関係ないでしょ？」

「そっかな？」

苦笑する。

朝の通学路。

今朝は二人だった。

「悠希ちゃんは？」

「実家から直接来るよ。体調が悪かったみたいだから多分遅れると思う」

「悠希ちゃんびっくりするくらい白いよね」

「慶介はさぼりで日向は朝連じゃないかな？」

「栄治くんは……………佳織ちゃん関連かな」

「佳織が起きなくて困っている」

胸のポケットで携帯電話が振動する。

すまん、佳織起こすのに手間取った。遅れるから先に行ってくれ。

「……………栄治から、ビンゴ」

「……………ねえ、久くん」

口調は真剣なものだった。

「何かあった？」

のぞみの鋭さには、驚かされることがある。

「何かって？」

しらをきる。

「今朝は嘘、下手だよ」

そう言つてのぞみは、僕の頬を二、三度つつく。

「………まいったね、どうも。顔に出るとは情けないね」

「肯定？」

「………さあね」

桜井要の帰還をのぞみに告げる必要はない。

「………」

のぞみは一度言葉を切る。

気づかれたのだろう。

「それは………私に関係することだから言えない？」

この子は、他人の顔色には人一倍敏感だから。

鋭すぎるから、僅かな悪意や不安すら表情ですくいとってしまう。

「出所してくるから？」

ああ、今日は一段と磨きがかかっている。

笑っていたって、ナイフのように研ぎ澄まされている。

だが、桜井のことで話すことなど何ひとつない。

何ひとつ、のぞみに話す必要なんてない。

沈黙を守るだけだ。

過去も、後悔も、全部否定しよう。

受け入れるのは、幸せな今だけでいいんだ。

「………」

のぞみの追求はない。

だが、笑顔の裏では恐らく確信しているのだろう。

桜井要の存在を。

「ん………？」

「？」

異変に気づいたのは二人同時だった。

学校まで続く緩やかな上り坂の直線に入ったところで、ジャージ姿の学生の姿が目立った。

彼らは皆面倒臭そうにアスファルトに洗剤を垂らして、モップで磨いている。

「あれって、朝練してる部活だよな」

「うん……」

登校して来る学生は、一様に狐に摘まれたかのように首を傾げる。ジャージ姿の学生と立ち話をする者も多い。

その会話が耳に入ってくる。

「落書きがスゲェんだよ」

「近所の地面とか校舎の壁とかもスプレーで落書きされてさ」

「なんでもウチのガッコでエンコーしてるやつがいるみたいでさー、顔にはモザイクかかって画質荒えんだけど明らかにウチの制服きた女子がホテルに入るとこのビラが……」

地面？

掃除され、もううつすらとしか残っていないスプレーの文字。

だが、書かれている内容は何となく分かる薄さだ。

「……エンコーガクエン」

「……」

「随分と悪質な悪戯だね」

「……」

「のぞみ？」

顔を上げると、隣に並んでいたはずののぞみの姿はなかった。振り返る。

彼女は、落書きの前で立ち尽くしていた。

「……どうしたの？」

のぞみは、笑っていなかった。

青ざめた表情。

ただ事ではない、と思った。

引き返し、のぞみの目の前に立つ。

「のぞみ？ 大丈夫？」

「えっ」

驚いたように顔を上げる。

あまりにも周りが見えていない。

「どうしたの？」

「………なんでもないよ」

上手く笑おうとしたけれど、失敗している。

「なんでもないように見えないから聞いている」

「………行こう、遅刻しちゃうよ」

なんでもないように振舞おうとしている。

でも、気づいているのだろうか。

自分の声が震えていることに。

学園の校門の前に建つと、落書きはより酷くなっている。

至る所に卑猥な言葉、女性器のマーク、罵詈雑言の数々が落書き

されていた。

職員用の駐車場にはパトカーが何台も停まっている。

学園は異様な空気に包まれていた。

窓に描かれた落書きを消す一団の中に見知った姿を発見した。

「日向」

「久？ それにのぞみも、おはよう」

こんな朝でも律儀に挨拶をするところが日向らしい。

「ひどいね」

「朝一番早く着いた先生が校門を開ける時にはすでにこの有様だったらしいわ」

「朝練の部活全員が駆り出されているの？」

「ええ、先生や用務員さんも皆朝から落書き消し。ほんとに悪質な

悪戯よね」

「この学園に恨みでも持っているのかな」

「なんでも援助交際している学生がいるって糾弾するようなビラが

学校中にばら撒かれていたの。一つ一つの学生の机や黒板に廊下。

コピー用紙とトナー代の無駄遣いにも程があるわ」

「ツツコむところそこなんだ」

「ツツコみたいところが多すぎて分からないわよ」

確かに馬鹿げた悪戯だ。

こんな悪戯が行われているなんて、今時間かないだろう。

「ビラってどんなの」

「………野次馬根性丸出しね」

「いやあ」

照れてみる。

「褒めてないからね？」

日向は壁に積まれているポリ袋を指差した。

透明なポリ袋の中に集められたビラに目を向ける。

写真が大きく載せられていて、その上に『針木学園生援助交際疑惑』とゴシック体で大きく書かれている。

ビラに写るこの学園の制服を着た少女とスーツの男の姿。

「………」

制服は違うが、この構図とホテル。

この写真に見覚えがある。

五年前、沙耶春樹に『おつかい』を命令された日だ。
振り返る。

「………」

当たり前だ、笑えるはずなどない。

「のぞみ？」

日向も、のぞみの異常な様子に気がついた。

「………先、行くね」

ぼそりと呟き、のぞみは逃げるように校舎へと向かう。

「ちょ、ちよつとのぞみ、アナタ大丈夫なの？」

日向の言葉ものぞみには届かない。

「どうしたってのよ………、ちよつと、久、コレ」

日向はのぞみの後を追いかける。

「……………どうしろと？」

その姿を、モップを手に呆然と見送るだけだった。

「朝からゴクロー、勤労少年」

「慶介？」

ポリ袋のすぐ傍で、慶介がビラを手にして眺めていた。

「いつきたの？」

「今さっきだ」

「別に僕は掃除してないよ」

「天下の委員長様が掃除を押し付けたんだろ？」

いつも通り軽口を叩く。

だが、その表情には真剣さが見え隠れする。

「この写真に見覚えがあるのか？」

「……………うん」

「桜井、要か？」

「間違いないね」

写真は、正しくのぞみ達が過去に恐喝を行った時のものだった。

顔はモザイクで隠れているが、制服は違うが、一目見れば同じ写

真だと分かる。

「制服は合成だろうね」

「小物らしい、手の込んだ陰湿な悪戯だ」

慶介はビラを指で弾く。

「これで復讐のつもりなのか？」

「いや、これが始まりだろうね」

「始まり？」

「慶介、僕とのぞみを後悔させる為に桜井は何をしようと思う？」

「俺ならブン殴る、全殺しだ」

「皆が皆慶介だったら、世界はすでに滅びていただろうね……………」

「」

「馬鹿言うな、俺は常々ラブアンドピースを謳っている」

「ノー・ワー。プレイ・セックス」

「まさしく座右の銘だ」

世界中の人間が慶介ならば、少子化問題も起こらなかっただろうに……。

「桜井は、僕たちに居場所を失わせる。一度桜井は、この街での居場所を完全に失ったんだから……」

「……学園から孤立させる気か？」

「そして、最終目標は、僕と慶介、七人の輪さえも絆を失ってしまうような、完全な孤立だ」

そう、桜井要はすでに佳織に接触をしている。

「彼は、仲間も家族も、何もかもを失ったからね」

「自業自得だろうが」

「僕らのせいにすることもできる」

「結局、桜井は他人のせいにはしかできない、性根の腐ったままだと言うことだ」

「根拠もなく自分が正しいって信じて止まない。そんな人間は意外と多いからね」

桜井要という人間は、それを人一倍盲信しているだけだ。

「桜井を潰すべきだ」

慶介らしい意見だ。

「どうやって？ 警察に訴える？ それとも桜井の所属した組織に、たった七人で戦うつもり？」

一蹴する。

「ビラに名前を出さず、制服を合成したのは出所を隠す為だよ。犯行は深夜に大掛かりで、だろうね。恐らくは規模と時間から十人単位で行われている。やり方が徹底している。法律の内ならば、こちらがアイツが犯人だ、と騒ぐことしか出来ない。証拠がなければ、戦うことはできないんだ」

「のぞみを助けたようにはできないのか？」

「沙耶の力を使わないと言ったはずだよ」

桜井要が接触した夜、慶介は同じ助言をした。

久の手に余るならば、沙耶の力を使うということ。

「沙耶春樹の力を借りる、ということは負債を背負うということだ。あの時の負債だって、まだ返していないんだからね」

「プランを実行できていない人間に手を貸すなど、あの男がするはずがない。」

「じゃあ、どうする？」

「守るしかない」

曖昧な答えだと苦笑する。

「団結するしかない。ヘイヴンを守りければ僕らの勝ちだ」

「いつまでだ？」

「さあね」

「それも下策だろうが」

「口調に苛立ちが混ざる。」

「久、始めに言っておくぞ」

強い口調で。

「もしも奴らが俺たちを攻撃したならば、俺は報復する」

「……………」

「どんな手段を使っても、必ず排除する」

物騒な物言いだ。

「必ずだ」

断言する。

「それが、守るということだ」

慶介の手の中にあつたビラはいつの間にか握りつぶされていた。

その激情は、危うい。

どんな手段を使っても？

その結果、人間でいられなくなったとしても、かい？

予鈴が鳴る。

「……………続きは昼にしよう」

「そうだな」

慶介も校舎へと向かう。

「ねえ、慶介」

その背中に呼びかける。

慶介の足が止まる。

「僕たちは……いつまで延命行為を続けられるかな？」

慶介は振り返らず。

「死ぬまで続けるつもりだろ？」

その言葉に、複雑なものを感じた。

「ははは……」

力なく笑う。

「……何が可笑しいんだ？」

「言葉の通り、延命行為さ」

「ああ……」

慶介は満足そうに笑う。

たった一人の戦友へ、僕の意志を伝えよう。

「死ぬまで続けよう」

傷跡 春賀のぞみ

春賀のぞみは、罪深い。
忘れていたわけではなかった。

なぜなら、いつだってそれは私について回ってきたのだから。
過去と現在の格差が大きくなることに、今手の中にあるものが重
たくなっていく。

幸せの分量がそのまま罪の分量となる。

幸せは今さえあればいい。

久くん、それはとても素晴らしいことだよ。

そして、今の私には何よりも難しいことなんだよ。

なんで笑ってるの、この子？

人の顔色を伺って、ヘラヘラしちゃって。

忘れたフリをして、苦痛からも逃げようとして。

犯罪者のクセに。

*

学園は一限目で早退しました。

眩暈と吐き気でとてもまともじゃいられませんでした。

フラフラの足取りで自室の中に飾られたコルクボードの前に立つ。

コルクボードには所狭しと飾られた七人の写真。

それを指でなぞりながら一つ一つ思い出していく。

始まりは、やはり天体観測。

「これが、家族に代わる新しい絆だ」

常に七人の中心にいた少年が初めて、一度だけ泣いた日。
後にも先にも、彼が泣いたのはあの日だけでした。

涙の真意は未だに彼にしか分からない。
もしかしたら、彼の姉である悠希ちゃんは気づいているのかもしれないけど。

嘘をつくことを許容する暗黙の了解。

その心地よさにずっとたゆたっていた。

同時に同じだけの痛みと恐怖を味わいながら。

「結局私は……何になれた？」

指をゆつくりと、思い出の順番に辿っていく。

久くんと悠希ちゃんが教会を出て行く時に撮った写真。

沙耶の家に引き取られる前日の写真。

その日、離れ離れになるのが寂しいのか慶介くんはいじけて自室に籠もってしまった。

業を煮やした日向ちゃんが慶介くんの耳を引っ張って強引に連れ出したりした。

家族に代わる新しい絆は暖かでした。

私の入学式で全員で撮った写真。

義務教育の定められたこの国にも関わらず、私が学校に入学したのはこれが初めてでした。

戸籍名は、『春賀のぞみ』……同姓同名でありながら、なぜか血縁には南さんの名前がありました。

一体どうやって南さんは用意したのでしょうか、謎が多い保護者です。

「針木学園へようこそ、のぞみ」

皆が先輩として、一つ年下で友達もいなかった私を迎えてくれました。

例えば、いつも七人でした。常に七人でした。

七人いるから、二人称では足りません。

お前、や、アンタ、では会話が成立しません。
のぞみ、と。

名前で呼ばれるようになりました。

名前を呼ばれることが嬉しいことだと初めて知った。
彼女の親は、一度も彼女を名前で呼ばなかったから。

教会に来る前に屯していた少年グループでも、なあ、おい、アイツ、で済んでしまっていたから。

呼んでくれる人がいれば、名前は宝物のように輝きます。

かつて私は、覚醒剤を服用することで初めて、自分の存在を自らが証明できた気がしていました。

だけどそれは、一人ぼっちの世界での証明。

一人ぼっちの世界で生きる人間が、自らを人間として認識したに過ぎません。

受信は私、送信も私。自給自足のコミュニケーション。

そんな私を受け入れてくれた世界。

久くんが、『ヘヴン』と呼んだ世界です。

私はやはり、その世界で生きるべきではなかったのでしょうか。

恐い。

失ってしまうのも、失望されるのも、自分のせいでその世界が危険に晒されて、壊れてしまうことも。

間違いありません。桜井要、かつて私が破滅ゲームへと巻き込んだ少年が、その復讐の為に攻撃を始めた。

罪を犯しながら、何の罰も受けずにのうのうと生きる少女へと罪の清算をする為に。

落ちていく。落ちていく。

皆で手を繋いで。

高い高いところから落ちていく。

踏み外した私に引つ張られて、皆次々と落ちていく。
粉々になる。

私は碎けて、皆も碎けて、それで、幸せは終わり。

その想像は、悪寒でした。

「……随分と、高いところまできたね」

その衝撃は、ケタ外れ。

今度こそ自分は人間ではいられなくなる。
そう。

それで、私は一度粉々に碎けてしまったことがあるから。
『おいで……』
伸びてくる白い手。

何本も何本も伸びて、身体に絡みつきます。
鉄の錆びた臭いと据えたアンモニアの臭いが漂って。
部屋我真ん中で何かがゆらゆらと揺れている。
ヒトガタをした何かが醜く口を歪めます。

『おいで……』
「つつつ！」

お母さん……。

悲鳴は声にならず、思考が狂気で切り刻まれていくように。

「狂ってる」

心からそう叫ぶしなくて。

「この世界は……狂ってる……」
頭を抱えて、いやいやと首を振る。

この白昼夢は、私が既に通過した人生。

『だから、おいで……』

ヒトガタと目が合った。

神経の系の上を炎が走った。

ぶつり、ぶつり、と何かが焼ききれていく。

『おかあさんを、ひとりにししないで……』

「はははっ……」

恐くて恐くて、笑う。

なのに、彼女に向かって行こうって。

一歩、一歩。

ゆつくりと、ゆつくりと。

一歩ごとに視界がブレて、ザザッと。

深夜のテレビの砂嵐のようなノイズが耳を支配。

八畳の自室が、六畳の和室に取って代わります。

「お母さん……」

ヒトガタに手を伸ばし。

「……」

ヒトガタは笑っていた。

「……あああ」

私にとっての恐怖の象徴。

それが、お母さんの笑顔。

『どうして、のうのう生きているの？ 私の可愛いぞみ』

ヒトガタは笑っていました。

『ああ、愛しい愛しい私の子供、のぞみ』

『美しい私の子、汚い男の血を引いた子』

『愛してるわ』

『春の木漏れ日のように揺れる瞳、夏の空のように晴れ渡る声、

秋の落ちていく葉のように無機質な粘土細工、冬の極寒の中で

生まれた私の氷細工』

『愛しているわ』

ヒトガタは笑っていました。

『私は私よりも遙かに下等なあなたを愛しているの。でもダメ、あの男の血を引いているあなたをそれ以上愛することなんて、出来るはずがなかったの。愛しているわ。でも私はそれ以上に私のことを愛しているの。なのにどうしてあなたが生き残るの？ おかしいじゃない？ あなたのようない方も知らない子供が、家事の一つもできない食い扶持を減らすだけの疫病神がどうして生きているの？ ほら、あなたは結局ろくな人間にならなかった。あなたのせいで何人の人間が不幸になった？ 何人の人間が死んだ？ 暴行、恐喝、麻薬の乱用 あなたはそんな世界でしか生きていけない子供。まるであの男のよう。子供だけじゃ生きていけない世界で、自分だけで生きてるかのように振舞うどうしようもない子供じゃない。どうして生きてるの？ 死んでよ。死になさいよ。今すぐ死に

なさいよ』

「つつつ」

『結局は……アンタさえいなければ良かったって話なのよ叫んだ。』

獣のように。

全ての幻視が拡散する。

そこは、薄暗い自室だった。

延ばしたての先にあるのは、天井の明かりから伸びた糸だった。力なく膝をつく。

「ひさし、くん……」

つたない口調で久くんの名を呼ぶ。

「うしないたく……ない、よ……」

会議 沙耶 久

昼休み。

学生の喧騒で賑わう食堂の中、緊迫した面々が占領するテーブルがある。

そのただならぬ空気を察してか、他の生徒たちは避けるように彼らの周りのテーブルを避けた。

のぞみを除く六人がいつもとは違う真剣な面持ちでテーブルを囲んでいる。

「・・・・・・・・」

言葉もない。

少なからず全員が衝撃を受けている。

日向も、栄治も、佳織も。

悠希だけは分らないが。

「なあ・・・・・・・・」

栄治が沈黙を破る。

「ほんとに、その写真の女の子・・・・・・・・のぞみなのか？」

「恐らく間違いないよ」

動揺と悲しみを口調にこめることは出来る。

だが、あえて客観的に淡々とした口調を心がけた。

今必要なのは悲しみの共有ではなく、迫り来る災いに対応しなければならぬからだ。

「父さんが春賀建設に恩を売る為にのぞみを助けたんだけど、その時ののぞみの資料の中に同じ写真があった。この写真は相手に送りつけて脅迫する為に使ってたらしい。そういう写真をばら撒かれて自殺した人もいる」

「そうか・・・・・・・・」

それつきり栄治は口を閉ざす。

「のぞみんの昔の悪事なんてどうでもいいんだよ」

佳織は憤怒の口調で告げる。

「私らに火の粉をかけるなら、桜井を許さない」

慶介と同じ意見だった。

「ヒッサー、つまり私らに対する宣戦布告っつーことだろ？」

「そういうことだね」

「いいじゃん。受けてやろうよ。どっちが後悔するのかわかんないからさあ」

「向こうが、恐らくは組の下についてると分かっただけの言葉？」

悠希が冷静に告げるのを、佳織は一笑した。

「つまりさあ、組つてことは滅多なことじゃアンタやヒッサー、のぞみには強引な手が出せないってことだろ？　沙耶と春賀っていやあこの街の二大グループだからね。相手は姑息な手段にしか出ることが出来ない。小物が私怨で組を動かさねえだろ？　虎の威、剥いでやるよ」

普段の蒙昧に振舞う佳織ではない。

残酷に他人を踏み躪るのは、彼女本来の気質だった。

「ちよつと佳織、ちよつと冷静になれよ。熱くなり過ぎだつて」

「私は冷静だつっの、ガングロ。売られた喧嘩買っただけ」

「それが冷静じゃないんだつて」

「久、やはりこつちからぶっ潰すべきだろつ」

慶介も口を開く。

「桜井のついてる組織を調べれば、ヤツのしている仕事まではつきりする。それが分かれば奴に何ができるのかも分かる。それでも動くな、つて言うのか？」

「慶介は桜井を過小評価している。ヤツは以前よりずっと狡猾になつてるよ。そう上手くはいかないはずだ」

「やってみなけりゃ分からないだろう」

「一手遅いんだ。ヤツはもう動いた」

「ヒッサー、怖気づいてんじゃねえよ」

「佳織、これは防衛戦なんだ。下手に出れば自滅することになる」

「おいおい……悠希からも言ってくれよ」

「久に一存するわ」

そう言って缶コーヒを傾ける。

こんな時でも悠希はいつも通り、一歩引いた姿勢だった。

「ちよつと待てつて。こんな時にも、我関せず、かよ。のぞみの、私らの危機なんだろう？ もうちよつと考えてくれてもいいんじゃないのか？」

悠希は皮肉げに笑ってみせる。

「のぞみが自分で、助けて、つて言ったの？」

「なんだよ、それ」

「久とあの子が自分の蒔いた種をどうしたいのか。二人の結論を聞いた上じゃなければ私は動かない。あの子は自分の為に私たちが手を汚したつて知れば傷つくでしょうからね」

「……」

「それに、こうなることは予測できたでしょう？ 久、これは何もしなかったあなたの責任よ」

分かっている。桜井を過小評価していたのは僕だ。

直情的なヤツが、狡猾な手に出るとは考えていなかった。

「……防衛戦、ね」

発言のなかった日向がポツリと呟く。

「日向？」

「本当に私たちは、踏み込むべきなのかしら？」

「何言つてんだよ？」

「これはのぞみの暗黙の了解でしょ……それに暴力団も絡んでくる可能性がある。もう事態は私たちの手に余るつてことじゃないの？ 助けてあげたいけど、私たちのカバーできる範囲を超えてるわ」

「ひなたんよー、ヒッサーの話聞いてたか？ 狙われてんのはのぞみんとヒッサーだけじゃねえの。このままじゃ私らにまで被害が来るのよ」

ねえ、と佳織は僕に同意を求める。

「そうだね、桜井の目的は僕たち七人の絆を滅茶苦茶にしてしまうことだろうからね」

「つまり、戦わなきゃ私らこれで終わりなの。アンダースタン？」

「……潮時なのかもね」

空気が凍る。

ぼつりと、小さな呟きが全員の動きを止める。

それは、禁忌の中の禁忌だったから。

「なんつった、今？」

佳織の、低い声が響き渡る。

「暗黙の了解……、他人の分まで背負うには重すぎるのよ」

「日向」

「……全てを洗いざらい警察に説明して、精算するべきだわ」

「それでのぞみがどうなるか……分かってて言ってるの？」

それは、のぞみの自首を意味する。

全く正しい。

日向の言うことは、皆が頷いて賛成する。

「……」

桜井が介入し、のぞみが自首し、プランは続行できなくなりました。

天命のように響く道徳的な言葉。

だが、彼女はそれで春賀の家へと戻されるだろう。

その時ののぞみは、今のぞみでいられるのか？

汚し、蹂躪し、価値がなくなるまで滅茶苦茶にしてやろうか？

そして、沙耶春樹は、僕のプランを実行する。

はははっ……そうなるだろう。

のぞみの笑顔は、全部僕らのためだけに作られた特注品なんだから。

春賀晃は、沙耶春樹と同じ人種だ。

吐き気がするくらいに、人を人として扱っていない。
もしかしたらのぞみの罪を屠る為に、のぞみの存在そのものを。

心に、闇がわだかまる。

「・・・・・・・・」

微かに、ウェイの気配がする。

スイッチの入る予兆だ。

そうか、僕は絶望していたのか・・・・・・・・。

目の前の光景が、どこか遠くなる。

「佳織っ」

今にも掴みかからんとする佳織を慶介が手で制する。

それもどこか、違う世界の出来事のように。

「友達を売って助かる、か。お前らしくないな」

「・・・・・・・・」

慶介が日向と向き合う。

バツが悪そうに、日向は目を反らした。

本気喧嘩だ、止めないと・・・・・・・・。

でも、何もかもが億劫だ。

「・・・・・・・・っ」

「・・・・・・・・」

静かに、それでいて糾弾するような慶介の表情に日向は気圧される。

ここまで重たい慶介の表情は初めてだった。

日向だけでなくほかの四人にも緊張が走る。

それを、どこか他人事のように眺めていた。

「こんな生贄みたいなこと私だって気が進まない！ だけど・・・・・・詳しくは知らないけどのぞみのしたことなら何となく知ってる。踏み込むわけじゃないけど、あの子だってどこかで清算しなくちゃいけないって気づいているはずよ」

「・・・・・・・・・・そうだな、お前の言うことは正しいだろうな」

「だったら」

「だが……本当にアイツは、正しいことをして幸せになれるのか？」

「……それは」

「否定する気はないが、賛同する気もさらさらない。正しい人間が必ず救われるのか？ 違うだろ、ケースバイケースだ。今回のそのみのケースは、警察に引き渡すことが彼女のためにならないと判断した。……だから、南さんはのぞみを引き取ったんだろう」

「でもそれは、ルールを侵してるじゃない」

「ヘッ、ルールだ？」

「慶介は、鼻で笑う。」

慶介の言葉に、心の奥が反応している。

「民主主義で皆様方の作った抜け道探しゲームのことか？ 責任を誰に押し付けるかを決める魔女狩り制度のことか？ お堅いお前の意見で一体誰が幸せになれるってんだ？」

……憎しみよりも、悲しみに満ちた誰かが、反応している。

ウェイじゃ、ないのかい？

「ルールだのそんなモンに固執するヤツこそが卑怯者だ。なあ、勧善懲悪を振り回す気分はどうだ？ 気持ちいいか？」

「……斜に構えて、正直なことをバカにするのが、そんなに楽しい？」

とにかく、もう止めよう。

その喧嘩は、不毛だ。

「……そうじゃないよ、日向」

「……久？」

ぼんやりと、ソファに身を預けながら、独り言のように呟いた。
熱病にうなされるように、アタマがぼんやりとしている。

「正しいことが全て、救われる世界ならばよかったんだ」

「何を、言ってるの？」

心の奥底で、誰かがそう嘆いていた。

「よく、ゴメンで済めば警察は要らないって言うよね……………」
僕の、言葉じゃない……………」

「久……？」

悠希が少し驚いたように尋ねる。

言葉は止まらない。

内側から自分じゃない誰かが溢れてくるように。

「そうじゃないんだ。本当はこう言うのが正しいんだ……………」
悪いことをせずに済む世界だったなら、警察なんていらなかった、
ってさ」

それは、理由を探す僕を代弁するようで。

絶望というよりは深い悲しみに溢れていて。

だからウェイの気配もない。

「そんな世界が、嫌いだった……………」

言葉は詠うように。

「でも、残酷すぎる世界が、たまに、気まぐれのように、優しさに
満ちていることがあるんだ」

それは、誰もがそんな世界が好きだから……………」

「ああ、そうか……………」

一人で納得する。

「僕は……………そんな優しさだけの世界を、あの子に見せてあげ
たかった」

「久……………」

泣きそうな声で日向が僕の名を呼ぶ。

そして、それはあの子だけじゃないんだ。
皆に笑っていて欲しかった。

だから、僕がまず笑ってみせよう。

「日向、それは僕が認めない」

意識はクリアになる。

「のぞみはこっちが貰ったんだ。警察に渡してそのまま春賀の家に

帰せば、彼女は、過去の過ちと共に闇に葬られるかもしれないんだ。春賀というのは、そういう家系なんだ。親族経営による一大ゼネコン企業、その秘訣は身内の恥を如何に隠し、その血筋が優秀であるかを回りにアピールする為さ」

「……そんな馬鹿なコト」

「そんな馬鹿なことを躊躇なく出来るから、ここまで大きくなったんだ」

「……」

「なあ、日向、これでもまだ警察とか詰まらねえこと言う気か？ どうなんだよ？」

佳織が責めるように畳み掛ける。

「……」

「だんまりかよ」

「佳織」

悠希が咎めるように口を挟む。

「止めんなよ悠希？ コイツは敵になるかもしれないんだから。もしのぞみを警察に売る気ならそんな時は容赦しねえ。なあ、そうやって助かりたいつつたよな？」

「……」

日向は沈黙を保ち続ける。

「否定しないのかよ」

「……止める、それは多分本心じゃない」

口を開いたのは、さっきまで日向を責めていた慶介だった。

「おいおい、オメエ、さっきまで散々言いたい放題だったじゃねえか」

「お灸を据えただけだ。それに、日向の言うことは正しいし必要だ。そういう良心がこの集団には欠けているからな。だが、それを押し通すのは今は危険だったってことだ」

「……結局は日向の味方かよ。じゃあ説明してくれんだろ？ コイツが裏切らないって根拠」

「日向は予想外のトラブルに苛立つてるだけだ。コイツはイレギュラーに弱いからな」

日向は俯いたままだった。

「そもそもコイツの中で最大のルール違反は『裏切る』って行為だ。裏切られること、裏切ることを、コイツは極端に恐れる。そんなコイツが俺たちを裏切るはずがない」

「裏切る？」

「暗黙の了解って言って、コイツは俺たちに友達をさせようとよくするよな？ コイツ暗黙の了解増やすの好きだからな。ある意味俺らのルールブックだ」

そう言つて慶介はこちらを見る。

補足を頼むつてことだ。

「そうだね……、日向は友達であることを確かめようとよくするね。何も言わずとも昼を一緒にしたり、放課後に集まったり、

それは暗黙の了解でしょ、って言葉。ある意味では、僕たち七人の日常の設計者だ」

「証拠探し 警察の捜査でも、裁判でも、証拠が必要な世の中だしね」

悠希が口を挟む。

「友情の証拠、ね。言い得てるよ」

「……じゃあ、なんでそんなこと言うんだっつーの」

「日向が苛立つ理由も最もだ」

五人の視線が慶介に集まる。

「慶介がさっき言つてた理由か？」

「ああ……、でも、それだけじゃない」

「えっ？」

日向は、驚いたように慶介を見ていた。

「なんなんだよ、それは」

「……慶介？」

日向の声は、少し震えていた。

暗黙の了解、という言葉がよぎる。

僕らが唯一口に出して定めた、僕らだけのルール。
互いの過去に、傷に、触れず、助けず、侵略せず。

「ああ、それはな………」

かまわず、慶介は続ける。

「……………」

「……………止めて」

日向の呟く声は、誰にも届かなかった。

……………本当に、言うつもりなのかい？

「……………生理が重いんだ、コイツ」

「……………」

「間違いない、多い日も安心大増量パツクだった」

時間が一瞬止まる。

「……………は？」

日向は空いた口が塞がらなかった。

「……………バカ」

悠希が溜め息をついた。

「……………ってことだけど、ひなとりす、コイツの処分は？」

「……………死刑」

「アーメン」

溜め息について、慶介のために十字を切った。

「おいこら、万年発情期か野獣。真剣な話してんだろぅが」

げしげしと、佳織が慶介を蹴りまくる。

全く、わざとらしいと思ったらありやしない。

「オブツ オブツ、ゆ、許せ、真剣な話は三分しか出来

ない仕様だ」

「お前はどこの星雲からやってきたんだっつーの」

気を使ったのがバレバレだよ、慶介。

こんな重い空気を背負うような関係が嫌で、僕らは暗黙の了解を
定めたのにね。

そうだね、きちんと説明すべきだったかな。

「でも……重い空気は苦手だけど、何か色々と台無しだ」

「慶介らしいと言えば慶介らしいわね」

「そうだね」

一気に弛緩した空気の中、脱力した。

「……ごめん、佳織。嫌なこと言ったわ」

剣呑な空気も拡散した。

「全く、頼むぜひなとりす。生理重いからって言っていていいことと悪いことがあるっちゅーの」

「生理言うな」

後は、いつも通りの風景だ。

「……ひなとりすって、いつもなら叩くところだけど、今日は立場が弱いわ」

「ひなとりすは今日一日私の肉便器ね」

佳織も、慶介の冗談に乗っかる。

彼女は、蒙昧に振舞うことで、湿った空気を換気しようとしてくれている。

「……肉便器か、いい響きだ」

なぜか栄治が遠い目をしていた。

栄治だけは、気を使って慶介の話に乗ったのか、天然なのか、読めない。

「肉便器が非処女であったことが許せない、という人は意外と多い。凌辱系において処女の消失が与える嗜虐性は非常に重要なファクターとなる。君は処女か？ 処女を守っているか？ アイアンがつくほどにメイデンなのか？ あなたのメイデン・フィルターを清掃いたします。ああ、ダメですね、フィルターが痛んです。もうそのフィルター突き破ってしましましょう」

「……栄治さん？ もしや、本当に天然ですか？

「おい、佳織。真剣な話だったんだらう？ この変態は止めないのか？」

「・・・・・・・・おいおい、関われって言うのかよ」

「花の散る瞬間が美しいと感じるのは日本的な侘び錆びという感性だ。ならば、侘び錆びに続き萌えを並べたことも、なるほど頷ける。それは凌辱系における処女性が証明している。いかに相手を屈服させるか、という心が折れていく過程こそが興奮を掻き立てるんだ。セックスにおけるプレイだけが話の中心じゃない。真の陵辱というのは・・・・・・・・」

「おい、久、その妄想機のスイッチを止めろ」

こっちに話が回ってきた。

「スイッチって・・・・・・・・」

「乳首を押したら止まるんじゃない？」

「・・・・・・・・あんたたちも加わらないですよ？ 恥ずかしい」

「そう、手錠というのはこの冬のマスト・アイテム。縄という古来日本より続けられてきた緊縛道具も捨てがたいが、時代の流れは緊縛を進化させてきた。肉便器の完全な飼育に必要なものは手錠に、そして首輪とレール。それすなわちお犬様スタイル。洋館と冬の肌寒い地下室。さて、ここで説明しよう。女性には二つの処女がある。一つ目は言わずと知れた花園への侵入。そしてもう一つの未知の洞穴。我々は潜入操作をしなければならない。アナル・ギア・ソリッド。なんということだ。処女ならば二度美味しい。すぐ美味しい、すごく美味しい。この脳内に広がる妄想ギャラクシイ・・・・・・・・しかし悲しいかな、ギャラクシイはけして現実と交わることがない。肉便器は、フィクションなんだ・・・・・・・・。彼女たちは我々の妄想宇宙を孤独に漂う旅人。僕たちは宇宙に引き裂かれた最初の世代だ」

スイッチ（乳首）を押してみた。

「アオっ」

「うわあああ」

緊急回避する。

「・・・・・・・・」

慶介がドン引きする。

説明しよう。

「・・・・・・・・多分栄治は妄想しながら性欲を高めて敏感になってたんだよ」

「おいおい、あの野郎、朗らかに公衆の面前で勃起してやがったのかよ」

「佳織、直接的表現は控えて控えて」

「ああ・・・・・・・・何から言えばいいのか・・・・・・・・頭が痛くなってきた」

日向は頭を抱えた。

「・・・・・・・・でも」

日向は誰にも聞こえないように呟く。

それを、久の耳は拾い上げる。

やはりか、と。

日向ならばそういう思考へと向かうことが高い確率で予想された。予想は出来ていても衝撃を受けないわけではない。

少なからず僕の心の側面を抉る言葉。

暗黙の了解、誰か一人が背負い損ねたら・・・・・・・・どうなるの？

春賀のぞみの暗黙の了解を、もしのぞみが背負い損ねたら。

落下するような錯覚。

天国の高度が、下がっている。

確実に、延命の終わりは近づいてきていた。

疎外 沙耶久

桜井要による大規模な『悪戯』。

ただの悪戯で終わるはずがなかった。

翌日登校したとき、こちらに向けられる奇異と敵意の視線に勘が当たったことを確信した。

すれ違う者達が明らかにこちらを一瞥する。

中には遠慮のない視線を向ける者もいる。

目を合わせようとすれば、すぐに反らされた。

「・・・・・・・・まるで出所してきた犯罪者みたいだ」

隣を歩く悠希は、そうね、と短く頷く。

「桜井要も、こんな気分だったのかな？」

「彼の場合は、それどころじゃなかったでしょうね」

「まあ、暴力団に命を狙われる立場だからね」

だがアイロニカルな構図だと思った。

桜井要もさぞかしご機嫌に違いなだろう。

「・・・・・・・・」

沙耶久の人よりも敏感な聴覚が、聞こえないように噂するクラスメイトの言葉を正確に拾い上げる。

「・・・・・・・・僕たちが、援助交際をしているグループじゃないかってさ」

「写真の人物がのぞみじゃないかって噂が広まっているのね」

「ビラに貼ると大事になるから犯人を特定されやすい。でも、噂ならば警察は動くことが出来ない、か」

「冤罪に対して敏感になっっているもの、よほどの重大な犯罪が確固たる証拠がなければ警察は動くことができないのよ」

いつもなら挨拶をしてくる比較的仲のいいクラスメイトも、異物を避けるように遠巻きにこちらを観察している。

「動物園のパンダかもしれないね」

「悪が大好きなのよ」

厭世的に目を細める悠希。

「貶めることは快樂だけど道徳がそれを許さない。でも、悪を糾弾するという免罪符があれば、どこまでも残酷に禁止された行為を行うことができるから」

「……懐かしいね、昔の表情だ」

「お喋りが過ぎたわ」

すぐに無表情の仮面に塗りつぶされる。

「今日、のぞみは休みだね」

「よほどシヨックだったのでしょうかね」

「のぞみは鋭いからね、桜井要の存在に既に勘付いているよ」

「鋭くなくとも、のぞみだけにはすぐに分かるようになってい
るよ」

「どういうこと？」

「のぞみが、とある大学の教授を自殺に追い込んだ事件」

「一流企業の重役から教授として招かれて、授業の内容は自分の功績、それによる会社の発展の自慢話。自尊心が高く、それ故に最も立場の崩壊を恐れる人種だったと聞いている」

「追い込んだ手段は今回と全く同じなの」

「初耳だ。春樹から？」

「ええ」

姉弟で扱いも信頼度も随分と違うもんだ。

「その時も大学の構内の道路に教授の学部の校舎にスプレーで落書きをして、丁寧には一枚一枚机の中に入れて回った。掲示板にも何枚も何枚も張り出した。ただ、今回と違って男のほうにモザイクはなかったけどね」

「なるほど、悪質な悪戯に見えて、実はのぞみへのメッセージだったと」

「『後悔させてやる』ってね」

中々効果覲面だ。

噂に尾ひれがついて、学校中の話題となる。

優等生ばかりのこの学校では事件が起こることのほうが少ない。

誰しもが刺激的な毎日に飢えているから、残酷なニュースはすぐに彼らの食い物となる。

「例えば今日が休みでも、あの子はこの状況と直面しなければならない」

「のぞみは……どうすると思う？」

「過去と正面から向き合うか、それとも逃避するか……二つに一つよ」

「彼女は逃げるなんて出来ない」

「そうね、春樹に守られたこの街でなければ彼女は簡単に捕まってしまうでしょうね」

「そうだね……」

「ねえ」

「何？」

「どうして、のぞみを助けたの？」

「……」

何度も問われたことだ。

答えたことは一度もない。

だが、沙耶悠希という人間の鋭角な思考はのぞみの比ではない。恐らくは気づいているのかもしれない。

「のぞみが好きだって言ったら？」

茶化してみる。

「まともに答えるつもりはないのね」

溜め息をつかれた。

予鈴が鳴る。

その後はいつもの日常。

クラスメイト達が余所余所しい以外はいつも通りだった。

昼休み。

のぞみが登校してきた。

噂の中心にいるのぞみは、七人の誰よりも不躰な視線に曝される。それでも、のぞみは完璧な笑顔の仮面をまとい正門から歩いてくる。

「のぞみ……」

彼女のクラスへ向かおうと立ち上がる。

「私も行くわ」

後を追って悠希も着いてくる。

彼女は二年三組とプレートに書かれた自分のクラスへと入った。彼女が入り口でクラスメイトである女子のグループとすれ違う。彼女たちはこれから食堂に向かおうとしていたのだろう。

「……」

そのクラスメイト達は、明らかに輕蔑の眼差しでのぞみの後姿を睨んだ。

そうして、コソコソと話し始める。

エンコー野郎。

公衆便器。

死ねばいいのに、アイツ。

キャハハ。

聞くに堪えない。

のぞみの噂に関してだけは飛躍的に広がり、内容が歪んでいる。恐らくは何者かによって意図的に加熱されているのだろう。

「……」

弱者を見つけると自分が優秀であるかのように勘違いする者がいる。

彼女たちがのぞみに何か危害を加えられたのだろうか？

当然の権利のようにのぞみを蔑ずみ、攻撃するような言葉を発する。

そう、人間はいつだってそうだ。

彼は、よく知っている。

頭が スイッチが入りそうになる。

「久」

強く、名前を呼ばれる。

「……悠希？」

「のぞみの様子を見ましよう」

「……そうだね」

感謝するよ、と笑った。

ここでスイッチが入ったら危険だからだ。

二年三組の教室を覗く。

のぞみの姿はすぐに見つかった。

彼女は黒板に近い廊下側の席だった。

何よりも彼女から距離を保ち、クラスメイト達が彼女を観察していた。

誰も彼女に寄って来ない。

異常な空気が廊下にまで伝わってくる。

のぞみは自分の席の前に立っていた。

机に目を落とし、俯いているようにも見える。

「あれ……」

廊下から近づき、机の見える位置に移動した。

「……学生らしいわね」

悠希が揶揄する。

ああ、確かにこれはありきたりな学園ドラマみたいだと場違いなことを思った。

『死ねアバズレ』

『援交少女』

『キモい』

黒いマジックペンで、のぞみの机は落書きされていた。

机の表面は更にカッターか何かでスタスタにされている。

「春賀さん」

遠巻きに眺めていたクラスメイトの一人が明るい声を上げる。

のぞみが振り返る。

クラスメイトの男子は悪意に満ちた笑顔を浮かべ。

「一回何円でやらせてくれんのー？」

「……………」

瞬間、彼らは大爆笑する。

ゲラゲラと。

何が面白いのか、理解できない。

ただ、不快だった。

「……………酷いよね」

「あぁっ　？」

だが、すぐに彼らの軽薄な笑みは消える。

口火を切った少年は動揺したようにたじろぐ。

動揺は伝染するように彼ら全員に伝わる。

「何だよ……………コイツ」

「頭おかしいんじゃないの？」

「……………なんでなのよ」

そうして、のぞみが口を開いた。

「酷い噂だよね」

こんな、根も葉もない酷いこと言っ

普通ならばそういうニュアンスで取れる。

「……………白々しい」

「あのビラアンタだろ？　分かってんのよ」

「ヘラヘラ笑って男に媚びうつてさぁ、前から気に入らなかったのよ、アンタ」

糾弾の声はどこか弱い。

異質な空気が場を支配する。

彼らは、のぞみの言葉を噂を否定するニュアンスで受け取ったのだらう。

だが、僕には分かった。

彼女が伝えようとするニュアンス、それは　。

改めて言われると、本当に酷い行為だったんだね、と。
深い後悔と罪の意識、そして彼女の内に眠る狂気を込めて
恐らくは、そう言いたかったのだろう。

予想していなかったわけではないが、ひどく心が乱れた。
あまりに場違いだと思ったから。

彼女は、笑顔だったからだ。

笑顔は使いどころを間違えれば異質なものとして捉えられる。
それは、完璧ではない。

完璧だったものの模倣に過ぎない。

完璧だったもの。

嘘つきになるんだ。

その言葉を思い出した。

春賀のぞみ2 沙耶久

歓迎会、のはずだった。

結果的には失敗に終わる。

のぞみは、やはり誰とも喋ることがなかった。

詰まらなそうだとか、顔に出ればよかったかもしれない。

だが、彼女は余りに無表情だった。

まるで抜け殻のようだった。

結局誰も、彼女をどう扱えばいいのか分からなかったのだ。

そのまま彼女はいつものように夕食を少しだけ食べるとすぐに立ち去った。

制止の声を聞こえないかのように。

白けた空気の中、僕は立ち上がり、のぞみの後を追う。

止めとけよ、と慶介は止めたが、動いた。

部屋のドアをノックする。

反応はない。

悪いとは思いつつも開けてみる。

部屋はもぬけの殻だった。

とりあえず教会内を探し回ってみることにした。

広い建物ではない。

教会と施設が一体となっているが、こじんまりとした構造だ。

のぞみはすぐに見つかった。

「のぞみ」

夜の教会の講堂。

彼女は、ステンドグラスに描かれた神の絵を見上げていた。

何となく、問いかけてみる。

「のぞみは、神様を信じる？」

「・・・・・・」

のぞみは答えない。

ただ目線だけが僕を捉える。

「この世界に、神様はいるかな？」

無邪気に笑いながら尋ねる。

「……神様って何？」

「全知全能の存在だよ」

「全知全能？」

「何でも知っていて、何でも出来る人」

「そんな人がいるの？」

「分らない」

きつと誰にも分からないことだ。

「でも、いるとしたらきつとあんな感じだろうって、昔の人は思ってたんだろうね」

そう言つて、ステンドグラスを見上げる。

「……」

のぞみも見上げて。

「……アレは何？」

そう言つた。

「神様？」

「ああやつて人を見下ろして馬鹿にしてるの？ 傲慢だね」

冒涇の言葉だ。

「……お父さんと一緒」

そう言つてのぞみは神の絵を睨む。

「引き取つたくせに、私を家に閉じ込めるだけで一度も姿を見せなかったヤツ。お母さんの言つた通り、アイツは本当に嫌なヤツ」

憎悪もなくのっぺりとした表情だった。

針木という楽園の路地裏で破滅を夢見て蹲つた少女は見る影もなく、ただ力なく佇んでいる。

それともこれが本来の春賀のぞみなのだろうか。

全てを諦めたような顔をする少女が……。

「そこには何も無いよ」

凝視というには視点が定まっておらず、ここにありながらここにはないものを見つめていた。

「・・・・・・・・」

「どうでもいい、って言わないんだね」

「どうでもいい」

「ははっ・・・・・・・・」

苦笑しながら、のぞみの薄暗い目を見ている。

その目を知っている。

僕は、よく知っていた。

僕、が？

「・・・・・・・・僕達が出会った日は、憂鬱な雨だったね」

のぞみへと話しかける。

ゆっくりとのぞみは振り返った。

「どうしてのぞみは麻薬に手を出したの？」

「・・・・・・・・」

笑顔のまま、僕は禁忌に触れる。

「のぞみがずっとそこに続けるのと関係がある？」

「そこってどこ？」

「六畳の畳の部屋だよ」

沈黙に亀裂が入る。

徹底的に、言い訳の出来ないほどに踏み込んだ。

「そこにはもう、誰もいない」

「黙れ」

静寂を切り裂く少女の悲鳴。

少なくとも、僕には悲鳴に聞こえた。

「誰だって、失ったと認めるのは本当に辛いからね・・・・・・・・」

「私は・・・・・・・・」

のぞみは否定しなかった。

彼女は失ったことを理解しているはずだ。

だから、転げ落ちた。

「ここにいる皆は、それぞれが何か欠落を抱えている。僕たちは、暗黙の了解って呼んでいるんだけどね」

「……………」

「でも、今は皆笑えるようになった」

「メロドラマ？」

「違うよ」

そんな美しいものではない。

「過去を捨てなければ前には進めない。でも、過去を捨てれば自分でいられなくなる。だから僕たちは、もう一つの日常を創ることにした」

過去の傷も後悔も伴わない。

そこにいる間だけは自分でない自分でいれる場所。
難民達が僅かなスーパを分け合うテントのように、僅かな幸せを分かち合うことが出来る場所。

初めて会ったような他人の子供でも、僕たちの周りにいた大人たちと傷を舐めあうよりはずっとましだった。

僕らの周りにいた大人たちは、僕らを傷つける者でしかなかったから。

「のぞみは、どうして麻薬に手を出した？」

「ねえ、人を滅茶苦茶に傷つける気分ってどんなものだと思う？」

のぞみは問い返す。

「気持ちいいのかな？」

「ははっ」

笑う。

「最高に気持ちいいんだよ」

のぞみは教会に引き取られて以来、初めて笑った。

壮絶な笑みを浮かべた。

「理由は……………それだけ」

あまりに空虚な笑い。

声は尻すぼみになる。

のぞみが余りに小さな存在に見えた。

「それだけが、生きていることを実感させてくれた………終
わるという希望が、そこにはあったから」

「……………」

のぞみはただ立ち尽くす。

震えるわけでもなく、泣き叫ぶわけでもなく、ただ無感情に。
そうやって笑っていた。

「何が、恐いの？」

「だい、じょうぶ……………」

何となく分かってきた。

彼女の無感情は、彼女の叫び。

「なんか……………スカスカするだけ」

愛憎が複雑に絡み合い、何重にも積み重なった過去。

簡単なことだった。

彼女の名前は、春賀のぞみ。

欲深い彼女は、その実何ものぞんでいなかった。

全てが失われることをのぞんだ。

「君ののぞむ形でなくても、生きることを実感できる方法はあるん
だ」

笑ってみせた。

『完璧な笑顔』で。

のぞみの目の前に腰を下ろして、彼女の肩を抱いた。

「一度死んだことにして、生まれ変わってみる気はない？」

「何それ……………」

のぞみは顔を上げる。

目線があつた。

これ以上ない優しい表情を作り出す。

「だから僕は、こうやって笑い続けている」

「……………」

これ以上ない、優しい声を作り出す。

「でも、こうしてたら……いつか嘘が本当になるかもしれないって思うんだ。何にだってなれる、どんなことにだって可能性がある。……だってたらその中に、偽者が本物になる可能性だってあつていいじゃないか」

今は分からなくなつていい。

でも、いつか君にも分かつて欲しい。

「ねえ……のぞみ、僕たちは、僕たち六人は、神父さん以外の大人たちに愛されなかつたんだ。それはなぜだと思う？」

のぞみの髪を撫でながら静かに問いかける。

「……」

のぞみの反応はない。

いいさ、構わずに続けよう。

「僕たちは嘘が下手だつたんだ」

「……嘘？」

「愛されたいなら、嘘が上手くなるべきだつた……僕の場合は完璧な笑顔を作れたなら、誰も疑わない。誰もが僕らを愛する。そう考えるようになった」

教会の子供たちが学んだ処世術。

それが、日常を取り繕うことだつた。

僕らが『ヘイヴン』と呼んだ世界。

「真実は決して僕たちに優しくない、嘘だけが僕たちに優しい」

「……何を私にのぞむの？」

のぞみが顔を上げる。

「嘘つきになるんだ」

「嘘つき」

「コレだよ」

そう言つて自分の顔を指差した。

「……」

のぞみは、僕の完璧な笑顔を無言のまま見つめていた。

そうして天体観測。

彼女は、日向に手を差し伸べて笑った。

僕は、彼女を救うことができたのだと、そう思った。

甘言 加藤恭介

計画の第一段階は成功だったと言える。

桜井の属するグループの中に針木学園に通う少女がいる。

彼女が言うに、沙耶久と春賀のぞみ、彼らのグループは思惑通り学園で孤立し始めているようだ。

一部の仲の良かったクラスメイトがいる佳織や、普段から素行の悪い慶介などは孤立とは言い辛いが、その他の五人についてはクラス内でも浮いた存在となっているようだ。

春賀のぞみについては、陰険なグループからイジメが加熱しかけたという報告もある。

「以上だよ、恭介さん」

桜井が報告を終える。

「そうか」

成功は確信していたから淡々と頷くだけだ。

桜井の表情は歓喜というわけではなかった。

復讐が絵に描いた通りに進むことに対する高揚感と爽快感は、桜井の中では薄いものだったワケでもないだろうに。

桜井の個人的な復讐に関して、彼の考えた作戦に俺は自らの部下を何人か寄越した。

針木学園に通う学生もその一人だ。

だが、彼らを動かすにはその見返りを与えなければならない。

桜井の作戦が彼らに見返りを与えることはない。

だとすれば、その見返りは恐らくは恭介自身が払っているのではないかという疑問があるのだろう。

「……なあ」

問いたくなつたのだろうな。

「どうした？ 不安ごとでもあるのか？」

「いや……そうじゃないんだけど」

言いよどむ。

加藤恭介を盲信するが故に、詰まらないことを口にして失望されるのが恐かったのだろう。ならば、助け舟を出すまでだ。

「なぜ、お前に手を貸したのか」

「………ああ」

底が知れない全能感を演出してやる。

桜井、お前は分かりやすいな。

コールド・リーディングも楽でいい。

組織を顎で動かす人間が自分のような脛に傷を持つ人間をどうして助けたのが疑問なのだろう？

「お前が優秀な人間だからだ」

お前に、優しい言葉を与えてやろう。

「オレがへまして年少にぶち込まれたこと忘れたのか？」

「だから声をかけた」

桜井は釈然としていない表情だ。

俺の言う優秀さと失敗した人間が、イコールで結びつかないのか？

「俺はね、お前が沙耶と春賀に復讐するという気概を持っていたことが嬉しくてならないな」

優しい、優しい言葉で、お前を飼いならしてやろう。

お前は知らないからだ。

人が自分に向ける優しさは憎しみ以上に警戒しなければならなかったことを。

「嬉しい？」

「ああ、嬉しいね」

『優しい大人』は、最も邪悪だ。

「失敗した人間ってのは三つに分類される。同じ失敗を繰り返す愚者、失敗が恐く諦めることを選ぶ臆病者、そしてお前のように失敗を学習し、次こそは失敗しないと優秀な者へと化ける者」

桜井から、ここで初めて歓喜の笑みがこぼれる。

「失敗を知らぬ者は、ただの臆病者か自己弁護が上手い者か、いず

れにしても使えない」

逆を言えば、一度失敗している者は自身の失敗を、事象を分析し、その原因と対応をとことん突き詰めていく。

そうして二度と同じ轍は踏まないということでもある。

もつとも、優秀な人間という括りではあるがな。

馬鹿な人間は結局同じ轍を踏むことになる。

その多くは、失敗を自分の失敗として受け入れられず正しい分析が出来ないからだ。

「今回の件、お前は実に優秀だったよ。もしもビラが春賀のぞみを限定するものならば、彼らには春賀のぞみを切り捨てる、という選択肢が残されてた。何も知らないと装い、周りの者と共に春賀のぞみを糾弾する。だが、ビラが春賀のぞみを限定していなければ、彼らは糾弾する側に回ること出来ない。噂だけで春賀のぞみを切り捨てた、というレッテルが残り、免罪符のない彼らのグループは空中分解する。彼らはいずれにしても孤立する案だった」

「ああ………」

「よくやったものだ。俺は単に奴らの結束を疑心暗鬼にさせ孤立させるよう提案しただけなのに、お前はルールの内で効果的に相手を攻撃した。お前の優秀さは認めないわけにはいかないな」

子供は褒めれば信用してくれるな。

相手に自分を認められるということ。

対人関係における性行為以外の快樂の全ては突き詰めればそこに尽きるからだ。

「ははは………」

自然と桜井の笑いがもれた。

他人を屈服させるのとはまた異質の快感。

桜井要にとって、誰かに自身を褒め称えられるのは初めての快感だったのかもしれない。

だからこそ、気づかない。

そんなお前を見る俺が本当に嬉しそうに笑みを浮かべている理由

など、お前には分からないだろう？

「で、次はどうするつもりだ？」

さて、本題に入ることでしょう。

「次？」

「孤立させた奴らを、さらに疑心暗鬼にさせる為の手段だよ」

桜井は顔を引き締めて思考を切り替える。

「……そうだな」

桜井もバカではない。

ここからが困難なことをお前は知っているはずだ。

彼らを一人一人分解するには裏切りが必須なのだ。

問題はどうかやって離反させるか。

その内の一人と接触し、彼らを裏切るよう説得するか脅迫するか。

甘いお前は、そう考えるだろう。

「ダメだ……」

裏切りが成立するには、相応する利を対象に与えなければならぬ。

桜井にそれに値する駒がないことは、桜井自身が一番よく知っている。

「難航しているようだな」

「ああ……、ココからが難題だよ、クソッ。アイツらのことをもつとよく調べねえと……、切り込む隙があるかを」

「そうだな」

では、どうする？

「なあ……」

桜井は口を噤む。

俺の力が借りたい、そう言おうとして思いとどまったのだろう。

自分の立場を少しは理解できるようになるくらいは成長したようだ。

組を動かす人間が、こうして相談に乗ってくれ、人手を貸してくれるだけでも本来ならば破格の待遇だ。

俺は自分のことを意図的に語らないのでよく知らないだろうが、恐らくは組織の中でもかなり上の方の人間であろう予測はつくはずだ。

そう、広域暴力団である唐風組と渡り合えるだけの立場にいる人間だ。

下のはずがない。

そんな人間が下の下にいる少年の個人的な復讐の話を聞いてくれているのだ。

それに加え俺の威を借りようと頼むのは、図々しいにも程があるだろう？

だが、そんな桜井の心境を酌んで口を開いてやろう。

「手を貸してやろうか？」

「えっ」

口を開けるな。

間抜けに見えるぞ？

「……今、なんつった？」

間抜けに問い返す。

それほどまでに思いもよらぬ言葉だったのか。

「手を貸してやるって言ったんだ」

改めて聞かせても信じられないという表情。

「嘘だろ？」

「こんなつまらん嘘言っでどうする」

「これは俺の個人的なことで、アンタに得はねえだろ？」

「信じられないってツラだな？」

「……」

それほどまでに間抜けな顔をしていたんだよ、お前は。

「俺のような組織の上層部の人間が、どうしてお前のような末端の人間の個人的な復讐に手を貸すのか、それに似合うだけの莫大な金が動くわけでもなく、名誉を得られるわけでもない。信じられないのも無理はない、か」

尊大に振舞ってみせる。

「アンタの言うことは信じるよ……けどわかんねんだよ」
桜井の本音が漏れる。

「俺のこと信じてくれるのか、嬉しいねえ」

桜井は思わず赤面した。

穏やかな笑みを浮かべて、お前の猜疑心を全て取り払おう。

「授業だよ」

「？」

「こういうやり方もあるってことをお前に教えてやる　お前はまだ、視野が狭いからな」

「授業って……」

「なあ、桜井」

芝居がかった口調で。

「……なんだよ、変な声出して」

「お前はいずれ、俺の片腕になる」

「……はっ？」

「出世を期待する、ということだ。俺と同じところに来い。そして、お前は組ではなく俺に恩がある。だから俺がこの組を乗っ取る時、お前は役に立つ」

「……俺が？」

大風呂敷を広げすぎだと思った。

だが、恐らくお前は信じるだろう。

こんな三文芝居さえ信じてしまう。

それは、宗教にも似ている。

お前にとって、今の俺は、加藤恭介という宗教だ。

「……冗談だろ？」

「今のお前にとっては冗談だ」

真剣な表情で演出する。

笑顔を作りながらも目を細め、底知れぬ不気味さを演出する。

「だから授業だよ。俺がそれを冗談じゃなく、本当に手の届く未来

にしてやる」

右手を桜井にかざす。

「お前は、俺のコレになつてくれるか？」

右手を差し出ししながら、告げる。

「・・・・・・はははっ」

桜井は笑うしかない。

こんな年少出の下手踏んだ子供に価値を見出してくれた男。

仲間にも、親にも見捨てられた哀れな野良犬に生き場所を与えてくれた男。

お前は、そんな男に必要とされたんだ。

「ははははははっ」

桜井は、大声で笑う。

盲信は崇拜へと変わったのを確信した。

暴力団を乗っ取る。

常軌を逸している。

そんな夢を、お前に与えてやろう。

「・・・・・・いいぜえ」

そう　加藤恭介といれば、敵などいない。

敵になどならないほど、何もかもが取るにならないように思える。

そんな安心感を、お前に与えてやろう。

「アンタ、最高だよ」

そう、お前には、恐れるものも、疑うものも、何もない。

桜井は、俺の手を掴んだ。

いい夢を見るよ、桜井？

その夢は、すぐに覚めてしまうからな。

脅迫 沙耶久

昼休み。

佳織はクラスメイトであり、友達の陽子を誘って食堂に行こうと考えていた。

しかし、その姿はすでない。

「しゃーない」

立ち上がる。

出遅れた感がある。

他の親しいクラスメイトはのぞみの件で疎遠になっている。

だから七人の輪を除き、特別仲の良い友達である陽子を捕まえ損ねると、昼食を食べる相手がいなくなる現状。

「ちくしょう」

それもこれも数学の林のせいだ。

今日に限って授業中に寝てたことをぐちぐちぐちと。

ねちっこいっいたらありやしない　そう考える佳織であるが、自

業自得の感が否めない。

ともあれ、このままでは一人寂しく昼食である。

さて、どうするべきか……。

こういう時はトモダチの少ないやつほど便利な物はない。

「……………」

佳織の脳内に真っ先に浮かんだのは日向だった。

「いじってあそぼ」

軽快な足取りで日向の教室へ。

二年四組と書かれた教室の入り口付近で喋っている女子のグループに問いかける。

「日向は？」

話しかけられた少女たちは眉をしかめる。

それもそのはず。

丁度彼女たちは、のぞみに関する噂に誹謗中傷を楽しんでいる最中だったからだ。

「……………高辻さん？　どうだろ、教室にいないけど」

「そりゃ、見りゃわかるっちゅーに」

「今日は見てないね」

クラスメイトは口々に答える。

「ああ、どーりでなんか空気が締まってないって思ったー」

「確かにねー、高辻さんいるとなんか締まったからねー」

「おいおい、マジかよ」

「かこけーかこけー」

「締まるってどこがよ？」

「風邪かなんか？」

「うーん、どーだろー」

考えるような素振り。

でも本当に考えているのか怪しいものだ。

彼女たちの表情からは早く去れ、とでも言いたげな雰囲気を感じ取れる。

日向は大丈夫なのだろうか、と思う。

無責任な噂に一番神経をすり減らしそうなのが日向だからだ。

「何ー？　高辻の話？」

教室の中心辺りで屯していた男子が声を上げる。

助け舟のつもりらしい。

「んー、そう。今日見てないねーって」

「なんかサボりらしいぜ？」

「えーっ、んなアホな」

「マジマジ、珍しいから数学の林が微妙に慌ててた。保護者に確認してみようって」

「へーっ、珍しいことあるもんだね」

「登校中にせーりとか」

「死ね、猥褻物」

軽い世間話のような空気の中、佳織だけは妙な胸騒ぎを覚えた。

「というわけらしいよ？」

「ん．．．．．サンクス」

「いえいえー」

あからさまにほっとした表情を浮かべる。

「あー、あともう一個」

「えっ？」

「日向の前でその噂してたら、慶介と栄治連れてきて殺すぞ？」

「．．．．．」

彼女たちの表情が青ざめる。

素行の悪い慶介と見た目の恐い栄治の名前は使いようがある、馬鹿と鉄はなんとか、と佳織は思った。

その三つ隣、二年一組の教室。

僕の電話に着信が入る。

登校時間中にかかってくるのは珍しいことだ。

「久」

日向の保護者、つまり南さんからだった。

「あれ、珍しい。どうしたの、パパ？」

「．．．．．久、パパは止めてください」

「ごめんごめん」

「学校から電話がありました。日向が無断欠席のようです」

「えっ？ ウソ？」

「久は、何も聞いてませんか？」

「家に寄ってみようか？」

「今．．．．．日向の家の前にいるのですが、いないようです」

「失踪？」

「縁起でもないこと言わないで下さい」

「．．．．．そうだね」

「少し探してみようと思います。久も日向の行きそうなところを放

課後に当たって貰えませんか？」

「サー」

「お願いします」

通話を切る。

「南さん？」

悠希が尋ねる。

「ん．．．．．明日、槍が降るかも」

「？」

悠希は首を傾げる。

「あれ？」

再び携帯電話が震える。

南さんが何か言い忘れてかけ直してきたのかと思った。

だが、表示されたのは見たこともない電話番号。

「．．．．．」

何か不吉な予感がした。

「もしもし．．．．．」

返事はない。

「もしもし、もしもし．．．．．」

無言電話。

切ろうと考えていた矢先、電話口から彼が話しかけてきた。

「よお．．．．．ボンボン」

「．．．．．桜井」

その名前を口にすると、悠希の目が細くなった。

悠希も電話口に耳を近づける。

「どうした？ 声が震えてんじゃねえのか？ 風邪か？ 注意しねえとな。季節の変わり目ってヤツは一番夕チの悪い風邪引くもんだからなあ」

「世間話するほど仲良かったかな？」

「おいおい、つねねえな、沙耶久。俺とお前の仲じゃねえか。あんまりツメてえと、今度はシャブパーティーのビラをばら撒きた

くなるぜえ……くくく」

「のぞみに自首でもして欲しいのか？」

「もしそうなりそうなら止めるよ？ そんな詰まらねえことで計画がご破算にされたら堪ったもんじゃねえからよお」

自首して楽になるうなどということだけは許さないと、暗にそう仄めかしている。

奇しくも、僕の考えていることと同じだった。

だが、その意味合いは全く逆だ。

「目的は何？」

「高辻日向」

その名前を口にした。

「今日、無断欠席してんだろ？」

「……お前」

恫喝するように低い声を出す。

「次のゲームだよ沙耶。お前の娘は預かった、ってか？ そう、高辻日向は拉致してもらった」

「分かってるのかい？ お前は法の範囲を逸脱した。こちらは警察に頼ることが出来る」

「ああ……好きにしたらいいぜえ？ ただ、そうなれば高辻日向がどうなるかは分かるよな？ お前がそう判断したことを死ぬまで後悔させてやるよ。高辻日向のレイプされた死体をエディフィスタワーからでも突き落としてやるうか？ ブラック・マンデーの再来、ってキャッチコピーでな」

「久」

息が当たる距離で悠希が呼ぶ。

「その声……のぞみじゃねえな。沙耶悠希か？」

「……桜井は本気で日向を殺すわ」

「はははっ、お姉ちゃんの話が早いねえ。ああ、本気も本気さ。殺しが許可されれば真っ先にテメエを殺してやるところだからな。俺はテメエを苦しめる為なんだってやるぜ？ 何なら試してみる

か？ 警察に連絡してみろよ。俺が本気だという証拠を見せてやるからよ」

「・・・・・・・・何が望みだ？」

「いいぜえ、月並みの台詞だが警察には電話すんなよ？ 身代金目当ての誘拐と違って一度警察の影が見えたらゲームは終了だ。まあ、俺はどちらにしろ大して困らねえからよ、通報されてもいいんだがな」

「時間がもつたないわ。本題に入りましょう」

悠希が口を挟む。

「そうだな、本題に入ろうか。沙耶、ゲームだ。放課後四時にもう一度連絡する。その時まで、春賀のぞみを連れてこい。お前たち二人で遊んでやるよ」

「・・・・・・・・何をするつもりだ」

「焦んなよ、そんな時になりや説明してやるからよ。言った通り二人そろってだぜ？ そうじゃなきゃ一人欠けて、お前らは永遠に六人になるぜ？」

通話は一方的に切られる。

「・・・・・・・・」

桜井を過小評価している、と慶介に言った。

だが、僕自身も桜井を過小評価していたのかもしれない。

脅し方にも年季が入り、以前の粹がっていただけの奴とはまるで別人のように思える。

「久」

「・・・・・・・・何？」

「惚けている場合じゃないでしょ。あなたはすぐに慶介とのぞみに連絡して。私は栄治と佳織に連絡するわ」

「分かった・・・・・・・・」

以前は何も出来ない吠えるだけの子犬が、寧猛な狂犬となった。
桜井要。

「ねえ・・・・・・・・悠希。桜井は、何をさせたいのだと思う？」

「さあね」

悠希にも図りかねるらしい。

『そんなもの、一つしかないだろ？』

ウェイ？

『アイツの目的は、ヘイヴンの崩壊だろう？』

・・・そう、のぞみを、仲間を失った復讐。そんなことは分かっている。

『キミにとっては、いい機会だ』

「えっ？」

思わず声を出してしまう。

それは予想だにしてなかった言葉だった。

『春樹に従い、ウォンを見捨てるか、春樹に逆らい、ウォンを助けるか』

額に油汗が浮かぶ。

背中に流れる汗が気持ち悪い。

『助けたいんだろう？ 何が何でも、ウォンを。キミという人間はそういう風にマスターから期待されたんだから』

どういう意味だ。

『はははっ、ごめんごめん、今大切なのはそこじゃない。考えるべきは、どうしたらウォンを助けられるか、という一点だ』

嘲笑うような声に苛立ちを隠せない。

拳を強く握る。

『最も効果的な延命は、手術して腫瘍を摘出することだと思わないかい？』

春樹を、消すというのか？

『キミが言ったことだ。悪いことをせずにはむ世の中なら警察は要らなかった、ってね。素晴らしい格言だ、正鵠を射ているじゃないか』

聞いていたのか。

『もう命令の期限は近い。そろそろ、タイムリミットだよ。そして、春樹が本腰を入れて動けば、本当に取り返しがつかなくなる』

そう・・・・・・あれは、返済の目処のない借金。

現状維持を繰り返し、動くつもりもないなら、取立ては当然の帰結。

『役割分担だよブラザー。春樹の相手は俺、詰まらない日常はキミ、だから分かっているよね？ 春樹も桜井も、ヤルのは俺』

汚し、蹂躪し、価値がなくなるまで滅茶苦茶にしてやろうか？

アレは、人間ではなく怪物。沙耶春樹は発した言葉の通り実行する。

彼のやり方で、のぞみを有能な駒へと仕立て上げるのだらう。

滅茶苦茶に壊してしまうことで。

・・・・・・彼らの命は、その因果応報に釣り合うものだろうか。

『それは、矛盾だ』

矛盾？

『ルールを侵すことを責めるならば、君が道德を掲げるならば、ウオンなんて捨て置くべきだったんだ。野良犬のように、路地裏で一人くたばる様を傍観しておくべきだったんだよ、このクソ偽善者』

ウェイは、楽しそうに笑うだけだった。

分かっている。

それこそが、唯一の解決策だと。

覚醒 沙耶久

放課後十六時。

桜井の指定したのは、桜井とのぞみが屯していたクラブだった。少年達の死体が遺棄されて、閉鎖したまま買手のない廃墟。長年放置され続け、雨にさらされて錆色に汚れた建物の地下にある。

「薄暗い建物だ」

慶介は最後までのだぞみと僕の二人で向かうことに反対した。だが、相手の手に日向が落ちているかもしれない状況では、迂闊に指示に反するのは得策ではない。

なんとか慶介を思いとどまらせて、僕たちは二人で訪れた。「ねえのだぞみ、ここつてもしかして……」

後ろから会談を降りてくるのだぞみに問いかける。

「うん……『ピース』っていうクラブだった」

「……だった？」

「……少年と少女の死体遺棄事件があったんだ」

言い辛そうに。

だが、あえて口に出すように。

「麻薬のマーケットに関するトラブルで唐風組というこの辺り一体を仕切る暴力団の子飼いの少年グループに殺されたの。床に落ちた薬物なんかから、麻薬の売買を少年達はそこで行ってたことも判明してる」

「……」

暗黙の了解。

それがのだぞみの踏み込んではない禁断の領域。

それを彼女が敢えて口にしたということは、その過去に踏み込む許可を与えられたのかもしれない。

無言のまま思う。

僕とのぞみは本当の意味で一線を越えて暗黙の了解を共有したのだと。

もう、これまでのようにはいられない。

これまでの、人が見れば互いの深くに干渉しない絆は、軽薄な友情に思ふのかもしれない。

でも、それを悪いことだとは思わない。

僕たちはそうやって上辺だけで、ただ今だけを見つめあうような絆を求めた。

秘匿を許容し、理想を否定した。

「……知ってたよ、春賀の家のことも、全部」

「やっぱり、全部知ってたんだね」

「……ごめん」

「いいの、些細なことだよ」

本当に些細なことだったら、きっと君が壊れることもなかったんだろう。

「行こう」

告げる。

だがその言葉はのぞみだけに対してのものではない。

「続ける為に」

ウェイの提案に対する答えは、未だに出ない。

覚悟がない、ということだろう。

「……」

黒いドアに辿り着く。

スプレーで卑猥な言葉が落書きされ、所々が剥げているドア。

ノブを掴み、ゆっくりと開く。

ぎいい、と軋む音を甲高く上げて、暗闇が僕らを迎える。

「……暗い」

「明かりは？」

背中越しにのぞくのぞみに聞く。

「入って右手側の壁」

そのまま壁際を障りながら室内を移動する。

「・・・・・・・・っ」

ごくり、とのぞみが息を呑む音が聞こえた。
スイッチを探そうとする僕の姿が、三年前の光景と重なったのか
もしれない。

彼女たちのグループが屯していたクラブ。

麻薬を売るためのクラブ。

愚かな少年たちのまやかしの樂園。

こんな世界、壊れてしまえばいい、か。

ねえ、のぞみ。

君は今でもそんな風に思っているのだろうか？

僕たちは、そんな君の唯一無二な存在となることが出来たのだからか？

楽しい方がいいに決まっている。

後悔なんて出来ればしない方がいい。

それが正常な人間の心理構造だ。

だが、そう思うほどにそれは彼女の求める願いとは違うものとして受け入れられて、脳が軋んだ。

のぞみはどこかで、罰されたがっている。

だが、それを口に出すことは躊躇われた。

口に出してしまえば、それを真実と認めなくてはならないような気がしたから。

あの教室での笑顔。

あれは、ようやく罰されることに対する安堵だったんじゃないかな
いかって・・・・・・・・。

「・・・・・・・・でもそれじゃあ、延命は出来ないんだ」
ぼつり、と。

のぞみにも聞こえないように呟いた。

「ああ、スイッチはコレか」

カチリという音共に、長年放置されていた蛍光灯がジジジっ、と

点滅する。

点滅を繰り返し、辺りが照らされる。

「えっ？」

のぞみの素っ頓狂な声が洩れる。

「日向ちゃん？」

ソファにうつ伏せに倒れている人影。

ソファに投げ出された人影はぴくりとも動かなかった。

「日向ちゃん　！」

のぞみが叫ぶ。

「落ち着くんだ　！」

叫んだ。

「のぞみ………違う」

今度は落ち着いて声を発する。

ぴたり、とのぞみの動きは止まる。

「………違う？」

打って変わって慎重な動作で、そっと人影の顔に触れる。

そうして、顔をこちらに向けた。

「　人形？」

のぞみの言葉通り、のつぺりとした、人の形をしているだけで、

目も、口も、鼻も、人間の器官はどこにも見られない。

日向と同じ髪型のカツラを被せて、針木学園の女子の制服を着せた、悪意の籠もった人形。

「………なんのつもりだ」

最も悪質だったのは、日向にみせた人形の右手に銃が握られている、まるで銃で自殺したような構図になっていた。

心が、大きく揺さぶられた。

この兆候は良くない。

これは負の感情。

憤怒、憎悪、絶望　。

僕の感情じゃない。

「ねえ……」

のぞみが恐る恐る呼びかける。

「どうしたの？」

振り返る。

「……テレビつけた？」

「テレビ？」

「あれ」

のぞみが視線でバーのカウンターを示す。

そこに置かれた液晶テレビに、砂嵐の映像が映っていた。

「始めからついていたの？」

「それだったら電気付ける前に気づくはずだよ」

「じゃあ、いつ？」

のぞみが警戒を強める。

「……桜井」

呟く。

「僕たちが電気が点けたのを確認して、遠隔で手動操作をしたんだろっね」

「……誰が？」

「ここは、桜井に監視されている。僕たちが怯える様を観賞するために、ね」

「もっとビビレよ、興ざめじゃねえか」

「つつっ！」

テレビの垂れ流すノイズに、少年の声が混ざる。

僕たちの視線がテレビに集まる。

そこに映し出された少年。

心の中で、笑い声が響き渡る。

僕の中に住む残酷なもう一人が、得体の知れない歓喜に満ちる。

「……桜井くん」

のぞみがその名前を呼んだ。

「よお、のぞみ……久しぶりだなあ」

軽薄な笑みを浮かべながら、その目は得体の知れない怒りに満ちている。

三年前とは、随分と変わった。

性格は臆病に、狡猾に。

憎悪は冷たく、鋭く。

「俺が檻にいる間もよお、随分と楽しそうな毎日だったみたいだなあ」

「桜井・・・・・・・・」

「はじめまして、沙耶久。お久しぶりです、沙耶久。どうだ？ ドツキリってヤツだよ。なのがいい絵撮れねえ表情だ・・・・・・・・バカみてえに突っ立てるだけかよ、沙耶。ひやははははははははは、芸人失格のリアクションだな、オイ」

『殺そうか』

っ！

口から出た言葉は・・・・・・・・、僕の意味から程遠い言葉だった。

冷たい血が、流れていく。

雨が、降っている。

思考が白黒になる。

「どうやって？ テレビでも壊すか？ ひやはははは、落ち着けて、テレビ壊したって俺は死なねえんだぜ？」

ありったけの侮蔑を込めて、桜井はあざ笑う。

「・・・・・・・・」

底知れぬ、黒き歡喜が上流から流れ込んでくる。

・・・・・・・・止めてくれ、これ以上、僕を刺激するな。

「ああ・・・・・・・・脇役は黙ってるよ？ なあ、のぞみ？」

ドクンッ。

桜井がのぞみの名を口にした時、更に動揺が加速する。

「・・・・・・・・何がしたい？」

汚された気分になる。

美しいものを、酷く汚された気分になる。

「よくできた人形だろ？　遠目だと本人だと思っちまうくらいによ
お」

「悪趣味なくらいにね」

その感情が、危険だと分かっているのに、押さえきれない。

『代われ　可哀想に。苦しいだろう？　その感情は』

その声は、厳かに頭蓋の中に響く。

「それくらいで悪趣味だとか言うなって。その人形に籠めたお前たちへのメッセージはそんな可愛いもんじゃねえぞ？」

「……………もし僕らがお前の思い通りに動かないと、人形じゃなく本人になる、と？」

「よく分かってやがる。さすがに狡猾なテメエは理解が早いなあ」

桜井は、本当に嬉しそうに喋る。

『桜井という個は、強いね　』

頭蓋の中で響く声が、より明確に、その存在を強めていく。

『直情的で愚鈍な少年は三年前にキミ達に砕かれて、出来上がった現在の桜井は歪に尖ったナイフだ。的確に急所だけを狙う、目に見えない冷酷で鋭角な憎悪。これほどまでに憎悪を原動力とし、冷たく進化させてきた人間に、ある種の尊敬の念すら感じるね』

「……………何をすればいい？」

もうこれ以上、僕を揺らさないでくれ……………。

のぞみに、こんな者を見せたくない。

「何、簡単なことだよ」

歪な喜びが、電話口から伝わる

「なあ……………のぞみ、そんなに高辻日向は大切か？」

「……………なんのつもりだ」

「黙ってるよ、沙耶久」

「……………大切だよ、お願いだから、彼女には手を出さないで」

「桜井っ　！」

『代われよ、ブラザー』

頭に血が上る瞬間に冷や水を浴びせるような絶妙のタイミング。

けて大きな声量ではない。

だが、一瞬で体中が冷たくなり、我に帰る。恐怖だった。

それは押しではいけないスイッチだから。本能がそう告げる。

沙耶久という身体の中にいる二人の人間。

その安定が損なわれてしまう。

押ししてしまえば、二度と沙耶久に戻れない気がした。

『……………ブラザー、すぐに俺に代わるんだ。じゃないと、キミは消えることになる』

消える？

『キミはね、そんな風に出ていないんだ』
消える、ね。

その方が、君には都合がいいんじゃないのか？

『言っただろう？ 俺はキミのことが大好きだってさ』

僕は、君のことが嫌いだよ。

悪態をつき、冷静であろうとするが。

「 のぞみ、簡単な話だよ。トモダちを助けたいなら、お前が身代わりに死ねばいいんだよ」

「 なっ……………」

その言葉は、致命傷だった。

「その人形が日向になるのが嫌なら その前にお前が代わりに銃を撃てよ……………」

なに、を、コイツは言っているんだ？

「どうして、すぐに死ななかったんだよ、のぞみ」

「……………そっか」

のぞみは、淡々と、呟いた。

ねえ、のぞみ。

何を言っているんだ？

どうして、否定しないんだ？

『 代われブラザー、危険だ。そいつはまずい動きだ』
ウェイが、何か、言ってる。

「どうして、生きてたんだろうね……………」

……………ああ。

聞こえない。

聞きたくない。

何も、聞こえなくなる。

ザアアアアアアツ。

深夜のテレビの砂嵐の音。

のぞみの顔が、見える。

その顔は……………抜け殻の頃だったのぞみ。

見えない。

何も、見たくない。

ザアアアアアアアアアツ。

酷い、ノイズ。

ザアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ。

その最後に見た景色。

彼女は、銃を手にした。

プツンツ。

覚醒 ウエイ

「それで自分を撃て」

曖昧だった外界の声が、急激に現実味を帯びる。

「……………随分とご機嫌な声じゃないか、マスター・ピース。殺しは、許可されてないんじゃないのかい？」

危うかった。

あのままだと、久は消えてしまふところだった。

彼はそんな風に出ていない。

人の悪意に対して余りにも脆い。

本当に絶望的な人格だ、アレは。

はははっ。

「どうした？ 日向ちゃんを助けてえんだろ？」

挑発するように、薄汚い笑みを浮かべる桜井。

それに比べコイツは素晴らしく薄汚い。

人間が見せうる中でも最高の表情だ。

銃を撃てないウォンの保身を嘲笑するつもりだろう。

そうして、彼女の罪悪感を助長する。

撃てるはずがない。

彼女もまた、素晴らしく生き汚い人間だからだ。

桜井とは違うベクトルの救いようななさ。

ああ……………、悪いね、ブラザー。

キミの思う通りには動けそうもない。

こんなに素晴らしい人間たちが目の前にいるんだ。

「どうしたよ、のぞみ？ そうだよなあ……………、トモダちの命のためにテメエの命を差し出すようなヤツじゃねえよな、お前は。テメエの快樂のために、仲間の命を売るようなクソ虫だったよなあ？」

久、桜井とウォンは俺が壊してやる。

「えっ」

瞬間、桜井の口から間抜けな声が漏れる。
何だ？

「破滅ゲームの続きだね」

ウォンは、人形の握っていた銃を手取る。

「．．．．．おい、それが偽者だとも思ってるのか」
恫喝する声。

だけど、震えが混ざっている。

オレにも、彼女が何を言っているのかが理解できなかった。
何故？

「．．．．．重いね」

ウォンは、それが本物だと言っている？

それを．．．．．自らのこめかみへと当てた。

動作は緩慢で、舞のように神聖に映る。

彼女以外の、全ての時間が止まった。

本気、なのか？

「清算するよ」

ウォンは、安らかに笑った。

カチンッ。

部屋の中に、激鉄が金属を叩く音が響いた。

「弾が、入ってなかったんだね．．．．．」

少女は、背筋を伸ばし、銃を側頭部に当てたまま堂々と立っていた。
た。

「．．．．．」

弾が入っていないことを知っていたのか？

いや、そんなはずはない。

彼女の表情は、前髪に隠れていて分からない。

何を、考えている？

どうして……死のうとした？

「……どうして、撃った？」

桜井が、オレの言葉を代弁する。

理解が出来ない。

「そんなに……仲間が大事だったのか？」

桜井、本気でそんなこと思っていないだろう？

恐らくキミは、過去のことを思い出したはずだ。

三年前、オレと同じくあの場所に立ち会ったキミならば。

「それとも……そんなに死にたかったのかよ」

その頃のウォンという人間を構成するのは、圧倒的な破滅願望だった。

だが、それは自殺などという矮小な破滅ではなかったはずだ。

「桜井くん……」

抑揚のない声。

「破滅ゲーム、続けるんでしょ？」

ウォンの口元が歪む。

「のぞみ、分かった。テメエのことは……よく分かったぜ。だったら、望み通りテメエの大事なモン全部ぶっ潰してやるよ

テメエに関わったヤツは皆破滅する。テメエはよお……そんなに死にてえんだったら、あの時、一人で死ねばよかったんだよ」

泣きそうな顔で、桜井は叫ぶ。

「テメエは……やっぱり、狂人のままだ。覚悟しろ、お前の大事なモンは全部なくなる……」

テレビの電源は落ちた。

桜井の姿は見えなくなる。

話はこれで終わりということだ。

「随分と、変わったじゃないか。ウォン」

のぞみの背中に語りかける。

「……久、くん？」

「ああ、久くんだよ」

「・・・・・・・・」

凝視される。

ああ、ブラザー。

キミの言うことは正しい。

この子は本当に鋭いな。

「ウェイと言う」

右手を腹部に添えて、慇懃に礼をする。

「えっ」

驚くのも無理はない。

だが、オレにはキミの変貌の方が驚愕だ。

「・・・・・・・・それが、久くんの暗黙の了解？」

「そうだね、キミ達風に言うとなくなるかな？ それにしても、よく久じやないと分かったね。俺達は喋り方も似ている、表面上は何ら変わりはないのにさあ」

「アナタは嘘が下手」

ウォンは、人差し指で顔を指す。
なるほどね。

彼ほど俺は偽善者ではないからね。

「どうして、引き金を引いた？」

オレは、先ほどのからの疑問をぶつけた。

「・・・・・・・・」

一時の沈黙、そして。

「本当は・・・・・・・・みんなと、友達になるべきじゃなかった」

彼女は淡々と告げた。

ドクンツ　と、心臓が跳ね上がる。

本当に、ウォンなのか？

これが、スリルの為に仲間の命を売った少女なのか？

「警察に行つて、自首して、全てを清算すべきだったんだよ。温もりなど知らず、愛情など知らず、一人冷たいコンクリートの檻の中で死ぬべきだったんだよ、私は」

「どうして？」

「…………結局は、みんなを巻き込んだ」

諦めに満ちた言葉が、冷たい空気に混ざる。

守る、ねえ……………。

これは、失望だ。

オレは彼女に失望した。

守ること。

それは神聖な行いのように人は認識するだろう。

だ。

「キミの言葉とは思えない。目に映るすべてを巻き込もうとしたキミが仲間を守りたいって？ 随分と詰まらない人間になったもんだね」

苛立つて仕方がないよ。

「…………詰まらない？」

「ウォンは……………」

一度言葉を区切り。

「ウォンは、それでいいの？ 守れないなら手に入れるべきではない？ 傷付けあうならば出会うべきではない？ それは、死ぬならば生まれてくるべきではなかったという後悔に等しい」

「守り方を知らない……………」

ぼつり、と呟く。

「……………守る？」

気持ち悪い！

それじゃあ……………まるで人間みたいじゃないか。

「違うね」

「違う？」

「楽になりたかったんだろ？」

結局は、そこが本音だよ。

キミは…………人間になったんだ。

キミは結局、怪物にはなれなかった。

「後ろめたい幸せなんて、もう沢山ってことでしょ？」

「・・・・・・・・」

ウォンは沈黙を守る。

胸の前で、十字を切る。

祈りではなく、冒涇のために。

「それは恐怖だ。自分のせいで仲間が傷つくことへの恐怖。悪になるのは、誰だって恐いからね」

冷たい血が、流れていく。

黒い雨が、降っている。

ウォン、随分とキミは落ちぶれてしまったモンだ。

キミの中には、もっと素晴らしいモノが眠っていたというのに・・・・・・・・

「違うかい？」

「・・・・・・・・そうかもね」

ぽつりと呟いた言葉は肯定。

「罰を受けるという潔さ。罪を認めるという高潔さ。それはみな、楽になりたいという気持ちの裏返しだ」

なら思い出せ。

あの頃のキミに罪意識などなかった。

「キミたちの正しいと思う常識は、ただの罪の清算システムさ」

そうだ　久、悠希、キミたちは今のウォンに何を期待しているんだい？

こんな、抜け殻のような彼女に。

テレビが、砂嵐の映像を映すように。

ざざざと。

脳内の思考を全て洗い流す。

「・・・・・・・・」

ノイズが重なっていく。視界が遠近感を失う。

心臓が跳ねることに、どくん、どくん。

なんて酷い。

ああ、酷すぎる。

酷く　人間臭い。

「・・・・・・・・罪だとか、そんなことどうでもいいの」
力なく、ウォンは呟く。

「それでも私は悔やむ」

「何を？」

「皆を巻き込んでしまったら、きっと私は私で居られなくなる」
それが、罪を犯したということだ。

キミが誰かを傷つけたという事実は、けして消えない。
その為にキミの大切な者が傷つくのは、因果応報だ。

「加害者のキミが生き続ける限り、キミが死んでも、その遺族が生き続ける限り、キミのしたことに對する憎悪は消えないだろう？」

それが、痛い、と加害者は償いを求める。

だからこそ、罪の清算システムさ。

そこには被害者の救済はない。

加害者にコレだけの罰を与えました。

だからこれで許してあげなさい。

ウォンの表情に後悔の色が見える。

だったら、始めからおとなしくしていれば良かったんだよ。
破滅など妄想に留めておくべきだった。

怪物になりきれないのならね。

「罪を償うということ、それは人間としての美德だ」

「・・・・・・・・」

「そして世界は、それに情状酌量を与える」
反省の余地としての、償い。

「・・・・・・・・」

「　春賀、晃」

「　　っ」

ウォンは、目を見開く。

唇が震えていた。

ああ、久しぶりだ。

どこか冷静に、ウォンを観察する。

モルモットの断末魔を見つめる研究者の気分さ。

自らが腹を切り開いた蛙の死に逝く様を、無機質に眺めるように。

「春賀晃が、同じように、罪を償って楽になるうとする様を、キミはどんな気分で眺める？」

「・・・・・・それは」

のぞみは唇を噛む。

「許せるはずがない」

断言する。

「そうして、彼の苦しみを天秤にかけて折り合いをつけるだなんて、許せるはずがないんだ」

ああ、ヒビが入っていく。

せつかく久が積み上げてきたもの。

家族に代わる新しい絆。

延命に延命を重ねたチューブだらけの末期症状の絆。

ごめんよ、ブラザー。

彼女は中途半端すぎて吐き気がする。

桜井のように人間になれなければ、キミのように偽善者にもなれない。

そして、春樹や春賀晃のような怪物にもなれない。

「桜井に悪いと思うなら、今すぐここで死んで見せればいい。どうしたんだい？ キミのトモダチの二人もそうやって罪を償わされたんだろう？ なんでキミだけ生きてるの？」

ウォンの肩が跳ね上がる。

ああ、どうやらこの言葉、キミのアキレス腱だったようだね。気がついたということだ。

自分が奪ってきたものを、キミは省みてしまった。

ブラザー、何が家族に代わる新しい絆、だ。

始めからこうしていれば良かったんだ。

どうせ、ろくなモノになんてなるはずがなかったんだ。

だから、あの時に死んでいけばよかったんだよ。

「本当の罰とは、人生の大半の時間をその後悔と苦しみに充てる時間だ。キミがそうやって每晚抱え続けるノイズこそが、罰だ。苦しいだろう？ 気持ち悪いだろう？ 每晚毎晩、今日が幸せな日であるほどキミのノイズは酷くなる。それは人を支配する道徳なんて詰まらないシステムじゃない。キミは知ってしまったからだ。そうなるように久に作り変えられてしまったからだ。人は素晴らしい、生きるというのは至上の価値があることを。身を持って、その身体で、理性のさらに根底に流れる剥き出しの意識で」

「あ……う……」

のぞみは頭を抑えて蹲る。

「そうしてキミは今、その苦しみに耐え切れなくなり、楽になろうとした。全く正しいことだよ。苦痛を和らげるということは、人間の正しい心理構造だ」

「……た、だしい？」

「結局は、キミには人並みの幸せなど過ぎたのぞみだということだよ。空を飛ばうとした時点で、キミは墜ちていたんだ」

ぷつり、と激しい痛み。

頭の中で、何かが切れた。

同時に、激しい頭痛に見舞われる。

ウォンを、解放した。

「……くっつ」

「……どうして？」

久よ、なぜこんな無駄なことをした？
救えるはずがない。

ルールに縛られた地球儀の世界で、ルールを侵した少女が人として生きれるはずがない。

その崩壊は、目に見えている。

なぜ、中途半端に救おうなどと考えた！

両手で額を抑えて呻く。
顔を覆うように。

『のぞみ．．．．．』

久が、口を開いた。これは、俺の意思じゃない。

「．．．．．」

久を、封じ込める。

なんだ、それでもキミは、彼女を助けるというのかい？

それは、キミの感情ですらないというのにね。

久、キミは最高だ、最高に気持ちが悪い。

はははっ、気持ち悪くて、思考することすらも億劫だ。

「久くんは、どうして．．．．．私を助けたの？」

彼女が、初めて聞いただした言葉。

「．．．．．ハハッ」

鼻で笑う。

気持ち悪さを押し殺して、口を開いた。

「今さらだね．．．．．ウォン。オレに彼のことが分かるはずなんてない」

「私はね、後ろめたい幸せだろうが、全然構わないよ」

余りにも弱い声だった。

「．．．．．それは、どういう意図だい？」

「．．．．．」

「久の真似事でもするつもりかい？」

『．．．．．エイ』

笑ってみせる。

「．．．．．」

「辛いだろっね、何も出来ずに久が死ぬ姿を看取るのは」

「えっ．．．．．何、それ．．．．．」

『．．．．．ウェイ』

そういえば、この子は知ってたっけ？

自分の無力さが、どれほど深い絶望となりうるか。
そうか。

それが、この子の『素質』か。

『ウェイ。彼女に、手を出すな。！』

なんだい、ブラザー！

救いたいんじゃないか、彼女を。

その理由を、知りもしないくせに。

『理由が、必要だった。』

なぜ？

『……強制ではなく、自らの意志で助けたかったんだ』

そうだね。

キミは助けたいんじゃないくて、助けなければならない、と思っている。

それを、強迫観念なんかじゃなく、自主的に助けたい、ってそう
思いたいんだ。

だから、理由を知りたかった？

『……そうだね、僕は臆病な人間だから、証拠がほしかった。寄り辺とするために』

義務を遂行する為には根拠を知りたいと誰だって思うさ。

当然の権利だからね。

『理由は もう分かってるんだ』

……何？

なぜ、理由を知った？ それとも、それはただの浅はかな強がり
かい？

『義務じゃなくなれば、理由も変わるだろう？』

義務じゃ、ない……？

だったら、何だと言っんだい？

『彼女が、好きだからだよ』

仲間として、かい？

『さあね』

それがキミの理由ってことかい。

だったら、彼女がその好意を拒んだら？

「僕が、彼女を好きなのは変わらない」

・
・
・
・
・
はははっ。

アハハはハハはハハはあっ はははははははあっ はははははははあっ

『可笑しなことを言ったかい？』

あはははっつっ
。

ああ、滑稽だ。

傑作だよ。

相手がキミの事を嫌いだとしても、キミは相手を好きで居続けるってことだ……。。

偽善者のキミらしい。

なんて気持ちが悪いか。

そんなものはストーリーの独りよがりな歪曲した好意と何ら変わりない。

すぐにボロが出る。

その虚しさに、キミは絶望するに決まっているさ。

まるで、彼女の母親のようだ。

「キミの価値観なんて関係ない。のぞみの母親も、関係ない！」

人が人を裏切らずに済むには、自分と相手を一つのズレもなく合致させなくちゃいけない。

同じ価値観、同じ世界、同じ形、同じ色。

キミたちが愛情と呼ぶソレは、押し付けあう感情だ。ズレがあるほど、キミ達は傷付けあうことになる。

「そうだろうね」

否定、しないのかい？

「君と僕とは、前提が違う」

前提？

『のぞみに裏切られたって、いいんだよ』
「・・・・・・・・それは、本気で言ってるのかい？」

『本気だ』

反吐が出るね。

『そうだろうね』

相変わらず、キミは絶望的だ。
最低だ。

痛みなんて知らず、現実の辛さも何も分かっていない世間知らず
の空想論者。

はははっ・・・・・・・・キミは最高すぎる。

キミが他人ならば今すぐにブチ殺してやりたいよ！

キミの目の前でウォンをバラして、絶望に突き落としてやりたい！
それくらい大好きだよ！

愛してるってコトさ！

『でも、そう信じたかったのは、実は君の方じゃないのかい？』
「・・・・・・・・何？」

『剥きになって喚き散らして、まるで子供みたいだ。君が人間に思
えたのは、これが初めてだね』

「・・・・・・・・面白い冗談だ。笑えるよ。」

じゃあ、証明してみなよ。

せいぜい、苦しめばいい。

どうせ、誰も助からない。

『・・・・・・・・』

はははっ、そうと知って臨むのかい。

キミは本当に、絶望的だ。

「ウォン、久をひとまず返そうか」

「えっ」

「でも、忘れないことだ。『人並みの幸せ』などそんなものは存在
しない。キミには、ドロドロの過去の土台の上にしか未来を築けな

い

「・・・・・・」

「けして、忘れないことだ」

瞬間、全身の力が抜ける。

意識は遠くなった。

ウォン。

正しいも間違いもない。

そして、全てはなかったことにならない。
それだけさ。

捕食者 加藤恭介

「春賀のぞみが見つかりました」

「それを俺に言う許可が沙耶から下りたのか？」

「・・・・・・・・」

「恭介よ、沙耶からの見返りはなんだ？」

座ったまま地面を蹴り、オフィスチェアをくるりと回す。

春賀晃は、窓の外から部屋の中へと体の向きを戻した。

部屋の中央に立ち尽くす一人の男 首から下げられた社員証には俺の職位が記載されている。

春賀建設、不動産部企業営業課主任、加藤恭介。
それが、俺 加藤恭介だ。

「ビジネスです」

「ビジネス？」

「御座市復興案の可決時に沙耶の買い占めた御座市の土地は何倍にも膨れ上がります。その際のビジネスの話ですね」

「ほう、裏でそんなことをしていたとはねえ」

「買い占めた、とは言ってもある程度、です」

「・・・・・・・・」

「土地の買取が専門ではない沙耶にとって、これ以上の買占めは困難です」

「二束三文とはいえ、広大な土地だからな。それだけのビジネスを行うには膨大な資本を要する。その事業を引き継げ、と？」

「その通りです。本業の当社ならば、それを行うだけ資金があります。沙耶と春賀では動かせる資金が天と地ですしね」

「ちょうど森野市長から話が来ていた。都合のいいタイミングだな」

「沙耶春樹の案です」

「はははっ」

愉悦とも苦笑ともとれる。

「ははは……本当に恐ろしい男だ。ブラック・マンデーとは、ここまですが計画だったんだな」

「予算が予算だけに国の承認をとる必要がありますが、恐らくは可決するかと」

「当然だ、世論は味方する」

ブラック・マンデー。

至上最悪の局地的恐慌。

大地の汚染と連鎖倒産、土地代の急下落と市民団体のテロリズム。そんな御座市民の受け入れの為に州予算を大きく引っ張ったのが森野市長だ。

彼らが住む為の新しい街を与え、職を与える為に針木市中の企業と掛け合った。

中でも春賀建設については事業拡大も手助けし、何百人単位の採用を決行した。

その功績により、人道的な評価で彼は英雄と呼ばれた。

そんな英雄が、再び御座市民の為に政令指定都市御座市の再興に着手する。

これ以上ない政治的パフォーマンスだ。

「森野勇次という男も相当な悪党だな」

「金が必要なのですよ。癒着をしてもあの男は莫大な金を手にする必要があった」

「確か、病気の娘の為、だったか？」

「ええ、海外での手術は成功したようです。あの男にとっては御座市の再興というのは罪滅ぼしのつもりなのかもしれませんね」

「バカな男だ　娘など野垂れ死んでくれた方が楽だというのにな　人の親とは思えない言葉だった。」

「……ならば、春賀のぞみを殺害するのですか？」

「沙耶春樹が必ず嗅ぎつける。沙耶に弱みを握らせるとするのが一番恐ろしいんだよ」

「ならば、春賀のぞみはどうなさるのですか？」

「檻にでも繋いでおけばいいだろう」

「人間の言葉とは思えませんね……………」

「ははっ」

一笑する。

「それが分かっていながら、お前はその子を連れてくるんだろう？」

「ええ、それが私の仕事ですから」

「仲介屋、加藤恭介」

「そう呼ばれています」

「私の依頼を、暴力団を下請けに働かせて達成する傍ら、沙耶の依頼を受け持ち俺との間で仲介するとはな、随分と肝が据わっている」

「お褒めの言葉と受け取りましょう」

恭介は、淡々と事務的に答える。

「まあいい、バカ娘の話だ」

「春賀のぞみは貴方の元へと返す、それでいいでしょうか？」

「ああ、沙耶にも了承しようと思える。詳しい話についてはウチの物を寄越す。話を通しやすいようにお前の課を統括する部長をつけよう」

「そう伝えます」

恭介は一礼し踵を返そうとする。

「……………匿っていたのは誰だ？」

恭介は足を止めた。

そのままの姿勢で、背を向けたまま問い返す。

「春賀のぞみを、ですか？」

「ああ、お前ではないのだろう？ 沙耶の手の暴力団関係か？」

「それですが、沙耶春樹の指示ではないようですよ？」

「何……………」

春賀晃の声が低くなる。

獰猛さを帯びていく。

ピラミッドの頂点にいる絶対的な捕食者。

人の金を食らい尽くし、人の心を躊躇なく踏み躪る男の片鱗が見

える。

「沙耶は当初、貴方の娘の麻薬をネタに貴方をこのビジネスに引きづり込むつもりだったようです」

「沙耶春樹にとっては、本当にイレギュラーな事だったと？」

「ええ、春賀のぞみを匿ったのは、沙耶久の意思であつた、と」

「・・・・・・春樹はなんと云っている？」

「沙耶久の予想外の行動が、時期を逸したと。それ故に春賀のぞみを沙耶久の思うままに任せ、今日この時を待ったようです」

「解せないな」

「何がでしょうか？」

「なぜ春樹は沙耶久を泳がせている？ あの男ならば勝手な行動を起こした部下を消すことくらい造作もないだろう？」

「息子が可愛いのかもしれませんか」

「下らんことを言ふなよ？」

娘を簡単に殺せ、と言えるような男にとっては、子供が可愛いなどという理由は冗談にしか聞こえないのだろう。

「沙耶としては、娘による脅迫は重要なファクターではなかった、ということでしょう」

「保険のようなものだつた、と？」

「ええ、私も貴方ならばそんなことをせずともこの話に乗るだろうと思ひました」

恭介は振り返り、春賀晃を正面から見据える。

「貴方は、金の魔物。エコノミック・モンスターです。金のためならば八十万の犠牲など躊躇わなかったのですからね」

「そうだな、これは十年前以上のビッグビジネスとなる」

「そうです。難民と化した御座市民達の家を建てるのとは桁が違う。封鎖された一つの街を一から再建するビッグビジネス。世界中からありとあらゆるハイエナたちも群がってくるでしょう。その中心として春賀晃が先陣を切るわけですからね」

「まるで、戦争の経済理論だ」

「戦争ですか」

「金を生む為に壊し、そして作り直す。世界が繰り返してきた歴史を我々も繰り返すわけだ」

「・・・・・・・・」

春賀晃の笑い声に見送られて、社長室を後にする。

腕時計に目を落とせば、午後五時を迎えようとしていた。

「さて、そろそろ頃合か」

今日、この街の全てが変わる。

「せいぜい上手く動けよ？ 桜井」

決意 沙耶久

彼女が、好きだから……そう決めることにした。

決めれば、きつかけなど些細なことになる。

意識がはつきりとし、五感の感触が蘇ってくる。

「……………久くん」

のぞみの声が聞こえる。

床の冷たい感触の中、頭部だけが温かで柔らかな感触に包まれている。

目を開く。

ぼんやりとした焦点の定まらない景色の中で、彼女の存在だけがはつきりと分かる。

「……………のぞみ」

「……………久くん、なの？」

焦点が合い始める。

陽を遮る分厚い雲に覆われた針木という楽園。

その薄暗い地下室。

僕はのぞみの膝の上に頭を乗せて、横たわっていた。

「ウェイじゃないよ」

笑ってみせる。

「分かるよ」

のぞみも、憂いを隠し笑ってくれた。

二人は、完璧な笑顔で笑いあう。

「……………僕達が出会った日も、こんな憂鬱な感じだったね」
のぞみへと話しかける。

ゆつくりとのぞみは頷いた。

笑顔。

完璧な擬態。

何の感情も伴わずとも、誰からも好かれるように。

「私が、初めて久くんに言った言葉、覚えてる？」

「……よく、覚えているよ」

嘘はない。

よく覚えている。

悲しい光景だと、そう思った。

人の壊れる姿は嫌いだった。

「天使、って……そう言った」

「そうだね」

誰が見たつてはつきりと分かる。

あの頃のものぞみは、孤独と麻薬で壊れてしまっていた。

「でも僕は、君を救えてなんかいない……」

「救われたよ」

「こんな状況なのに、かい？」

「久くんは……教会の皆は、こんな犯罪者に好意を向けてくれたんだ」

「僕たちは、後ろめたい集団だからね」

「例えば、もう一人の久くんのこと？」

「のぞみが、ボーダーラインの内側へと踏み込んでくる。」

「そう、類が友を呼んだだけだよ。僕だけじゃない……皆、爆発し損ねた不発弾を抱えた後ろめたい集団だったんだ」

「それでも、嬉しかったよ」

「……」

「好意だけを与えてくれたのは、初めてだったから」

「家族に代わる新しい絆、だからね……」

「それまでは、ぐちゃぐちゃで、混沌としていて、何一つはつきり
としない世界の中で私は生きてきたから……」

手の指先まで隠れるほどの長袖の制服。

ちょうど左手の肘の内側辺りを右手で押さえる。

「辛かった？」

「？」

のぞみは首を傾げた後に、ああ、と呟いて左手を顔の高さまで上げる。

「これのこと？」

右手で袖をめくると、痛々しい注射の跡が姿を現す。

傷跡は今もお消えることはない。

起き上がり、のぞみと向かい合って座る。

「……………後悔しているのかな？」

「うん」

言いよどむこともない。

そう言って笑う彼女の姿が、自らを傷つける代償行為のようにも思える。

「こんなことになるんなら、するんじゃないかって……………、そんなどうしようもなく身勝手に幼稚な後悔だよ」

そう言って笑うから、春賀のぞみは危うい。

「何に對しての後悔？」

「心当たりが多すぎるよ」

のぞみは自嘲する。

「だから、幸せすぎると……………笑えなくなるの」

「後ろめたい？」

「うん、死にたくなるくらいに……………」

言葉通りの意味だ。

時に死が甘美な誘惑となるほどに、彼女は過去に追い詰められていく。

ならば、過去を改竄するのか？

だが、改竄した、という事実が残るだけだ。

逃げ場はない。

この世界には、逃げる場所がどこにもない。

罪は消えない。

それは、彼女が春賀のぞみである限り、どこまでもついて回る。

「死ぬなら、全ての荷物を下ろせるよ」

「・・・・・・・・」

「楽しいことも、嫌なことも、嬉しいことも、辛いことも、全てをひっくるめて捨ててしまえば。それはきつと本当に楽になれるって事だよ」

「そうだね」

「だけど、強い人にしかそれは選べない」

「強い？」

「強いよ・・・・・・・・人は簡単に自分を捨てられるようになんか出てない」

「・・・・・・・・」

「だから・・・・・・・・のぞみには、弱いままでいて欲しい」

「どうして・・・・・・・・？」

「一番後ろめたいのは、僕たちを巻き込んでしまったからだろう？」

「・・・・・・・・」

「君は自分を卑下しすぎているんだ。君は、君が思っているよりもずっと優しい」

だから、今さら自首を望んだ。

彼女は、春賀晃の元へと戻されることがどういうことが知っている。

自首により一族の汚点を晒した彼女の未来は、けして明るいものにはなりえない。

「・・・・・・・・優しくなんてないよ。久くんは、過去の私を知っているでしょ？」

「僕には、君が必要なんだ」

「なぜ？」

のぞみは問い続ける。

「好きだからだよ」

「はははっ」

のぞみは笑う。

「久くんは、そうやっていつも本性を隠すんだね？」

「……………」

否定は出来ない。

「ねえ、納得させてよ。そんな嘘くさい言葉じゃなくて、信用に値するだけの理由を話してよ」

「理由があるのかな？」

「無償の愛は、不可能だから尊いんだよ……………」

「真似事なら、できるよ」

「無償の愛の？」

「ああ……………」

「それが家族に代わる新しい絆？　はははっ、なるわけないよ」
嘲笑う。

悪役のように。

遠ざかろうとしているのかもしれない。

優しい悪だ。

冷静に思う。

自首なんて、しなくていいんだ。

彼女はもつと卑怯になっけいい。

だから、それ以上心を自傷する必要はない。

僕を、利用したらいいんだ。

邪悪な善でいいんだ。

だから　僕もまた、キミの深部へと踏み込もう。

「分かってるよ。家族の絆だって、無償の愛にはなりえない」

のぞみの嘲笑は消えた。

「……………そうだね」

ぼつりと彼女は呟く。

「本当に……………その通りだね」

「理由が知れたかった？」

意固地になり理由を求めるのは、過去の彼女だ。
のぞみは理由を知りたかった。

彼女には、理由が分からなかったから。

「愛されない理由が、知りたかった？」

「・・・・・・誰に？」

「ネグレクトは、愛の放棄だよ」

「・・・・・・うるさい」

冷たい声も久しぶりだ。

敵意に満ちていた病院でのぞみのもの。

ネグレクト　、養育を放棄することである。

悠希が説明したことである。

「あんなクソ野郎のいうことなんて信じない・・・・・・」

怨ずる様に呟く。

恐らくは、春賀晃のことだろう。

「のぞみ・・・・・・」

「私は・・・・・・お母さんに、愛されてたの・・・・・・」

「だって、さっきのぞみ自身が言ったじゃないか」

「・・・・・・」

そう、矛盾である。

「『家族の絆だって、無償の愛には成り得ない』って」

「うるさい・・・・・・」

「そこに理由は？」

「うるさいって　！」

「さっきのぞみが言ったことだ。理由がなければ人は人を愛することが出来ない」

「黙ってよ　！」

ようやくだ。

のぞみはようやく自らを覆う仮面を剥がした。

ようやく彼女の原点に達した。

母親と彼女　、三年かけてようやく僕は彼女の核心へと迫った。

「私は　」

その目から涙が溢れる。

「私は、理由なんて……欲しくない！」
嗚咽交じりに叫ぶ。

「無条件に愛されたかった！」
本心からの言葉。
なぜなら、彼女は。

「私は……無条件だったから」
無条件に母親のことを愛していたのだから。

「私は……」
言葉にならなかった。

のぞみは言葉を探そうとして、でも何も喋ることが出来なかった。
「その通りだ」

「その通り？」

「理由はない。理由は、知らなくていいんだ」
「……っ！」

抱きしめる。
細い冷えた身体。

力を込めてしまえば簡単に碎けてしまう危うさ。

それが、春賀のぞみという少女。

「僕は……君が好きだと決めた」

「……暗示だよ。そう思い込んでるだけ。ただの……
・錯覚だよ」

そう言いながらも、僕の背を強く掴む。

まるで、離すまいとしているみたいじゃないか。

「この三年間一緒に嘘をつき続けてきた、春賀のぞみという少女を
好きになったんだ」

「……その私自体が久くんの言った、上手な嘘なんだよ」
「ねえ……のぞみ」

そう、僕は嘘つきだ。

だから、それも嘘にしておもう。

「知ってるのぞみ、この世界に嘘という事柄は実は何ひとつないん

だよ」

「？」

のぞみは首を傾げる。

「嘘というのは現実にある事柄の一側面に過ぎないってこと」

そう言つてのぞみの肩に手を置き、彼女を解放する。

三十センチの距離で、お互いの顔を見合いながら。

「例えば、いつも笑っている女の子、のぞみ」

希望を込めて、『のぞみ』と発音する。

「のぞみの笑顔は、沙耶久の教えたとおり人に愛してもらう為に作られた本心ではない偽りの笑顔と呼べるものかもしれない」

そう、のぞみは嘘が上手くなったから。

「だけど、正確に言えばそれは少し違うんだ。あれは諦念に満ちていた自らの人生を変えようとする、人に愛されようと努力した春賀のぞみという少女の結果だ」

偽りなどではない。

「愛されようと足掻いた、尊い春賀のぞみの側面だよ
のぞみは自失する。

その表情から笑みは消えていた。

手を伸ばす。

彼女の目の前に手を浮かせ、それをのぞみが掴むのを待つ。

その手をのぞみはただ見つめていた。

弱まることのない感情の渦の中で。

まるで魂の抜けたような表情で。

それでも 彼女の目には感情の入り混じった得体の知れない光が灯っている。

「初めて会ったとき、どうして私と関わったの？」

「どうしてだろうね。僕も空っぽの時期だったし。欠落した者でも二人いるなら一になれるんじゃないかとも思った。どこまでも不恰好な一だけだね」

「腹黒いね。打算に満ちた人間関係だよ」

のぞみは苦笑いを浮かべた。

「そうだね、本当に、そう思うよ……」
乾いた談笑を交わす。

「そうして、僕たちは七人で一つになった」

どこまでも歪に、白々しいまでに取り繕う。

それがヘイヴン。

空っぽのまま出会った。

寂しいから繋がった。

でも、それでいい、と思った。

それに価値を見出せば何者にも変えがたい絆となる。

「まだ、終わりじゃない」

動乱は、まだ終わっていない。

鉛色に包まれた世界で、希望にすがりつくことはできる。

「まだ、終わるには早すぎる」

「……久くん、何をするつもりなの？」

「奪われるくらいなら、最後まで戦う」

そう宣言した。

痺れを感じた。

脳の片隅で、もう一人の自分が酷く喜んでいる気がした。

それでも、何の問題もない。

悪魔に魅入られるとはこのことかと、心の中で自嘲した。

「僕も、もう僕らの世界を踏み躪ろうとする人間を絶対に許しはしない」

庄治慶介を肯定しよう。

ウェイの問いに答えを出そう。

希望を紡ぐ為に。

「……どうするつもり？」

ゆつくりとのぞみを再び腕に抱く。

冷たさに混じり、暖かな体温が体越しに伝わった。

「戦うんだ」

「・・・・・・・・何と？」

「まだ消えていない。だから、手繰り寄せる為ならどんな汚らわしい行為だって厭わない」

「汚らわしい？」

「罪深い、つてこと」

「・・・・・・・・何をするつもりなの？」

「たとえ嫌悪していても、体の中に染み付いた道徳を裏切るのは本当に勇気が必要だよ。大衆心理もなしに、ただ一人素面でそれを破るとなれば尚更だ。人の指針となってきた道徳を裏切ってしまう、この先何を信じればいいのかすら分からなくなってくる。でも、それでもいいんだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・それで、いいんだ」

諦念の混ざる物言いの向こうにある結末に、背筋を冷たくした。

僕のしようとしていること、それは。

「ずっとこの結論から逃げてきたけど、でも、もうこれ以上逃げることは出来ないんだ。無力なままにいるか、それとも戦うか。周りが何とかしてくれるかもしれない、時間が解決してくれるかもしれない、なんて甘えをずっと引き摺ってきた報いなのかもしれない」
抱く力が強まる。

「だから、のぞみももう苦しまないでいいんだ」

「久、くん・・・・・・・・」

「のぞみの過ちは、のぞみの自傷行為だったんだ。過去からの、無力で何も出来なかった自分からの逃避。でものぞみは、その罪に苦しみ続けてきた・・・・・・・・なら、もういいじゃないか」

「無理だよ・・・・・・・・そんなに、簡単なことじゃない・・・・・・・・」

「

「僕が、許す」

「・・・・・・・・」

「そして、君が僕を許す。僕たちが互いに許しあい、そして、救わ

れ
る
ん
だ
」

親友 沙耶久

慶介と出会ったのは、のぞみと帰路を辿る途中だった。

「久」

「慶介？」

慶介からは、どこか鬼気迫る空気が感じられた。

「慶介くん……ごめん、日向ちゃんのこと分からなかった・
……」

「日向の居場所が分かった」

のぞみの言葉を遮るように。

「えっ？」

あまりにも予想外の、早すぎる答え。

「どこなの　っ」

「……っ」

歯を食い縛ったまま慶介は答えない。

「ねえ、慶介くん」

「暗黙の了解だよ　っ」

慶介は、叫んだ。悲鳴のように、その声は夕暮れの街に響いた。

「頼む……聞かないでくれよ」

慶介は震えていた。

「久　面貸せ」

「えっ」

のぞみ思わず声を上げる。

「のぞみ、ごめん……先に帰ってもらっていい？」

「どうして？ 私も」

「日向の暗黙の了解に関わることだ」

慶介は、のぞみを突き放すように言った。

「……」

そう、この言葉を出せば僕は引き下がるしかない。

「大丈夫、日向が助ければ話してくれると思う」

「分かった……」

のぞみはそのまま帰ろうとして。

「久くん……」

「……何？」

努めて、穏やかな声で答える。

「……何も、変わらないよね？」

「前よりも、幸せになるくらいだよ」

笑ってみせる。

のぞみも笑い、僕は手を振って分かれた。

「あの笑い方……納得はしてないってツラだったな」

「へえ、慶介も随分とのぞみのことが分かるようになったじゃないか」

「三年も一緒だったんだ。自然とそうなる」

「そう……まあ、それはいいよ。話、あるんだろう？」

極めて、穏やかに笑顔を向ける。

場の緊張感が、少しでも和らぐように。

「一応、お前だけには言っておこうと思う……」

「……何かあるの？」

「高辻日向を救済する」

「……」

僕は、沈黙を守るしかなかった。

「何となく、気づいていたな？」

沈黙はよくない。

沈黙は使いどころを間違えれば、確信に近い肯定として捉えられるからだ。

「それとも、初めから高辻日向の禁忌を知っていたのか？」

「……どうだろうね」

はぐらかしたかったわけではない。

強いて言うならば、億劫だったのだ。

「ヘイヴンを、ヘヴンへと昇華する」

慶介に向かって両手を広げてみせる。
道化師のように。

慶介に、ではなく自分に言い聞かせるように。
今の自分が、道化師に過ぎないことを忘れさせない為に。
ひどく滑稽なことをしていると自分でも嫌というほど分かる。
忘れてはならない。

僕がしようとしているのは、そういうことだ。

「慶介のしようとすることも、嘘が本当になるってこと？」
「そうだ」

慶介は断言する。

「そこに、慶介はいる？」
「・・・・・・」

「沈黙はよくないよ」
にへら、と笑う。

そう、限りなく確信に近い肯定。
肯定だ。

そこに、慶介はいる？
いないよね？

続くはずだった言葉の肯定。

「ひとりが誤爆すれば、全員が巻き込まれるかもしれない」
「・・・・・・仮定も、例えば話もいい」

「そう」

「そう言うお前こそ、何をしようとしている？」

「何、とは？」
「誤魔化すなよ」

慶介は、視線で促す。

その先には、既に後姿も見えないのぞみ。
表情が崩れないように気をつける。

「同じ結論に至ったんじゃないのか？」

その言葉は核心だったからだ。

「・・・・・・・・それは馬鹿の考えだよ」

慶介が目を細めて首を横に振る。

「そう思ってたんなら・・・・・・・・」

慶介は力なく呟く。

「どうすれば、全てが上手くいくんだろうね」

慶介は呆れたように溜め息をつく。

「それは俺が聞きてえくらいだよ」

「違う」

苦笑してみる。

作り笑いはすぐにそらそらしくなり、尻すばみに消えていく。

「慶介　僕は反対だ」

「なんだと？」

口調に剣呑さが籠もる。

だが、慄かずに続けた。

「戦え、立ち向かえというけど、それで慶介は何かを侵略するんだろっ？」

「それが嫌ならいつまでも現状維持だ。言い換えれば、見殺しということだ」

「欠ける人数は最低限の方がいい」

「お前一人で何とかなることなのか？　お前らしくもない。神風を期待して特攻するつもりなのか？」

「もちろん玉砕するつもりなんてないよ」

「？」

慶介は首を傾げる。

「ただ最悪、慶介がいてくれれば・・・・・・・・」

「アホか・・・・・・・・、それじゃ失敗だろうが」

「そうだね、だからそれは慶介にも言えることなんだよ」

「・・・・・・・・」

「ねえ、日向の為に慶介は全てを諦められる？」

「・・・・・・・・」

「だから、沈黙はよくないよ」

出来るわけないよね、という肯定。

「僕たちは傲慢すぎる」

淋しそうに笑って見せた。

「誰かを救おう、だなんてさ・・・・・・・・。そんなこと考えちゃいけないかったんだ」

寂しそうに、そう呟いてみせた。

「大人にだって、出来ないことなのに」

「分かってる　お前の言ってることは」

悔しそうに、慶介は呻く。

「だけど・・・・・・・・俺は今すぐ、アイツを救ってやりてえんだよ。そう思うのは、悪いことなのか・・・・・・・・」

普段の慶介からは考えられない愚痴のような呟きで。

「・・・・・・・・それは本当に、彼女の為だろうか」

遠くから聞こえる車のクラクションの音が破滅への警笛のように響いていた。

「それとも、キミの家族の　」

「言っとな　！」

慶介は叫ぶ。

言い過ぎたと思った。

「慶介・・・・・・・・僕は、死ぬまで続けると言っただ君の言葉を信じるよ」

「・・・・・・・・へっ、信じるって都合がいい言葉だな」

皮肉げに、昔の僕の言葉を呟く。

「全てを、諦めろってか？　俺に踏み込むってことか？」

「言っただでしょ？　嘘が本当になるって」

そう、家族ごっこは、本物の家族へと変わるんだ。

「家族なら、口出しオッケーでしょ？」

「口が減らねえ・・・・・・・・」

「結局は、慶介次第なんだよ」

「・・・・・・・・」

きつと、簡単に答えは出せない問題だ。でも。

「お前だって、同じだろうが・・・・・・・・」

僕だけがそれをしていい。

「だったら、交渉は決裂だ」

はつきりとした口調で慶介は言った。

「・・・・・・・・俺たちは、結局仲間にはなれなかった」

慶介らしからぬ言葉。

「どうして？」

尋ねてみる。

「日常は続けたいが、お前に踏み込むことは出来なかった。お前も結局は俺に踏み込まなかった」

暗黙の了解とは、一体何の為のものだったのか。

刹那的な絆を僕たちは望んだ。

そして今度は、それを延命しようとした。

ツギハギだらけで。

歪な絆だ。

「だから、これは俺の願いだ・・・・・・・・」

「うん」

弱い声に頷く。

「俺たちの為に、止めてくれ」

「ありがとう」

笑ってみせる。

最高の笑顔で答えて見せた。

これは完璧な擬態だ。

「同じ言葉を君に返そう」

僕たちは傲慢すぎる。

僕たちは、自分自身をかければ誰かを救えると信じていたから。
本気で、信じていたからだ。

ヘヴン 沙耶久

登校する。

のぞみと二人で。

二人だけしかない。

それは日常を取り繕う行為。

だけど、暖かな日常。

虚が実になる。

それを再び虚に戻したくはなかった。

通学路は、僕たち二人がまるで異物のように。

ヒソヒソとした声が聞こえてくる。

中には、わざと聞こえる声量で。

「……」

下らない。

気にするのは止めた。

何も変わらないじゃないか。

だって、世界には七人しかいなかったんだから。

そうでしょ、のぞみ？

のぞみの手を握ってみた。

握り返してくれる。

お互いを見つめあう。

でも、どうしてだろう。

寂しかった。

二人しかない。

……二人だと、寂しかった。

教室に入ると、悠希の姿はなかった。

ここ最近学校を休んでいる。

体調が思わしくないのかもしれない。

一人だった。

七十坪程度の空間の中で、僕は一人だった。

一人しかない。

感情を放棄しそうになる。

一人だと、人間で居る必要はないから。

昼休み、席を立つ。

のぞみの様子を見に行ってみた。

一年生の教室。

のぞみの姿はなかった。

「……」

規則正しく並んでいる机の列が、途中で途切れている。
のぞみの机もなかった。

代わりに、その場所に花瓶が置かれていた。

花は、枯れていた。

予鈴が鳴っても、教室には帰らなかった。

ふらふらと校内を彷徨っていた。

「屋上」

ふと、閃いた。

足を運ぶ。

重苦しい鉄の扉が目の前に現れた。

その先は、空に近い場所。

扉を開けた。

『空には、誰もいないよ？』

誰もいない。

そこには、誰もいなかった。

『そこ』とは、どこを指す言葉だったのだろうか。

『実』とはなんだったのか。

『虚』とはなんのことだったのか。

「あつ」

頭の中にノイズが混ざる。

この兆候は良くない。

一人で生きるのって、難しいね。

丁度この場所で、のぞみに言った。

四階建ての建物から、金網越しに地面を見下ろしてみる。

確実に死ぬには少し頼りない高さ。

それでも、何かを誘う力はある。

「馬鹿馬鹿しい」

教室に戻ることにした。

帰り道。

足を運んだのは、駅前の複合喫茶だった。

目的はインターネット。

アンダーグラウンドだが、人が多い場所を選んだ。

入店時に偽名を書いた。

個室に入り、早速目当てのページへと飛ぶ。

ひっそりとした個人用のサイト。

サイトに並ぶ商品は、物騒なものばかり。青酸カリだとか、大麻

だとか、拳銃すら扱っていた。

この手のサイトはすぐに封鎖されるから、情報を手にした瞬間か

ら二・三日以内にアクセスする必要がある。法の目を逃れる為に、

そのアドレスはすぐに違うサイトとなるから。

そこで、ナイフを見ていた。

サバイバルナイフ。

手に持てば頼もしいけど、持ち歩くには不便だ。

マルチツールタイプは、殺傷時には不安が残る。

折りたたみ式のポケットタイプ。

しかし、刃渡りはそこそこにある。

作りは精巧かつシンプルで、ロングセラータイプの商品。

値段は少々張るが、それが僕らの未来を背負うならばプライスレス。

多少の出費は惜しくない。

即日配送を確認して、クリックした。

受け取り時の支払い。

店ではなく個人なので足はつき辛い。

決行は、明日の夜に決めた。

僕は、きつと間違ってない。

誰も、何も間違ってなんかない。

だって、世界に正しいことなんて何ひとつないんだから。

「ねえ」

夕食時、悠希が話しかけてくる。

「うん？」

「何を、考えてるの？」

「どうして？」

平静を保つ。

大丈夫、擬態は完璧だ。

「完璧すぎると、却って不自然さが際立つのよ」

魔女、という言葉がよぎる。

まるで、心を全て見透かされているようだ。

それでも、動揺はない。

質問は、確信を得るためにするものだからだ。

「気のせいでしょ？」

笑ってみせる。

「そう………」

それっきり、彼女は食事を再開する。

読むことは出来ない。

長年一緒に生きてきたけど、彼女のことだけは全然分からなかつ

た。

愛、友情、絆。

世界で一番素晴らしい言葉。

まやかしならなお素晴らしい。

利害が一致するうちは、本物よりも理想的だからだ。
そう、利害が一致するうちは。

翌日、僕は学園に電話を入れて病欠した。

メールを打つ。

宛先は、誰にしようか。

慶介か、悠希か、栄治か。

それとも、日向か、佳織か。

熟考し、辿り着く。

なんだ。

いたじゃないか、家族。

宛先は、南さんに設定した。

彼が裏切らないことを、僕は知っている。

僕だけが、知っている。

メールを打ち終わると、携帯電話の電源を落とした。
返信はいらない。

携帯電話を机に置き、椅子に深く腰掛けた。

そして、長い溜息をついた。

言い聞かせる。

守るために。

守るために。

機械のように。

機械のように。

忠実に、プログラム通りに。

僕の組んだプログラムの通りに。

そうだな。

こう名づけよう。

プログラムの名前は　ヘヴン。

．．．．．。

神様。

もし、あなたが存在するのならば、のぞみに幸せな世界を与えて欲しい。

そう、祈る。

お願いします。

世界を呪うしかなかった彼の代わりに。

世界を閉ざすしかなかった僕の代わりに　　。

エラー 沙耶久

針木市でも閑静な住宅街。

御座市市民の受け入れ先として山を切り開いて開発されたベッドタウン。

深夜ともいう時間一際大きな家に一台のタクシーが止まる。

中から降りてきたのは長身瘦躯の壮年の男性。

沙耶春樹。

タクシーはすぐに去る。

沙耶春樹の帰宅時間はいつも日付が変わるか変わらないかの時間。トップが最も多く動かなければならない、というのは彼の弁だ。

ただ恐怖で下を縛り付けるような前時代的なマネジメントでは組織は動かせない。

恐怖で強制させつつ、自発も求める為のアピールの一つ。

誰よりも有能に、多く働くことで部下の泣き言を封じる。

飴として金を与える。

組織の未来のヴィジョンは明確に。

合理的過ぎる。

全ての行動がカタにはまっている。

そんな男と、対峙しなければならぬ。

全ては、仲間の為。

息を殺す。

全ての音を消す。

沙耶春樹は自宅の門に手をかける。
背中を向けたまま。

忍び寄る。

だが、瞬間に携帯電話が鳴った。

「っ」

足を止めて物陰に隠れる。

「もしもし」

春樹は電話に出る。

これは、チャンスなのではないだろうか？

今ならば、簡単に後ろに回ることが出来るのでは？

「なるほど」

再び、ゆつくりと忍び寄る。

ポケットの中に忍ばせた、ナイフを手にした。

「私どもとしましても時期はもうすぐだと考えています」

通話に気を取られている今ならば、あの男でも。

「春賀晃というトップを失脚させ、同時に春賀建設という企業の信用を崩壊させる」

音を立てていないはずなのに、やけに五月蠅い。

ドクンッ、ドクンッと。

心臓の音が、五月蠅い。

「そして春賀建設を安価で買収し、彼らの持つ資産価値を処分すること」

沙耶春樹には、死んでもらう。

ゆつくりと、歩を進める。

「我々が中心となり御座市再生プロジェクトを進めることが出来ます。その為の事前準備として三年の時間を要しました」

ナイフの柄を握る手の平が汗ばんでいる。

「・・・・・・」

大丈夫だ、いける。

ポケットに入れた手に力を込める。

殺せる。

守るためならば、手段は選ばない。

そう、仲間のためならば。

「だから私は」

「えっ？」

思わず、間抜けな声が洩れた。

「お前のプランに乗ってやることにした」
「っ！」

沙耶春樹の双眸が、僕の姿を捉えていた。
その言葉は明らかに僕に向けて放たれた言葉。
心臓の音が止まる。

一瞬、世界から全ての音が消えた。

「……なぜ？」

「愚問だな」

頭が回らなくなる。

緊張がピークを超えている。

「そこで、何をしている」
「……電話は？」

悲鳴を上げそうになるのを必死に留めた。

「既に切れている。通話は三秒ほどで終わっていた」
「……どうして？」

「隙だらけならば、お前は姿を現すだろう？」

「……なぜ、それを」
「どうして、気づいている。」

「他は？」

「他……とは？」
「けして、同様を見せてはいけない。」

「私を殺した後の対応、という意味だ」

心臓が倍速。

全身から冷や汗が流れる。

「そう、お前は罪にならない。お前ほど完璧な二重人格者は恐らく二人としまい」

「っ！」

動揺し過ぎていた………。

頭が全く回っていない。

「罪は全てウェイという人格に。お前は賢い。ウェイよりも生き汚く、そして救いようがない。自己分析も完璧だ」

唇が震えた。

「お前は人を憎むということを知らない。知ろうとすればウェイという人格が目覚めます。だからお前は自分の為に人を本気で傷付けることはできない。だが反面、仲間の為ならばどこまでも残酷に全てを侵すことが出来る。それが、お前の『素質』だ。それは、春賀のぞみの『素質』に近い」

「………のぞみ？」

「そうか、それがこの子の『素質』か」
□
ウェイの思考を思い出した。

「お前は素晴らしい。春賀のぞみを素晴らしい者へと仕立てた。始めは痺れを切らしてけしかけただけだったが、桜井要と対峙した時の春賀のぞみには戦慄を覚えたよ。あれは怪物だ。お前と同じ、怪物だ」

「何を………言ってるのですか」

「そう、結果的には成功だったの。彼女に絆を与えろという行為は………」

「えっ？」

声は、僕の背後から聞こえた。

「………歯車は動き出したわ」

薄暗い路地裏には悠希が一人で佇んでいた。

「なぜ、悠希が？」

「貴方の向かうその先には、破滅しかなかった」
悠希は毅然と告げる。

「貴方の手に負えるほど、沙耶春樹は甘くない」

「・・・・・・電話は、君が？」

「沙耶久が大幅な信頼を置く沙耶悠希ならば、お前の裏をかくことも可能ということだ。今回の件、始めからお前の動向は監視させてもらった。私もまだ、死ぬわけにはいかないのぞな」

これは裏切りだった。

悠希が、僕を裏切った。

「でもまさか、本気で春樹を消そうと考えていたとはね」

「君が、僕の方につけば可能だった・・・・・・」

呪いを込めて。

「・・・・・・」

悠希は言葉を失う。

「悠希、延命を続けようよ」

悠希の肩を掴む。

「のぞみは、罪を償いたいと思うほど苦しんでいる。過去の彼女を
考えれば、信じられないことじゃないか！ 彼女は希望となり得る
。僕たちの手の届かなかった可能性だ　　っ」

続けようとして、袖を掴まれた。

「・・・・・・何？」

「久、覚悟は出来た？」

「・・・・・・」

覚悟、ね。

「・・・・・・ウェイが必要なのかい？」

「あなたは・・・・・・目を逸らして問題を先送りしているに過ぎない」

静かなる忠告。

「のぞみの為と誤魔化せるのは、妄想に留めている今だけよ。ウェ

イに代わりなさい。貴方では、誰一人傷つけることは出来ない。例外は過去に一人だけ、桜井要だけよ」

「出来るさ……機械のように、仲間のために」

噛んだ唇から血の味がした。

「……人の本質は、そう簡単には変わらないわ。あなたも、同様なのよ?」

「……」

「ウェイだって、本質は昔と変わらない」

その言葉は 今日、投げつけられたどんな言葉よりも強い衝撃だった。

「ウェイの、本質……?」

「沙耶久である限り、嘘は本当に為り得ない」

「……なんだい、それ」

「哀れね」

彼女は、そう呟いた。

「……答えになってない」

「……裏切られるわよ、自分に」

「ワケが分からない!」

そうして、沈黙が支配する。

その沈黙を破ったのは、久でも悠希でもなかった。
場違いな明るい着信音が鳴り響く。

「出ないの?」

「ああ……」

着信は、桜井要。

「よお、そろそろお家についた頃か?」

「……」

込み上げてくる不快感を押さえて。

「虚言誘拐の目的は何だ?」

直球で告げる。

「……なんだと?」

「時間は、充分に稼げただろう？ お前はどうかやって日向を僕たちから引き離すつもりだ？ そして 稼いだ時間で慶介に何を吹き込んだ？」

「・・・・・・・・」

桜井は言葉を失い、そして。

「 そうだな、そろそろいいか」

電話越しに、溜め息をついた。

「俺は、始めにこう言ったよな？ 『殺しは禁じられている』ってさあ」

「ああ」

沙耶を殺すことを禁じる。

そのように解釈していた。

「本当はこう言われていたのさ・・・・・・・・。『沙耶に手を出すな』
『沙耶に攻撃を加えることを禁じる』ってさあ・・・・・・・・、ここ
まで言えば、お前なら分かるか？」

「・・・・・・・・」

「 沙耶、蒙昧なフリすんじゃないぞ」

脳髓に鋭い衝動が走る。

「・・・・・・・・どういう意味だ」

「俺は俺なりに、沙耶春樹が春賀のぞみを助けるメリットを考えていた」

メリット 、沙耶春樹にとっては、数字で表される利益の総称。

沙耶春樹は、無言のまま立っていた。

ただ、哀れな僕を無感情に観察していた。

「春賀のぞみに目をつけるとすれば、春賀建設との取引を優位に進めることに違いねえ。どんなビジネスがあるのかまでは分からねえが、春賀晃の弱みを握り、言いなりにさせるか。それとも春賀晃を失脚させるか」

その通りだった。

あの日のお遣いの内容は 春賀のぞみの麻薬常用の現場を警察

に売ること。

もしくは捏造すること。

唐風組の麻薬マーケットを荒らした彼らの排除と共に、親族経営により春賀建設内部に敵の多い春賀晃のスクヤンダルを煽り、彼らの親族経営を終わらせること。

春賀晃は、優秀すぎる。

それ故に春樹は排除しようとした。

「お前は、のぞみを囲う気なんてなかったはずだろうが。テメエの名前は裏では聞かねえが、沙耶春樹の直結のガキがいることは都市伝説みてえな頼りない噂で聞いたことがある。沙耶の手足となり、唐風組の内部で自由に動く子供だ。曰く 唐風組の下についてるガキのグループを、沙耶直結で動かす為の仲介役。現場作業責任者その場においては、ガキを動かす権限の全てを与えられているとかよ。信じられねえ話だ。沙耶というこの街の裏を仕切る野郎が、子供にそんな強大な権限を与えるなんてよお……」

「それが僕だと？」

「……三年前よお、俺とのぞみの他に二人の仲間がいた。園河ってオンナと川端ってオトコだ。でも、二人とも唐風組の下についてるガキのグループに殺された。それを動かしていたのは沙耶春樹じゃねえのか？」

「……」

「……お前だろう、俺の仲間殺つたのは」

「はははっ」

笑う。

どついうツテかは知らない。

興味もない。

ただ、今ここに沙耶久の本質に辿り着いた男がいる。

桜井要が、ウェイに辿り着いた。

「……はははははあはああつつ」

心から愉悦を吐き出すように、脳内にヤツの声が響き渡る。

「………確信しているみたいだね？」

酷い、頭痛だった。

気持ちが悪い。

ヤツが無理やりとって代わるうとしている。

「俺の上司が、秘匿されてる内容を教えてくれたよ。これからは俺を右腕として使いたいってよお」

「それが分かってても、沙耶に手を出すかい？」

「出せねえよ。下っ端の私怨で組が動かせるかよ」

諦念の混ざつた物言いだが、それも一瞬。

「でもなあ………」

歪な喜びが電話口に伝わる。

「それを全部、お前の友達に払ってもらったんだよ」

「日向と接触し、彼女から僕たちの絆を潰すつもりか？」

『寝言を言うなブラザー。気づいているんだろ?』

愉快そうに、ヤツが話しかける。

[illegible]

「……それは、手を出す、ということだろう」

キミの敗因は、七人が無条件で仲間だと信じ込んでいたことだ

敗、
因
・
・
・
・
・
・
？

何を、言ってるんだ？

「あつ？ 何言つてんだ？ それはセーフだって目の前の沙耶はそう言つたぜ？」

ウェイに重なるように、桜井の勝ち誇ったような声。

「なん、だと………?」

悠希を見る。

悠希は優雅に笑って見せた。

「まさか……」

『そう、動いているのは、沙耶春樹じゃない。キミを焦らせていたのは、沙耶春樹の意志ではない。 全ては』

「悠希」

『イグザクトリィ ツ!』

本当に嬉しそうに、ウェイは告げる。

「ああ？ 何言ってるやがる？ よく聞こえねえぞ？」

桜井の不快な声も、もはや届くことはない。

すでに携帯電話は落としている。

「貴方の、可能性を示してあげましょうか？」

悠希の手が伸びて、頬を撫でる。

丁寧に、何度も上下し、愛撫する。

「桜井要の目的は、貴方の目を違う方向に向けることと、貴方が本当の目的を察知したとしても邪魔することがないよう時間稼ぎをすること」

「……目的は、始めから四人を誤爆させることだったの？」

「暗黙の了解、という爆弾を、ね」

「そんな……」

「……庄治慶介、高辻日向、昴栄治、塚本佳織、あなたは誰一人助けることが出来ない」

背筋が凍る。

「ようやく……、ようやくこの気持ち悪い避難所が壊れるのね」

悠希は、目を細めて笑う。

「何、を……」

「これで貴方ものぞみも、一パーセントにも満たない可能性を期待せずに済む」

「彼らを……どうしたの……?」

「呪った」

端的な答え。

「ずっと……そのつもりだった？」

「裏切りだと思う？」

「……………」

答えることは出来ない。

「私にとつては……今の貴方の存在自体が裏切りのようなものだわ」

「……………」

「貴方は、変質してしまった」

先程、彼女が告げた忠告とは逆の言葉だ。

「……………」

「そうじゃなきゃ、私に向かって延命を続けようなんて、持ち掛けもしなかったでしょうね」

彼女の表情に、言葉に、寂しさが混ざる。

「昔と同じことを問うわ。人間になった気分は、どう？」

何の、こと……………？

ウェイ……………？

「……………」

ウェイは、何も答えない。

「バカね……………昔とは違い、中途半端なまま人間になろうとして……………」

「……………」

混乱する。

ワケが分からない。

本当に分からない。

彼女は何の話をしている？

分からない。

だって、僕は。

「なれるはずがないのに。貴方は、沙耶久にインストールされた人格なのだから」

仮想の、人格なのだから。

崩壊 春賀のぞみ

「・・・・・・・・」

何度も、その名前を反芻する。

ウェイ。

それは、私に羽を与えた沙耶久の中の悪魔。

天使の脳の中に潜む悪魔でした。

暗黙の了解という七人それぞれが抱える不可侵の秘め事。

『ここが、あなたの新しい家となります。あなたは自由にすればいい。ここにはあなたの他に六人の子供たちがいます。友達になるのも、他人として過ごすのも、あなたが決めることです。唯一つ、彼らを取り決めたルールがあります。それだけは必ず守ってください』
私を病院から引き取った時、保護者である南さんは言いました。

『彼らの過去に触れることだけは、けしてないように』

久くんたちは、それを『暗黙の了解』と呼んでいました。

久くんのそれが、ウェイという悪魔の人格の存在に集約されるのでしょうか？

頭の中で天使と悪魔を同時に飼っている少年、多重人格者。

そんな人を実際に見るのは初めてでした。

この三年間、気づきもしませんでした。

でも、あれはけして久くんの夕子の悪い冗談なんかじゃない。

あの禍々しい、全てを蔑すみ、憎むような笑みは、けして久くんのものなんかじゃない。

『まだ、終わりじゃない』

『キミの正しいと思う常識はただの罪の清算システムさ』

言葉が脳を順番に苛んでいく。

冷静になる度に、彼ら　久くとウェイの言葉に薄ら寒い予感を覚えます。

何を………しようとしているの？

その質問には、恐らくは誰も答えてくれないでしょう。

ねえ、久くん………。

あなたはもしかして、何か恐ろしいことを考えているんじゃないのかな？

私の問題を解決する為に、罪深いことを考えているんじゃないの？

『日向の居場所が分かった』

『暗黙の了解だよ　っ』

いつも不敵に振舞う慶介くんが、あんなにも切羽詰っていた。

暗黙の了解とは、一体なんなのか？

暗黙の了解、多重人格、桜井要、日向ちゃんの誘拐　。

分からない、私には何も分からない。

………あの時のように、何も分からないまま否定され、全てが失われる。

あの時。

あの時？

六畳の、和室　？

ぷらん、ぷらん、ぷらんっ　。

愛しているわ、私の、のぞみ。

………ああああああ　　っ………マズい、マズ

イマズイマズイツ………。

『バカな娘だ　』

止める。

そう叫んでももう遅い。

私は必死にその箱を閉めようとするけれど、全然うまくいかない。それは発作のように突然やってきて、自分の意思じゃ止められない

い。

『一方的に殴られて、痛んで、なのに？』

頭がどれだけ体に命令したって体はまるつきり思うように動かない。

このままじゃ箱が開いてしまう。

『あの女は、初めから捨てられる運命だったんだよ。なに？
見えない力で想像の体で止めようとするけれど、神経が繋がっていないみたいに意識だけが暴走する。』

あの男の汚らしい声に、ノイズに、アタマの中がジャックされる。

『出来の悪いお前の頭でも分かるように教えてやる。要は！
開く。』

パンドラが、開く。

必死に目を逸らそうとするけれど、神経の繋がっていないからだから目を閉じることも許してくれない。
きっと目を閉じたって許してくれない。

私が生まれて初めて、本当に人を殺したいと願った日。

その相手は、血を分けた実の父親でした。

『俺は確かにお前にとっては到底いい父親ではないな。だが、あの女は』

どんどん、溢れてくるもの。

殺してやる。

赤い赤い、怒りを超えたもの。

殺してやる殺してやる。

毒々しいほどに鮮明な赤い色で。

殺してやる殺してやる殺してやる。

すぐに酸化して黒くなる。

殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる。

じじじと。

死ね死ね死ねシネシネ死ね死ねシネシネ死ねシネシネシ

ネ。

『だがなあ』

開くな　その箱を開くんじゃない！

だから、無駄なんだって。

全然うまくいかないんだから。

医者に駆け込めばいい。

体の神経が繋がっていないって。

『！』

白黒。

白黒画像。

箱が開いて、色がついた。

鮮やかなカラーの画像。

『結局は』

六畳の、和室　。

ぷらん、ぷらん、ぷらん　。

どうして生きてるの、のぞみ。

．．．．．お母さん、くる．．．し、いよ．．．．．。

「はあ．．．．．はあ．．．．．はあ．．．．．」

酷い白昼夢。

私の存在が両親から否定される夢。

はははっ、夢？

違うよ。

辿ってきたでしょ、そういう人生を　。

『手繰り寄せる為ならどんな汚らわし行為だって厭わない』

．．．．．そうだね、その通りだよ、久くん。

何を、躊躇していたんだろうね。

春賀のぞみは、罪深い　？

当たり前じゃない。

普通になんて、生きられなかったんだからさあ。

知らず知らずの内に、私は日向ちゃんの家へと向かっていました。

「私なら、どんなに汚れた行為だってできるじゃない……」

「

罪深くていいじゃない。

そんなことよりも、過去と同じことをするのが恐ろしいよ。

「……罪を犯すよりも、罪だからって何もしない方が遥かに救いようがないよね」

自分に言い聞かすように。

道德、大衆心理、倫理観。

そんな正常を、春賀のぞみは認めるわけにはいけないのだから。

だから私は、あの時銃を撃てたはずでしょ？

必要ならば、命だって差し出せるから。

日向ちゃんのマンションへと辿り着きます。

ワンルーム、オートロックとは名ばかりの、塀を越えれば何の役にも立たない飾り。

中途半端な威圧感の、四階建ての建物。

その前に立つ、見知った姿を見かけました。

「南さん」

「？」

長身痩躯の男は振り返ります。

南神父 私たち七人を引き取った、私たちの父親代わりの大人です。

「のぞみですか」

優しい口調だけど、どこか疲れが見え隠れしていました。

南さんも今日一日、日向ちゃんを探して街中を駆け回ったのかもしれません。

「のぞみも、日向を探してくれているのですか？」

「……うん」

頼りなく頷く。

「どうしましたか？」

南さんは、首を傾げる。

「な、なんでもないよー」

私は瞬時に笑顔を作り上げました。

「・・・・・・・・」

奥の見えない双眸が私を捉え、思わずドキリとしました。

「日向の行方を知っているのですか？」

「うつん・・・・・・・・」

これは本当です。

行方は知らないから。

「ならば、何かトラブルですか？」

「何でもないよ」

笑顔で答えます。

でも、彼の目に見据えられると、嘘がすべて暴かれるような恐さがあります。

「話せないことですか？」

嘘だと、見破られたみたいです。

「・・・・・・・・」

「そうですね」

でも、南さんは追求しませんでした。

「・・・・・・・・」

そして、沈黙。

しばらくして、南さんは口を開きます。

「昔・・・・・・・・のぞみの作ったB級グルメ、あれは意外と好評でしたね」

それは昔の話でした。

私が食事当番の時に作ったギャンブルクッキング。

それが、玉子に加えてマヨネーズをかけたパンを焼くだけのもの。始めは漂うマヨネーズの臭いに皆の表情は曇りましたが、一口食

べてそれは笑顔に変わりました。

当然です、マヨネーズは万能の食材なのです。

「どうしてマヨネーズで合えようと思ったのですか？ のぞみが普通に作れば皆喜んでくれると思うのですが」

疲弊した心に南さんの声が優しく伝わる。

「……………」

暖かさが、どうしてこんなに後ろめたいのでしょうか。

「……………冒険してみたかったのかも」

「冒険ですか？」

「そこは、天国に近い場所だったから……………冒険してもいいかって」

「……………天国、ですか」

「暗黙の了解 私は何ひとつ知らないけど、みんな辛いはずなのに楽しそうで、だから私もそんな風になれるかもしれないって」

「彼らは、本当に私の自慢の子供たちです」

「……………そうですね」

本当に、私は仲間に恵まれていたのだと思います。

「他人事ではありませんよ？」

「えっ？」

「彼らの中には、のぞみ、あなたも混じっているのですよ」

振り返り、南さんは優しく笑いかけてくれる。

けど、胸が締め付けられる思いがしました。

自分が、酷く後ろめたく感じます。

「……………だからですよ」

ぽつりと呟く。

「えっ、何か言いましたか？」

「何でもないですよー」

笑ってみせましょう。

これ以上は、揺るがないように。

「……………そうですか？」

南さんは首を傾げ、そして腕時計に目を落とします。

「・・・・・・・・南さんは」

なのはどうして私は、尋ねようとしているんだろう。

「もし、日向ちゃんを助ける為に他人を犠牲にしなければならないとしたら・・・・・・・・出来ますか？」

語尾は、掠れていた。

「・・・・・・・・どういう意味ですか？」

「仲間が助かる為に、他人を貶めることは・・・・・・・・罪ですか？」

「

南さんと目が合う。

辺りは、オレンジに侵食される。

黄昏でした。

落ちていく私を象徴するような、黄昏でした。

「罪です」

そうして、南さんは言い切ります。

「じゃあ、何も出来ずに、仲間が不幸になるのを眺めなくちゃいけない？」

挑発するように。

糾弾するように。

極論を持ってして。

「例え誰も責めなくとも、貴方の中で後悔が残るならば、それは罪です」

「じゃあ、見殺しにするんだね」

叫ぶ。

「でも、他人と仲間なら・・・・・・・・罪のない他人を犠牲にしてでも助けたいでしょうね」

南さんは、落ち着いた口調で。

「だったら」

「ならば、苦しみ続けるしかないでしょう」

南さんは、遠い目で何かを眺めていました。

「それは……人間ですらない」
間をおいて。

「そうやって思考を停止すれば、それはもはや人間ではありません。
無感情に人を害する怪物です」

怪物という言葉。

「そんな人間を私は、理性の怪物、と呼びます」

「……理性の、怪物」

「のぞみ……日向に、何があったのですか？」

「それは……」

言葉を探し出そうとした時。

「私が、どうかしましたか？」

「えっ？」

思いもよらぬ声に顔を上げる。

「日向……どうしたのですか今日は」

「ごめんなさい、南さん。学校を無断欠席してしまいました」

「日向ちゃん、無事だったの？」

「無事？」

日向ちゃんは首を傾げる。

私は気づきませんでした。

彼女の目に宿る全てに疲れたような諦念を。

申し訳のなさど喜びが入り混じった、自分でもよく分からない感情でいっぱいでした。

そのまま、日向ちゃんの肩に触れようとして。

「……触らないでっ！」

バチン、と手を叩く大きな音。

障らないで、と日向ちゃんはもう一度呟くけど、よく理解するこ
とができませんでした。

「えっ」

理解が、出来ませんでした。

「南さん……さっきの罪の話」

俯く彼女の目は前髪で隠されて、その表情は伺えません。

「何ですか？」

「それは……自身の戒めの話であって、そこには被害者側の救済はないわ」

「……そうですね」

南さんは否定しませんでした。

「だから、被害者が加害者を認めることは永遠にありえない」
吐き出す言葉が、ナイフのように心を刺します。

「そんな風に理不尽に大切な者を奪われたら、貴方はどう思う？
加害者をどうしたら許せるってことよ、のぞみ……」
力なく発されたその言葉は、私に全てを諦めろと言うのと、何も変わらない。

「……日向ちゃん」

「気安くその名前を呼ばないでよ」

日向ちゃんは、叫んだ。

呼吸が乱れ、それに反して、息をすることも忘れたような感覚。

「……気安くその名前を呼ばないで……」

その言葉は、とても静かに響きました。

私たちの絆が壊れていく様を悼むように、優しく響きました。

喪失 春賀のぞみ

薄暗いまどろみ。

自分が寝ているのか起きているのかもよく分からない意識の浅瀬で、外界の音を聞いていました。

朝特有の小鳥の囀る声。

たまに通る車のエンジン音。

冷蔵庫の低音。

・・・・・・。

目を開きます。

血の気が引いて、意識が一気に覚醒して。

『覚悟しろ、お前の大事なモンは全部なくなる・・・・・・』

その言葉が、昨日の日向ちゃんの様子と重なりました。

『・・・・・・気安くその名前を呼ばないで・・・・・・』

日向ちゃんは、とても苦しそうにそう呟きました。

『続いてのニュースです。旧御座市で起きた『ブラックマンデー』

と呼ばれる人災ですが、一カ月後に十周年を迎えます。それに対して森野市長は・・・・・・』

時間を見ると、まだ登校までに余裕がありました。

だけど急いで部屋に出ることにしました。

とにかく動いて確認しなければ。

ブレザーに腕を通して、朝食も忘れて学園へと急ぎました。

日向ちゃんは、一体何を苦しんでいるのか。

そして、桜井要は何をしたのか。

だけど、通学路、学校、チャイムが鳴るまで歩き続けましたが、久くん、悠希ちゃん、慶介くん、日向ちゃんの姿はありませんでした。

栄治くんもいませんでした。

「佳織ちゃん」

唯一見つかった彼女。

呼びかけるとゆっくりと振り返りました。

でも。

「……何？」

「えっ」

その表情は、いつもの佳織ちゃんではありませんでした。

瞳孔が開いたうつろな瞳。

目の下にはクマが出来ていて、明らかに疲弊していました。

言葉をかけませんでした。

彼女は興味を無くしたのか、視線を戻し、そのまま歩いて行きま
した。

「なんで……」

「おっと」

背中から強い衝撃。

「ごめんねえ、春賀。ぶつかっちゃった」

「きやはははっ！」

背中から思いつき蹴られたのでしょうか。

私は壁に強かに側頭部をぶつけました。

「つつう」

クラクラする頭を押さえながら、顔を上げます。

「……」

いくつもの敵視の視線が私を捉えました。

何人かの女子生徒が私を囲んでいました。

「覚悟しとけよ teme。今まで調子乗りやがって」

肩を強く押され、再び壁にぶつけられます。

「庄治先輩や昴先輩がいなけりや teme。を守るヤツなんていねえん
だからな」

「いない……？」

「可哀想に見捨てられたんだろ？」

「違うつて、年少じゃなかったっけ？」

「きやははっ、なんでもいいって。とにかくコイツもこれで調子乗れねえんだからよ」

ケラケラと。

羽虫のように笑います。

中途半端に。

不快でした。

『覚悟しろ、お前の大事なモンは全部なくなる……』

唇を噛みました。

私は、この感情を知っている。

大切なものが、今まさに零れようとしている不安を。

放課後、自らの行動を『いつも』の日常にトレースしてみます。

学校で、ファミレスで、そして自宅で。

『いつも』と変わらぬ行動を一人で続けてみました。

自室のベッドに腰掛けて、慶介くんにメールを送ります。

すぐにメールは届かなかったことが伝えられました。

久くんに電話を試みます。

お客様のかけになった電話番号は、電波の届かない……。

誰とも繋がらない。

どうして？

分からなくなってきました。

「桜井、要」

答える声は勿論ありませんでした。

大事なものがなくなるというのは、こういうことですか？

私から遠ざかるのではなく、本当にいなくなるということですか？

「ふざけやがって！」

携帯電話を壁に叩きつけてました。

折りたたみ式の携帯からバッテリーが飛び出しました。

底知れぬ絶望感。

世界に取り残された孤独感。
分からなくなる。

彼らと過ごしてきた日々の延命行為を続けてきた理由は何だったのか。

延命行為の果てに、私は何を求めていたのか。
彼らを巻き込んでまで、何をしたかったのか。

一日が過ぎました。

翌日も同じように繰り返してみました。

学校では、陰湿なイジメが待っているだけでした。

何度机を運んでも、次の日に私の机はありませんでした。

上履きはゴミだらけにされて、来客用のスリッパを使っしかありませんでした。

教科書はすでに使い物になりません。

可愛いものです。

私一人で済むならば、可愛いもの。

彼らは、命までは奪わないのだから。

歩き回ります。

でも、誰かと繋がることはありませんでした。

心が思った以上に鈍化しているらしいです。

昨日ほどの絶望感はありませんでした。

ただ、不思議と焦りだけを覚えていました。

「何に？」

気づかないフリ。

逃げ場所として最適なのは蒙昧であること。

佳織ちゃんはいつも蒙昧に振舞っていました。

それが人によっては退化であり、私にとっては笑顔になること。

何も感じずに、機械の如く顔を笑顔にする。

それは、無意識の心の防衛。

誰かを失うということは、時として心を壊してしまうほどの深い絶望になるから。

私は、たまに思います。

たった一人だけの世界ならば良かった。

失敗に対する全ての責任が、自身に転嫁される世界ならば良かった。

「みんな……」

失敗すれば、責任の追及は私を取り巻く対象にまで及ぶ。

「桜井、要」

どうして、久くんは私を助けたのか？

見知らぬふりをして、捨て置けばよかったのに。

そうすれば、ただ一人の少女が心を壊したまま、廃人のように路地裏で朽ちていくだけ。

例え助かったとしても、罪を犯した少女に、世間はどこまでも冷たいでしょう。

久くんにとって見知らぬ少女が一人のまま灰色の部屋の中で死ぬだけなのに。

「本当に、分からない……」

彼は私を特別だと認識した。

好きだと、そう決めた、と。

決めてしまえば、あとは自働的。

妄信というシステム。

決めた瞬間にその感情はすんなりと自身の心に浸透し、真実となります。

私を助ける確固たる理由となったのかもしれませんが。

だから私は、その代償に演じることになりました。

思慮深く、調和を何よりも大切にする少女。

いつも笑顔を絶やさない少女。

そんな鏡越しの少女が、偽りの希望の中で本物になっていきまし

た。

七人の輪に、何者にも代え難い絆を見出しました。
久くんもまた、私にそうのぞみました。

「だから……けして、壊させはしない」

そう、桜井要の思い通りに七人の輪が簡単に壊せるものではない。
私たちは、強い。

慶介くんだって、栄治くんだっている。

いずれは皆の過去と向き合い、そしてそれを受け入れた上で、再び手を繋いだときこそ虚が実にとってかわる瞬間なのだ。

と 愚かな可能性を胸に抱いて、自己欺瞞へと帰結した。

偽りの希望を盲信するほど、心の不安は消えます。

いずれは意識的に笑顔を作る必要はなくなるだろう、そう思うことにしました。

私は、惰性のように希望を紡ごうとした。

携帯電話を出して、悠希ちゃんにコールをする。

ヘヴンを続ける為に希望を始めようと思いました。

延命という、偽りの希望を。

「もしもし、のぞみ……」

三日ぶりに聞いた、親友の声でした。

そしてすぐに、希望は碎かれる。

「……日向ちゃんが？」

「ええ」

「……本当に？」

「ええ」

悠希ちゃんの部屋で、私は報告を受けました。

「……日向ちゃんが、人を殺したの？」

「事件は市長選挙に向けた演説会場、もうすぐメディアも一斉に報道を始めるわ」

僅か数時間前に抱いた希望は、簡単に碎かれてしまったという事

実。

「・・・・・・・・」

鈍化した心でも強烈な衝撃を食らうほどの、大きな大きな絶望。淡々と事務的に告げる悠希ちゃんの表情は、それが覆せないほど確かな真実であることを語っていました。

「・・・・・・・・慶介くんは？」

聞かずにはいらなかった。

日向ちゃんを救済するといった彼の行方は　。

「・・・・・・・・予測の範囲内」

笑うしかなかった。

「・・・・・・・・どうして、人を？」

「結果的にそれは誤算でもあるし、修正可能な範囲の誤差でもあるわ」

「誤算？」

「ええ、思った以上に彼女は優秀だったということよ。もったいないくらいに」

「日向ちゃんは、誰かをその手にかけてたってこと？」

「罪のない人間はいたかしら？」

「・・・・・・・・」

言葉を失う。

罪を犯さない人などいるはずがないでしょう。

世界のシステムは、そんな風にできていないからです。

でも、その罪に対して支払われる罰としては、彼女に殺された人間の受けた罰は果たして、彼女の犯した罪と天秤にかけた時に吊りあうものだったのだろうか。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・これでもあなたはまだ、希望を抱き続けるのかしら？」

答えを知らながら彼女は問う。

「次こそは、次こそはと言いながら、可能性が0に還るまで縋り続

桜井要は全身全霊を持って、嘲笑を浴びせかけ。

「・・・・・・・・」

「はははっ・・・・・・・・」

嘲笑はすぐに尻すぼみになっていきます。

「仲間を失った気分は、どうだ？」

「・・・・・・・・そうか」

ぽつりと呟く。

「私は・・・・・・・・失ったんだね」

淡々とした口調はあまりにものっぺりとしていました。

嘆きも絶望も含むことのない無機質さで。

「・・・・・・・・テメエは、なんでそんな顔してやがる」

打って変わって苛立ちの口調で。

「・・・・・・・・」

沈黙のまま桜井要を見据える。

「あの時と同じ顔かよ」

「あの時？」

「・・・・・・・・テメエが俺を嵌めやがった時だよ」

「ああ・・・・・・・・」

思い出したように。

「そうかい、忘れてたよ。テメエは薄汚ねえヤツだったよな」

彼は一方的に苛立ち、罵倒します。

「テメエにとつたらトモダちなんてその程度なんだろうな・・・・・・・・」

「」

「駒に考えたことなんて一度もないよ」

「使い捨てのトモダちだっただろうが、オレ達は　！　アイツら

は、ゴミのように犯されて殺されたんだ……」

恐らく鈍化している私に、目に見える変化はありません。

でも、その言葉は致命傷でした。

「そんなヤツがトモダちは唯一無二です、なんて誰が信じれるんだ
よ」

ウォン3 幕間

ウォンの語るべき物語もこれで最後だ。
春賀のぞみ。

のぞみは英語に直すとWant。
希望ではなく、欲望。

だから、登場人物の名前はウォン。

彼女はとても欲深い。

でも、始めから欲深いわけじゃなかった。

普通の子供たちに当たり前に与えられるものが、彼女には与えられなかったのだ。

ネグレクト 育児放棄。

酷い場合には、子供を餓死させてしまうようなケースもある。

ではその親たちは、子供に対する愛情を少しも持ち合わせていないのだろうか？

きっと、一概にそうとは言えない。

少なくとも、ウォンの母親はウォンへの愛情を持っていた。

愛情。

一言にその情念を表しても、様々な形がある。

形だけの軽薄なものから、深みにはまり歪んでしまったものまで別に定義しようというわけではない。

ただ、ウォンの母親は、彼女なりにウォンを愛していた。

だけど、それを正しく伝える術が彼女にはなかった。
いや。

むしろ彼女は、その感情を認めたくなかったのかもしれない。

だから、ウォンはそれを欲しがっただけだった。

ウォンには父親が居なかった。

いつも酒に酔って、家事も子育てもろくにしない母親がいただけだった。

「どうしてわたしにはお父さんがいないの？」

ウォンは一度だけ、その禁忌を口にした。

彼女は、その時の母親の顔を生涯忘れることはないだろう。

背筋が凍るような憎しみの形相を、忘れることはないだろう。

叩かれた。

蹴られた。

いくらごめんなさいと言っても、母親は許してくれなかった。

口の中は鉄錆びの香りで充満して。

顔は涙と鼻水と血でベトベトで。

初めは泣き叫ぶ声も、最後には掠れて聞こえなくなった。

そして母親は、泣きながらウォンを抱きしめた。

ごめんね、ごめんね、と。

何度も呪いをかけた。

ウォンの心はいつも優しい母親を欲していた。

お母さんは私をどんなに叩いても、最後にはこうして泣きながら抱きしめてくれる。

だから、私が悪い子だったんだ。

ぼやけた意識の中、ウォンは思った。

その後、父親のことは母親から聞いた。

毎晩毎晩、出来る限り汚い言葉で母は父を罵倒した。

簡単に言えば父は、ウォンを身ごもっていた貧しい母を捨てて、資産家の娘を選んだ。

娘の両親も、父が優秀な男であったためにそれを望んだ。

母は、父に捨てられた。

その時母は……すでに私を身籠っていた。

ウォンはすべての原因が父親にあることを疑わなかった。
彼女の世界の中心にいたのは、母親だからだ。
だから、母を憎まなかった。

母に愛情を欲した。

殴られてケガをしても。

何かと理由をつけて二日もご飯を食べさせて貰えないことがあっても。

その後母は泣きながら謝り、抱きしめてくれるから。
虐待される子供の心理は、自分が悪いと思ってしまうことに尽きる。

自分がいい子になりさえすれば。
ウォンは母が自分に人並みの愛情を与えてくれるのだと思い込むようになった。

でも、それが叶うことはなかった。

それは、冬の寒い日のことだった。

きっかけは本当に些細なことだ。

丁度、世間はブラックマンデーという事件に湧いていた頃だ。

公園で一人で遊んでいると、スーツの男の捨てた新聞に『英雄』

と書かれた文字とそこに写る男の姿。

彼女は、興味を引かれた。

なぜだろうか？

彼女にしか分らない。

彼女はその新聞を手を帰路についた。

「……お母さん、これ、何て読むの？」

いつもは、分からないことがあっても黙ってたのに、どうしてこの時ばかりは聞いてしまったのか。

もしかすると彼女の中に眠る二重螺旋の遺伝子コードが、彼に反

応じたのかもしれない。

「ああ……五月蠅い子ね、何騒いでるのよ……」
面倒臭そうに寢床からゴソゴソと起き上がる母の動きが、その新
聞を目にした瞬間に止まる。

「なっ……」

目を見開き、驚愕に口をパクパクとさせる。

「どうしたの、おか……」

「なんの……」

母親の声は震えていた。

「お母さん？」

「何のツモリだよこのクソ砂利イイ！」

これが、始まりだった。

手加減のない大人の本気の蹴りがウオンの腹部にめり込んだ。

「……ぶえええっ」

奇妙な声が漏れた。

大人が本気で子供の腹部を蹴ったのだ。

内臓が破裂していてもおかしくない。

だが、母親はそんなことでは止まらなかった。

「あの男の記事見せ付けて、そんなにあの悪魔の元が良かったのか
？ お前も金か？ 裕福な暮らしに私を捨てるのか？ ふざけるな
！ 育ててやった恩も忘れやがってエエエ！」

拳を何度も振り上げる。

頭に。

顔に。

肩に。

腹部に。

何度も振り下ろされる。

鈍い音の、人間で奏でるパーカッション。

足りない？

まだ、足りない？

その愛を受ける資格が、まだ私にはない？

だったら。

だったら、もつといい子でいないと。

もつと、もつと……いい子でいない、と……。

考えない、と……。

やり方を、考えないと。

そうして彼女は、絶命する寸前に、ドアをけたたましく叩く音を聞いた。

意識は落ちた。

入ってきたのは警察官だった。

母の狂乱が頂点に達したとき、見かねた近所の住民が警察へ通報したのだ。

母親は警察へと連行され、ウオンは病室のベッドの上へと運ばれた。

舞台は、六畳の和室から、白い部屋へと変わる。

目覚めたウオンが始めに聞いたことは、自分の容態ではなく、母のことだった。

お母さんのことを何度も不安げに問うウオンに対して、周りの大人たちは口を噤むしかなかった。

だが、隠し続けるにも、彼女は執拗に問い続けた。

根負けした大人たちは、彼女の母親が逮捕されたことを教えた。保護責任者遺棄、及び暴行、殺人未遂の疑い。

ウオンは泣きながら懇願した。

母親に罪はないと。

自分が悪い子だったからと。

お皿を洗うときに割ってしまったから。
掃除をしても窓の棧に埃を残してしまったから。
これからはちゃんとします。

ちゃんといい子になります。

だからお母さんを許してください。

お母さんは悪くない、と何度も泣きついた。

大人たちは、目を伏せるしかなかった。

彼女の引き取り先が決まった。

スーツを着た夫婦が訪れた。

ウォンを引き取る旨を手短に伝えた。

男性は、自分が父親であるから彼女を引き取らなければならない、と。

義務だから仕方ないと、そのことを隠しもせずに。

ウォンは初めて憎む相手の顔を知った。

母親の言うとおりだった。

その男は最低だった。

血の通わない冷酷な男だった。

帰れ、と。

何度も言った。

辺りのものを投げつけ、大人たちに抑えられる。

そんな彼女を、実の父親はゴミを見るような目つきで見下ろした。

「だったら、野垂れ死ぬか？　その方が俺にも都合がいいな」

それが、春賀晃。

金の為ならば、八十万人の犠牲など厭わなかった男。

ウォンがどんなに嫌がっても、それ以外の引き取り手はなかった。

ウォンは父親と共に暮らすしかなかったのだ。

憎しみだけで生きていくことは出来ない。

いつしか反発することに疲れたウォンは母親のことを思うようにした。

いい子となり、母親の愛情を欲そうとした。
彼女はなお、母親の愛情を欲そうとした。
彼女は、それしか知らなかったから。
誰にも心を開かなかった。
母親以外の、誰の愛情もいらなかったから。
唯一欲しかったもの。
心からのぞんだもの。
それは。

父親譲りか、ウオンは非常に頭脳明晰だった。
瞬く間に色々な知識を吸収し、失われた十年の知識を、僅か二年で取り戻した。

大人しい、言うことを聞く可憐なお嬢様。
でも、笑わない、可哀相なお嬢様。
ただ頷くだけの、人形のような空ろなお嬢様。
それが、春賀家に勤める使用人の、彼女の印象だった。

ある夜、使用人たちの会話を盗み聞きした。
母親が出所した、と。
再びウオンを取り戻そうとするのではないかと。
警備を強化しないと。
使用人たちは、母親を異常者のように扱っていた。
心を開かなくて良かった、とウオンは心から思った。
使用人たちも、やはり敵だった。
彼女の敵だった。

使用人たちの反応は最もだ。
男の気を引くために、女は身籠った子供を中絶しなかった。
子供が出来たならば、捨てることは出来ない、と。
女は必死だったのだろう。

必死だから、酷く盲目だ。

男は、金の為に稼動する怪物だというのに。

結果として、女には子供と僅かな養育費だけが残された。

それでも生きていくには十分だったはずだ。

だが女は、それを酒とギャンブルに注ぎ込んだ。

養育の放棄と家庭内暴力。

その果てに自らの娘を殺しかけた。

女の心は、病んでいた。

だから、使用人たちが女を『異常者』として扱ったのは自然なことである。

だが、そんなことはウォンには関係ない。

彼女にとっては、ただ一人の肉親だから。

不幸を分かち合うことができる、自分を愛してくれるはずのただ一人の肉親だったから。

いい子にしていた。

泣き喚いたりもしたけど、最近ではおとなしくいい子のふりをしていた。

使用人たちも眠りに付く夜半。

ウォンはついに家を抜け出した。

行くべき場所は知っている。

帰るべき場所だ。

毎晩この日のために地図を眺めていた。

母と二人で住んでいたアパートを目指し、子供の足では何時間かかる距離。

必死で走る。

わき目も触れず。

ただ会いたいという感情だけで。

帰りたい。

いい子になりました。

勉強もしました。

もうお母さんの手を煩わせることもありません。

だから。

だから……。

私を、愛してください。

思い出は都合よく美化されるもの。

気まぐれで優しくされた記憶だけが、ウォンの中で輝いていた。
殺されそうになったのに。

なのにまだ、無条件で母親のことを愛そうとしていたのだ。

夜も更ける頃、切れる息を必死で抑えながらウォンは家へと辿り着いた。

部屋には電気が点いている。

逸る気持ち。

善望した愛情。

これから始まるはずの未来。

胸に沢山のものを抱いて。

そして、裏返る。

希望の反対は、何だ？

希望のコインの裏側に描かれているものは、何だ？

彼女は玄関のノブをひねった。

鍵は開いていた。

薄暗いライトの中で、それはゆらゆらと揺れる。

「あ、れ……………」

柱に括られた布に吊るされて、それはゆらゆらと揺れる。
それは、母親と呼んだ人の変わり果てた姿だった。

「……」

この時既に、彼女の目から輝きは失われていた。

これが、彼女の物語だ。

春賀のぞみ。のぞみは英語に直すとWant。^{ウオント}
だから、登場人物の名前はウオン。

彼女はとても欲深い。

でも、始めから欲深いわけじゃなかった。

そして、心から望んだものでもない。

それは仕方のないこと。

たった一つ、望んだものを彼女は永久に手にすることが出来ない
のだから。

少女の価値　春賀のぞみ

深夜、久くんと悠希ちゃんの部屋を訪ねました。

「一体、どういつつもりかしら……」

悠希ちゃんは、言葉に反して怪訝な表情を見せることはありません。
ん。

血が繋がってないのによく似ていると思いました。

久くんが笑顔で全ての感情を隠すのに対し、悠希ちゃんは無機質な仮面をかぶり何事も動じないように振舞う。

たまに思います。

彼女たちは、私たちの知らない絆で結ばれているのではないかと。

「どうして、久の居場所を知りたいの？」

「それが、必要だからだよ」

「……理由になってないわね」

素っ気ない一言も、まるで彼女の口癖のように思えます。

全てに興味がないかのように振舞う。

これも、彼女の嘘じゃないかって思います。

彼女が久くんのことに興味がないわけがない。

気づいていました。

彼女は、一歩皆から引いて皆を見ているように見える。

でもその実、その目には久くんしか映っていなかったと。

それが、どのような感情なのかは分かりませんが。

「ウェイ、会えないかな？」

ぴくりつ、と僅かに瞼が動きました。

それは十分な反応。

「どうして？」

「必要だからだよ」

同じ言葉を返します。

「・・・・・・・・ふう」

「気だるげに悠希ちゃんは溜め息をつきます。」

「どうしてそれを私に？」

「知ってるんじゃないかな？ 久くに何かあったんでしょ？」

「久が、アナタは七人の中で誰よりも鋭いと言ったのが分かったわ」

「そんなこと、言ってたんだ」

「それも久くんが言ったことです。」

「嘘が上手くなる目的は、人に嫌われないようにするため。」

「笑顔の下で私は、いつも人の顔色を伺っていました。」

「・・・・・・・・何のつもりかは知らないけど止めておきなさい、踏み込むのは」

「睨むような視線も、彼女にしては珍しい。」

「元は私の蒔いた種なんだよ」

「でも、引くわけにはいきません。」

「違うわ。久自身が蒔いた種よ。あの子が自分の意思でアナタを助けようと決めたの」

「それも、久くんの暗黙の了解？」

「鋭さとは、観察力と疑念の塊ね」

「悠希ちゃんの言うことは正しい。」

「観察し、違和感に疑念を抱く能力こそが、人が鋭いと呼ぶ直感の正体なのです。」

「あなたがいうとまいと、あの子は遅かれ早かれ向き合わないければならなかったの。だから、アナタの気に病むことではないわ」

「・・・・・・・・じゃあ、質問を変えるね」

「今度は何？」

「桜井要って、知ってる？」

「・・・・・・・・ええ」

「そうでしょう。」

「久くんがどうして私の過去を知っていたのか。」

「彼の中にいるウェイという人格がどうして私に破滅を提案したの」

か。

この街で力のある暴力団の麻薬マーケットを荒らしてまで彼らが何をしようとしていたのか。

表は春賀、裏は沙耶。

あの暗黒時代、よく耳にしたことでした。

おのずと答えは見えてきます。

彼らの保護者、沙耶春樹による春賀への干渉。

つまり、春賀晃の娘を破滅させたかったということ。

「久くんは、私を助ける為に何をしたの？」

沈黙。

私の推論が限りなく真実に近いという証明のようでもあります。

「……のぞみは、教会に来るのが一番遅かった。あなただけが事情が違う」

「？」

予想外の答え方。

「どうして、暗黙の了解は出来たのだと思う？」

「誰にでも知られたくない過去くらいあるってことでしょ？」

「重いよ」

淡々と告げる。

「友達面して他人の分まで背負うには重過ぎるから、私たちは上っ面だけの傷を舐めあうような関係を求めた」

「でも久くんは、ヘヴンと呼んだ」

「天国？ ふふふっ」

悠希ちゃんは、おかしそくに笑う。

「聞き間違いよ」

「聞き間違い？」

「ヘヴンじゃなくてヘイヴン。その意味を知ってる？」

「うっん」

「天国じゃなくて、避難所。一見すれば嫌なことなんて何ひとつない楽園のようにも見える。でも、けして天国には為り得ない」

それは哲学的にも聞こえ、ただの言葉遊びにも聞こえました。

「久はきつと、ヘイヴンをヘヴンへと昇華したかった。嘘を本当に変える。馬鹿な子よ、無力で、誰一人支えることができない癖に」「支えあうことはできるよ?」

「無理よ。二人で潰れるだけ」

彼女は断言しました。

「ブラック・マンデーとは、そういう事件だったの」

ブラック・マンデー。

十年前に起きた原子炉の融解事故を巡る一連の事件の総称。

「久くんは、その被害者だったの?」

「ええ、アナタと私をのぞく五人全員が、ね」

「それが、ウェイという人格を生んだ?」

「イエスでもあり、でも、アナタの思う答えとも違う」

「どういうこと?」

「久は、ウェイという存在のブレーキとして生まれた」

悠希は静かに呟いた。

「久が道徳観に囚われるのは、そう「沙耶久」にのぞまれたから」

そう、のぞまれたから?

沙耶、久に?

その言葉が、一瞬上手く理解できませんでした。

「だからあの子は、嘘を本当に変えたかったのよ」

「なに………それ………」

その言葉は、あまりに重い。

「………嘘を本当に変えるって、そういうこと?」

自分の零した言葉が、あまりに重い。

それは、偽りの自身の存在証明。

「あの子自身には自分が二セモノという意識はなくても、久とウェイが共有するメモリのどこかでそれは常に存在している。無意識の内に久は人であることを求めるようになったの」

「久くんは、人間だよ………」

「いいえ、あれはただの擬態。久という存在は、結局のところ錯覚に過ぎないのよ。人は、全てがそろってこそ人なの。意識だけのあの子はただのプログラムに過ぎないの」

「人間だから痛いって泣くんだよ」

悠希ちゃんの言葉が、無性に許せなかった。

「人間だから・・・・・・好きだって、笑ってくれた」

「哀れね」

「人を好きになることのどこが哀れなのよ」

叫んだ。喉が衝撃でチリチリとする。

「綺麗な言葉なこと」

彼女は嘲笑いました。

漆黒の髪と目の彼女が、まるで魔女のように映りました。

「人を無条件に好きになったその結果が、ウオンという少女でしょ？」

血の気が、引きました。

「母親を無条件に愛そうとした結果は無残だったわね。母はあなたのことを自分の都合のいい道具にしか見てなかった。それでも、道具に愛着が湧いたのでしょうね。人間は失って初めて価値に気づくっていうけど、アナタの母親は薄暗い独房の中でそれに気づいたのでしょうね。だから、狂った。それを見てしまったあなたも狂った。好きという感情は必ずしも肯定的には捉えられない。いわば諸刃よ。溺れてしまえばいつか、自らを滅ぼすモノになる」

否定してしまいたかった。

「禍々しいでしょ？」

戯言だと笑い飛ばしてしまいたかった。

でも、そうするにも言葉はあまりに春賀のぞみという核心を突いていました。

「知ってる？ 私が教会に来て間もない頃、沙耶久は全然喋らない、部屋に閉じこもった子供だったの」

懐かしそうに目を細めて、窓の外を眺める。

「あの子の本当の家族は、御座市の狂騒の中で追われる立場だった。電波ジャックを行った過激テロ集団のような市民団体がいたでしょ？ 彼らは久の目の前で久の家族を殺してみせたの。その時の光景は、今でも無意識下で久を苦しめている」

背筋が凍るような寒気を感じました。

久くんの人懐っこい笑顔を思い出します。

「・・・・・・・・」

「愛情なんて、ほどほどでいいのよ。期待が薄ければ、絶望も小さい・・・・・・・・」

悠希ちゃんの言葉も、恐らくは一つの真実。でも。。

「そんなに器用に、割り切ることなんてできないよ」

それは、とても哀しい悟りでした。

「だから、哀れなの」

「そうだね・・・・・・・・確かに哀れだね」

『この三年間一緒に嘘をつき続けてきた、春賀のぞみという少女を好きになったんだ』

その幸福感を、哀れとしか表現できないことこそが、哀れなんだよ。。

「だからこそ、誰かが守らなくちゃいけない」

「・・・・・・・・」

悠希ちゃんは、静かに目を伏せて。

「随分と、久に毒されたのね」

伝わったのだと思う。

彼女こそ並外れた観察力と、全てに疑念を抱いて思考する鋭く歪んだ少女なのだから。

私は、それで久くんを守ることができる。

「・・・・・・・・久がアナタを助ける為に何をしたか、だったわね」

「えっ？」

「アナタの『素質』を見せてもらおうかしら」

挑むように、どこか期待するように。

その表情は、人間味を帯びたものでした。

「教えて、くれるの？」

彼女は頷く代わりに答えた。

「沙耶春樹の命令で、久はアナタと桜井に接触することになった。

本来はそうだったことはウェイが担当するのだけど、その時だけは勝手が違ったのよ」

「勝手が違う？」

「桜井の証言が必要だった。春賀のぞみが麻薬売買の黒幕で、援助交際、脅迫、強姦、そうした少年少女グループの主犯でした。そして彼女は、春賀建設社長、春賀晃の娘です、ってね」

予想したとおりの内容。

私をネタにあの男の信用を失わせようとする沙耶春樹による画策だったそうです。

「でも、ウェイはあまりに不安定なの。特に桜井のような酷く自己中心的な思考の人間は何人が殺してしまったこともあるから、この件についてだけは久を動かすことにしたの」

ウェイが手にかけて人の中には、私と一緒に麻薬の売買を行っていた仲間の名前もありました。

「そうして久はアナタを助ける為に、沙耶春樹に一つのプランを提示したの。それが 春賀のぞみは母親の件で父親を憎んでいる。

実の娘に殺された方が事件はよりセンセーショナルとなり、人々の食い物になる。春賀建設は瓦解し、春樹の思うように動くようになる。ってね」

そして悠希ちゃんはその裏を取った。

私の虐待を受けていた過去から、母の死んだ夜、あの男を殺そうとしていたことまで。

「アナタに殺させる気なんてなかったくせにね。娘が麻薬中毒だと世間の同情は引けないと、そのプランをずっとあの子は先延ばしにしてきた。今の今まで。でももう限界、沙耶春樹という人間は

そこまで甘くはないの。なんとしてもアナタに春賀晃を殺させようとする。だから、桜井要という駒を動かしたの」

組織についた。

ようやく理解ができました。

麻薬マーケットを荒らした少年を庇護する組織がどうしてあるのか。

唐風組から組織ごと報復を受ける可能性すらあるというのに。それも当然です。

その大元が庇護するように指示を出していたのですから。

『手繰り寄せる為ならどんな汚らわしい行為だって厭わない』

その瞬間、寒気を感じました。

糸が恐ろしい繋がり方をしました。

「・・・・・・・・何をしようとしているの？」

声が震えるのが止まらない。

「久くん、何をしようとしているの？」

「・・・・・・・・もう一度聞くな。アナタは、久に踏み込む？」

「・・・・・・・・」

「そうならば、覚悟しなさい」

彼は、私を救うと言った。

その為に、どんな汚らわしい行為をしなければならないか。

「あの子は、自殺しようとしているのと変わらないのだから」

「沙耶春樹さんを・・・・・・・・自分の父親を、殺すってこと・・・・・・・・」

「・・？」

「そう、暴力団の組長と懇意の男を殺すってコト。その後久がどうなるかは、分かるわよね」

それは・・・・・・・・私の破滅ゲームよりも遥かに絶望的な行為でした。

「もう・・・・・・・・私では止められないの・・・・・・・・」

悠希ちゃんは、淋しそうに笑いました

「悠希ちゃん・・・・・・・・」

「久は、アナタの為に死のうとしている……………だから、あなたなら久を止めることが出来るの……………」

「……………」

「たった一つだけ残された手段……………アナタはそのためここに来たのでしょうか？」

「久くんは、どこにいるの？」

悠希ちゃんは問いに答えず、首を後ろに振ります。

「……………春賀、のぞみさんですね」

どこか淡々とした、なのに存在感のある声。

悠希ちゃんの視線の先に、白髪交じりの、長身痩躯の男の人が立っていました。

浮かべる対外的な笑み。

ピンとききました。

その表情の作り方に、彼の正体が分かりました。

「……………沙耶、春樹さん？」

「おや、どこかでお会いしましたか？」

薄らと浮かべる笑みを、肌寒く感じます。

「……………いえ」

「久と似ているのよ」

悠希ちゃんが、私の言葉を代弁しました。

「似ている？」

沙耶春樹さんは首を傾げます。

「のぞみが久の表情を真似たように、久もまた父の表情を真似た」
「なるほど、そうだったな」

でも決定的に違います。

沙耶春樹さんからは、感情はおろか、温度すら感じない。
滲み出る冷気が私を包み込みます。

……………独特の、威圧感でした。

「……………どうして、ここへ」

震える声を抑えて、尋ねました。

恐ろしい。

この人の前では、表情を取り繕うことさえできない。

「君が、ウェイに会おうとしていた理由」

「……」

「君は、久を助けるにはどうすればいいか。それを行動に移そうとしたのではないかね？」

彼は内胸のポケットから何かを取り出しました。

「っ！」

それは、黒光りする禍々しい金属の塊。

この国では、一般人が持つことを許されない『兵器』と呼べるものの。

そのグリップを、私に向けて差し出しました。

そして、銃口は彼のほうに向いている。

「一つは、ここで私を殺害することだ。だが、あまりお勧めはしない。お行儀の良くない連中を飼っているものでね」

脅迫と言って差し支えありません。

彼は、私に武器を与えて脅迫しました。

「二つは、二人で逃げることだ。私にも、桜井にも捕まらぬように生涯をかけて鬼ごっこをしよう。あらかじめ言わせてもらおうなら、私は逃がさない。多大な負債を負っている久を絶対に逃がさないだろう」

自分の息子にかける言葉ではありませんでした。

理解しました。

彼は、春賀晃と同じ人種です。

怪物。

春賀晃と違い、どこか得体の知れない怪物でした。

「そして三つ目、それこそが君の考えていたことだろう
一歩こちらに詰め寄り。」

「持ちたまえ」

「は、はい……」

私に銃を握らせました。

南さんの言葉を思い出しました。

『そんな人間を私は、理性の怪物、と呼びます』

「 理性の、怪物」

それは、物理的に破壊を繰り返す異形のモンスターではなく。

人を害することに躊躇のない思考の人間。

それは 。

三年前の、私のことでもあります。

「怪物になればいい」

沙耶春樹は、静かに言いました。

「罪を犯したということよりも、罪だから何もしなかったという方が遥かに救いようがない」

心を読まれたみたいに。

「見殺しというのは、合法的な悪意だ。責任を負うことを恐れていい子でいようとする。他人は何もしてくれない。私は君に手を貸そう。同情や共感などといったあやふやな理由ではない。君がそうすることにより、私は利益を得ることが出来るからだ。その利益は、数字で表すことができる」

彼の口にした数字は、想像を絶する金額でした。

「君には、それだけの価値がある。その金額は、この国の未成年の援助交際する少女が上げる利益一年間分に相当する。君には、それだけの価値があるということだ」

約一千億円。

それが、私の価値だった。

怪物 春賀のぞみ

「ありがとうございます、春賀建設です」

「……もしもし、春賀、晃に取り繋ぐことは出来ますか？」

「はあ、失礼ですがどちら様でしょうか」

「春賀……のぞみ」

「えっ？」

「娘の、春賀のぞみであることを伝えていただいていいでしょうか？」

「少々お待ちくださいませ」

……。

「もしもし、春賀晃だが」

「……もしもし、お父さん？」

「その声は、馬鹿娘か」

「本物だよ」

「お前の話は色々と聞いている。お前は本当に、あの女以上に救いようがないな」

「はははっ」

「何が、おかしい？」

「私の身柄を、押さえたいんでしょう？」

「……」

「アナタの言う通り、私は馬鹿だからね。これ以上野放しにしておくと、お父さんでもみ消せないような事態になるかもしれないしね」

「加藤恭介という男は知っているか？」

「うん、今日これから会う」

「やはり、沙耶春樹の下で保護されていたか」

「違うよ」

「違う？」

「天国にいたんだよ」

「……お前、薬でもヤツているのか？」

「はははっ、薬はもうヤツてないよ」

「ヤツていたということか……本当にお前は救いようがない屑だ」

「あとちよっとで家に帰るよ。その時は、私を自由にすればいいよ」

「私がどうするか、お前はわかっているか？」

「さあね」

「……つくづくお目出」

「でも、海に沈むのは冷たそうだね」

「お前」

「生きていくのって、辛いね。でも、自分を殺すのは怖い」

「そうか、それでどうして電話した？」

「最期にやり残したことがしたいの。その後に、加藤さんから身柄を引き渡すことになってる」

「やり残したこと？」

「お父さんにとっても、やり残したことだよ」

「それは、何だ？」

「桜井要の始末だよ」

……。

「……のぞみですか？」

「南さん」

「どこに、いるのですか？」

「どうしてですか？」

「何を、しようとしているのですか？」

「どうしてですか？」

「普通じゃない」

「……」

「普通じゃない……、どうして皆……いなくなったのか」

「そうだね、もう、普通じゃいられないんですね」

「どういことですか」

「言葉の通りです」

「分かるように説明しなさい」

「……」

「のぞみ　！」

「……人間と、怪物」

「それは？」

「怪物に罪の概念は通用しません。それは……人間ですらない」

「それは……」

「そんな人間を、理性の怪物、と呼ぶんですよね？」

「なぜ、今その話を……」

「怪物と会いました……本物の怪物と、会いました」

「誰と、会ったというのですか」

「怪物は、強いですね」

「だから　誰と会ったというのですか！」

「私の欲しかった強さです」

「のぞみ、質問に答えなさい！」

「それは、腕力じゃなくて、強さじゃなくて、優しさでもない。群れることでもない　」

「……」

「躊躇わないこと」

「そんなもの、人間ではない」

「そうですね」

「迷い続けるからこそ、人間です。何度も答えを見出しては打ちのめされて、それでも答えを見つけようとする。さまよい続けることこそ、生きていくことです　！」

「見殺しだッ　！」

「……」

「正しいことは、その信仰は、誰も救ってくれなかった」

「なに、を……」

「ごめんなさい、南さん　お父さん」

「待ちなさい、のぞ」

ツー、ツー。

春賀のぞみという少女の物語です。

私の出生は複雑でした。

父親を放すまいとして母が産んだ子供こそが春賀のぞみでした。

しかしその父親は、裁判の末ごく小額の慰謝料と養育費だけを渡すことになり、結局母親は捨てられてしまいました。

私はその母親から虐待を受けることになります。

母親にとって自らの娘は、愛する男との間に授かったものであり、自分を捨てた男の薄汚さの象徴でもありました。

愛しているのに、同時にそれ以上に憎しみが募る存在。

結局母親はいい母親になれません。

娘を殴るようになり、育児を放棄し、酒におぼれるようになりました。

私は、愛情に飢えていました。

彼女の母親の、ごくたまに見せる優しさ、それだけが私に与えられた僅かな愛情でした。

だから、母親にも愛されたかったのです。

しかし、願いは叶うことなく、母親は逮捕されてしまいます。

身寄りのない私は、父親の元に引き取られることになりました。

彼の娘を見る目は、酷いものでした。

そして、母親の出所と自殺。

母親の亡骸を目の前にした彼女は、父親に言われます。

お前が居なければ、死ぬこともなかっただろうな、と。

家を出た彼女は非行を繰り返すようになります。

それは、何の代償行為だったのでしょうか？

存在の証明と無条件の愛情。

私と、私の母親に優しくなかった世界を、平等に人々に与えてやりたかった。

自分と母親の、存在の証明。

それは結局、人々から暖かさを奪う。

結局私は、自分で生まれてくるべきじゃなかったと思うようになった。

その罪は、存在の証明。

無条件の愛情を求めるが故。

こんな世界、滅んでしまえばいい。

それだけが、存在の証明。

そうじゃない、と。

言ってくれた少年がいました。

壊れた私を暖かな、無条件の愛情で包んでくれた少年がいました。凍えそうなコンクリートの世界で。

私にとってはそれだけが、唯一の希望でした。

彼の与えてくれた七人の絆だけが。

私は再び体温を失っていく。

遡る。

遡る。

無知で、残虐な子供へと。

「春賀のぞみ、お前の心と引き換えに、お前の手に入れた力だ」
加藤恭介が、言います。

「……」

高揚感も、優越感もない。

淡々と思います。

権利を行使しよう。

心と引き換えに手に入れた権利を 行使しよう。

春賀のぞみは、怪物になりました。

裸の王様 桜井要

全ては俺ののぞむようになるはずだった。

「春賀のぞみちゃん、もう学校でも居場所ないよ。もうすぐ、仲間たちも皆いなくなるしね」

ざまあみる、クソ野郎。

お前に関わる全てをブチ壊してやる。

沙耶久と春賀のぞみ、あいつらに関わるヤツは全員破滅させてやると決めた。

なのに。

アイツのあののつぺりとした表情はなんだ？

まるでこの世の全てが無関心だと嘯くような傍観者の目は。

思い出した。

思い出した、畜生。

何が、仲間だ。

何を甘いこと言ってたんだ、俺は。

アイツは人間なんかじゃない。

狂ってるんだ。

春賀のぞみは狂ってやがるじゃねえか。

思い出せよ。

だってそうだろうが。

川端と園川 奴らに殺された仲間たちを思い出せ。

特に、園川はレイプされ、性器周辺の損傷が特に激しかった。

「なんだよ……あいつはよお……」

おかしい、脳のシステムがまともじゃない。

思考回路が人とずれている。

「へっ……」

飛ばされて、地面に背中を強かに打ちつけた。

「テ、テメ……エ……？」

針木市セントラル街のはずれの廃ビル。
ふわり、ふわりと埃が舞う。

「どういう、ことだよ……」

わけもわからず、声が震える。

銃が向けられている。

ワケが分からねえ。

なんだよこれはこれはなんだよ。

「恭介の、命令だぞ……？」

加藤恭介の名前を使おうとした。

「カッ」

一笑される。

なぜ……？

「仲介屋はこねえよ」

昨日まで仲間だった少年は、嗜虐の笑みを浮かべる。

「仲介屋……？」

昨日まで恭介に媚びへつらっていた連中は、まるで手の平を返したかのよう。

「ありや昨日までのゲストだよ。このチームのボスは唐風組なんだからなあ」

直感する。

向けられた銃の意味はつまり、俺はもう不要だということだ。

『だから授業だよ』

俺は、おれは、オレは、再び裏切られた。

『お前は、俺のコレになってくれるか？』

ワケの分からないまま逃げた。

とにかく夢中で、どう逃げたのかも覚えていない。

どうして逃げられたのかも定かでない。

銃を向けられながら生き延びたのは奇跡のようにしか思えなかった。

気がつけば俺は、ここにいた。

オレが最後にたどり着く場所は、やはりここだった。

「ピースかよ………」

クラブ・ピース。

のぞみたちと麻薬の売買を行っていた場所。

オレの転落を象徴する場所。

「こんにちは、桜井くん」

どくんつ。

心臓が跳ね上がる。

誰だ！

どこにいる？

女の声だ。

「この前と逆だよ、テレビ見なよ」

この前？

目に付いたのはオレが設置した液晶テレビ。

それが、オレが触っていないのに砂嵐を映し続ける。

「の、ぞみ………」

のぞみが、笑っていた。

「こんにちは、はじめましてお久しぶりです桜井要。組織から逃げ回り、仲間から裏切られた浅ましい世界の王様」

テレビに映ったのは、昔のように全てを蔑んだ笑い方をする春賀のぞみだった。

「なんで、テメエが………」

「にぶいなあ、相変わらずお目出度いね」
そうだった。

アイツはそんな風に全てを見下したような目をするオンナだった。
苛立ちの中に、どうしてか、懐かしさが混ざる。

「・・・・・・・・・・どういうことだ！」

「ゲームは、私の勝ちってことだよ。三年前の破滅ゲームの結末。
破滅するのは君だけ。でも、悪いのは桜井くんだよ？ 君が続けよ
うとするからこうなるんだよ」

「テメエ、何を言ってるやがんだ！」

「 高辻、日向」

背筋が凍った。

高辻、日向だと？

コイツは、何を言っているんだ？

「私の、大切な友達」

ト、モ、ダ、チ ？

何を言ってるんだ？

お前が、友達だと ？

「お前たちが手を出した私の友達だよ」

のぞみの瞳孔が開いていた。

違う。

違う、コイツは昔ののぞみじゃない。

昔のようにゲームで人を破滅させるような、異常者の気配じゃない。
い。

「それが、どうしたんだよ・・・・・・・・・・」

あざ笑おうとして失敗した。

鏡に映る俺は、滑稽なほどに引きつった笑い方をしている。

それは、昔ののぞみにはなかった素質。

「壊れたんだって」

淡々とした口調。

のぞみの心情をスポイルする。

それが余計に、底知れぬ怒りを表しているようで恐怖した。
だが、分かることもある。

[illegible]

L

ふらりと、後ずさる。

恐
か
つ
た。

な、なんなんだ、コイツは？

……この化け物は、一体誰だ？

歪んだ笑顔で。

醜い表情で。

ありつたけの狂気をぶつける。

プツンツ。

「はあはあ……」

テレビの電源を切った。

「ちくしょうが……」

なんなんだよ、これは？

先に裏切ったのはテメエじゃねえか！

フザけんな、オレの方が正しいだろうが！

だが、そんな呪詛がこの状況からオレを救ってくれるはずなどなかった。

誰にも届かない。

急いでクラブを離れた。

いつの間にか、雨が降っていた。

「居たぞ」

野太い叫び声が聞こえる。

マズい！

逃げる逃げるニゲロ

走る。

後ろは恐くて振り向けない。

足が絡まる。

顔から水溜りに転んだ。

「ク、クソ……」

足音が、聞こえた。

急いで立ち上がる。

逃げる、逃げる、逃げる。

路地裏の、適当なドアを開けた。

転がり込む。

「はぁはぁはぁ」

心臓の音がうるせえ。

酸素が足りない。

肩で息をしながら、辺りを見回す。

六畳ほどの部屋。

どこかの飲食店の従業員休憩室だろうか？

ヤニ臭かった。

「一時休憩かな？」

「なつつつ　！」

肩が跳ね上がる。

「いいよ、夜は長いからね。でもね　モタモタしてると、捕まるよ？」

辺りを必死に見渡す。

「ラ、ラジオ……？」

机の上に、ラジオが置かれていた。

ラジオはノイズを発していた。

「捕まったら、分かるよね？」

ノイズに混じり、のぞみの声を発していた。

「うわあああああああつつつ　」

「えっ　誰？」

休憩室入り口のノブが回る。

叫び声を上げながら。

俺は再び、雨の中へと飛び出した。

裸の王様 春賀のぞみ

「現在、桜井は中華万来の休憩室から再び外に出た」

加藤恭介さんが、静かに告げます。

「どちらに向かつてる？」

「伊勢崎二丁目から三丁目にかけて逃走」

「三丁目春雷亭の裏路地と十七号線に五名ずつ配置。絶対に、セントラル街から外に出すな」

一瞬で捕まえることも出来ず。

でも、それじゃ苦しくない。

「四丁目に向けての道の配置は五丁目リストランテの角へ移動。四丁目に誘い出して」

「了解」

逃げ惑えばいい。

必死な顔して、滑稽に這い蹲ればいい。

絶望しろ。

お前が生まれてしまったことを絶望しろ。

生きていることが、どんなに絶望的なことが。

その身を持って、思い知れ！

「四丁目入り口の監視カメラより、桜井の画像が映りました」

「出して」

「了解」

薄暗い部屋、モニターが幾つも並ぶ。

その一つに、桜井の必死な形相が映し出された。

顎が上がり、口から涎を垂らしている。

銃声。

「うわあああああああつっ！」

スピーカから、ノイズに混じって悲鳴が聞こえる。

「あはははははっ」

あはははっ、ひどく無様だね。

おかしくて、おかしくて。

身を折り曲げて、お腹を抱えて笑った。

[illegible]

⌈
⋮
⌋

私だけが笑っている。

加藤恭介や、他の少年たちは、笑っていなかった。

恐れのような、哀れみのような、そんな感情の入り混じった視線をこちらに向ける。

「いつまで、続けるつもりだ？」

加藤恭介が私に尋ねる。

「朝が来るまでには決着をつけるよ」

「朝が来るまで、ね」

午前零時を回ったばかりだ。

朝が来るまでは後五から六時間。

長いでしょ、桜井要？

ギリギリまで、遊んであげるよ。

息が続かなくなったのか、桜井は再び屋内へと入る。

「?」

「四丁目キャバクラ」「クラブ蓮」です」

「そこは管轄外だね。そのママに連絡とって唐風の名前出して」

「遊びで余りシマを荒らすのはまずいんだがな」

「沙耶春樹の許可は取ってるよ？」

「……ウェイのようなことを言う」

ぽつりと、加藤恭介は呟いた。

「炙り出して」

「……了解だ、お姫様」

慇懃に礼をする。

「お姫様？」

「マリー・アントワネット」

「なるほどね」

「まあ君は、持たざるものだがね」

「違うよ」

「違うないさ、キミの今行使する力は、キミの力じゃない」

「マリー・アントワネットも、きっと持たざるものだったんだよ」

「王女様が、か？」

「彼女もまた、欲深い。それはね、本当に欲しかったものが手に入らなかったからだよ」

「……なるほどね」

再び悲鳴。

苦しみの喘ぎ。

もっと、いい声で泣け。

もっと、無様に叫べ。

「では、マリー・アントワネットが本当に欲しかったものとは？」

加藤恭介が尋ねる。

「……そうだね。」

それは奇しくも、私と同じものだったのだろう。

「 真実の愛」

「ああああああああああっ」

ぞくり、と背筋を走る快感。

狭い密室の中、少年の叫び声だけが木霊していた。

遡る。遡る。
無知で、残虐な子供へと
。

裸の王様 ウェイ

叫び声。

笑い声。

銃声。

入り混じり、混沌と化す。

素晴らしい。

CDにして販売するべきだ。

目を閉じて楽しむ。

金持ち達が、ワインを片手にクラシックを楽しむように。

それが、オレの場合はスクリーミング・シヨウであっただけだ。

「随分と、派手なことで」

悠希がぼつりと呟いた。

ウォンと加藤恭介は、テレビ局のロケ車で街中を移動しながら桜井を追い詰めていた。

目を開ける。

この街が見下ろせる高層ビルの一角。

人々が粒に見える。

深夜だというのに、街は粒たちで溢れている。

そんなメインストリートから一本入れば、叫び声の木霊する世界が展開されている。

まるで『地球儀の世界』の縮図みたいじゃないか。

愛や自由というメッキの下に、どうしようもない矛盾を抱えた針木市という街は 。

「ウォンの『素質』ね……」

春賀のぞみ、ウォン 。

オレたちは、キミのことをそう呼んだ。

そう、この物語の主役はキミだ。

「貴方は、気づくのが遅かったわね」

「ウオンの素質についてかい？」

「ええ……」

悠希がオレの隣に並ぶ。

二人で街を見下ろした。

「悠希は、始めから春賀のぞみがこうなることは分かってた？」

「可能性の一つよ」

相変わらず恐ろしい。

オレは思う。

オレしか知らない。

沙耶悠希の恐さは、オレしか知らない。

彼女がここまで変貌することも視野に入れていたってことだ。

春賀のぞみ ウオン。

彼女はとても欲深い。

たった一つ欲しかったもの。

無条件の愛情。

言い換えれば、真実の愛とも言えるだろうか。

たとえ、それがまやかしても、僅か一欠けらでも。

その為ならば彼女はどこまでも残酷になれる。

怪物に戻ることも厭わない。

ははははっ。

素晴らしい。

久、君はどこで見ている？

それとも、未だ眠り続けているのかい？

キミの作り上げた最高傑作だ。

ウオンが、完成したんだ。

彼女の仲間に手を出したものは破滅する。

彼女の手で破滅する。

躊躇わないということ。

ただそれだけが、彼女の手にした力だ。

「……」

無言で入り口へと歩を進める。

「どこへ？」

「分かってるだろう？」

そして、もう一人の最高傑作。

生まれながらにしての『人間』のマスターピース。

桜井要。

一目見たときから決めていた。

アイツは、オレが愛してやると。

一目惚れというやつだ。

全てを他人のせいにして、反省もなく、酷く自己中心的な憎しみで稼動する。

他人から搾取して、弱きを責める。

他人から搾取されて、道徳性を盾にする。

矛盾に溢れた存在。

素晴らしい。

素晴らしすぎる　！

そんな人間を目の前にして、何度齒がゆい気分を味わってきたことか。

「……物好きね、貴方も」

だって、もったいないじゃないか。

こんなに面白いショーが、今真下の世界で行われているんだ。

恋人が待っている。

愛人が待っている。

セックス・フレンドが待っている。

ありったけの愛をぶちまけあいたい。

汚物に塗れあいたい。

アイツの死体を愛してあげたい　。

想像するだけで、背筋に電流が走った。

「嫉妬しそうだわ　」

「桜井に、かい？」

「ええ……そうになりたいとは思わないけど」
「見下すように。」

「悠希、次の桜井が誘い出されるポイントを携帯で指示してくれ」

「ふう……分かったわ」

仕方なし、といった表情。

「祭りに参加してくるよ」

始めよう。

ウォンの物語も、佳境へと至る頃合だ。

裸の王様 桜井要2

「はぁ……はぁ……」

身体が、冷てえ……。

「はぁ……はぁ……ウツ」

吐いた。

喉から、奇妙な音が漏れて、胃酸の香りに気持ち悪くなる。

これで何度目だ？

もう吐けるものなんてない。

胃の中はカラカラだ。

胃だけじゃなく、内臓が全て縮こまっていくような奇妙な感覚。

限界だった。

身体も、心も、限界だった。

オレが、何をした？

ここまでされなくちゃいけないことだったのか？

なんで、こうなった……。

なんで、オレが……。

「居たぞ」

「ひい」

なのに、オレはまだ逃げようとしていた。

逃げ場なんてどこにもない。

一体何人の兵隊を使ってやがる。

逃げ場という逃げ場は全て固められている。

セントラル街から逃げる事が出来ない……。

どこをどう走ったのかよく覚えていない。

三年前のように、今度は一人ぼっちで、針木の夜の路地裏を逃げ回った。

息が切れる。

心臓が破裂しそうだ。

ちくしょう、ちくしょう、チクシヨウチクシヨウチクシヨウ。

一秒が永遠のようで。

どんなに進んだって光は見えない。

十三階段を上るように、オレは絞首台の上に乗っていた。
撃たれた腕の感覚は、既にない。

「畜生……畜生……」

全身から、止まれという警告が鳴り響いている。

筋肉も、神経も、既にボロボロだった。

だが、止まってしまえば奴は必ず。

「どうしたの……、もうお仕舞い？　じゃあ、もう死ぬ？」

春賀のぞみの声が、どこから聞こえる。

街頭のテレビ、入り込んだ飲食店のラジオ、公衆電話。

監視されている。

俺の居場所は、監視されている。

認めまいとしていた、心の闇に押し込んでいたものが鎌首を擡げる。

それを認めてしまえば、オレは二度と動けなくなる。

「言っただでしょ、お前だけは許さない、と」

そしてついに、オレは膝をついた。

緊張の糸が一気に断ち切れる。

全身から力が抜けた。

「ああ……」

逃れられない。

「あああああ……」

アイツからは、逃れられない。

「終わり、だ」

心が塗りつぶされようとしていた。

そして。

「……会いたかったよ」

顔を上げる。

「おま、え……」

「いい表情だ、オレを誘う表情だよ、桜井」

「沙耶……」

路地裏の果てに、沙耶久が立っていた。

欠陥者2 ウェイ

ツいてるよ。

今日のオレは本当についてる。

アイム・ソー・ハッピーだ。

暴力団より、ウオンより早くコイツを見つけられるなんて、なんて幸運なんだろうね。

悠希に感謝しよう。

彼女の優秀さに。

「デメエ……よくもオレを嵌めやがったな……」

そう、その呪詛を待ちわびた。

「待ちわびた」

本当に待ちわびた。

影として存在してきた日々。

キミを目の前にしながら、何もできずに幾度齒がゆい思いをしたか。

オレは、何度も久に嫉妬したんだ。

キミを目の前にして、何もしない久を。

焦らされて焦らされて。

ああ、オレは今とても敏感だよ。

ちよつとの刺激でスパークしてしまいそうだ。

ああ、本当に待ちわびたんだ。

大通りのネオンの明かりが少しだけ差し込む薄暗い路地。

桜井要が、どこかぼんやりとした視線でこちらを見つめている。

「沙耶」

桜井は呼びかける。

「桜井、要」

親愛を込めて答える。

ありったけの、優しい声で。

桜井は苦悶に顔を歪める。

目線を下げて、桜井の右手に収まるナイフを見つめた。
そう。

キミの獲物は昔もナイフだった。

オレは大好きだよ。

直情的なキミらしいじゃないか。

だが、昔はそれで久を刺すことはできなかった。

……なら今は、どうだい？

「……それは、ルール違反じゃなかったのかい？ 沙耶には手を出すなってさあ」

「ああ……許可されてねえ」

怯えと憎しみが交差したような、そんな複雑な表情。

「それどころか……オレはもういらなから死ねっつてよ」

「……」

「体よく利用されて……、なんの見返りもねえ」

「くっ……、はははははっ」

「何が、可笑しい……」

「くくくくくっ、はははっはははっ」

「！」

滑稽だよ、滑稽すぎて喜劇だ！

キミはやっぱり最高だ。

未だキミは、誰かのせいにしてようとしている。

まだ言葉を捜すというのかい？

自分だけに都合のいい言葉を。

救えない。

本当に救えない愚かな底辺。

人間の最高傑作だ！

恐怖に震えながら、キミは泣き叫ぶというのか！
オレは悪くない、ってさ！

「何を……したんだ？ テメエは……」

「何とは？」

そう。

ならばもう、オレのせいにするしかないだろ？

キミはいつだって自分の代わりに責任をとってくれる誰かを探していた。

被害者ヅラの加害者。

それが桜井要という人間だ。

最も人間らしい人間。

だからこそキミは人間の最高傑作なんだよ。

「シラバつくれてんじゃねえぞ！」

恫喝もどこか弱弱い。

「突然、死んでくださいって……納得できるかよ！」

「納得する必要なんてないんだよ、キミはここでオレの欲望を満たすために死ぬんだ」

「どうせ汚え テメエのことだ、沙耶の名前を使っ たんだろっが！」

「はははっ、嘘であれ、踊らされたにしろ、組織の力で散々好き勝手してきた君が言える言葉かい？ 最高だ、ロジックすら崩壊する。キミの前では倫理や道徳なんて全く持って無力だね」

「黙れ、テメエ本性を現しやがったな？ オレは自分で手に入れた。」

これはオレの力だ！ テメエのは、生まれてなんの苦労もなく親の七光りを振り回してるだけだろうがぁ！」

「自分の力？ オレのチカラです！ ははははははっつ」

「その笑いを止めろっつ
！」

「止めてくれ笑い死にだけは勘弁だ！ 最高だ！ その無様さ！」

滑稽さ！ 惨めさ！ 矮小さ！ 人間の持つ汚さの集合体みたいなヤツだよキミは！ ああ、最高だ。最高にブチ殺してやりたい程愛

してるよ！ そう、愛してる！ これはプロポーズさ！」

「この狂人があゝ！」

「そう、キミを必要としているのは世界ではもうオレしかない。
桜井要、桜井くん、要くん、ほら、キミの名前を読んでもくれるのは
オレだけだ！」

「ザケンじゃねえよつつ！」

「オレの大切な大切な玩具。大切に愛してあげたいんだ。大切に！
残酷にさあ！」

「オレは、お前のオモチャじゃねえゝ！」

「へえ……」

「なけなしのプライドを振りかざすかい？
だが、それを否定してしまえば。」

「じゃあ、キミはなんだい？」

「オレは……？」

「声は雨音にかき消される。」

「オレは……」

「桜井の瞳孔は開いていた」

「オレ、は……？」

「そう、オレに否定されれば、キミは一体何者だというんだい？」

「家族はもういない、キミを置いて蒸発した。」

「仲間はどうもない、皆死んで、のぞみはもはや久のものだ。」

「恭介は偽りだ。」

「彼にとってキミの価値はもはやない。だからキミは見捨てられた。
キミはやはり、たった一人の世界の、哀れな『裸の王様』な
んだよ。」

「オレは……なんなんだよ……」

妙にしつくりとくる言葉だ。

哲学的じゃないか。

人間関係、立場や肩書き、名前の意味を失い、純粹に個人だけとなった時、人は途端に自我が希薄になったように感じてしまうだろう。

もしも沙耶の一族を始め、七人の輪、南神父、久を知っている者が世界からいなくなった時、沙耶久という名前だけが残る。

その名前に価値はなくなる。

どちらがウエイでどちらが久か、そんなものは些細なことになるだろうね。

呼んでくれる者のいない名前には、なんの価値もないからだ。

他人が認めてこそ自己は成り立つ。

そう。

オレがキミを認めなければ、もはやキミという自己は成り立たない。

キミは今度こそ、オレ以外の世界の全てから見捨てられた。

つまり、何者でもないまま死ぬんだよ。

「桜井、要」

もう一度、親愛を込めて名を呼ぶ。

桜井の口元が歪む。

泣きそうに笑う。

それは、キミの歡喜でもあり、同時にどうしようもなく屈辱でもある。

「沙耶……」

桜井も、呟く。

「キミはなんだい？」

「そつだ……オレは、オマエの敵だ」

「そつ、そしてトモダチだ！ 花丸だ！ 満点をつけてあげたくな

「る！」

「沙耶あああああ」

「キミにとって、たった一人の！ 唯一無二の存在さ！」

桜井の体が一瞬沈み、鋭い動きでナイフが突き出される。

オレの腹部を狙ったはずのナイフは空を切る。

対象を失った桜井の体はバランスを崩して、そのまま水溜りへ倒れた。

「えっ？」

水溜りに、赤色が混ざる。

「どうしたの？ 耳に経を書き忘れたのかい？」

「み、耳……？」

桜井は右手で右側の耳たぶを掴もうとする。

「あああ……」

うめき声と共に、耳たぶのあつた場所を押さえる。

プライスレス。

久、キミの買ったナイフの値段だ。

愛の値段は、プライスレス。

彼の右の耳たぶは、地面に落ちた。

「あああああああああああああつつつつ！」

[illegible]

喧嘩慣れをした者の動きではなく、純粹な殺意に身を任せた猪の様な突進。

「畜生、畜生がああああああ」

叫び、今度は首筋を目掛けて大振りにナイフを振るう。

あまりにも原始的な攻撃、泥臭い攻撃だよ。

でも、キラらしい。

大降りでおれの脳天を目掛けて、ナイフが振り下ろされる。

「あつ」

桜井の間拔けな声が漏れる。

シューっ、と音を立てて返り血を浴びる。
ナイフが生えている。

桜井の右の手首から、ナイフが生えている。

桜井は叫んだ。

もはやそれは、言葉ではない。

「最高だよ！ 桜井要！」

「つつつつつつ！」

解読は不能。

桜井は激情に表情を歪める。

理性を手放した。

剥き出した。

剥き出しの、桜井要だ。

ところで、気づいているかい？

キミはね、激昂しながら笑ってるんだよ？

心の中では、認めているってことさ。

ナイフが何度も、キラキラとネオンを反射して軌道を描く。
酷く、拙く、ダンスを踊るように。

そう、僕たちは相思相愛さ！

キミは憎いとオレに愛を注ぐ。

オレは愛しているとキミに毒を注ぐ。

最高の相思相愛じゃないか！

踊るたび、血が舞うたび。

睾丸が反応し、腹の底から何かがこみ上げてくる感覚がする。

「イキそうさあ……イキそうさああああ
最、高だよ！」「！」

ああ、気持ち悪い。

ああ！

射精してる！

ホラ、射精してるんだ！

セックスで味わえない光悦の境地だ！

ニルヴァーナさ！

「気に食わねえ……」

うわ言のように。

「見下しやがって……あの時もそうだった」

突進。

避ける。

倒れる。

「どいつもこいつも……自分は世の中の全てを知ってますって顔で

……ゴミのようにオレを見下した」

立ち上がる。

その度に何度も興奮が昂まり、再びオレは勃起する。

「どいつも、こいつも……オレを舐めやがって……」

不平不満を漏らす桜井の表情は、まだ幼さの残る少年のモノ。

そう、幼さは無垢の塊。

無垢とは、人の生まれ持つ悪意の総称さ　！

エゴの塊、無知という責めようのない最高の悪意。

「それこそが、人間の本質だ！」

下から上へと振るう。

桜井の左の耳たぶも宙を舞った。

「世の中を舐めていたのは、キミたちの方だろ？　楽しかったかい

？　身の程も知らずに粹がった気分はどうだい？　幸せかい？　幸

せだっただろう？　キミたちは、そんな矮小なものが大好きだから

ね！」

「あああああつつつつつ！」

「はははっ」

会話など、成立していない。
最高だ、トリップする。

意識が空気に同化しそうさ　！

『可哀相だね。のぞみもきつと、こんな世界にいたんだ』
えっ？

この口が、言ったのか？

「えっ」

のぞみの名前が出たとき、桜井の動きが止まった。
目にゆつくりと、理性の色が戻る。

なんだい、今は……。

「……テメエが、のぞみの名前を口にするんじゃない
ちが、う……？」

オレじゃない　！

「……誰だ」

「ワケがわかんねんだよっ、テメエはよお！」
再び会話が成立する。

だが、そんなことは最早どうでもよかった。

異変だった。

恐ろしいほどの異変だ。

久の気配、なのか？

意思に反する言葉が口に出たのだ。

『のぞみを救えるはずなどなかった』

なぜ後悔をする？

この気配、吐き気がするような甘さ！

久よ！

間違えない、キミだろう！

何日ぶりだ？

悠希に壊されそうになつて以来かい？

嬉しいよ、消えたものだと思つていたからね。

また会えて嬉しいよ！

はははっ……。

そして、何をしにきた？

中途半端に決意して、意識を手放して。

期待外れの沙耶久が　　！

「おっと」

「クソ　っ」

危ない危ない、殺し合いをしているんだつた。

危ないところだったよ。

そうそう……久、キミが消えなかったのはとても嬉しい。

でもね、今は眠りなよ。

人のセックスを邪魔するのは無粋でしょ？

『黙れ　』

そう、性交だ！

ちよつとばかり人と違うけど、これは立派な性交だ！

一方通行で挿入もフェラチオもなくとも、これこそがオレをスパ

ークさせる最高の悦楽なんだよ！

『代われ　ウェイ』

眠れよ、久。

お呼びじゃないよニセモノ。

『分かつてる　、この感情も、痛みも、結局全ては……』

……。

キミは、期待はずれだったじゃないか。

『……』

キミは結局、悠希を救えなかったんだ。

『悠、希……？』

沙耶春樹を殺すということは、そういう意味なんだよ。

それを分かっているながら、春樹はオレ達を拾った。
キミを恐怖で、オレを憎しみで飼いならした。

『お前は、どうして……？』
のぞむからさ。

悠希が、そう望むからさ。

『だが、悠希は僕達を　！』
始めに裏切ったのは、オレの方なんだよ。

桜井のナイフが振りかざされる。

だがヤツは、狡猾さを取り戻している。

深く踏み込まず、致命傷を避けようとしている。
目には理性が宿り、オレの隙を待ちわびていた。

『……』

久の声が、止まる。

ごめんね、そういうことなんだよ。

『マスター……って』

そう。

それはキミのことでもあるし、俺のことでもある。

オレ達は、コインの裏表だ。

しかし、常に状況は傾きつつある。

キミには、沙耶久の希望しかなかった。

道徳、倫理、すなわち人への希望　。

『希望……』

そんなキミが、絶望から世界を拒絶した。

それは絶望だった。

沙耶春樹を殺すという選択は、キミの中では、希望ではなく絶望
だった。

オレの絶望は、少しずつキミへと流れていく。

キミの積み重ねてきた偽りの希望は、少しずつメッキが剥がれよ

うとしている！

『……偽り、ね』

分かっているだろう？

キミが、『スイッチ』と呼んでいるものだ。

キミでいらなくなる。

春賀のぞみが好意を寄せるキミでいらなくなるということだ。

だったら、大人しく眠ってくれないかな？

『僕は、本物になる』

「それが、どういうことになるか分かっているかと聞いている

！」

思わず、叫んでいた。

「死ね」

桜井の声が、重なる。

意識を、久に傾け過ぎていた。

まずい。

直感が告げた。

久に気を取られたその空白の一瞬だった。

そこに、桜井のナイフが最短距離で近づいていた。

「しまっ」

桜井の顔が、愉悦に歪もうとして。

甲高い銃声が響いた。

「ガッ」

蛙のつぶれた声とは、よく言ったものだ。

飛ばされた桜井の右腕からは血が滲み始めていた。

振り返れば、硝煙のにおいが漂ってくる。

加藤恭介が、銃を向けていた。そして、その後ろには。

「久くん、じゃないね」

三年前のウォンが、破滅を望んだ少女が、そこに立っていた。

「ドイツもコイツも、人のセックスを邪魔してくれちゃって、ねえ、ウォン」

「なんだ、ゲイかお前は？」

加藤恭介がおかしそうに笑う。

「オレの愛は性別も国境も越えるんだよ、それよりお久しぶりだね春賀のぞみ。詰まらない罪に苦しむのは止めたかい？」

「あぐっ……」

桜井は蹲り肩を押さえている。

高揚感は、一気に冷めた。

「罪だから何もしなければ、結局全てを失うしかないでしょ？」

いいねえ、昔の表情だよ、キミのその表情は待ち行くスーツを着た大人たちの、生きることに疲弊した諦念によく似ている。

「おめでとう。キミは、自分に都合のいいものしか信じない、真実を歪曲して虚言を好む、『地球儀の世界』の人間から脱皮した」

そう、彼女がここにいるということは、素晴らしいことなんだよ久。

『すぐに、代われ』

恐い声だね。

代わってどうする？

キミがそうやって憎悪を向けられる相手は、未だオレしかない。クソ偽善者の沙耶久。

どんな心境かは知らないけど、キミは桜井への憎悪を膨らませて壊れかけたじゃないか。

キミにその感情は無理だよ。

肯定してしまえば、全ての価値観が裏返るぞ？

春賀のぞみをどうやって救うんだい？

価値観が歪めば、キミはきっとオレになる。

断言しよう。

キミは、オレよりも酷いモノになる　！

『とりあえず君には、引きずり落ちてもらう瞬間に意識がぐらり、と揺れる。』

「なっ　」

酷い頭痛　。

こんなことは初めてだ　。

正常な状態で休眠している人格が干渉するなんてあり得ないことだった。

確かに、今のオレは少し興奮している。

だが、これは　。

いつだって干渉は精神に乱れが生じたときだった。

絶望、憎悪、苦痛　。

つまりは、無意識のうちにお互いがお互いを呼び合うとき　。

「インナー、マードー？」

頭を抑えて膝をつく。

クソッ。

イレギュラーだよこれは。

ぐらんぐらんする。

強制的に精神を乱されたような、酷い状態だ！

「久、くん　？」

ウォンが、一縷の希望の視線を向ける。

シャット・ダウン。

夢だと分かる。

夢だと分かりながら夢の光景を眺める。

意識が混濁とした状態。

黒い雨、難民たちの足取り。

雨がやがて波となり津波となる。

周りが泡立ち、オレは沈んでいく。

深く、深くへ。

これは、久の原風景？

沙耶久の中に眠る、沙耶久たちの総意。

深海の最奥に、墓標が立ち並ぶ。

いくつも、いくつも。

その全てが、『沙耶久』だったものの墓標だ。

「ウェイ」

オレを、呼ぶ声。

振り返る。

この時初めて、久とオレは、対峙した。

深海魚たち 沙耶久

深い、深海を漂っていた。

前後の記憶もはつきりしない、ただ浮遊感だけが漂う意識の淵。
ようこそ、機械仕掛けの沙耶久。

その声は、ウェイのように愉悦に満ちてはおらず、深い悲しみと
優しさに満ちていた。

君は、誰だい？

君こそ、誰だい？

キミこそ、ダレだい？

きみこそ、だれダイ？

深海の中で、無数の深海魚たちが一斉にこちらを見る。

自分が異質であるかのような居心地の悪さ。

深海魚たちは、分裂と融合を繰り返す。

物理法則を無視したように重なり合い一つとなり、千切られたよ
うに分かれていく。

それぞれが個を確立していく。

生まれては消えて、消えては生まれて。

そして、腐れ落ちていった。

ここは、なんだい？

此処とは、何処？

ココとは、ココ。

個々とは、何？

無数の深海魚の群れの中から一匹が近づいてくる。

敢えて、彼と呼ぼう。

彼も、体の半分が腐れ落ちていた。

その魚が体と触れようとする瞬間、接触の感触はなかった。

実体のない立体映像のように、彼は僕の体内へと侵入する。

その瞬間、急激に意識が火花を散らせてスパークする。

視界がホワイトアウトする。

「沈黙は、ノーということかしら、ウェイ」

僕らの自室へと舞台は移動していた。

不思議な感覚だった。

僕は僕でありながら、浮遊している。

無重力だ。

僕は僕でありながら、体の感覚がありながら、体を動かすことができない。

送信の出来ない、受信するだけの存在だった。

「さあね、久がどうなったかなんてオレにも分からない」

僕じゃない誰かが、口を開いている。

ああ、ウェイか。

「だったら、消えたのでしょうか？ 他の生まれては消えていった人格と同じように」

「……本当に彼は消えてしまうのかい？ 信じられないね。感覚が無理だと告げる。彼は、沙耶久じゃない。いわば沙耶久というハードの中にインストールされたプログラムさ。そんな自分のものじやない人格を統合することなんて可能なのかい？」

「少なくとも、春樹は可能だと言っているわ。沙耶久とはその為の人格だと」

「春樹の言葉だ、どこまでが本当でどこまで嘘かなんて誰にも分からない」

プログラムされた沙耶久。

プログラムチルドレン。

視界は反転し、僕は再び深海へと投げ出される。
さっきの彼が、口を歪にして笑う。

ボクたちの中に埋め込まれた異質なる存在。

ボクたちを殺すもの。

ボクたちは生まれては死ぬ。

生まれては殺される。

鮮やかに。

残酷に。

美しく。

醜悪に。

キミはボクたちを殺していく。

キミたちがのぞみながら生まれたボクを、キミが殺していく。

その中でもボクは最も新しく、最も短い。

そう、生み落ちる前に腐っていく。

そして彼は、ボクの目の前で腐れ落ちていく。

再び、無数の深海魚の群れの中から一匹が近づいてくる。

今度は、彼女と呼ぼう。

彼女も腐れ落ちていた。

その魚が体と触れようとする瞬間、接触の感触はなく、実体のない立体映像のように彼女は僕の体内へと侵入する。

その瞬間、急激に意識が火花を散らせてスパークする。
視界がホワイトアウトする。

「……世界は、突然変わってしまったのよ」

僕は、女言葉でそう言っていた。

今度の舞台は屋根裏部屋、教会にいた時代の景色。

ウェイでもなく、僕でもない誰かの物語だった。
そうか……。

沙耶久は、二人じゃなかったのか。
何人も居た。

僕の中には、何人もの僕が居たんだ。

「あんなのじゃなかったの……あんな平気で人を傷つけるような、
そんな冷たい世界じゃなかったのよ……！」

幼い、世界で生きていく辛さを知らない子供の傲慢だ。

今よりも小さな僕の手は、誰かの首を絞めていた。

「……もつと暖かだったの」

失った者を嘆き、悲しいという感情だけで泣き言を漏らす。

何となく分かった。

世の中の全てが善と根拠もなく信じ、そうじゃなければ裏切られたと錯覚する。

これは、そんな『少女』の物語なのだ。

こんな子供を、彼女はどんな思いで見ていたのだろうか。

首を絞められる少女、白い髪、赤い目のウサギの少女。

君の目にはどのように映ったのだろうか。

……。

君は、一体誰？

「アナタは、必要ない……」

ウサギの少女はただ、そっけなく一言だけ。

「デリート」

糸が切れたように僕の体中から力が抜けていく。
視界は暗転し、聴覚だけが最期まで残り続ける。

「イマジナリーフレンドは、まだ上手く作動していない」
ウサギの少女は、最後にそう言った。

この言葉の意味を吟味してみる。

多重人格者において、患者の精神の安定の為に生み出される存在。それが、イマジナリーフレンドと呼ばれる。

……意図的に作られた僕こそが、それなのかい？

そう。

イマジナリーフレンド、コードネームファウラ。

キミの名前はファウラ。

ウェイという基本人格を救う為にインストールされたインナー・マダー。

内なる殺戮者。

調和と安定と淘汰の存在。

そう、ワタシも消される。

キミが無意識で、ワタシをコロしたの。

ひとごろし……。

この、人殺し　！

キミは、最低のブタ野郎よ　！

ぶくぶくと泡が立ち、彼女だったものはバラバラの欠片になって沈んでいく。

深く深く、彼女が沈んでいくのを見届ける。

人殺し　。

その言葉が何度もしフレインし、脳内を支配する。

なのに、言葉の意味が理解できない。

どうして……。

一体、何を言っているのか。

その海底に不思議な建造物たちが見える。

海底都市の伝説のような神秘的な光景。

彼女は、その都市の中に消えていくのだろうか。

……っ！

……違う！

アレはそんなロマンティックなものなんかじゃない！
目が慣れて来る度にその光景がなんなのか理解する。

……墓標、墓標、墓標。

海底を埋め尽くすほどに広がった無数の墓標たち。
気づいた瞬間に海は紅く染まる。

幾多にも重ねられた憎しみのミルフィーユ。
鉄の味に塗れた鮮烈なイチゴジャム。

ああ……。

酷すぎる。

醜悪すぎる。

沙耶久の中は、こんなもので出来ていたのだ。

そう、ボクたちはそうやって淘汰され続けてきた。

それがキミの存在意義。

無数の深海魚の群れの中から、中心にいた大きな一匹が近づいてくる。

彼も、何かを伝えたいのだろうか？

キミに、希望を見せたい。

幾度も悪魔に産み落とされて、同化させられて、そして再び産み落とされ、永遠に殺され続けるボクたちの希望。

キミが夢見る希望とは、無条件に信じようとするものとは、
ボクたちの希望の借り物。

ああ……。

返せよ。ボクたちの希望を返せよ。

そんな、バカな。

返せよ、返せよ、返せ！

これは、ボクの、心だ　！
返せ返せ返せ返せ返せ力エセ力エセ力エセ力エセ力エセ力エセ力
エセツツツツ　！

彼が僕の体内へと侵入する。
そして、スパーク。

ホワイトアウト。

「おもしろいことを聞くのね」

「おもしろい、こと？」

白い髪の毛、赤い目の、ウサギの少女　。

「新しいキミ。キミは、誰が悪かったと思う？」

「……」

僕は答えない。

「もしも、原子炉を融解させようとした人が居たとしたら、その人が悪いのかしら？」

「当然だよ、……もし、そんな人がいるなら、その人が皆を不幸にしたんだ！」

「でも、それに踊らされて狂った人たちが、あの人を×××したのよ？」

ウサギの少女、少女なのに妖艶に笑う。

「それは、被害者？」

「……」

「キミの姉さんが捕まったときに、ただ傍観するだけで止めてくれなかった人は？」

「それは……」

「その時に何も出来なかったキミじゃないキミは？」

無力は罪。

そう少女は糾弾したのだ。

そういえば、沙耶春樹も同じ事を言ってた気がする。

『何も知らないということは、人を見殺しにするための免罪符だ、罪ではない、合法的な悪意であると言える。無力であることもこれと同じ。いつでもお前たちにチャンスや未来があるなどとは思わないことだ。今が全てだと思え』

ああ、世界はこんなにも薄汚れている。

世界はけして、優しくなんてない。

「例えば、人のお金を盗るのは悪いこと？」

「当然だよ」

「そのお金が、誰かを騙して手に入れたものだとしても？」

「……それは」

「誰かが幸福になるために誰かを不幸にする。たった今でもこの世界のどこかでそれが行われている」

「だけどその結果で……もし、誰かが死んでしまったなら、多くの人を不幸にしたなら……それは悪いことじゃないか」

意地悪く少女は笑う。

「その一人を殺すことで、他の多くの人間が救われたとしたら？」

「情状酌量の余地ありってヤツ？」

「難しい言葉、知ってるのね」

「茶化さないでよ！」

「でも、世界に本当の意味で情状酌量という言葉はないのよ」

「どういうこと？」

「地球儀の世界に人の意志はあっても、自我はないもの。そこにはルールがあるだけ」

ぽかんと口を開いている。

当然だ。

そんな難しい哲学の話が、子供に分かるはずがない。

「法律やルールが定める行為を犯したら悪い。その行為に対して、裁判官や道徳観という暗黙に定められる背後関係が見られた場合には情状酌量となる。世界とは、云わば六法全書の拡大版なのよ」

拡大版、か……。

つまり少女が言いたいの、十人のうち八人以上の世界の価値観が重なる部分の意志やルールこそが世界ということ。

「多数決至上主義、それを民主主義と言うの」

そして少女の顔に影が落ちる。

「逆を言うならば……世界は、八人の人間しか救えない、ということになる。じゃあ、その六法が取り決めた情状から取り残された二人の人間はどうすればいいの？」

「それは……」

「取り残されたキミとワタシは、どうするべきだと思っ？」

……僕じゃないボクの感情が、上流から流れ込んでくる。

ああ、そうか……。

それを助けたいと、君は思っただね。

ウサギの少女を救いたいと、君は思っただね。

それが、君の希望だった。

僕の希望でもあった。

そう、だから僕は、のぞみを助けたいと願った。

重なつたから。少女の赤い目と、のぞみの目、慢性的な諦念に満たされた目を。

これ以上無力でいたくなかったから。

そして彼もまた、同じことを考えていた。

共有する感情。

恐らくは、彼のものだった感情。

僕に、受け継がれたもの。

「でもね、彼は逃げた」

声は、墓地から聞こえた。

「ウェイ」

墓地に手をかけて、悠然と彼は佇む。

「変わってもらおうか」

もう、時間はない。

「何も出来ないクセに？」
「からかうような口調で。」

「本物になるということが、どういうことか分かってるかい？」

醜くウェイは笑う。

仄暗い意識の海。

その底で初めて対面した自らの半身。

「さあね……」

「キミに出来ると思う？」

その表情は、狂気に満ちていた。

「僕はきつと、そんな風に出ていけないだろうね。人を傷つけて
幸せを得るような、そんな普通のことが出来ないんだ。それしか知
らない僕が、ウェイという規格外のプログラムを組み込むことにな
る」

「分かてるなら、過ちだと分からないほど馬鹿じゃないだろう？」

「そうだね」

一時の無言。

そして、ウェイは口を開く。

「救いたかったのは、キミの意志？」

「そうだよ」

「はははっ、奪った感情なのにかい？」

「……」

分からない。

「……感情のルーツがどこだとしても、そこだけは変わらない」

「矮小な人間であると知りながら、助けられないなら救うべきでは
ないと知りながら、ウォンを救おうとしたの？」

「偽善だと？」

ウェイは、見下したような笑い方で。

「……いいや、そこに損得の感情はないね」

「いつもみたいに、自己満足だと、偽善者だと罵倒されると思った」

皮肉を返そうとしたが。

「キミのそれは、偽善よりも遥かに救いようがない」
「それは……」

これまでで一番蔑みの言葉を投げ付けられる。

「決めたからそうした。それはね、偽善というよりも実験と呼んだ方が近いのかもしれない。自分が人間らしいモノを手に入れるために、キミは春賀のぞみを都合のいい被害者に仕立て上げた」

「違う　！」

「違うない　！　キミの行動のバックボーンは、バックボーンがないということに尽きる。人間を擬態しようとした。それが　家族に代わる新しい絆、だろ？」

「違うと言ってるだろ！」

「人間ごっこ、だ」

認めない。

なのに、ヤツの言葉はことごとく急所へと届く。

認めるな！

それを認めてしまえば……。

「どうして、のぞみを引き取ったのか覚えてるか？」

ポツリと、ウェイが話題を逸らす。

「春賀晃への復讐の為だよ」

「分かってるじゃないか」

ウェイの口調は、淡々としながらもどこか感情的だ。

「春賀晃を……　春賀建設を社会的に抹殺することをキミは提案した」

「ああ」

「あの時、悠希も、春樹も、オレすらも言ったはずだよ。『春賀のぞみ』を警察に引き渡せ、ってね」

「……」

「その時に、土壇場でノーと言ったのはキミだよ」

「……その通りだ」

「春賀のぞみに、春賀晃を殺させようって　」

春賀のぞみは、父親のことを恨んでいるから、と。

その事件のセンサーシヨナルな側面こそが、人々の食い物になる、と。

「でも、当時ののぞみは重度の麻薬中毒で、廃人の寸前だった。だからキミは、のぞみの回復と共にのぞみが父親に対して改めて殺意を覚えるように誘導していくことを春樹に提案したんだ」

「娘が麻薬中毒だったら、世間の同情を得ることは出来ないからね

……」

「父親を殺したいほど憎むために、同情に値する理由付けが必要になるね」

「……そのキーが、『お母さん』という言葉だったよ」

「それを聞いて、春樹は落胆してたよ……」

「賛成したのに？」

「キミの浅はかな考えなんてとくに暴かれてたつてこと。キミがプランを進めないことを春樹は確信していたんだ。だから今回の件は必然だ。でも、今ののぞみだけがイレギュラー。キミの功績だよ」「どういうこと？」

「ウオンはね、仲間の復讐のために、久、キミに辛い選択をさせない為に、自分が手を汚すことを決断した」

「……」

怪物という言葉がよぎった。

「そうだよ、驚かないよね。だからキミは変われと俺に言ったんだろう？」

その声は、心なし寂しそうだった。

「改めて聞くけど、キミは、どうするつもりなんだい……？」

「……僕はどうしたいんだろうね」

全てが、分からなくなっていた。

その中心が、自身のアイデンティティ。

「オレに命令しなよブラザー……春樹を殺せてさ」

「なぜ」

「何が正しかったのなんて誰にも分からない。でもね、キミは僕の表側。キミが沙耶久の希望であり、オレが沙耶久の絶望。オレたちはね、ずっと同じベクトルに向かっていたんだよ」

「……ウェイ、どうしてそんなことを僕に言うんだい？」

「上手く生きていきताかった。オレとキミ、二人で」

「君らしくない答えだ」

「……そうだね」

ウェイは、自嘲した。

「なんで、そんな方法しかないんだよ　！」
叫んだ。

「」

ウェイが、目を見開く。

悲愴な顔で叫びながら、心の中でもう一人の僕は冷静に思う。

君も、驚いた表情が出来るじゃないかと。

「あるかもしれないじゃないか……まだ、あるかもしれない。助かる方法が」

だが、それも一瞬だった。ウェイは淡々と告げる。

「思いつかなければ、それはないのと同じさ」

「春賀のぞみ　、いつも笑っている女の子」

そつ、のぞみ　。

「でも、いつだって笑っていられるほど、この世界は甘くない……」

「キミの成果だよ」

「愛される一番の方法は、必要とされること。ギブがなければティクは得られない」

シンプルな理屈、物々交換の理屈。

人間が原始の時代から続けてきた唯一の法則だ。

「もし、ギブできるものが見つけれないならば、人の顔色を伺い、怒らず害さない。笑顔を崩さずに、いつも見る人を安心させる完璧な表情を手に入れること」

「そつ、今の春賀のぞみは、キミの作品だろう？」

「分からない」

「それで、笑顔の内面では……彼女は、絶えず何かに追われている。追いつかれないように、必死に生き急ごうとしている。止まってしまうと、何もかもがそいつに壊されそうな気がするから」

「お前が彼女の何を知っている！」

「……でも、彼女は、どこにも逃げることもなんて出来ない」
断言する口調。

「爆発する」

ウェイが告げる。

「ずっとそれだけを春樹はのぞんでいた。彼女が、自分の母親のよ
うに、ある日突然プツリツと切れてしまう可能性さ」

「だから、そうならないように」

「そうならないように？ だったらキミはこう言うべきだ！ お願
いします、彼女の代わりに、何も出来ない僕の代わりに沙耶春樹を
殺してくださいってね！」

「煩い！」

子供のように叫ぶ。

「認める！ キミはオレの一部だ。オレはキミの一部だ！ そ
れぞれが独立しているが、紛れもなくキミもオレも沙耶久だ」

「僕は、人間だ！」

「キミは……嘘が、上手すぎたんだ」

拳を握り締める。

「嘘、だと？」

「キミの決意とは、文字通りだ。決めたから、規定したから、そう
やって自らのアイデンティティを確立してきた」

泣きそうだ。

「沙耶久の数少ない美しいものを食い散らかし、今のキミは存在し
ている。でもね、オレはそれでいいんだよ」

「……なんで、だよ？」

僕は、縋るような声で。

「オレにはもう、必要ないからさ」

ウェイは、優しい声で。

それは、諦念に満ちた大人の表情だった。

「それにさ、もしもキミがスイッチを押した時、残っているものは何もない」

「……それは」

「キミの知らない沙耶久が、全てキミになる」

ウェイは両手を一杯に広げる。

黒い海の中で、視界の端まで広がる墓標たちが揺れる。

その言葉の真意を、恐ろしいと思った。

「恐い？」

「それすらも……分からない」

「嘘だね」

ウェイは、即答する。

「だってキミ、泣いてるじゃない」

「……」

言われて初めて気づく。

僕は、泣いていた。

「俺も……不安だよ」

「不安？」

「ああ」

見据える目は、糾弾するように。

「キミが、どんどん違う人間に変わっていくような気がする。

どれをなくしても、後悔する……そんなことをキミは考えている。

キミがね、どんどん人間になっていくような気がするんだ。でもそれは、ここまでにするべきだ」

ウェイは、足元に線を引く。

「……」

「答えは、今は一つしかない。キミは俺に託すべきだ、春樹を殺すことを。だから今ここでウオンを止めるべきだ」

「……」

「これしかないと知りながら認めることが出来ないから、喚き散らすしかなかったかい？」

「僕はそんな無責任じゃない」

「いいんだよブラザー、それで」

「結局それしかないのかい？」

「出来る事はある」

「それは？」

「百には出来ないけれど、百に近づこうとすることは出来る」

「……」

「出来ることを潰して、可能性を広げていけばいい。一が十になるかもしれない。十が七になってしまいかもしれない。キミの行為が可能性をどう動かすかなんて分からない。正解なんて用意されてないのだから。でも、キミ自身が考えて動かなければ、可能性が広がることはない。それは自分の首を絞めるだけなのかもしれない。それが嫌ならば動かなければいい」

「……そんな時間、もうないじゃないか」

「これからの話さ。要は、キミがどうしたいか、全てが終わった後でゆっくりと考えていけばいい」

「キミは……」

「理解は出来ないけどね」

「……」

ウェイが、初めて微笑んだ。

軽薄な笑みなどではなく。

でもそれは、とても寂しそうだった。

「春賀のぞみを止めるといい」

ナイフを手にした。

沙耶春樹を殺すために。

だが、僕には何も出来なかった。

違う。

そうじゃない、オレはキミの力だ。

キミが出来ないことはオレがする。

だから、オレに出来ないことキミがする。

役割分担だよ。

注意しなよ。

キミが無茶をするから神経系がかなりイカれてる。

意識を保ってられるのは僅かな時間だ。

その間に、キミの頑固な彼女を説得するんだ。

ああ、難易度の高いミッションだ。

キミ向きじゃないか。

オレにはそんなクソみたいなミッションは無理だよ。

だから、オレはしばらく眠らせてもらうよ。

そうして、僕はゆっくりと光の方へと泳いでいく。

始めよう、終わらせよう。

僕は、自分の無力さを、けして忘れないだろう。

それこそが、僕の罪だから。

そして、君が僕を許す。

僕が君の罪を許す。

僕たちが互いに許しあい、そして、救われるんだ。

だから、罪は均等に。

ウェイを、肯定した。

……。

だが、もしもキミが俺を食うことを選んだら。

……。

やめよう、今は。

今は救いようのない偽善者の為に祈ってあげよう。
せいぜい、上手く出来ますようにってね。

彼女の為に 沙耶久

「桜井、要」

底冷えするような冷たい声が、似合わぬ童顔から発せられる。痛みに叫び、のた打ち回る桜井には聞こえなかった。

「君はね、私の一番大切なものを犯したんだ」

聞こえていないと分かっているながら、彼女は語り続ける。会話ではない。

これは、呪詛だ。

「あああああああつつつ！」

桜井は叫び続ける。

冷たい眼差しでそれを見下ろすが、すぐに逸らした。

そのまま彼女は、路地裏のポリバケツの蓋を開ける。

獣のように叫ぶ桜井の声が耳障りだったのか。

のぞみはゴミ箱の中から飲食店の廃棄物を取り出して、桜井の口へと乱暴に詰め込む。

「つつつ！」

くぐもった悲鳴に代わる。

そのままのぞみは、桜井の髪を掴んで、無理やり視線を合わせた。桜井の表情は、怯えに満ちている。

「……あの時止めておけばよかったんだ」
呟く。

「少年院に入れられた時に、そこで足を洗えばこんなことにはならなかったのにね」

のぞみは、加藤恭介に向かって手の平を広げた。

加藤恭介は無言で銃を渡した。

のぞみは銃を見ながら呟く。

もう一度溜め息をついて、銃を桜井の顎へと当てた。

「誰のいない王国で王様を気取る無様な道化師」

桜井は目を見開いた。

逆光にくり抜かれたのぞみの目を直視する。

桜井は言葉を失った。

それは、恐怖だ。

桜井の目にはのぞみが、得体の知れない者のように映った。

「無様なままで、死ね」

引き金を引く指に、力が込められる。

だが。

「止めよう、のぞみ」

少女の動きが止まった。

薄暗い路地に、この声を凜として響かせる。

弾は、薬室から発射されることはなかった。

「久、くん……？」

のぞみは驚いた顔で見上げる。

酷い状態だ。

一歩歩くごとに、脳が軋む。

視界がぶれる。

ごうごうとノイズが煩い。

五感が全ておかしい。

それでも銃を持つのぞみの手を、両手でそっと包んだ。

震えている。

それが肌を通して伝わってきた。

麻痺した感覚器で、君の暖かさだけは伝わってくる。

好きだと、そう決めたただだった。

でもね、決めたらその通りになった。

だから、君が好きだ。

理由はもう必要じゃないだろう？

「そうだね……、殺人は許されないことだよ。そんなこと、よく分かってるよ」

のぞみは目を反らさずに。

「でも、久くんは、分かっていながらどうしてだと思っ？」

「……止めよう。怪物になる必要はないよ」

「法律でそう決まってるから？　どんなに楽だろうね。それで許されたら」

「……」

「でも私は、そんな答えじゃ満足できない」

のぞみの為に薄く笑う。

しかし、無駄だった。

のぞみは俯いたまま、僕の手を乱暴に振りほどいた。

「私が怪物になれば、全てが上手くいくんだよ！」
叫んだ。

そして、周巡するよう目を閉じる。

「私だって何度も思った。他に方法があるんじゃないか、こんな間違いってる。手を取り和解する可能性だってあったかもしれない」
でも、と彼女は続ける

「その結果が、日向ちゃんでしょう？」

「そうだね……。あの時僕らは手段を選ぼうとした。社会のルールに従おうとした。だから、僕たちは復讐された。七人は二人になった。五人も欠けた。これは、僕の甘さが招いた結末だよ」

「もう、誰が悪いかなんてどうでもいいよ……ようは、彼を殺せば解決する、そういうことなんだよ」

「……」

思わず正論を紡ごうとして、それを喉奥に詰め込んだ。

正解だろう。

今僕達を選べる選択肢の中では、限りなく正解に近いだろう。

しかし。

「どうして、のぞみがするの？」
代わりに出たのは疑問。

「この人は、わたしを捕まえに来たんだよ」

「そうだね……」

事実である。

「だからこれは……わたしが招いた結末なの……」
震える彼女を見ながら、気づいた。

「……」

春賀のぞみは、怪物なんかじゃない。

どうして桜井をすぐに消そうとしなかったのか。

彼女は、罪を背負おうとしてたからだ。

恨まれるだけの罪を。

「久くん大切なもの、壊したのは私でしょ？ だから、久くんは
手を汚さないで」

怨ずる様に呟き続ける。

だが桜井は、周りを巻き込んだ。

だからのぞみは新たな罪を選んだ。

僕達を見殺しにする罪よりも、自らが再び手を汚す罪を選んだ。
いいじゃないか。

卑怯で、他人任せで、……それでいいじゃないか。
のぞみを見据える。

「ねえ、のぞみ」

「……」

のぞみは、答えない。

「よく、ゴメンで済めば警察はいらないって言うよね？」
言葉とは裏腹に、口調は優しい。

「でも、実際はこう言う方が正しいんだ 悪いことをせずに済む
世の中だったなら、警察はいらなかった……、ってね」

再び僕は、のぞみの両手に手を添える。

「過ちを犯さない人間なんていない。人を殺した人間は稀でも、人を傷つけたことのない人間なんていない　理不尽な暴力、偏見や差別、最も多いのは、見殺しだ。他人が傷ついても心は痛まないなら、自分が傷つかないように見てみぬフリをする。でも、それだつて悪意じゃないかな？　法律は、よくも悪くも強制力がある。だからこそ、合法は正しいことだと思われがちだ。でも、合法的な悪意だつてこの世には数多く存在する。この世には見殺しが溢れている。誰もが誰かを見殺しにしたことがあるはずだ。自分のことじゃないと胸を撫で下ろし、そうして憐れむ」

一度、言葉を区切り、

「それは、合法的な悪意だ」

呟いた。

「だから、それはのぞみ一人で背負う必要がないんだ」

「暗黙の了解……だよ？」

思えば、のぞみの口からその警告を聞いたのは初めてだった。

「その言葉が出たってことは、のぞみの主張はそこまでってことだねえ、のぞみ。」

君は今、酷い顔をしてる。

今にも泣きそうな、そんな薄っぺらな笑いだ。

意気地なしの笑い方だ。

そうじゃないでしょ？

僕たちはいつもこうやって笑ってたじゃないか。

「……確率の問題だよ」

「その確率から導き出した答えに、のぞみの幸せはないんだよ」

選んでしまえば、三年前に君を救えなかったことになる。

今度は、決めたからじゃない。

好きだからだ。

今、僕がのぞみを好きだからだ。

「のぞみは……どうして笑うようになったの？」
問いかける。

「……久くんが、そう望んだからだよ」

「どうして僕が望んだから、そうしたの？」

嘘が上手くなれば、誰もが僕らを愛する。

大人たちは利口な子供が好きだからだ。

それは、そういうことなのかい？

君もそう思ったから？

違うでしょ？

だって、僕らの周りに大人は一人しか居なかった。

その大人は利口な子供が好きじゃなかった。

言うことを聞かない七人の問題児を好きになってくれた奇特な人だ。

そして君の笑顔は、そんな大人を含めた七人の君の家族の為のものだ。

「直感だったんだ」

のぞみが、核心に触れた。

「きっと、久くんも私と同じだって。理由なんてなかったんだ、無条件なんだって、そう思ったんだ」

「そう、家族に代わる新しい絆。無条件に傷を舐めあえる。卑屈かもしれないけど、それはとても大切なことなんだ」

「嘘だけが僕たちに優しいから、でしょ？」

そう。

だけど、それを本物にする事だって出来るはずだ。

『百には出来ないけれど、百に近づこうとすることは出来る』

ウェイ、君が言いたかったのは、そういうことだろう？

僕達は、家族に近づいていくことができる。

愛することは出来なくとも、愛そうと努力することは出来る。

この心が折れない限り。

「その笑顔も、嘘かい？」

「そうだよ」

のぞみは微笑を作る。

「言葉にしてしまうと、寂しいよね」

「そうだね」

優しい声で頷いてくれた。

「みんなが、そんな私を好きになってくれたから、春賀のぞみはそうあるうと思ったの」

知ってる。

だから、君の嘘は誰にも責めさせない。

だって、のぞみは僕たちを喜ばせてくれる為に一生懸命嘘をつき続けてくれたのだから。

「のぞみは……どう思う？」

「えっ？」

「嘘から始まったモノは、本物になれるのかな？」

「……」

時間が、止まったようだった。

「僕たちは……本当に、笑えるようになったのかな？」

ぐらりっ、と視界が大きくぶれる。

そろそろ、限界が近い……。

「少なくとも、私にとっては本物だったよ」

彼女は、泣きながら笑った。

直感した。

その言葉に嘘はない、と。

「……よかった」

安堵に緊張が途切れた。

瞬間に、猛烈な痛みに襲われる。

ぐらり、ぐらりっ。二度、ぶれる。

だが、もういいんだ。

説得は、成功し。

「だから私は、皆のために全てを犯すことができる」

「のぞみ……？」

「ごめんね」

説得は……失敗、した？

瞬間、視界が急激に色を失う。

彼女が遠くに感じられる。

『時間切れた』

ウェイの声が、響く。

「ごめんね」

「……どうして、謝るの？ ……謝るくらいなら……」

口を開くのも億劫になる。

「これ以上はね、もう誰かに支えてもらうわけにはいかないから」

「僕が支える」

鋭い痛み。

叫んだ瞬間に、脳の血管が切れた気がした。

『久 限界だ』

ウェイの声とともに、神経が焼ききれる。

プツンツという音ともに、立っていられなくなる。

「春賀のぞみという家族のことは、忘れてください」

視界が、血のように紅くなる。

「忘れないと、潰れちゃうよ？」

「のぞみを支えて潰れるなら本望だ……」

偽りはない。

「だから、もう止めよう。これで終わりなんて思わないで……。まるで、お別れの挨拶じゃないか！」

「……」

優しい笑顔だった。

これまでで一番、優しい笑顔だった……。

「僕は、君を救いたかったんだよ！」

祈りを込めて、彼女を見つめる。

視線で訴えようとした。

「知ってる」

のぞみは、見つめ返す。

祈りは、届かない。

「その義務も、もう終わりだよ？」

「何を……言ってるの？ 義務なんてどこにも……」

「久くんのこと、好きです」

言葉を、忘れた。

「あなたが好きだから、あなたを私から解放します」

触れなくなる。

大切なものが。

失いたくないものが。

それが、今まさに、遠くに行ってしまうような気がしたから。

『失敗 か』

ウェイが、ため息をついたように感じた。

「……かないで」

子供のように懇願する。

行かないで、と。

声が掠れる。

酷く意識が混濁としている。

指すら動かすことが出来ない。

「ゴメンね」

彼女は、寂しそうに笑う。

いつもと同じなのに、寂しそうに見えた。

「……らないで、よ……」

謝らないでよ。

「そうだね、じゃあ」

優しい笑顔なのに、寂しそうだった。

まるで世界から一人取り残されたように。

……寂しい？

寂しそうに見えるのは、僕が寂しいからだろうか？

「ありがとう」

……なんだよ、それは。

まるで、最期の言葉みたいじゃないか。

行かないでくれ。

引き止めたい。

でも、すでにしゃべることも出来ない。

口を開くことすら出来ない。

真っ黒な深海へと、意識が徐々に変化していく。

思考することすら、できなく、な……。

「久くん」

……のぞみ、まつ……て……。

「お休みなさい」

視界反転。

全てが泡立ち、僕は闇へと溺れていく。

その途中で、ウェイが、寂しそうな顔でこちらを見ていた。

その唇がゆっくりと動く。

お・や・す・み。

そして、真っ暗な深海に不似合いな銃声が響いて、沙耶久の意識は深層へと沈んだ。

ねえ、久。

世界はね、希望と絶望で満ちている。

それら是对極ではなく、一本につながっているからだ。

希望を抱くことは、その裏に眠る絶望を包括することでもある。

上がるから下がる。

登るから降りる。

だからこそ、それらを切り離れたオレ達は酷く矛盾している。

キミは多分、それに気づくだろう。

オレはね、その矛盾をなあなあで誤魔化したかったんだ。
上手くやりたかったというのは、そういうことだったんだよ。
でも、もう遅い。

キミの感情は、オレへと流れ始めた。

沙耶久は、一つになる。

それはキミなのか、それともオレなのか。

……。

それはまた、別の物語だ。

ウォンの物語でのキミは、これで退場だ。

おやすみ。

そして、再び会おう。

世界の果てで。

彼の為に 春賀のぞみ

「……ははは」

乾いた笑い声が足元から聞こえます。

抑揚のない笑い声。

心のない、人形の笑い声。

「……なんだよ、これは」

うつ伏せのまま、桜井要が呻きました。

うわ言を何度も。

「……」

因果応報。

目には目を。

歯に歯を。

「ハハ……なんなんだよ、この茶番はよお」

「……遺言はいいかな？」

「うるせえ」

「桜井」

冷たい目で加藤恭介さんが見下ろすのにも動じない。

「好きだあ？ 馬鹿じゃねえのか？ 援交でガバガバになった腐れ

マ×コのくせによお」

桜井くんは吐き捨てます。

「オレはテメエが許せねえ……自分じゃ人一人殺せねえテメエがなんでこのうと汚い手で人を欺けんだよ……殺してやる、ぐちゃぐちゃに犯して殺してやる」

撃たれた腕を押さえながら、桜井くんはノロノロと立ち上がる。

狂気に浸しすぎたようです。

もはや彼は未来など見てはいない。

死を覚悟した人間。

だったら。

「なあ、のぞみいい……」

「助けて欲しい？」

笑いかけてあげましょう。

「ざけんな」

私を睨む眼光の鋭さは、未だ衰えていません。

「テメエは……オレを裏切ったクセに、テメエは色恋かよ」

「……」

「何とか言えよテメエ……。人を殺そうとして、アナタが好きだあ？　なんの茶番なんだよおおー！」

「まだ右手は、動くよね？」

「ああ？」

右手で銃を向けながら、左手で桜井要へ向けて。
からんと。

地面に金属が転がる音が響きます。

「小指と性器」

「はっ？」

加藤恭介さんが顔をしかめるのが見えました。

「小指があればナイフが握れる。性器があれば私を犯せる」

「……だからどうした　！」

声に再び震えが混ざります。

「助けて欲しいんでしょ？」

残酷に、笑いかけてあげました。

ウオンの物語も、もうすぐ結末を迎える。

彼女は、ファウラの為に罪を犯す。

それは、ハッピーエンドだろうか？

過去、彼女達のしてきたことは家族を奪われた遺族達にとっては許されざることだ。

そして、これから彼女がする行為は、この国でも重罪となる行為。
その選択肢は、客観的な視点から見れば、やはり間違いなのだ。

悪いことをせずに済むのなら、警察なんて要らなかった。

それはすなわち、人はお互いを力によって監視しなければならぬということでもある。

庄治慶介の言ったことでもある。

すなわち、法と正義はイコールではない。

「ざけんな　！　助ける気なんてないだろうが！」

「罪を許しましょう」

一転して、聖母のように笑いかけてあげました。

「あなたが罪を認めて、罰を自らに与えるならば、あなたを救ってあげましょう」

「信じれるか　！」

「それが……キミたち三人を地獄へ落とした私の償い」

「イカれてやがる」

「そう、罪を償う気、ないんだね」

「デメエは　つつつ！」

叫ぼうとして。

「ハ」

桜井の顔から生気が消えていきました。

青ざめた顔で眺める先には。

「桜井くん、こーんにちわ」

がらの悪い複数の男が、彼に向けて笑顔を振りまいているからです。

高級なスーツを着こなす中年の暴力団。

明らかに幹部の貫禄があります。

彼らは無骨な黒い鉄の塊を、そろって桜井へと向けました。

「誰だよ……？」

一転して怯える声。

思い出したかな？　川端ちゃんと園川さんのその凄惨な死体を。

お前は、もつと残酷に死ぬけどね。

「唐風組　？」

桜井が呟くと同時。

「いやぁ……キミを殺すなって命令がようやく撤回されてさぁ、ねえ、恭介くん？」

「ええ」

恭介が、短く頷く。

スーツの男はにやにやと笑いながら、目は笑っていない。

「これ、何か分かる？」

そう言って一歩前に出て手を広げて見せる。

小指がなかった。

「この世界にはさ、責任の取り方があるわけ。降格とか、弁償とか、そういうんじゃない。知ってるかい？　小指を失うと上手く物が握れないんだ。絶対に歯向かわない。あなたの顔に泥を塗ることのない従順な駒であります、ってことを痛みと共に刻まなくちゃいけないんだ」

「ああ、あ……」

「ほんとうーに間抜けな話さ。まさかこんなガキ共に麻薬のマーケット荒らされるなんてね。お陰で同業者はこの指を見ると見下したように俺を笑う……どうだい？」

「どう、とは……」

かろうじて言葉に出来た問い。

「自分じゃ、恐くて罪を償えないんだろ？」

桜井くんの、小指が宙を舞いました。

「あああああああああつつつ　！」

遅れて、絶叫。

「お前のようなガキを、本気で匿う奴なんていねえよ」

「恭、介　さ」

発砲音。

「　つつつ　」

桜井くんの足の指も、飛びました。

ばしゃり、と。

コンクリートに落ちます。

「後は、性器だったかな？」

男は懷から短刀を取り出しました。

「乳クセエ餓鬼のくせに、そいっだけは一人前に意地汚ねえらしいからな」

「や、やめ……助けて、くれ、よ」

桜井は、失禁します。

「おやおや、本当に騾のなつてない餓鬼だ。こんなところで粗相するなんて」

「あああああ……」

一步一步、男は近づいていきます。

足の指を失った桜井は、芋虫のように必死に這い続けます。

「騾の時間、だよ？」

目を見開いて見るがいい。

お前には、何度も絶望を叩きつけてやると決めた。

そう。

お前が、殺してくださいと懇願するまで。

「……」

顔が、桜井くんの鮮血を浴びて紅く染まりました。

じわじわと赤が広がり、路上に血のアートが描かれます。

生気のない目。

これから行われるスプラッタ映像。

生きたまま、性器を刻まれる景色を、私は無感情に眺めていました。

何度も叫び、転がり続ける。

痛み。

恐怖。

何度も突き落として再燃させる。

死を覚悟したならば。

身体を切り刻んで、苦しませてあげよう。
そうだね。

心臓と脳だけが動いているっていうのも悪くない。

「嬢ちゃん、悪いね、服を汚した」

そう言つて先ほどの幹部の男が、紙幣を私の手に握らせます。

「……この餓鬼を売ってくれた謝礼だよ」

三万円。

ねえ桜井くん、見えてるかな？

三万円 キミの価値だよ？

「……」

心が、麻痺していくのが分かりました。

「いるんでしょ？」

虚空に向けて呼びかけます。

「ねえ、お父さん」

「勘がいいな、馬鹿娘」

音もなく暗闇から長身の影が現れる。

「晃さん？」

ぼつりと、恭介さんは呟きます。

「ああ」

「知り合い？」

「俺は、のぞみちゃんのお父さんの会社の社員だよ」

「さて、春賀の力を借りる見返り、忘れたわけじゃないよな？」

「……」

恭介さんは笑います。

そして、呟きます。

「余興は、楽しんで貰えましたか？」

「余興？ くだらんことをお前もするな。これがいくらになる？」

「いくらにならなくとも、金で買えない価値もあります」

そのとおりです。

例えば。

「……何の冗談だ？」

周りを囲んでいた暴力団が、一斉に春賀晃に向かい、銃を向けました。

「冗談などではありません。春賀のぞみとの契約です」

「なん、だと？」

「春賀のぞみは、唐風が引き取ります。その代価として提示されたのはあなたを殺害する権利です」

「裏切るのか、加藤恭介　！」

「お疲れ様です。沙耶春樹からの伝言です。あなたはブラックマンデーの際非常に役に立ってくれた、そして今回の件においても、お前の働きには感謝していると」

「まだ、貴様たちのプラン、御座市再生プロジェクトは動いてないだろう！　私がいなければ、春賀建設など　！」

「いいえ……もう用済みです」

「……まさか、お前たちはブラック・マンデーを……」

「別に、特別なことはありません」

「春賀建設に全ての汚名を被せるつもりか？」

「あなたの残った資産は、せいぜい有効活用させていただきます」
引き金を、一斉に引く。

春賀晃は、倒れた。

金に取りつかれた怪物の最期は、あっけなかった。

あまりにも、あっけなかった。

「親族経営においては、身内の不祥事は他の誰よりも厳しく罰さなければならぬ。そうしないと秩序が保てない。そして、春賀建設の親族経営は、これで終わりです。あなたはスキャンダルに塗れた人生の落伍者として、歴史にその名前を刻むでしょう」

加藤恭介は、淡々と死体に向けて話しかけます。

「アナタは、絶望の礎となる　」

この日、久くんが彼のお父さんに提案したプランは完遂されまし

た。

これでもう久くんが苦しむことはありません。
もう、久くんが手を汚す必要ありません。

久くんは路地裏の隅で仰向けに眠っていました。
規則正しい寝息でした。

おやすみなさい、久くん。

その寝顔が愛おしくて、髪を撫でました。

「……もう少しだけ、いいよね」

しばらくの間膝の上に彼の頭を乗せて、私はその寝顔を見つめて
いました。

「春賀のぞみ 覚悟は出来ているか？」

加藤恭介さんの後ろから、初老の杖をついた男性が現れます。

「親方さま」

唐風組トップ。

親方と呼ばれる老人。

「違いますよ。春賀のぞみじゃないです」

私は、怪物らしく軽薄に笑いました。

「ウォン」

その名前は、久くんの中に眠る狂気が私に付けた名前でした。

ウォン エピローグ

そして、何日かが経過した。

ある朝登校すると、学校中是一个の話題で持ちきりだった。

春賀のぞみが実の父を殺した、という内容だ。

ねえねえ、今朝のニュースを見た？

あー、見てないけど朝からメールきまくり。

隣のクラスの、あのほんわかした子。

びつくりしたよー、人はほんと見かけに寄らないんだね。

それがね、そのクラスの友達から聞いたんだけど、あの子あんな顔して昔は……。

えーっ、嘘だあー、全然キャラ違うよ。

いやいや、これマジバナだってさ。現に私のトモダちのトモダちも……。

出ましたよ、トモダちのトモダち。

いや、マジなのよ。マジマジ。とんだ雌豹。

はあー、人ってほんと見かけに寄らないんだあー。

悠希はのぞみのクラスの前を通る。

空きっぱなしのドアから見える窓際の席には、誰も座っていないかった。

「ねえねえ、沙耶さーん」

「……何？」

億劫に悠希は振り返る。

三人組の女子。

悠希は、わざとらしく目を細める。

事実煩わしかったのだろう。

「あのニュースの少女Aって、ほんとに春賀さんのことなの？」

「……」

悠希は露骨に辟易とした表情を浮かべる。

「……知らないわよ、噂でしょ？」

「えー、だって沙耶さん、ジブンあの子の……あつ、ちょっと！」

会話の途中で、悠希は顔を戻して再び歩き始める。

「ウォンはとても欲深い」

「恐らく彼女は、自分の手に入れたいものを手に入れるときは、仲間内の誰よりも手段を選ばずに残酷になれるだろう」

「だから、登場人物の名前はウォン」

「彼女はとても欲深い」

「でも、始めから欲深いわけじゃなかった」

「そして、心から望んだものでもない」

「それは仕方のないこと」

「たった一つ、望んだものを彼女は永久に手にすることが出来ないのだから」

のぞみには、嘘があつた。

それは久と悠希しか知らない、薄汚れた心で薄汚れた行為に快樂を見出して身を委ね続けた過去の彼女のこと。

だが、それは真つ赤な嘘と言うわけではない。

春賀のぞみという人物は破壊衝動だけではなく、他者を立てて自らを律する思慮深い一面もある。

いつも笑顔でいるのは、久がそう望んだからである。

だが、それをいついかなる時も人前で保ち続けてきたのは、他ならぬ彼女の変わろうとする努力だった。

確かに彼女の笑顔は作られた偽りかもしれない。

だからと言ってそれが、彼女を糾弾できる理由にはならない。

彼女は空っぽなどではない。

ただ人より、家族の愛情を知らないだけである。

だが他人は、自分の知らない他人に対して、どこまでも残忍になれる。

そうやって悪を仕立て上げてることは、一番手っ取り早い自己の正当化である。

春賀のぞみの父を殺した側面や過去の犯罪行為の側面は、春賀のぞみという全体像のほんの一側面に過ぎない。

でも、人が彼女の全体像を望むことはない。

一側面をその人の全てだと決め付ける方が楽であり、そして都合がいい。

そんな耳障りで無責任な噂話に嫌気が差して、悠希は学校を早退することにした。

いるはずがない。

分かっていながら悠希は、色々な場所に足を運ぶ。

校庭。

中庭。

グラウンド。

屋上。

七人の消えた風景は、そらぞらしい程にいつも通りだ。

嘲笑うかのように、誰かがわざと日常の風景を造り上げているのではないかと、そんな馬鹿なことを考えてしまう。

沙耶悠希は、最後の一人となった。

校庭に立っていると、ポツポツと冷たい感触が落ちてきた。

それは、短時間であつという間に大粒の雨へと変わる。

空は鈍色の雲が覆い隠す。

のぞみと久が会ったのは雨の日だった。

「雨に縁がある、ね」

雨が降ったからといって、それがなんだというのだろうか。
もう恐らくは、彼女と会うことはないだろう。

顔を戻すと、校門に傘を差す人影がこちらを見ていた。

それに向けて悠希は歩き出した。

「……南さん」

「悠希」

黒で統一された服装は、制服で統一された学園では異質でよく目立つ。

「私は……、けしてお前を責めることはしない。だから、教えて欲しい」

「悔いるつもりはないわ」

「お前は、そのまま世界から逃げ続けるのか？」

「違うわ、戦い続けるの」

「そんなこと、出来るわけがない」

「……出来るわ」

まだ残暑の残る空気に、心地の良い冷たさだ。

雨を全身に浴びながら、悠希はふとそんなことを思った。

「お前たちは、人間の尊厳や未来、その存在全てを奪ったのだ。それは、けして許されることではない」

「それは、南さんの持論？ それとも聖職者としての意見？ 社会が定めたルールだから？」

「殺されてもいい人間なんていない」

「正論は、うんざりよ……」

悠希は吐き捨てる。

「この世界は、『殺してはならない人間』って人たちを何度も殺し続けているはずよ。世界は善悪では稼動しない。損得でしか稼動しないの」

「……」

「そういう考え方は寂しいって思う？ 私も寂しいと思うわ」

それは、本当に寂しいことだ。

「人間はどうして……そんなやり方でしか生きて行けなかったのかしらね」

南はけして、違う、とは否定しなかった。

「何故、あんなことを……」

代わりに口に出たのは、やはり『なぜ』だった。

「こうすることしか、私たちは虚無を埋めることが出来なかったのよ」

「断言は、できないはずだ」

「……結果、こうなったでしょ？」

溜め息をついてみせる。

「でも、もしもと……そう思いながら、結局問題が解決することはない。例えば、のぞみはもう限界だった。彼女はこれ以上、失うことに耐え切れない……手に入れた瞬間に、彼女の崩壊はすでに始まっていたの。そして……最後の一押ししたのは、きつと久」

そして、春賀のぞみの爆弾は破裂した。

「彼女はずっと母親の死は自分のせいだと悔やんでいた。麻薬を一緒に売りさばいた過去の仲間たちは皆目も覆いたくなる結末を迎えたのに、彼女だけは助かったことも。そして、自棄になって傷つけてしまった関係のない他人……自分の過去に巻き込んでしまった仲間たち、そんな中で、自分だけが幸せになることが耐え難い苦痛だったのでしょうね」

「それは……」

「でも、それはあの子だけが悪かったこと？ 誰もが少しずつ悪かった。誰のせいでもなく世界は狂っている。そんな中であの子の虚無を埋めるには、誰かのせいにするしかなかった。言うならば、春賀晃だけのせいではないわ。春賀という昔から続いてきたシステムが、あの子を不幸にしたの」

悠希は雄弁に語り続ける。

「この世界に神様はいるかしら？」

神の代行者に向けて悠希は問いかける。

「たとえばとしても、人々を救わない神様に意味なんてない。だったら、誰かを救うためには、誰かがその身代わりにならなければならない」

冷たく、神の教えを否定し続ける。

「人は、自分と同じように隣人を愛し合うものかしら？ でも、その隣人とはつまり、恋人や家族、友達のことに過ぎないじゃない。人は他人を愛することは出来ないわ」

一息ついて。

「……では、しないのよ」

怨ずるように吐き出す。

「その者たちを犠牲にしなければ、『愛』を継続させることすらままならないからよ。それとも取り繕う世間体の上に成り立った他者への笑顔や優しさを愛と呼べいいのかしら？ 素晴らしいわ……、愛ってなんて偽善なんでしょうね」

この世で信仰される、最も美しいとされる感情を否定した。

「南さんは、そう感じたことはない？」

「真実は誰にも優しくはない。だから目を背ける、真実だと認めない。だからのぞみにとっての真実は、そんな自傷行為を繰り返すような罪意識であってはならないの。真実を知ろうとせず、自分に都合のいいことだけを信じて……誰かを憎めばいい。春賀晃を憎んだように、世界を憎めばいいのよ」

今日もどこかでパトカーのサイレンが鳴る。

謝って済めば警察はいらない。

そして、悪いことをせずに済むのなら警察は要らない。久の持論である。

それは、ファウラがインストールされる以前の彼の持論だった。

雨足は強くなる。

「春賀晃が、彼女の背負ってきたカルマの元凶……それでいいじゃない」

「そうするしかなかったと、罪から逃避するのですか？」

「道徳的見地から見れば許されない？ 法律や憲法は彼女を断罪する？」

雨は二人の頭上から激しく降り注ぐ。

「だったら私はそれらに対してこう言う 道徳的見地や、法律や憲法は、彼女を救ってくれなかったじゃないか、ってね」

「……」

「弱い者を守れない正義に意味はないのよ……誰もが弱者で、誰もが強者。それは角度の問題で、その時々によってそれは簡単に入れ替わる。そうしたら、ほら……正義なんて存在することは出来ないの」

「それでも、私は悔やむ」

苦悶の声を漏らす。

「お前たちが、そうして解決してしまったことを悔やむ」

「どうして？」

「彼女はいつか、自分のしてしまったことと向かい合わなければならぬ……彼女は、優しい子供だからだ」

「……」

「その時にお前たちはまた、誰かのせいにして生贄を仕立て上げるのか？ そうして心の奥底にいる優しいお前たちは傷つき、痛いとかび続けるのか？ それは何も、解決していないじゃないか」

「だから……戦うのよ」

「何を……しようというのですか？」

「私たちの本当の敵は、弱者のフリをして真実を見ようとしなかった『地球儀の世界』なのよ」

雨が、降っていた。雨は透明でありながら、なぜか黒色に見えた。それは、十年前に振った雨の色をしていた。

ウォン エピローグ（後書き）

伏線置き去りのまま終了しました。
次回の『サン』で回収します。
半分くらいは……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8065g/>

WAN t the relief -the 1st story-

2010年10月8日14時29分発行